

昭和三十四年二月三十日印刷
昭和三十四年二月一日発行

(第十三卷 二月号
第三号 通巻第百十九号)

(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1959年 2月号



懸賞入選作品
愛憎 磔裸女 緑猛比古
十七娘 火焙哀話 有馬流子

2
月号

縛写真とその妖美を競う!!

グラビア 緊縛写真特集

(マニヤ垂涎の秘蔵写真、百十四葉
収載!)

【内容紹介】

- 妖精 (ニンフ)..... 絹川 文代
- 三ツ葵のプロファイル 田代 悠子
- 誘拐..... 絹川 文代
- 羅致..... 絹川 文代
- プレイ..... 浜本 喜美 三木 敬子
- 木洩れ陽..... 大塚 啓子
- 夢路..... 益田 房子
- 競花..... 絹川 文代
- 首縄..... 愛川 悦子
- シユミーズ..... 田中 芳代
- 放心..... 愛川 悦子
- 間諜成敗..... 村井知可子
- 三処締め..... 大塚 啓子
- 黒タイツ..... 益田 房子
- 観念..... 花坂 道子

縛写真特集号 堂々完成!

臨時増刊号

昭和三十四年度、特集号の第一弾、こゝに放つ!



本誌が号を追うて、その内容を充実し昭和二十七年年度の撮影期を経て次第に上り坂となってきた昭和二十八年度。今では、その頃の雑誌は中々入手することが出来ずやっと探し当てても定価の幾倍かの値段を示しています。ここで読者の要望にこたえ、昭和二十八年発行中の雑誌から、特に悦庵小説として優秀な作品を選び出し、四馬馬孝氏を煩して、全部新しく挿画を描いて頂いて再録したものであります。

口絵では、四馬孝氏の八葉の華麗な責絵に加えて、最近の撮影緊縛写真百十数葉を一挙に発表いたしました。「サド特集号」では、ヌード写真を混ぜました為、いささか、その点不評でしたので今回は全部緊縛写真ばかりと致しました。口絵、本文共々相俟つて、必ずや皆様の期待にそうことが出来ると信じております。どうか、是非一冊を皆様の座右の宝典として末永く可愛がつて下さるよう、御願致します。

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

◎賞金

佳作	秀作	優作
(各篇につき)		
三千円 若干篇	五千円 若干篇	壹万円 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 本誌に適當した題材を扱ったもの

締切 三十枚乃至五十枚程度(四百字詰)

縮切 但し多少の増減は差支えありません。

投稿 着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

発表 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

用紙 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以って報告します。誌上では入選作の掲載を以って発表にかえます。

読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

〔映画、雑誌〕通信〕映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊(送料共)	二百円
三月分三冊(送料共)	六百円
半年分六冊(送料共)	千二百円
一年分十二冊(送料共)	二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十三巻第三号
毎月一回一日発行
定価二百円

二月号

昭和三十四年一月三十日印刷
昭和三十四年二月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天星社

電話天下茶屋⑥三六〇七番
振替口座大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手にて一割増)等どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

昭和三十四年一月三十日印刷
昭和三十四年二月一日發行
昭和三十一年四月二十日發行
第三種郵便物認可



定価二百円

IBM. 2805

☆昭和二十八年度の総決算／当時満天下の読者を魅了

流麗「四馬孝・画集」

(巧緻な画風が描破する名場面の数々！)

○白魚の悶え (「燐光」より)

○苦悶の前奏 (「女奴隷の手記」より)

○鉄鎖のきしみ (「続・囚衣」より)

○籠の白鳥 (「縛られた妻以前」より)

○宙に踊る (「妻は縛らず」より)

○アクロバット (「色狼」より)

○濡れる朱唇 (「長期刑」より)

○土蔵の花 (「夕の朝顔」より)

表紙…… オフセット
五色刷

口絵…… 写真版刷八頁
グラビヤ
二十四頁

本文…… 悦虐小説満載
百八十数頁

奇譚グラス

限定版 悦虐小説と緊

なつかしの「悦虐小説集」

(昭和二十八年度中の傑作、茲にアンコール登場！)

○雌獣の手記…… 近見 啓

○妻は縛らず…… 岡田 圭介

○夕の朝顔…… 那須不二雄

○続・囚衣…… 古川 裕子

○私の主題…… 岡田 咲子

○色狼…… 児島 光

○女奴隷の手記 北山カオル

○受難記…… 岡田 咲子

○怪奇曼陀羅教 緑 猛比古

西田琴江傷害致死事件調査より

○呪縛…… 辻村 隆

○悦虐の旅役者 青山三枝吉

○長期刑…… 古川 裕子

○私の想い出…… 岡田 咲子

○片耳伝奇…… 窪村 弘

○縛れた妻以前 早川新二郎

○燐光…… 久留木 栄

○地獄絵行脚…… 長岡愛一郎

○鉄格子の中に 小坂多美枝

臨時増刊号

「悦虐小説と緊縛写真」特集号

定価 三百円 (送共)

只今発売中

「サド特集号」は絶賛の中に売切れとなりました。『悦虐小説と緊縛写真』特集号も売切れとならないうち、早くお求め下さい。予約の方々には製本完成と共に、いち早くお届け致しました。

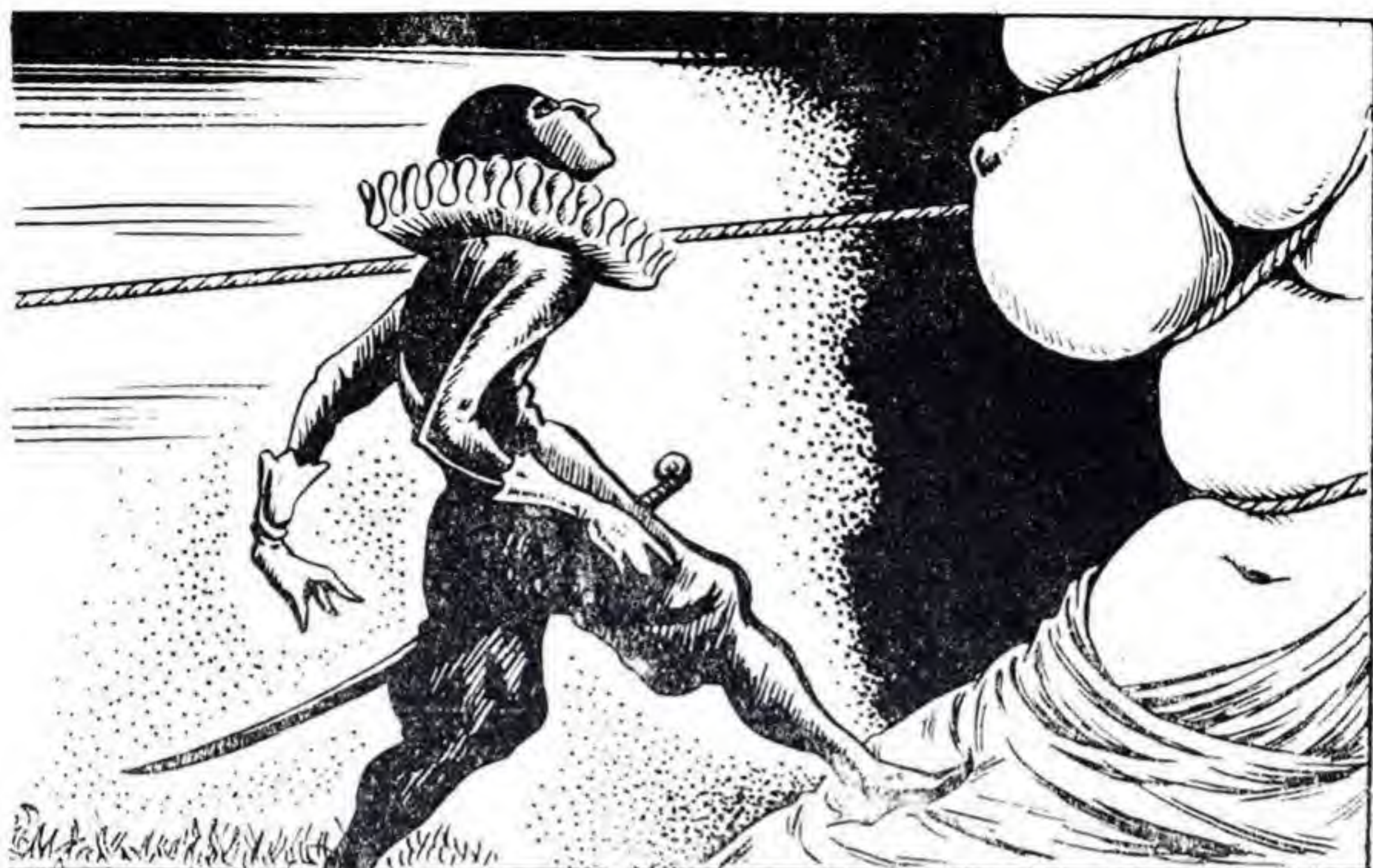
お申込は

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天星社

振替口座大阪第五〇〇四二番

御注文略号 (悦 特)



奇譚クラブ

復刊第三十八号
二月

目次

縛り絵 フラ・フープ……………滝 れい子・画

戯画墨 像……………南村 俊平・画

絵 スクリーンに現れた緊縛場面……………提供 田辺啓二
増田長彦

東映作品「薩摩飛脚」花園ひろみ

東映作品「丹下左膳」美空ひばり・松島トモ子

頭 ニューガールの緊縛模様……………(田代悠子の巻)

巻 特写々真『黒いスカート』……………田中芳代嬢

四馬孝傑作集 裏切者への私刑……………四馬孝・画

南村俊平戯画 女侍・人喰鬼の腕を斬る

南総里見八犬伝中の女の縛り絵……………三条 卓史 18

新聞切抜通信……………藤木 仙治 21

―体験記―バー『ナナ』の人々(第六回)……………南 時夫 22

胸毛頌……………菅 良太 28

薊銀十郎懷手帖第二話

愛憎磔裸女……………緑 猛比古 30

被縛渴仰……………近藤 一 42

現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正 48



未来幻想マゾ小説「家畜人ヤプー」	沼 正三	50
映画通信「今月の縛られ女優達」	大河原珠樹	61
話の屑籠	辻村 隆	62
相撲雑記	津田 進	66
緊縛映画スナップ・シリーズ／松竹映画／紹介		
紅梅の巻『七人若衆誕生』	牧 高志	68
愛好者の記録 (M派に捧げるメニュー)	とやま・かつひこ	75
創作Ⅱ 吾 木 香Ⅱ (われもこう)	三条 卓史	78
切腹研究夜話 (昭和の女白虎隊)	中康 弘通	93
創作『妖婦の生贄』	東町 三郎	96
妊婦の魅力について	羽村 京子	109
魔 教 圏 No. 8 (その十二)	土路 草一	114
M通信「馬化白書」の作家へ	馬場 好男	128
— 創作 — 法衣と軍服	楨村 奏	130
蠟人形に想う	生地野 透	137
「仇討奇譚」姫塚物語	吉備与二郎	138
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品		
十七娘火焙哀話	有瀬 流子	146
沼正三だより	沼 正三	162
読者通信		166

南村俊平戯画 女侍・人喰鬼の腕を斬る



昔、羅上門に住む鬼、夜な夜な出でて殊に若い女を好みて喰いけりとぞ。
女侍綱、この片腕を斬りて、高名洛中に響けりという。



斬つたりけり
抜きて突正すや
衛府れ太刀
去りたまふ
鬼れ腕
黒髪抱き
かゝる
綱
此の時

フラ・フープ

晴衣を衣桁にかけて、後手に縛られた美女がフラ・フープを回している。回せ、回せ、輪を落したら、次のお仕置が待っている。ああ腰巻が飛んだ。美女はフープを落すまいと懸命である。

滝 れい子・画



墨 像

近頃「墨像」と称して、やたらに墨をのたくる事がはやります。
美少女の肌に、このように筆を走らせたら、どうでしょう。
立体的な芸術品が出来上るのと違いますか。



南村俊平・画

スクリーンに現れた緊縛場面

東映作品

『薩摩飛脚』

花園ひろみ



〈田辺啓二・提供〉

東映作品

『丹下左膳』

美空ひばり
松島トモ子

増田義彦
提供





モデル 田代悠子

ニュー・ガールの緊縛模様

<田代悠子の巻>



黒

い

ス

カ

ー

ト





モデル

田中芳代

裏切者への私刑

四馬 孝・画

「さあ、よく見てみろ、あれが裏切者への、見せしめだ。」



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1959年2月号

(第十三巻 第三号 通刊第百十九号)





南総里見八犬伝中の 女の縛り絵

三 条 卓 史

曲亭馬琴作の南総里見八犬伝は全巻百六巻の長大な小説で、柳川重信、漢齋英泉の挿絵も豊富であるが、その全巻から、特に女の縛り絵を拾い上げて見ると次のようである。

○ 円塚山での浜路の受難―恋しい犬塚信乃との仲を割かれ、無理強いに陣代の人身御供にされようとするのを、これも横恋慕している浪人、左母二郎が祝言の当夜、浜路をひそかに連れ出し、後手に縛り上げ、猿ぐつわ

を噛ませて駕籠へ乗せ「狂人だ」と詐って円塚山まで来た時に駕籠昇きに酒手をせびられ彼等を斃した後に、浜路を口説く。

絵は駕籠の中に浜路が両袖を二の腕まで捲き上げて後手に縛られているうしろ向きのもので、顔は見えていないが、島田の襟足がすっきりと見えている。駕籠の垂れは上にあげて女が駕籠から落ちないように両側に縄を張ってある。その手前で左母二郎が村雨の名刀を抜いて加太郎、井太郎の二人の駕籠昇と闘っている図である。

○ 曳手（ひくて）―単節（ひとよ）馬上に縛られる―犬田小文吾が二人の女を戦火から遁

れさせようと一頭の馬に合鞍に乗せ、落ちないように縛ってその馬を樹へ繋いでいた処、火がその樹に近付いたので慌てて駆けよつて見ると、敵兵が三人その馬を解こうとしている。そこで立合いとなるが、敵の刀が馬の尻を切ったので、馬は二女を鞍の上に縛りつけたまま、東の方へ走り去るというのである。

絵は二人の野武士が一人は槍、一人は鉄砲で馬の尻を傷つけている。小文吾は少し離れて両手を拡げている。その足許に一人の野武士の首が転がっている。左の方に馬が二本の前足を上げて棒立ちになろうとしている。その首を両手で抱えている単節（ひとよ）。その後、曳手（ひくて）が乗っている。左手を拡げているが二人の左の膝が、いかにも一生懸命に取纏っている感じを出している。二人の腹から背の帯へ幾本もの縄が廻してある。一寸交っている図柄である。



毒婦船虫（ふなむし）縛られる 犬村角太郎と犬飼現八が妖怪山猫と貂（てん）や鰐（まみ）を退治する条で、座敷のほぼ中央に獸人牙二郎が武士姿で首を切落されて俯伏している。中連窓の処で角太郎が山猫（これも

人間の衣裳をつけている）を取押えている。現八が右手を小刀の柄にかけて構えている。その手前に船虫が斜左後向きで両手を後に縛られ、腰を折って前かがみになっている。後に縛られた腕に頭の髪が冠さって、帯が裾まで垂れ下っているのが艶めかしい。後手に縛った縄尻を取っているのは逸東太である。

夏引（なひき）捕方に糺明せられる 木工作の死を繞って、出来介と夏引が捕吏に召捕られる図である。絵は左上と右下の二図に分れていて右下は信乃と浜路が倉の前の部屋で捕吏に囲まれている処、左上は同じ様な座敷で夏引と出来介とが四人の捕吏に縛られている。出来介は手前の捕吏の蔭になって前半身しか描かれていないが、夏引は左前向きに片膝立って顔を右に向けて後手に縛られている。左手に縄尻を取った捕吏が右手で十手を頭上に振り上げている。夏引は女

房姿で黒襟の前が、はだかつて胸が大きく開いている。髪が半分崩れて垂れ下っている。畳や縁に土足の跡が夥しく印されている。

○ 船虫、庚申堂の二階の梁に吊される。眼病に悩む犬田小文吾を女あんなに化けて刺そうとした船虫が、取押えられ、次団太、ふな三、土丈二の三人に庚申堂の二階の梁に吊されて私刑に遭う図で、崩れかかった屋根、隙間だらけの床、壊れた手欄など古めかしく描かれた堂の二階に、顔を斜め上に向けて船虫が吊されている。勿論これも後手縛りで、頸に一条の縄がかかっている。次団太が背後から襟髪を取って引張っている。女の手前にふな三が後向き肌脱ぎで長い棒を構えている。船虫の前にいる土丈二は丸に亀の字を入れた提灯を掲げている。女は右足を上にあげて下股を露わにしている。八犬伝中、一番写實的な責めの場面である。

○ 船虫、小文吾に捕えられる。船虫が閻魔堂の前で、小提灯を片手に菅笠姿で来る武士をたぶらかそうとして「恥かしながら親のため、情を商う遊び女」と云い寄った処を、声で覚った小文吾が「そう云う汝は船虫か、小文吾なるを知らずや」と名乗りも果てず太刀の緒はやく解出しつつ両手をそびえ捻じ曲げて早や縛しめんと——と云う処の図である。

る。

狐格子の閻魔堂の前で地上へ腰を落した小文吾に船虫が、右手を後に捻じ上げられている。左手は大きく開いて役者が見得を切っている。黒い着物を着ている。胸元から麻の葉模様の褌袴が、なまめかしく覗いている。右膝を少し上げているので裾から湯文字がこぼれている。膝の前に小文吾が提げていた小田原提灯が落ちてゐる。堂の向うに上弦の月が懸っているといった図である。

○ 浜路姫、女僧に誘拐せられる。浜路姫が女僧、妙椿に猿ぐつわを嚙まされて連れ去られる処で、縛りの絵ではないが、猿ぐつわをせられた姫を、白無垢の着物に黒の広幅帯を前結びに締めた女僧（頭は坊主でなく二枚刈り程度）が小脇に抱え、なみ六と云う暴漢を突き飛ばしている。浜路姫は妙椿の左の脇腹へ下向きに抱えられ、左手を挙げて藻掻いている。背景はない。

○ 雪吹姫（ふぶきひめ）二人の悪僧に攫われる。徳用（とくよう）、堅削（けんさく）と云う二人の僧が雪吹姫を般若櫃に押し込めて加茂を越え、白川の山路を登り山中の靑面堂という小堂で休憩している時に、躍り出た猛虎に襲われるという場面——此処にて

時を移すより顔をちよいと見て、又櫃におさめて、明日の宵語らい給へとうち戯れつつ諸共に身を起し、櫃に掛けたる太緒を解きしりぞけて蓋を開けば徳用は、両手にもたぐる雪吹姫を出してやおら推し据ゆれば雪吹姫は悲しさと又口惜しさと苦しさに涙玉なす不識の窮厄。ものも云はれぬ猿ぐつわ、屠所の羊に異ならぬ身は後手に縛られし。膝に額を押し当てて只泣き沈みいるを、徳用は後より抱き起し、のけ反らして髭きたなげなる頬ずりして——戯れかかるのを堅削が制止するという文章であるが、絵は堂の縁と部屋の間で後手、猿ぐつわの雪吹姫が据えられ、奥に般若櫃が蓋を除いて置いてある。太い緒綱が姫の背後から膝の前のあたりへ蛇のようにうねっている。処々、板のはがれた縁にかけた階段の下に、二人の僧形が大きな虎の為に一人は足を股の処から噛み切られ、一人は脳天から血飛沫をあげて虎の顎の下にぶっ倒れている凄惨な図である。

○ 大体以上の八図であるが、総体に見て男の顔の表情はよく描かれているが、女はいずれも無表情に近く、喜怒哀楽の表現に乏しいように思われる。又姿態も芝居絵に見られるような仕切った形のものがかなりあり、その当時の読者の好む傾向が現われているようだ。

（終り）

パンティは誰に盗まれた

長谷川裕見子さんの家をねらっているところを、隣家の会社員に見とがめられ、重傷を負わせて逃走していた男が捕まった。網走帰りのすごいヤツだった。

誰、彼と名をあげるまでもなく、まったく俳優さんの家によく狙われる。つまり、お金がある……と、みられていたからだろう。

木暮実千代さんの話によると、毎月来るファン・レターの何分の一かは「金を貸してくれ」だそうだから、おして知るべし……である。

それにしても、どうしてこう女優さんばかりがねらわれるのだろうか。男は手ごわいが女はやさしい……というより、ドロボウ——この場合、全部男である——も、一度は女優さんの素顔を見たいという、一般のファンなみの心があるからか、あるいは、あわよくば、居直って……というスキ心があるから、なんだろうが、それがもう

一つこじれると、妙なことになる。

被害者は新東宝の三ツ矢歌子さん。しかも白昼にやられた……といっても、彼女の身体に別条があったわけではない。

物干に干してあった洗たく物をやられたのである。その品ぶれがケツサクなのだ。パンティ七、ブラジャー一、スリップ二、ネグリジエー、ブラウス一、計十二点。先月末の話である。

盗んだ女の下着ばかり、南京袋二袋に詰め込み、それをながめて、一人ニヤニヤしていたエロ漢のドロボー君が、二十六日佐原署に御用となった。

千葉県香取郡大栄町大良貝、香取操（二十九）で、この一月から、捕まるまでに実に百五十点も盗んだ。彼の押入れは、ピンク黄色、青など、色とりどりの盗品の山で、取調べに行った独身のお巡りさんも、これをみて目をパチクリ。

物が物だけに、被害届けは一件もなく、茶のみ話に「このところ物干ザオから、女の下着ばかりよく盗まれる」と聞き込んだのが逮捕のきっかけ。

お巡りさんたちは、いま派手な下着類を両手に抱え、これはお宅で盗まれたものではないませんか」と被害者を探し回っている。

（昭和33年8月27日附東京新聞）

（昭和33年9月5日附東京タイムズ）

百五十点盗んだ女の下着

× × × × ×

☆新聞切抜通信☆

藤 木 仙 治

体験記

バー「ナナ」の人々

(第六回)

南 時 夫

六 ミスズのこと(その二)

ミスズの腕がK子に掴まれて背後に廻されると、彼女の身体はうつ伏になった。自分も演技者の一人だとの意識が、ミスズを無抵抗にしていた。ごわごわした感触が背後に組合わされた手首に巻きつき、両手首の血管が止まるかと思われる程のきびしさで固定された。美智子が縛られた縄と同じ麻縄だった。それがいやさに枕もとに不必要な程、沢山の腰紐類を散らばせておいたのに、それもK子に通じなかったらしい。そこにある腰紐にしてよ！」と小声で頼もうとしたが、妹の美智子に聞こえると思って止めた。眼と口を覆

われている美智子は全身を耳にして、どんな物音に対しても敏感になっているだろう。強盗に、なれなれしく話しているミスズの声でも聞いたら、このなれあい強盗は直ぐバレてしまう。ミスズは仕方なく我慢した。手首を縛られると、そのまま引き起され蒲団の上に座らされた。それから後手が、ぐっと上に持ち上げられると同時に、手首を縛った縄がそのまま首に廻され、再び手首に掛けられ強く引張られた。首が、ぐっと締め息苦しくなった。ミスズは、自分から更に後手を上に上げ胸を反らし、これに耐え様とした。一旦、縄が手首に結び付けられてから、全く自由を失ったミスズの二の腕から胸へと、三重、四重と廻

され締め上げられた。一卷きすることに、ぐいぐいと締められるので全然、緩むことがなく、ミスズの身体は縄の当たっている箇所だけ大きくくびれてしまった。なにしろ、ブラジャーとパンティだけの姿である。それに同じ麻縄でも古くなったものならまだしも、真新しい絶対切れないことを我慢として売っている下駄の鼻緒の材料にする麻縄である。縄の当たっている膚はちかちかするのを通り越して切れる様に痛い。麻縄が細いものだけにその痛みも激しい。ブラジャーに覆われた乳房の上に巻かれた縄などは肌に喰い入って殆んど見えない程だった。あんなが一番ひどく縛られることになるのよ」とK子に念を押され



て幾分覚悟もしていたが、これ程までに情容赦もなく手ひどく縛り上げられるとは思ってもよらなかった。そうかと云って、この際、K子に抗議してもはじまらない。ミスズを高手小手に縛り上げたK子は男達に眼くばせした。男達は先程、縛ったまま転がしておいた、妹の美智子の両腕を持って、抱き起す様にして階段を下りていった。美智子は何分眼隠しされているので足取りも危い。それを持ち上げる様にして階下に消えてゆくのがミスズに

見えた。「可愛想に……美智ちゃん御免ね」自分と同じ様に痛々しく縛り上げられた美智子の後姿に、ミスズはこう頭を下げて謝ったがそんなミスズの思いも無視した様にK子が「いいね！ あと旨くやってよ！ さあ、口を縛るからうんと大きく開けて！」とミスズの頬を突ついて云った。美智子が側に居なくなつたので身体の痛みを訴え様と思っていたミスズも、こうK子に命令的に云われて思わず口を開いてしまった。それを待

っていた様にK子は、ミスズの枕もとにあつたハンカチだのストッキングだのをミスズの口の中へ押し込んだ。手当り次第布切れを押し込んだので、ミスズの口は半開きのまま閉じることが出来なくなつたが尚も、その上から靴下をつめ込もうとした処、入りきれずに口辺にだらりと垂れ下つた。その上から腰紐でぐるぐると縛り、はみ出るのを無理に押えつけた。これ以上、入り切れない程の布類を押し込まれたため舌は全く動かなくなり、発声は全く不可能になつたばかりでなく、うっかりすると気管までふさがってしまう様な気がしてミスズは喘いだ。鼻の穴が普通の何倍も大きく拡がってゆくの分った。もうその位で勘弁して！ 痛くて、苦しくて……と云つた積りが「あ、あーあうあう」という変な声になり、「フガ、フガ」という鼻声になった。

「何をアーアー云ってんのさ。あんたがそうだらしがなくちや困るじやないの」

とK子は怒つた様な声で云ってから、唇を開いて噛ませた猿轡の上から手拭で丁寧に覆つた。これでミスズの顔も多少、見られる様になった。それから後に結びつけた縄尻を取って

「さあ、立って下に降りるのよ。皆んな下の八畳に集めておいたから。あんた一人で降りられるでしょ。あとの事は分っているね。も

しバレたら、あんたも共犯なんだから、しっかりやるんだよ。まあ皆んな絶対解けない様に縛っておいたから、朝になったら、あんたが隣の家にでも知らせればいい。さあ、立た立った。」

立てと云われても上半身をきびしく括り上げられている身体では安定が取れない。ミスズは長い脚をずらして、やっと立ち上った。女学生とは思えない立派な姿態である。肉付きのよい肌、すらりとした脚、長く垂れた髪の毛。十七才なのでまだ未成熟のところもあるけれど、立派なグラマーであった。そのグラマーが哀れにも高手小手、首繩という姿で、口には猿轡を嵌められてよたよたした足どりで階段を下りた。手を縛られてしまうと何んと歩き難いものか、ミスズは初めて知った。一段、一段転びそうになりながら、やっと階段を降りて八畳の部屋に入ると、K子が云った様に、そこに哀れな犠牲者達が集められていた。

被害者達が皆、薄着なのが無惨だった。満足に洋服を着ているのは美智子だけだった。皆同じ様に猿轡をはめられ、眼隠しをされているのが見えただけで、ミスズは直ぐ畳の上に転がされた。両足が引張られ足首をぐるぐると括られた。今度はそう痛くなかったのは腰紐を使ったかららしい。足は自分で解ける様にとの約束で、その結び目を後に廻して強

く縛ってあっても、紐の一端を引張れば解ける様になっている。足を縛り終えると、K子はミスズの両眼を覆った。これは余りしっかりと締めていない。しかしミスズには何も見えなくなった。痛む身体を横にして長々と転った。もう何時頃だろう。三時に近い頃か、或はそれも廻った頃だろうか。やがてミスズの耳に、K子達が箆や引出をがたがた開ける物音が聞えて来た。現金や貴重品の在り場所は事前にK子に教えてある。近所、隣は寝静って何の物音もしない。こう旨く事が運ぶとは、ミスズも思っていなかった。ただ縛られている上半身が、たまらなく痛む。いくら何んでももう少し手加減をして呉れればいいものを、これでは痛くて身動きも出来ない。その中にK子達が、とるものもとったのか部屋から出て縁側を下りてゆく気配がした。用心深く縁側の戸を閉めてゆく物音がしたのも聞いた。やがて表の方で自動車の走り去る音がした。万事は終わった。ミスズは張りつめた気も抜けて、ぐったりとなった。これから朝までの行動は自分にまかされている。

K子達の逃げ去った気配を、ミスズの外の者も感じたのだろう。ミスズがそんな事を考えているのも知らずに一室に集められた被害者達は、今までの恐怖から覚めたためか呻き声をあげながら藻掻きはじめた。いくら暴れたって絶対に解けない様にしておく」とK

子が云っていたが……、どんな具合なんだろう。ミスズは畳に顔をこすりつけて眼隠しを取ろうとした。鼻が邪魔になって思うようにはずれない。尚も繰返えすと、やっと鼻の頭の方へ下った。部屋の灯が眼に入るとミスズは、ほっとしたが、皮肉なことに眼隠しの布で鼻穴が覆れて息苦しくなった。嚴重に咬された猿轡は主に口だけであつたので、鼻から大きく息をしていたのだけれど、その鼻も覆われて彼女は危く窒息しそうになった。眼隠しが猿轡になってしまったのである。あわて鼻を畳にこすりつけ、どうにか息苦しさを多少、救った。そして顔を浮かせて部屋を見廻した。

ミスズの眼に最初に入ったのは、眼前に伸びた裸の太股だった。ぴたりと合わされて長々と伸びていて、喰い込むように、これも白い麻縄が巻かれていた。ミスズの眼の前に突き出された両足から向側に伸びている身体に眼をずらせて顔を見た。年上の店員の春江だった。あの理知的な顔も眼隠しと猿轡に覆われ、スリッパ一枚の肌に厳しく縄が掛かっている。ぐいと背後に捻じ上げられた両腕に痛い春江の姿を見て、ミスズは見る事の出来ない自分の姿が想像された。春江の右に、これも手足を縛られて転っているのが母だった。縁台で涼んでいる時の浴衣姿のまま、これは

着物もきちんとして丁寧に要所を括られているが、胸に廻った縄などはそう厳しくはないらしい。母の美しさを先程、再確認したミスズだけに申訳けないとは思いつながらも、浮世絵を見る様な気持だった。母と春江の二人は恐怖からか、あきらめからか転ったまま動こうともしない。春江の真白い足が、ときどきびくびくとけいれんするだけである。ミスズは痛む身体をねじって更に見廻わした。

縁側の近い方の隅に身体をどたばたと動かしているのが、もう一人の店員の貴美子だった。K子達の去った後、急に暴れだしたのはこの娘だったらしい。寝間着姿で後手に麻縄で縛り上げられているのだが、横にごろごろ転ったり、無理に起上ろうとしては又、ばったり倒れてしまったり余程、勝気な娘に見えた。余り暴れ方がひどいので、寝間着の肩は脱げ乳房までのぞいている有様だった。美空ひばりによく似ている顔も猿轡に覆われ動物の様な唸り声を出して必死にもがいている。貴美子の隣に先程、二階から下ろされた妹の美智子が横になって、これ又、自由



を奪われた身体で藻掻いていた。もう時間も刻々と経っているだろう。猿轡から洩れて来る呻き声が、異様に耳に入る。言葉にならない声。それは身体の全体からしぼり出された声だった。藻掻き暴れれば、それだけ多く涎が出る。貴美子の口からも美智子の口からも、猿轡をぬらし喉の方へだらだらと垂れ流れはじめた。今迄、死んだ様に横たわっていた母と春江も、今は手足を突っ張ったり何んとか縄を抜け様としていた。こちらに背を向けるたびに後手がよく見える。K子の言った通りに絶対と云ってよい程の完全な縛り方だった。後手首だけは皆一様に真新しい麻縄のやや細目のもので嚴重に縛り上げられてあった。ちよっとの隙間も許されない程、ぴたりと合わさった後手首から二の腕へ、胸へと縄は伸び、はては首筋へと掛けて文字通り高手小手に括り上げられていた。それ等の中でも母と妹の縄目は、嚴重である点には変わりなく要所を強く締上げてあるが、その本数は少なかった。それに比べて女中である春江と貴美子の方は、情容赦もなく荷造りの様にされていた。高

手小手には違いないが、その上から尚も雁字搦目に縛ってあった。

眼の前にあるこれ等の光景を、不自由な身体を抬上げる様にして見廻わしてからミスズは、ぐったりと横になった。寝る前には縁台で涼んでいた、楽しそうに唄をうたっていたり、一生懸命、本を読んでいた家族のものが今はどうだろう。映画や小説の世界でなければ味わえない縄目に或は死んだ様に横たわり、或は苦しげに呻きながら藻掻き廻っているのだ。それも家族の中に一人の不良の娘がいた為だなんて。ミスズは眼前の無惨な光景に、さすがに心を暗くした。自分自身が厭になりそうになった。でも又、次にはこうなる外、仕方がなかったのだと思い直し、K子の強い眼の色と金を手にした時の仲間達の顔を思い浮べた。なるようにしかならない。刹那的の喜びだけが私を待っている。

ミスズは額に、べっとりと汗が吹き出しているのを感じた。口中に含んでいる布切れやストッキングは唾液を吸ってベトベトで氣持が悪く、更にその唾が猿轡の下から流れ出し首の方へ落ちてゆくのが分った。背中では組合わされた両手は、糊で張り付けた様にびったりと固着したまま動かなかった。首から二の腕へ、そうして乳房の上下に蛇の様に巻きついて麻縄は肌を喰い込み深い凹みの中に

没していた。体が寸断されるかと思われる痛みに彼女は呻いた。暑くても我慢して着物でも着ていれば、これ程ではなかったであろう。もう他の犠牲者達を観察する余裕とて無くなっていた。それに時の経つのがミスズを焦らせた。早く、なんとかしなければならぬ。いくら焦っても身動きすら出来なくなっていた。身動き出来ないとは全身を何処かに縛り付けられた場合だけではなく、一寸の向きの変更にも起る全身の痛みに、動く意志を失った場合も云うのであることを、ミスズは身をもつて知らされた。俯伏せになったまま棒の様に長々と伸びた哀れな姿。ブラジャーに覆われた乳房が畳に押つけられ、自ら招いた苦痛に不覚の涙さえ頬を伝っていった。K子が云った足首の縄を解くことも全然、計算違いだった。足首を後手に近付けようと俯伏になっていた身体を無理に反らせてもみた。しかし後手は首へと連絡して、それ以上、下らないし、足も両太股に縄が廻っているためよく曲らない。首が締め窒息するかと思う程後手を引張りながら、それでも数回、足首の縄が指先に近付いたこともあった。足首でも自由になれば、なんとか立って歩ける。しかし、それも諦めなければならなかった。余りの緊縛に、ミスズの手は腕から指先まで全く痺れ、彼女の意志の通りに動こうとはしなかったからである。全く別の人の手の様になん

の反応も示さず、K子の折角の好意(?)も役に立たなかった。

四時を打ち五時が鳴った。ミスズ達が助けられたのは朝の七時過ぎだった。商店は朝が早い。七時になっても戸を下ろしたままのミスズの家を、不思議に思っ庭に入ってきたのは隣の表具屋の奥さんで、勿論、木戸は開いたままだった。一步、庭に入ると何か異様な唸り声と戸をがたがたする音が聞えたので急いで開けてみると、ミスズ達の無惨な姿態があった。唸り声と戸を叩く音は貴美子がしたものだ。雁字搦目の貴美子は朝方ようやく眼隠をとり、ごろごろ雨戸まで転がってそれを開けようとしたらしい。身体ごと雨戸におっけて猿轡の下から呻き声をあげているところに、丁度その人が来たという。大騒ぎになった。近所の人々が来る、派出所の巡査が来る。ミスズは先に自由になった貴美子に手足の縄を切って貰った。猿轡を咬んだまま痺れた両手をこすり合せて、やっと口中からびしよびしよの布を取り出した。さすがに裸に近い姿では、と思い二階に上ったが、まだ悪夢を見ている様な氣持がし、それに全身に残る痛みに動けなかった。やがて妹の美智子もよろめく足取りで上って来た。美智子の両頬にくっきりとついている絞った様な猿轡のあとが、余りにも生々しかった。

この慣れ合い強盗事件は意外に早く発覚してしまった。仲間の一人が盗品である腕時計を質に入れたことから足がついて、その男の自供によりK子もミスズもいもづる式に捕った。その後の細い推移は省くことにするが、ミスズは当然、退学処分になり、自分の家に居ることも出来なくなった。お決りの転落コースである。アルサロ、バー、キヤバレーと転々としながら自活の道を歩んだ。性来の気の強さから男に頼るのは厭だったがミスズがその気になれば豊富な姿態に物を言わせて、男を手玉に取る位いは造作もなかった。確に、どんなキヤバレーでもミスズのような日本人離れした体を持った娘は数える程しか居なかったし、貧弱な男ではかえって威圧されてしまっていた。従って男を頼りに思った事もなく、又、頼ろうともしなかった。そうであればある程、よりたくましい自分を振廻す様な強い力の出現を期待する事もあったが、現実には男勝りのミスズをリードしてゆく男性は見当らず、皆彼女の意



のままになる様な不甲斐ない男ばかりのよう
に思われた。

アルサロ「Y」に居た頃、一つの事件が起

きた。この事件がこの話における一つの重要なポイントを占める。彼女の潜在意識を表面化した一つのエポックとなったからである。

アルサロ「Y」に入ってから一月半ばかり経った頃、ミスズを指名する客の中で高林文男と云う男が居た、M大の学生ということだったが、財界に一勢力を占める父を持つ裕福な家庭に育ち、しかも彼以外はことごとく女の姉妹であつたためか非常におとなしく、多少W的傾向にあつた。その文男がミスズに夢中になった。初めの中は一週間おき位だったが、やがて一日置きに通うようになった。甘やかされ我儘に育つたため、熱中すると、止るところを知らなかった。指名してもミスズが他のテーブルに呼ばれて直ぐやって来ら

胸 毛 頰

菅 良 太

一昔前までは、胸毛というものは粗暴野蛮のシムボルとされ卑められ、画などでも悪鬼野蛮人、又は荒くれ男、雲助などでなければ、胸毛を持たないように描かれていたが、近代になって胸毛は立派に男子の体の装飾具となって、ひそかに胸毛の生えることを苦心している男性もあるとかいう話である。

ある女性ばかりの座談の中にも、男性の最も魅力は何かと言ったら髭と胸毛だという事が衆議一決したそうである。なる程、この二つは女性にはないもので、女性が渴仰するのはもっともな話である。浅黒い胴板のように引緊った男の胸に黒々と生えた胸毛、二つの小さな乳首を挿んで、湧き昇ってゆく渦雲のような胸毛は、何と言つても男性の魅力の最たるものであろう。ウィリアム・ホールデンは、この胸毛のりっぱな俳優として第一人者である。彼はワイシヤツの第一釦を外すと、もうすでに粗い胸毛が見える。純白なシャツと対照した胸毛

は、女性の心をときめかさずには置かない。「ピクニツク」という映画では彼の裸体になる場面が多かったが、何を思ったか彼は胸毛をきれいに剃って出演した。これは重大なミスで、彼の豊かな胸毛が見られたらあの映画の魅力は一そう増したと思う。

フランスのジェラル・フィリップの胸毛も又、相当なものである。彼は小柄で、そんなに魅力のある体の持主ではないが、「赤と黒」で、ジュリアンソレルに扮し、上半身を裸になった彼は、実に立派な胸毛を見せたものだ。あの場面で、ソレルの野望に満ちた青年であることが暗示されて面白かった。伊仏合同映画のフアビオラで羅馬の軍政官が反逆の罪で矢で射殺される処刑の場で、腰をわずかに掩っただけの体にされた彼が、両手を高く括られた時に見られた腋毛と胸毛は、実に素晴らしく、思わず溜息が出たものだった。その男性的な体は無惨な矢を射込むのだから我々アブには十二分の垂涎映画だった。未だ見ていな

れない様な時は、泣きそうな顔をして帰ってしまう。ミスズも相手がお坊ちゃんでもあり学生なので、適当に相手になっていたが、余りにも熱中し、真剣になって来るにつれて時々、可愛想にもなり、又それだけに困る事もあった。しかし金も惜しみなく使い、その点ではミスズにとっては上客であった。

学校が夏休になったとのことで、毎晩の様にやって来た文男が或る夜、ラストバンドで踊りながら無理に飲んだウイスキーの勢で「ねえ、明日つき合ってくれない？ 逗子に行きたいんだ。ね、いいだろう。車を廻すから真直ぐ飛ばせば、たいして時間なんてかからないよ。」

「逗子！ いいわね、行きたいけど明日は駄目よ、一寸約束しちやうたことがあんのよ。」

「じゃー 明後日でも、その次でも……」

「そうね……」

ミスズも、こうまで言われ、しかもこのところ高価な品物を次々に持って来る文男のことを考えると、そう無下に断るわけにはゆかなくなった。

「じゃー、そうね、月曜日にでも連れて行って頂くわ。余りお店もあけられないから、すぐ帰るわね。」

それから四、五日経ってから、ミスズは文男と逗子に行った。じりじりと照りつける真夏の太陽のもと、平日でも可成りの人出だっ

いが「芽生え」という映画で出てくる青年の胸毛も又、良いものである。ラブシーンの時、可憐な少女が胸毛の中に顔をうずめるシーンは男性女性の美しさを端的に見せる美しい場面である。ある随筆にあった話であるが、ある女性が昔の級友を訪問した時に、丁度、夏の頃で、その級友の夫君が禪一つという姿で、庭の芝生にホースで水をやっている姿を、垣間見てしまって、その夫人に逢った時「貴方は美しいわ、あんな男らしい旦那さまをもって」といったらその夫人は「あらどうして」と尋ねた。

「だって、あんな立派な胸毛のある旦那さまって少いわ」と言ったので、夫人は「あらッ」と言つて赤面したそうである。本当に日本人には胸毛の立派な男性は少いようである。髭は濃い人はあっても胸毛はまばらであつたりする人が多い。ミケランジェロのような男性の美に傾倒した芸術家も、ミステナの祈拝堂の壁面に胸毛を描く事が出来なかつたのは残念だつたであらうと思ふ。又、ギリシャ彫刻家も、あの隆々たる胸に胸毛を描けない事は彫刻の哀しさであらう。

男性の責画や責写真に胸毛を見せたら、どんなに魅力が倍加するだろうと時々思ふ。乳房以外に女性と比較して大して変ら

ない胸部を、この胸毛によってはっきり區別する事は、やはり大切な事であると思ふ。責め抜かれて脂汗で濡れる胸毛。又、鞭によって傷つき血のこびりついた胸毛。緊縛された縄目の間から盛り上つてくるような胸の筋肉に密生した胸毛。ともに素晴らしいものである。横村奏氏の「偽縛」(十月号)に中年の巡査部長が、ぐれん隊の報復を受けてリンチされる場面があるが、遅い六尺禪一本で緊縛され、先ず蠟燭火で豊かな胸毛をじりじり焼かれる場面があつたが、最近の男性責での異色であつた。男性責では、ただ吊したり鞭打つたりするだけでなく、男性の魅力の根源を責めるのではないと、女性責と何ら異なるところがないような気がする。

力士朝汐は、この胸毛で鳴らした男の一人であるが、彼の人気を支えるものは、あの太い眉と男性的な風貌、あの逞しい胸毛である。近代の力士は、もはや若の花のような美しい肉付きの豊かな力士よりも、朝汐のような男性美の象徴を見せた力士の方が明らかに魅力のあることは言うまでもない。だから彼に対して、サムソンの髭を狙つたデリアのように、一夜にして彼の胸毛を剃りとってしまう者がいたとしたら、彼は無力な黒星力士と逸墜するに違いない。

た。ミスズは真紅の海水着に純白のアロハを着て歩いた。堂々たるその姿態は、すれ違ふ人達を必ず振りかえらせ、それが側に居る文男を誇らしげにした。駅から海まで殆んど男女が露な体を見せて歩いていった。夕方になりある一部の人達が帰つていった後は、夜に咲き狂う様々な花の温床であつた。波の音が不気味に静まり返つた海岸を流れる。文男は大事なものを持つ様に、ミスズの手を握つて歩いた。ミスズにとつては今迄に、いろいろと場数を踏んで来ただけに別に恐くも何んともなく、かえつて余り気の進まないままにやつて来た初の気分が周囲の空気によって興味あるものに変つていった。文男が何を言い出そうとし、何をしようとしているのか、考えなかつた。夜の十時を過ぎ周りは闇の中にとけ込んだ様だつた。ケーキやジュースを飲みながら文男と二人で多少、草地のある場所に座つて居たときだつた。矢庭に懐中電灯の光が二人の顔を照らし、数人の男達が近付いて来た。相手の顔が見えないでこちらの姿だけ見られる程、気味悪いことはない。二人が反動的に腰を浮せると同時に四、五人の背の高い男達がぐるりと取巻いた。二人の男に腕を掴まれたミスズが

「何をすんのよ! あんた達!」と叫んだのと、文男が他の男に殴られ、よろよろと倒れかかつたのと同様だつた。(未完)

話 第二・帖手懷郎銀十郎

女 裸 磔 憎 愛

古 比 猛 緑

糸屋町の六間筋の裏にある小さな居酒屋『よし乃』は月に一、二度、まったく客のない、淋しい晩があると云うが……今夜が、それだった。

堺の浜の、汐香を含んだ冷たい夜風が吹き込んでくる晩秋の宵――。

のそっと縄暖簾をわけて、寂莫を破った浪人――。外ならぬ薊銀十郎であった。

隙間風で微かに揺れていた行燈の明りが二、三度、すうっと仄暗く、またたいた。

銀十郎は、それへ何となく視線をなげて、おると胸震いした。

「うう、滅法、冷めなくなってきたやがった。かみさん、熱いのを一本つけてくれ」

その声で、おかみは、ほっとわれにかえったように眼をあげる。

「何んだか、今夜は妙に淋しい晩ですねえ」

「そうよ――、妙に、客のねえ晩だな」

「月に一度や二度、こないやな晩があるんですよ」

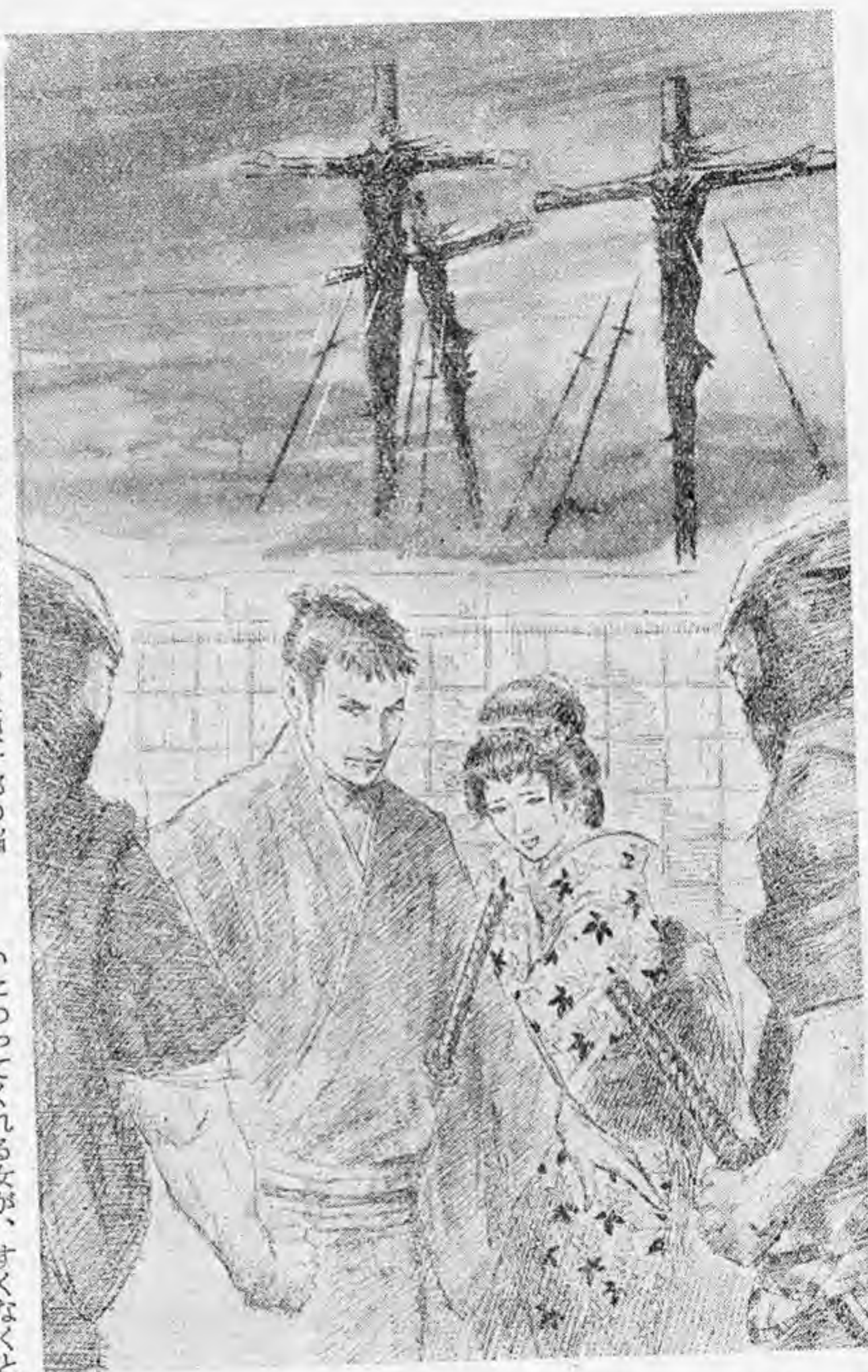
「こんな夜、店で一人ねるのは、やり切れなからうよ……。フフ、高須の酒が時に帰りつくまでに、すっかりさめてしまったぜ」

苦味走ったこの男の、面貌にただよう虚無的な冷たさか、銀十郎の生きている世界の暗さと遣切れなさを暗示していた。

高須廓での流連三日の疲労が、銀十郎の四肢に沁み渡っていた。

旅籠町東二丁の松屋の女郎、珠名大夫の濃艶な匂いが彼の鼻孔にとどまって、その匂いが、酔いのさめて果た後の、うらわびしいむなししい今も、空虚な脳裡の片隅を占めていた。

何時頃、堺へ流れて来て、何処に住むのか――。謙いたちの弥六も知らない、銀十郎の謎に閉ざされた前歴である。



二本、三本と、彼の前に空徳利が並んで蕩然となった銀十郎の脳裡に、女盛りのむっちりとした柔かな肌を、蛇身の様にくねらせて身悶えした、珠名大夫の妖艶な痴態にダブって、お小夜の、あの夜の灼けつくような強い想いをこめた眼眸が、名状しがたい感動で浮び上って来た。

危機一髪、まさに人肌人形とされる直前、大野道竜軒の魔手から救った時――

――死んでもいい。

お小夜は、気の遠くなるような陶酔にひたつて、銀十郎の腕の中で、いじらしくつぶやいてすがりついて来た。

激情のまにまに、瞬時が過ぎて――。

「達者でくらせ――、縁があれば又逢おう」

無感動に、風間利兵衛の宅前まで送り届けて、追い縋る必死の眼眸を無下に退けて、別れた筈であったが――。

――あの娘は、おれを好きだと云ってくれた……。

銀十郎は、自分に云いきかせて見た。

強く抱きしめたお小夜の、しなやかな重みは、未だ彼の両腕が忘れずにいた。

――おれのひび割れた魂を、

いたわってくれる女が、すくなくとも一人はいるのだ！

盃を口に無心に運び乍ら、銀十郎は臉をとじて、お小夜の羞恥を思い出そうとした。

いつか、しとしとと表は、秋雨がしめやかに軒を叩いていた。そして、うつらうつらと臉が重くなったその時――。

秋雨にそぼ濡れて、つむじを巻いて若い女が駆け込んで来た。「お願いです。助けて下さい！。捕まると殺されてしまうのです……」

お願い——」

顔色蒼褪めて、銀十郎に哀願すると、必死の素振り、彼の後姿に隠れ様とした。

何か喚いて、数人の覆面姿のいでたちの屈強な男達が、ドヤドヤと乱入して来たのは間もなくの事であった。

銀十郎はキッと眼を配る。

むこうの相手も、一齊にぴたりと静止し、異様な沈黙が続いた。

この沈黙を、さきに破ったのは銀十郎の方であった。

「何者じゃ？」

悠々、迫らぬ訝えた声である。

頭だった正面の男が低く、殺氣立って答えた。

「女を引渡して貰いたい——」

「フフ、たった一人のか弱い女子に、多勢でかかって引渡せとは……拐わかしに違いあるまい」

「何——」

忽ち殺氣立つ連中へ、「いや」と押し止めて、頭の男は険しい表情をかえして、

「無理からぬ事だ。しかし、その方、この女を、西宗真の娘と知ってかばい居るのか——」

「何——、宗真の娘だと……」

銀十郎は、急に苦虫を噛みつぶしたような顔になって、彼の後に震える娘を、改めて見直した。

必死の哀願の色が、娘の円らかな瞳に宿っていた。

——そうか、あの鬼畜生の、宗真の娘か……

銀十郎は、目を伏せ訴える様に彼の背にピタリと体を寄せた娘にフト憐情を覚えた。

「御一同——、気の毒だが渡されぬな——。窮鳥懷ろに入れば何とやら——、わしに免じて見逃してやってくれ——」

「ならぬ——。何者だ、その方？」

「名乗る程の者でもないが、強いて聞きたくば、堺の勘ね者、薙銀十郎と申す、ちよっかい浪人だ。宗真の悪どさは兼々、聞いているが、娘の知らねえ事だ。勘弁してやりな——」

「えーい、問答物用。邪魔立てすれば斬る迄だ——」

「どうしても……」

そう言つて、銀十郎は素早く、おもてを一瞥した。

暗い往来を、音もなく黒い影が三つ、四つふさいでいたのである。狭い店の中に、殺氣はひしひしともつて、数人の黒覆面は一齊にギラリと刃をかざすと、じりじり銀十郎に迫ってきた。

二

雨中に血風を捲き起して、銀十郎は漸やくに逃げ延びて来た。大里町の西宗真の座敷に間近い、ここは本受寺の境内だった——。うばたまの間に、二人は雨を避けて、寺の本堂の庇にピタリと、へばりついていた。

銀十郎は、刃を裾で拭いて鞘に納めると、

「フフ、とんだ妙な廻り合せよ。わしは宗真を憎んでいる。人間としては……。知っているのか、そちの父の行状を」

静かに闇に問う。

「はい、薄々は人伝てに聞いております。悲しい事です。でも、私にとつて……」

「鬼畜生でも、父だと云うのだな……」

「はい——」

「そちの名は、何と云う——」

「志津と申します」

「そうか……だが、今夜は危険だぞ。屋敷には戻れぬかも知れない。奴等、必ず、その方の屋敷の辺りに潜んでいるに違いない」

「……」

「如来様にお頼みして、本堂で濡れた衣類を乾かしなどして、夜明けを待った方がよさそうだぞ」

銀十郎は、うすく笑いかけた。殺気に脅えて、志津は微かに声をのんで、頷いた様子だった。

信者仲間の裏切者——。瀆神者として、切支丹信者から激しい恨みを買った、父宗真の脂ぎった肥軀が、その時、悲しく志津の胸中をよぎるのであった。

堺の西宗真と云えば、遠く呂宋にまで知れ渡った貿易商人であった。異国人相手の彼の取引の秘訣は、相手の国民性や人情の機微に通じるのが、その最短手段であると彼は信じていた。彼は第一に切支丹信者になって洗礼をうけ、名もルイス（類子）とさえ改めもした。

勿論、心底からの信者ではなく、商売可愛さの手段に過ぎなかったが、洗礼を受け改名した事が、南蛮人の好感を呼び信用を得て、瞬く間に巨利を博したのであった。

時の流れが、豊臣から徳川に移り、幕府の方針が切支丹の禁教令となつて現われ、この禁を犯した者は嚴罰を加えられる事になると、時世に敏な宗真は、逸早く切支丹宗とプツリ手を切り、同時にこの切支丹を逆用して、身の安全を計ろうと考え、すぐ様、幕府にとり入って、今までの切支丹宗徒との交際によって知り得た内情を一切合財、幕府に報告したのであった。宗真の安泰に引換え、こうした裏切り行為は、忽ち切支丹信者への厳しい弾圧となつて襲いかかり、信者は続々捕えられ、あの有名な、七堂の浜での惨忍な処刑へと発展していたのであった。

宗真の屋敷の大里町は、ルイス町と呼ばれる程の繁栄に比較して血涙を呑み拷問に憤死した幾多の信者の怨恨が、宗真の一身に集ま

った事は当然の事であつた。

七堂の浜に血風吹き荒ぶ頃、志津はこの世に呱呱の声を挙げていた。

銀十郎は志津と並んで堂に跼まり乍ら、人伝えに開いた拷問の惨状を、測々と胸に蘇がらせていた。

志津の髪から洩れる丁字香の匂いが、彼の間近でおののいているのを、心の片隅で意識し乍ら……。

三

七堂の浜の切支丹処刑場は、宗徒に対する残虐な拷問や、眼を蔽うような極刑ぶりから、さまざま哀話を生んで、怪奇な噂が次ぎ次ぎと伝えられていたのであった。

子の刻過ぎる頃、七堂の浜の浪風が突如、騒いで、浪間を縫うて何処からともなく、鋸引きや、海老責め、石抱きの絶叫が聞え、怨嗟の聲が湧き上ってくるとか——。

小雨の細々と煙る宗門の日の夜には、十字架を先頭に、鼻を削がれた者、両耳を切られた女、脳天から串刺しの男、火焙りの醜怪な形相の男、碧眼をくり抜かれた伴天連、手足を断ち切られた達磨女、腹を割られてドロドロの腸をはみ出した女等が、よろめいて、人魂の飛ぶなかを数限りなく行列をつくって、宗真の屋敷へ進んで行くのを見たとか、——

噂は数限りなく、とにかく宗真の屋敷辺りは魑魅魍魎の巢窟の様に云われていた。

事実、七堂の浜での拷問振りは、衆目への見せしめもあって、苛酷、惨烈を極め、見る者の眼を蔽わせずにはいられなかった。

珠数つなぎにながれて頭髪を乱し、既に度重なる打撃と、激しい折檻の為に、ぼろ布のようになった着物を引曳って、ぞろぞろつながらて行く信者たちの誰一人、満足な姿の者はなかった。取わけ

女たちは半裸に近い姿で、胸や裾の乱れも直せず、よろめいては恥かしい恰好になって、足どりも危うかった。

役人たちの鞭は、情容赦もなく鳴り響き、悲鳴をあげながら長い黒髪を引摺まれてズルズル引き曳られて行く若い女もいた。

それでも信者は口々に「えすきりぬす！」と低く唱えていた。

竹矢来の刑場に、数多くの白木の磔柱が転がされてある中に、役人たちは、宗徒の左右で槍の穂先を光らせていた。

よろめく信者の背に、弓折れの鞭がヒューと風を切る。打たれた信者の咽喉から、細い笛の様な悲鳴が洩れる。

空は高く晴れ、浜の白波は柔かく海辺で碎ける白昼——。刑は正に始まろうとしている。

信者の群から三人の男女が引き出された。

「ころべ！ 今からでも遅くはない、許すぞ。ころばぬか！」

「さんた・まりあ」

「うぬ、こやつ！」

憤怒の形相で、役人達は信者に襦を着せ、その上から荒縄でぐるぐる巻きに縛って、その襦袢に火をつける。

浜風に煽られて、忽ち襦は火になり、火達磨の男女は、猛炎の中に絶



叫して狂い廻る。地に激しく頭を打ちつけて倒れ、手足をビクビクとけいれんさせ、地面を転げ廻り完全に襦が焼け落ちると共に、命の炎の消える者は、まだしも幸福であった。

女の、半身焼け爛れた軀を地面にこすりつけ呻めき続ける態は、見るも哀れであった。

「鍔踊りだ！」

さも愉しげに役人達は、女のそんな恰好を眺めては笑った。

「おお可哀想に——」

群衆の中で、つぶやく者がある。

と、忍んでいた捕吏は、その同情者を捕えて、忽ち刑場へと引曳って行った。

環視の前で、男も女も轟々と高手小手に縛り上げられる。

唯、一言の為に、三尺高い空に曝され、颯りものの様に滅多突きに突き殺され、鮮血をしたたらせて残骸を垂らしている。

「でうすの奇蹟は、うそなのか——」

「おお、天の神よ——」

声は次第に刑場に溢れ、高くなる。

しかし、累々と死屍はふえて行く一方だった。

残酷な刑は、それだけではなかった。

七堂の浜辺には高い足場が組まれ、足場の棒杭に、波がザブザブと打ち寄せていた。

裸の信者が足場の上に追いやられると、役人は、宗徒の両足首を太い縄で丸太に縛りつけ、後手に縛り上げた上、乱れた髪に荒縄で重石を括りつけ、弾みをつけてドンと押した。信者の体は真逆様に海に落ち、振り子のように前後に揺れ、重石のために静止した頭上に波がザブリザブリと容赦なくかぶり、逆吊りの顔は浪間に沈んで、鑢て命を奪って行くのであった。

ズラリと並んだ逆吊りの体が動かなくなると、役人は足首の縄を切り離す。

重石の為、頭を沈めて、下半身を波間に浮べた信者の群が、プカプカ漂ようとしているのは、悲惨云わんかたもなかった。

遙かに淡路の島を望んで、紺碧に澄むちぬの浦も赤く激んで、鬼哭啾々と松嶺に打ち寄せていた。

水刑に火刑に、残忍の極に没る役人達は、女の宗徒の黒髪を櫓から突き出した太い足場の丸太に結んで吊しては、耳をそぎ、鼻を削り、手足を斬り、遂には胴体を真二つに断ち割って、上半身だらりと腸の垂れ下った体から、滝の如くほとばしる血を眺めては、歓喜した。

生き乍らにして首を鋸で引きさられた者。仰向けに四肢を棒杭に結いつけられ、大槌で叩かれて、全身粉々につきくだかれた者、生理めにされて、真赤に焼けた鉄鍋を頭からかぶせられた者、櫓の頂上から、海老責め縛りにされて突き落され、頭を砕いた者等、惨忍と極刑の限りを尽して、一応、堺の切支丹信者は根絶したかに見えた。

しかし、その底に潜む背徳者、西宗真への深怨は、身内一族の中に烈火と燃え盛っていたのである。

薊銀十郎は茫然と、銀杏のいただきから去って、雨の上った薄明るい空を、ゆるやかに流れる有明の月を見上げていた。

乳色の朝霧が徐々に立ち籠めて、颯々の冷気が頬をなぶる、陽の昇る一刻前——。

——女心か……。おれにはわからん。

金で買った珠名太夫は別として、小夜も志津も、あらがう色もなく、恥じらいを浮べて、俺の抱く手に寄添って来たではないか。

——所詮、女心はわからぬ。

銀十郎は、身支度もそこに頬を真赤に染めて逃げる様に立去った志津の、濡れて冷たい手肢の内に、カッと燃える様な若い柔軟な熱い肌を、己れの皮膚に残した強烈な感動を想い浮べて、われにもあらず臉がうるむのを覚えた。

——もう一度、逢えるか、逢えないか。

ボンと空に鏝銭を投げて、パツと掌に受ける。そっと開くと、表

が出ていた。

「逢えると云う占いか——、フフ、逢ってどうする。」

銀十郎は静かに歩を運んだ。

割合いい声で、

「秋の野に、咲きたる花は何々ぞ……」

珠名太夫の口説の間に間に聞き憶えた、堺で流行りの隆達節のひと節だった。

四

「——逢うことの絶えてしなくばなかなか、人をも身をも……」

「おや、旦那。百人一首でげすかい。急に又どうなさったんで」

鎌いたちの弥六が驚いた様に、素頓狂な声を出した。

あれから数カ月——

正月も過ぎて、木枯が吹き荒れる季節に変わっていた。

居酒屋『よし乃』の片隅——。

銀十郎と弥六が、どぐろを巻いていた。

「ところで旦那、西宗真の野郎のところへ、昨夜、賊が押し入って、ごっそりと金銀財宝を引っさらった上、末娘の、宗真が眼に入っても痛くねえって可愛がり様だった志津って生娘を手籠めにして、何処かへ拐わかしあって噂ですぜ。へん、いい気味じゃござんせんか——」

「何——。志津が、かどわかされたと……」

銀十郎の眠ったような眸が、キラリと鋭く光る。

「へえ——。旦那。あの娘を御存知なんで」

「……」

「何にね、銀十郎の旦那が、去年の秋、丁度ここで、その娘御さんが助けを求められたのを、救ってあげたまでのことですよ」
居酒屋のおかみが、横から口を出す。

「へーん、世間は狭いねえ。ところで旦那。押し込んだ奴が云う事にや、娘は苦しめるだけ苦しめて殺してやる。次は姉娘の番だ。可愛い娘達をすっかり片付けてから宗真、手前を颯り殺しにしてやる……と、こう脅かしてづらかったそうですぜ。堺の街で、あれだけ恨まれてりや、誰一人同情はしていねえ。デウス様の罰が当たんだと、専らの評判でさあ」

弥六のお喋りも上の空に、銀十郎は別の事を考えていた。

——銭占いで表が出て、もう一度逢える筈だ。となると俺は、あの娘を助けてやらねばならぬ。宗真の娘を助けたとなると、堺の街じや、この俺をどんな眼で見事だろう。考えて見りや、まったくハナから奇妙な廻り合せだ——。

無言で銀十郎は立上る。

「旦那、旦那——何処へ行きやすんで……」

「……」

志津の行方の知れぬ詮議は、所詮俺一人の手では負えねえんだ。銀十郎の足は、殿馬場の方を向いて嘗って助けたお小夜の父、普請奉行、風間利兵衛の宅に向っていた。

案内を乞うと、出て来たのはお小夜であった——。

一瞬、二人の眼が空中で激しく火花を散らした。久方振りの再会が、お小夜に万魁の思いで胸に迫って来た。

銀十郎に傷つけられた傷痕は、その容姿に微塵もとどめず、その心の中でだけ、今も生々しく熱い血をたぎらせていたのである。

たしかに、あの時——その白い艶やかな裸形は羞恥に息づかい一つ、青竹を背に、両手を竹に縛りつけられ、豊かな双つの乳房を丸々と曝して、なまめかしく緋襦袢の裾を乱して、恐怖におののいていた筈であった。

咄嗟に羞恥の肢態を思い浮べて、小夜は真赤になって、もじついた。

「今日は、父上にお目にかかりに来た。案内して下さらぬか——」

「まあ、父上に——」

フト、不審げに、

「して又、どの様な御用事で……」

「そなたに話しても詮ないが、西宗真の娘が拐わかれた。その娘御を助ける手段として、父上殿の御智恵を拝借しに参った——」

「まあ、その様な危ない事を……」

「してはならぬとおおせられるか。縁もゆかりもなかったそなたを救った拙者。他人の迷惑、難儀ならどうでもよいと云われるか」

「申し訳、御座いませぬ。父に直ちにお伝え申し上げましょう」

火と燃え盛る心の中を押し殺して、小夜は努めて平静になろうとした。男の体臭を切々と肌身に思い浮べ乍ら——。

——この人は、こんなお方なのだ。私のお慕いする気持を、十分汲み取っておられても、所詮は別の世界に住んでおられる方なのだ。

風間利兵衛を待つ間。

銀十郎は目を伏せ、じっと小夜の挙措を嚙みくだいていた。たった今迄、小夜が自分に会いたいと考えていようななどは、夢にも思わなかったにも拘わらず、小夜の必死に取り纏ろうとする眼の色を読みとると、自分も前からそれを期待していた様な、胸の弾む喜びをおぼえた。

——志津を救うにしても、まず、この俺は生きのびねばならぬ。

銀十郎は生きている事が楽しくなってきた。

五

志津は、もう四、五時間も水につけられていた。飛石伝いの春日灯籠のわきの、飾井戸のはねつるべは除かれて、井戸車にかかった太い棕櫚縄の先は、井戸底に胸まで水に浸って呻吟する志津の体に犂々と巻きついていていた。

屋敷からさらわれて、ここ数刻、志津は幾度か、カラカラと吊り上げられ、又沈められては屈辱を全身に受けた。

棕櫚縄は深く肌に喰い込んで、最早、疼痛を越えて感覚をなくしていた。寒気は骨の髄まで沁み通り、神経を貫いて知覚を麻痺させていた。両の素腕は痛々しく後手に捻じ上げられて縛られていた。縄を通して覗いている胸の双つの隆起は、かすかな紅を含んで、既に色づいていた。肩から腹、そして腰から太腿へかけての、なだらかな円みを帯びた曲線は、初雪に掩われた丘陵さながらの、美しくも滑らかな眺めであった。

「降ろせ——」

掛声がかかると、志津の体は急速度で下降し、再び胸まで水に浸った。

水を含んだ棕櫚縄は、容赦もなく志津のかよわい裸身を、心ゆくまでしめつけた。

凍りついたような井戸水は、志津の全身を瘦れさせた。

ふいに刺し通すような激痛が感じられた。

始めは長い間をおいて感じられていた。だが、次第に痛みと痛みの間の時間が縮まり、同時に痛む度合も一際激しくなってきた。

「あっ！ ウーッ、ひーッッ」

ついに辛棒ならず、志津は声を挙げた。縛られた全身をけいれんさせて、水中で両肢をはね、身をのび縮みさせて志津は苦悶した。懸命に志津は、後手に縛られた指先で、井桁の石を掴もうとし生爪を剥がし、それでも必死に掴んで力を入れた。

彼女の体力の、それが限界だった。

——凍え死ぬんだわ。

遠い記憶に薊銀十郎の苦味走った顔が、クルクル脳裡をかけ巡って、志津は失心した。

六

大小路、占の辻の火の見櫓に、黒い影がさっと近寄るとみるや、猿のように音もなくスルスルと昇って行く。

大気も凍りついて静まり返った寅の刻——。

寒さに震える欠伸交りの見張り番が、呀ッと云う間もなく引倒されて、脾腹を押えて悶絶する。

櫓の端に突き出た摺板を外すと、黒い影は腰にした太い綱を通して、ズルズルと手繰り、パタリと地上へ垂らした。

戸板にのせられて、ここ迄運ばれたのか、志津は腰のもの一枚の哀れな姿で、両手も両足も捻げるだけ捻げさせられて、二本の太い青竹に縛りつけられていた。一団の持つ数本のたいまつに赤く照らし出された志津の顔は、蠟のように透き通って血の氣とてなく、点々と赤黒く血痕に染った腰のものは、べったりと濡れて、彼女の肌にひたと氷の如くまとわりついて、その曲線を深々と浮出していた。

五十尺になんなんとする櫓から、地上に垂れ下った太綱の端が、志津の両足を束縛した青竹の中央に確っかり結ばれると、頭梁らしき男の合図によって、一齊に縄の片端を掴んで、えいッえいッと引っ張り始めた。

ズルッ、ズルッと、否応なく志津の全身は櫓に引寄せられ、両手脚を張ったまま脚から逆に、ぐんぐんと引上げられて行く。

志津の悲鳴は闇に消えて、十尺——二十尺——三十尺と櫓の頂上へと吊り上げられて行く。

逆はりつけに近い志津を、遙かに高い櫓の頂上に吊り下げて、夜があければ、この身の毛もよだつ恐るべき逆吊りの姿を、界の人々へ曝そうと云うのか——。

目眩むような高さに逆さに吊られて、志津は既に生死の境を彷徨

していた。相次ぐ苛酷な責めの連続に、既に彼女の命は半ば失なわれていた。

西宗真の娘と生まれた因果に、志津は己れに襲いかかった、この地獄の責めに最早、諦めに似た、悲しい運命を感じていたに違いない。夜明けまで保たぬ生命であったが、仮りに群衆にこの生恥を曝しても、宗真の娘と知れば誰一人助ける者もなく、反って歎び、石を投げるにきまっていた。

いや、唯一人、薊銀十郎を除いては……。

その夜、銀十郎は既に先刻から、この一部始終を、闇に隠れて眺めていた。

下手に手出しをして、あの引き綱の手を離されたら、志津は一瞬落下して、粉々に砕け散るに違いなかったからだ。

櫓の根元にしっかりと引綱を括りつけると、頭梁の覆面は、夜眼にも太く書いた紙片を櫓の土台にべったり貼りつけた。

空は風が出たのか、寒気は愈々つのり、体は宙に激しく揺れているのが微かに見えた。

そろそろ夜明けも近い。

引綱の根元に一人の男を残して、さっと、一味は散った。いざといえは、見張の男はピンとはりつめた、この命の綱を一刀のもとに断ち切る覚悟であろう。

「なんとねえ——、非道え事をしやがるじや御座んせんか。宗真って野郎が、どんな悪い奴か知らねえが、あの娘には罪のねえ話だ——。遙か空に霞んで、判っきり見とれねえが、ぐずぐずすると可哀想に死んじまいますぜ」

弥六が、うずうずしたように囁くのを押し止めて、

「フフ、では、そろそろと行くか——。うまくやるんだぜ——」

「オッと、合点承知——」

鎌いたちの弥六め、放たれた犬のようにさっと駆けて、櫓にとり

ついた。

と、同時に銀十郎の剣が、隼の如く一尖、空気を切ると、櫓の根元の男は声もなく倒れた。峯打ちだ。櫓の頂上の男は幸い気付いた様子もない。夜明け迄を、櫓のてっ



べんで頑張るつもりであろう。此奴に気付かれれば最後だ。銀十郎は無益の殺生をしたくなかった。恐らくは宗真のために、万こくの恨みをのんだ彼等の一族の復讐であるだけに、彼等一味のこの行為を肯定する気持と、志津を助け出したい気持とが錯綜して出来れば血を見ずにその場をすませたかったのだ。

弥六の姿が高く小さくなっ
ていった……が、時は既に遅
かった。暁闇をついて既に
白みかけた東の空は徐々に明
るさをまして、櫓の男は逸早
く、弥六の姿を認めた。

きらりと抜いた一刀が、摺
板の太綱に当てがわれる。

「寄るなッ——、この綱を切
るぞ——」

必死に覆面の眼を血走らせ
て、この男は身を捨てて叫ん
でいた。

七

堺の街の人々で占の辻は身
動きもならず埋まっていた。

青竹に、両手足を大の字に
拡げて縛りつけられた逆吊り
の美女に、人々はあれよあれ
よと立騒いだ。

「助けてくれッ、誰か助けてや

「ってくれ——、助けた者は黄金十枚、いや二十枚……ええい五十枚褒美に与えようぞ。娘を助けてやってくれよ——」

狂気のように髪を振り乱して、櫓の下で叫んでいるのは宗真であつた。

堺の人々の恨みの頂点の宗真に、群衆は小気味よげに嘲笑し、誰一人応ずるものもない。

「——うーむ、娘が死ぬ……。あのままではもう死ぬに違いない。頼む、どなたか助けてやってくれ——」

半狂乱となつて絶叫する宗真を、群衆の後で銀十郎は黙念と見凝めていた。

——俺はあの志津を助けてやりたい。だが……助けてやれば、堺の町人共はこのわしに唾をはきかけるだろう——。

馬蹄の響きが人々をわけて、堺の奉行、長谷川左右エ門が直々に出馬した。

「不逞なる痴れ者！ 神妙に致せよ——」

「ハハハ……町奉行か、一步でも近づいて見ろ——。この女は急転直下、粉々になるぞ！」

櫓の上と下とで激しい応酬があつたが、奉行は業を煮やして、

「ええい、女の命が危ない。かかれッ」

下知と共に捕手がバラバラと櫓に縋る。

「来るな、ええい、切るぞ——」

片手に太綱を握り、真剣が綱に押し当てられる。

朝陽が志津の白蠟の全身を赤く染めて、群衆は、この惨酷な私刑に湧き返っていた。刻一刻、人は増してくる。あちこちの屋根は人で鈴なりとなり、口々に宗真の非を鳴らして喧々ごうごう。騒ぎは娘の志津に端を発して、日頃の宗真への恨みが拡がって、不穏な空気を形成していった。

おどろに髪振り乱した宗真目掛けて、パラパラと瓦礫が飛び始め

た。

櫓上の男は英雄であつた。群衆の効果を推し測って、彼は益々威丈高となつていった。

銀十郎は意を決した。

黙々と櫓に近づくと、捕史の眼を尻目に、櫓の梯子を一步一步ふみしめて昇り始めた。

「あつ、銀十郎さま——」

群衆から女の声が銀十郎の耳を打った。

揉まれ揉まれた群衆の中に、彼はお小夜の交っているのを知つた。お小夜も可愛いすが、志津もいとほしい。しかも、今は一刻の猶予もならない——。

銀十郎の後を追つて、捕吏がよじ昇ってくる。

「近寄るな。俺一人で沢山だ。下れッ——」

彼は叱咤して昇る。

櫓の頂上に手が掛つた時、殺氣が彼の頭上に流れた。

「うぬッ、斬るぞ——」

「待てッ、話がある。俺は昨夜から、其方等の一部始終を眺めていた男だ」

「何？」

「まあ刃を引け。俺はその方を斬る氣は毛頭ない。フフ、俺も宗真を憎む男の一人だからな——」

「……」

「が、俺はその志津に惚れられた男——。と云えば思い出した様だな。そうさ。居酒屋『よし乃』でその女を助けた浪人者よ……」

「あッ、銀十郎……とか申す浪人——」

「その通り、俺だって立場が代れば、この位のこととはやりかねぬ男だ。が、ものは相談——その方等の目的も達した上は、この女を救けてやってくれ。その代り、その方の命も保証する——」

「いやだと申せば……」

「フフ、命を粗末にする男だ。既に死にかかった女を今更斬って何になる。見ろ下界を——。蟻の這い出る隙間もない、あの通りだ。俺は其方の糞度胸が気にいったよ。殺すに惜しい男だ。とも角、刃を捨てろ——」

「よしッ、逃がしてくれると云う言葉に偽りあるまいな——」

「銀十郎は堺の名物男よ……。それに武士だからな、二言もあるまい——」

男の刃は垂れて、虚勢は崩れた。

銀十郎の双手が、太綱にかかる。力を入れて志津を引き上げる。青竹を斬り離すと、下界からなだれのような歓声が上った。白く凍った、氷の肌を横抱きにして、銀十郎は、胸に手をあてる。あるかなさかの鼓動を感じとり、始めて銀十郎の頬に軽い喜びの笑が浮んだ。

——よかった。助かりそうだ。可哀想な志津さん。——

刃を垂れて、覆面の男は立竦んでいる。或いは銀十郎の気魄に打たれたのだろうか。

縛られていた火の見櫓の見張り番の絆纏を大急ぎで脱がせると、そっと志津にかけてやる。

「おやじさん、面倒だが、暫く介抱を頼んだぜ——。おい、度胸のいいの、さあ、下界へ降りるとしよう。フフ、任せておけってことよ」

銀十郎が先に、二人は櫓から下って行く。

待ち構えていた奉行の手の者が、さっと二人を取囲んだ。

「薙銀十郎、出かしたぞ。よくも曲者を召捕えてくれた」

馬上の長谷川左右エ門の声に、じろりと銀十郎は奉行を見上げ、

「拙者、召捕った覚えはござらぬ。勝手に櫓に上り、勝手に下りて参ったまで。ハテ一向に——」

じっと町奉行の眼を凝視した。

「では、曲者の事は一切存ぜぬと申すのだな」

左右エ門の唇は、ほころんでいた。

「その通り。あッ、群衆に混れ込みましたぞ——」

声と共に、銀十郎の左手は、逃げる逃げる男をつついて、群衆の中へ押しやっていた。

「ヤレ、有難や。娘は生きておったか。ホレ、大枚五十枚の黄金、手渡すぞ」

慌ただしく彼にかけよった宗真は、さも惜しげに勿体ぶって五十枚の黄金を、ふくさに包んで差出した。

咄嗟に激しい憎悪の念が、こみ上げた銀十郎、いきなり、宗真の顔を力任せに平手で殴りつけると、空高く黄金をばらまいた。

金色に燦然と輝いて、飛び散る小判に群衆は、わっと歓呼の声を挙げるのを尻目に、彼は見向きもせず、やがてスタスタと太陽に向かって消えていった。

(この項終り)

臨時増刊号

「責小説特集号」

一部 定価 二百円 (送共)

大好評、売切れ近し!

昨年十二月に「責小説特集号」として、昭和二十七年年度発行の本誌の中から、責小説の傑作二十点を選んで刊行しましたところ、好評裡に最近残部僅少となりました。東京にて本号の海賊版を作成する悪質出版社が出現して話題を呼んだ問題の特集号であります。只今、残部数を若干保有しておりますから、何卒売切れにならない中、御申込み下さるよう御待ちしております。

被 縛 渴 仰

近 藤

一

民子の果てしない幻想の源は彼女の豊富な読書力にあった。そしてその読書の力は、優雅で、教養深かった亡き母が育成してくれたものであった。民子は心から母を敬愛している。此の広い世の中に、誰一人頼る者の無い女の身には、頼もしい父や、勇敢な兄の愛情が満ち満ちていた家庭の想い出が、心の拠り所になっているのは勿論だが、やはり母親の助けが一番有難く思われるのも女同志の細かい心遣いが感得されるせいであろうか。日常の悩み、判断の迷いには、民子は必らず母を思い出すのである。星一つ見えないような苛

立たしい夜に、民子が被虐の幻想に悶えた、うち廻って苦悩する時は母は民子の気持が鎖まる迄じっと見守っていてくれるのである。そんな狂おしい被虐の幻想に憑かれても、民子は母を尊敬し愛慕していた。民子の想像力は確かに母によって培われた読書の慣わしに基いていても、民子のマゾヒズムは自らが育て上げたものであり、それが生来の資質と指摘されようと母を恨む筋では更々ない。悦虐の性を持つ自分を嫌悪する処か却って愛憐を感じている以上、こういう民子を生んでくれた父や母を恨めしくなど思う筈もない。

母が買ってくれた数多い物語を民子は貧るように片端から読み耽った。様々な描写が乙女の心に強い感銘や印象を与えたものであった。然しそのような中で、美しい女体が女なるが故に受ける苛責の苦悶は、当初、乙女心に決して快いものではなかった。悪神の怒りと呪詛を受けた両親の身代りになる乙女が、孤島の海岸の大岩に鎖で後手に繋がれ、柔肌を房々とした長い髪で出来る限り覆い隠して海獣の犠牲にされる日を泣きながら待つ姿、神罰を受けた三人の女が太木の幹に裸で珠数繋ぎに縛り廻され、多くの男神達の視線に曝

この一篇は、高村民子さんの「被縛症」を、そのまま骨子にして綴ったものです。原文は今以て、私に鮮かなイメージを描かせてくれる大好きなもので、未見の方には心からお奨めしたいと思います。

昭和三十一年七月号「被縛症」
昭和三十一年八月号「被縛症(二)」

されている姿に、神話の世界を忘れて、民子は胸がドキドキする程の恐怖や羞恥や悩乱を現実に感じたのだった。もしも自分がそんな目に遭ったらどんなだろうかと考えるだけで心臓がギョッと絞られるような居たたまれぬ想いがして、夜、床の中の回想にさえ牀を顫わせたものだった。

現実の事態として被縛、凌辱が民子の柔らかな女体を襲ったなら、恐らく死を覚悟するだろうと民子は憶う。慎しみ深く育てられた良家の乙女は、そのような恐ろしく強烈な感情を歓迎など決してしなかった。だがそれでいて断乎斥けることもできなかった。

或る夜、父の愛犬の首につける鎖を隠しておいて深夜の湯殿で独り自らを縛ってみた。銀色の細い鎖を一廻り喉に巻いてから背に垂らし、背で組んだ両の手首に巻きつけて、その姿を脱衣室の大鏡の中に晒してみた。壁に凭れたまま何分も頃垂れている丸やかな裸身に、あの物語の乙女達の恥ずかしい姿を偲ぶと、肩から乳房、胸、太股までが小刻みに顫え出して、激しい気の遠くなるような胸の疼きが全身に渦巻いた。

好ましい激情とは決して思わなかった。然し一度きりで忘れ去ることは到底できなかった。勉強を理由に家の者の寝鎮まるのを待っては、淨らかな裸身を湯殿に晒してみた。肩

や腰の辺りのぼつてりと女らしく色づいた肉体、胸から腹へかけて殊に輝く程の膚の白さ、すんなりと媚やかに伸び切った四肢などが、物語の女達の受難になぞらえた自虐に、屢々曝された。

この、全身を揺さぶる激情の本質が、充分な理解とまでは行かなくても、臍氣ながら掴み得たのは、やはり民子の読書力の賜であつた。一般のマゾヒスティンが雑誌や写真、絵画、或いは現実の行為の累積から、感覚として、事実として識り得ることを、民子はかなり理論的に体系的に考えて讀んだ。民子が父や母の眼を怖れながら、それでいて家人に怪しまれずに耽讀した書籍は、父の蔵書の犯罪学であり刑罰学であり犯罪心理学であつた。民子は淑やかな頬を紅潮させて、分厚い専門書を読み耽った。怖ろしい口絵や写真に惹きつけられて、激しい鼓動や喉の渴きを覚えた。そして益々被縛による自虐じみた妄想は際限もなく拡がり、独り遊戯の愉悦は深く大きくなつて行つた。確かに、それは愉悦であつた。愉悦というものゝが嫌悪でなく自ら希求すべきものであるなら、他の誰に知られることをも怖れながら嫌悪せず、求めて已まないその激情は、正しく隠れたる悦楽、秘めたる愉しみであつた。

民子はこの愉悦を甘やかさず、慎しみ深く大切にきて来た。厳格なまでに一筋に育くん

で来た。そのことが、民子をあらゆる誘惑や暴力から守り通す力の支えになつていたのであつた。

民子の希いは静かな落着きであつた。優しい夫に心から仕え、可愛い子供達を二人か三人育てながら、平凡な主婦として家庭を守ることを夢見ていた。

民子は他人から信じられたいと思ひ、そして自分も心から信じたいと願つた。しかし大衆の世界は醜惡で嘘が満ちていた。民子は他人に屢々、裏切られた。そんな時、涙を泳いで民子は母に縋り、父を想つた。母は教養深い眼差しで、やはり正直の美德を説き、民子を褒めてくれた。民子はやはり他人を信じたいと思ひ努めて来た。民子の前に現われる男性には、それが民子を求めると否とに拘らず、臆病な程に控え目であったのも、民子のいじらしい努力の現われであつた。だから、もし民子が口数に反比例した凝視を送つていた男性に、民子の心の琴線に触れる誠実さがあつたなら、民子の肢体は彼の胸の中で妙なる樂を奏でていたに違いない。

或る時は思ひもかけぬ烈しい嫉妬に苦悩しながらも、多くの人達の好意に包まれて生きて来た民子は、生活が安定すればする程に、男性に対して臆病になつて行つた。

いつの頃からか、そのような男性への臆病が、大事な被虐の妄想と結びついていた。



そして——
民子の前に高村と云う青年が現われた。高

村は酔いにまかせてか、民子の上品さを脱がせ、淑やかな慎みの裏側にある裸の女を手にとってみたいと云った。その言葉は聞き馴れていても心に染みた。

「アラ、上品？私、ちっとも淑やかなんかじやないワ。でも、脱がせたいのなら御自由になさってヨ。どうしたらいいの？」

相手をしながらのビールのせいかな、確かに心が弾み、血が躍っていたのを識っている。

「それはネ、まず君を縛り上げ、本音を吐く迄ギューギュー抑えつけ、それで未だ上品ぶっていたら、ムチで引っぱたくのサ。」

それを聞く途端、どうした事か、胸の中がキュウツと締めつけられ、ビリツと撚り取られたドレスの下から肌が露われ、首筋近くまで捻じ上げられた後手首が首縄に繋って縛られるような幻覚に襲われた。民子の顔は真赤に血が上り、息が弾んだ。まるで引据えられた晒し者のように、民子は高村の前に深く首を垂れ、両膝を揃え、身を固くして眼を閉じてしまった。

「貴男になら、そうされもていいワ。」

冗談にするつもりで云った言葉が、却って内心の秘密を曝け出したようで、はじめだった。笑みが頬を硬張らせてしまった。

その夜、民子は床の中で輾転した。高村に縛り上げられる吾身の幻覚が、民子に覆いかぶさり、体中の血を沸き立たせた。

小犬のように泣きながらいざり寄る民子は邪慳な手で着物を撈り取られた。

両の手は、必死の抵抗も空しく無慈悲に後手に高く縛り合わされ、俯向いていた顔も引絞る首繩に堰かれて高村を仰ぎ見なければならなかった。冷やかな侮蔑と嘲笑。それでも民子はムチを握る高村に魅せられていた。緊い首繩で俯向くこともできず、厳しく縛られた哀れな姿で、民子はズルズルと無恰好に曳かれて行った。血塗れの責具。怖ろしいギロチン。

「許して下さい。他の事なら何でも云う事をします。どんな事でもします。お願い！」

高村の前に、膝をついて必死に哀願する吾身を頭に描いて、民子はホロホロと泣き悶えた。

そのこと以来、民子は高村に惹かれる特殊なものを感じ始めた。否、特異な激情を求める余り、民子は高村の上に求める男を見出すとしていたのである。

留守に訪れた高村の部屋で、民子はKKという特異な存在を発見して、貪り読み、激しい胸の疼きに暫らくは安心してしまった。学問の世界の出来事として観念の事例であったことが、普通の出来事として身近い実例の数々になって迫って来た。

今迄の自分の後めたい縄の遊戯がまるでマ

マゴトであったという安堵。高村が求める男になつてくれるかも知れぬ、怖いような期待そして愈々昂まる自虐の妄想。

深夜、衣服を脱ぎ捨てて、冷たい銀色の鎖を足首に巻いて、やっと歩ける程に拘束し、上半身は幾度もやり直しながら雁字絡めに自縛して、よろめきながら歩き廻った。囁き者にされた死ぬ程恥ずかしい吾身を頭に描いて項垂れて膝まずき哀願した。後手の裸身を仰向けに地面に倒して、妄想に身をくねらせ、喘ぎ呻いて、気の遠くなるような被虐の陶醉に耽りきった。

今は、ただ高村に助けを求めるより外はない、高村にこの気持を鎮めて貰う外に救いはないのだと、民子はいじらしくも一途に思い詰めた。高村の愛情と理解は不安だった。こんな大それた恥ずかしい秘密を打明ける相手としての自信はない。しかし、とにかく高村に求める男になつて貰うより救いはないと思つた。高村から受けるものが苦しみだけであるとしても、今の苦悩よりは遙かに小さく軽いと思われたのである。

逢つたならば、ああも云おう、こうも云おう。そして説明し、理解され受け容れられようと思うことが、いざ高村の顔を見、前に立つと、一言も口に出ず、胸の奥深く後退りしてしまつた。

独りになると堪らなく恋しい。今度こそ逢

つて云おうと思う。言葉をかわすと、二人きりになつたらと思う。二人きりになれると、然し素面では云えなかった。アルコールの力を借りようとして、却って苦しくなつて哭いた。高村の屈託のない顔、温い言葉を前にすると、折角張りつめた気持が段々動揺してしまつて、何から云い出していいのか分らない程に頭が混乱して来る。「私、貴男に縛って頂きたいの」とは、幾ら思い詰めても民子に云える言葉ではなかった。

KKを愛読するからと云つて、高村が民子の求める男とは限らない。もし打明けて侮蔑をかつたらどうしよう。民子は高村の反応が心配で、不安で、死ぬ程の思いだった。

逢えば、涙の出そうになる顔を覆う外はない。夜更けまでまんじりともせず考え、とても口では彼に云えるものでないと識つて、民子は高村への想いを手紙に託すことにした。幾枚もの便箋を丸めて捨てたあと、かなり思い切つた文章を綴つて行つた。書きながら羞恥と不安で民子は泣けてしまつた。本当に生きた心地もなく高村の反応を待った。

諾否に拘らず、民子の希いは高村独りの胸にしまつて貰いたいこと。疵が残ることや、未だ自信のないムチ打ちはしないで欲しいこと、等々を、民子は条件として書き綴つた。民子は、自分が未だ完全なマゾではなく、ま

たそうなりたいたとも思わず、遊戯の域に止まりたいと願うことも書き足した。高村が民子の小さな願いを蹂躪するかも知れないことなど考えもしなかった。これまでに身を低く、ひれ伏して哀願する乙女の願いが無視されるとは到底信じられもしなかった。

手紙を手渡して高村の応答を待ち詫びる間、民子の心に湧くのは只、後悔ばかりだった。心を擱めたとも思えぬ高村に、女の一生を運命づける程の大事を託してしまった自分の無謀と軽卒が頻りに悔やまれた。

高村の回答は応諾であった。

張りつめた心が一時に緩むような安堵と、ワクワクする程怖ろしい期待に、民子は舌が硬張っていた。高村との、生まれて初めての悦唐遊戯を実行する日、かつてない甘酸っぱいものの疼きを味わって胸が痛んだ。

民子はその夜、心身共に醜弄され尽した。

民子は泣き虫になった。悲しくては泣いた嬉しくても泣いた。苦痛にも安堵にも泣いた。涙を拭うこともできず、後手のまま突っ伏して哭くのは快かった。転がされ男の前に曝されて、やがて身を顛わせて哭くことが、堪らなく娛しかった。空想や妄想が現実化して何の悔いもない。

民子は、やがて高村の姓を名乗った。

海老責め、逆海老などのポーズをフィルムに残されながら、紐の喰い入る痛みが、いつか痺れるような快感に変わって行くのを覚えていた。

泣くことの欲びを識ってから、民子は以前にも増して素直になり新鮮になった。夫を疑うことは更になかった。責められれば心から苦しみ、悶え哭いた。余りにも生々しい反応を、体全部で示すのであった。

抑えつけられる

吾身を想い

浮かべながら

腰紐を

いじらしい程、ひたむきに夫を慕い求めた。夫の心にもない烈しい詰問に、涙を浮かべながらも、決して責苦を拒もうとしなかった。民子は高村の可愛い妻になっていた。

今宵も又、夫のために粧う民子であった。肥り肉の身を入浴に浄め、ほんのりと染まった素肌に湯文字と肌襦袢を纏う。鏡台の前に跪いて身をよじりながら、夫の好む和服姿に



れい子 画

装った。無理矢理に脱がされ、抑えつけられ
る吾身を想い浮かべながら、腰紐を結び帯を
締める。晴々と幸福感に満ちた顔だった。
細引の束ねたのを取り出して見る。それが
緊く喰い込んだ膚は、括れ、赤く脹れ痕を残

している。吾身の肌が愛しく、夫の暴虐が恋
しく、細引の苛責が懐しかった。
民子は二巻き三巻き、細引を胸に縛々と巻
いてみた。肌触りは快い味だった。手首だけ
を動かして細引の余りに煩ずりをしてみた。

哭く娛しみを憶い今宵を恋う民子である。
——夜は静かに更けて行った。
——完——

〔新版〕女体緊縛フオト オンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 纏)

各組一組 (全部送料共)

R 10	R 9	R 8	R 7	R 6	R 5	R 4	R 3	R 2	R 1	一組一枚	一〇〇〇円
鎖しはり晒責	股間しはり	鏡に映つた後手	後手足しはり	後手猿ぐつわ	海老責しはり	高手小手猿ぐつわ	床間の飾り物	海浜に於ける緊縛	柔肌に強烈な荒縄	五組五枚	四〇〇〇円
(蘇千恵子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(須川令子)	(蘇千恵子)	(花坂道子)	(佐賀美智子)	(蘇千恵子)	(須川令子)	十組十枚	七五〇〇円
										二十組二十枚	一四〇〇〇円
										三十組三十枚	二〇〇〇〇円
										四十組四十枚	二五〇〇〇円
										五十組五十枚	三〇〇〇〇円
										六十組六十枚	三五〇〇〇円
										七十組七十枚	四〇〇〇〇円

R 32	R 31	R 30	R 29	R 28	R 27	R 26	R 25	R 24	R 23	R 22	R 21	R 20	R 19	R 18	R 17	R 16	R 15	R 14	R 13	R 12	R 11
薄羅の後手緊縛	くさりゼメ	松樹後手しはり	変型足手しはり	高小手しはり	逆エビ責め	股間しはり後手	後手吊りゼメ	逆さ本吊りゼメ	梯子責め	強烈な梯子ゼメ	帆立しはり	いたふり	足湯梯子ゼメ	緊縛横臥	立木野外しはり	トイレでの縛り	猿ぐつわの魅力	開股しはり	尻立後手しはり	女学生制服しはり	股間しはり正面
(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(蘇千恵子)	(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	(蘇千恵子)	(春日ルミと伊吹)	(伊吹真佐子)	(厚狭春江)	(村田那美子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)	(川辺砂登子)	(蘇千恵子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)

R 71	R 70	R 69	R 68	R 67	R 66	R 65	R 64	R 63	R 62	R 61	R 60	R 59	R 58	R 57	R 56	R 55	R 54	R 53	R 52	R 51	R 50	R 49	R 48	R 47	R 46	R 45	R 44	R 43	R 42	R 41	R 40	R 39	R 38	R 37	R 36	R 35	R 34	R 33
帆立舟のゼメ	樹間のハリツケ	落花狼藉の緊縛	股間しはり	本縄しはり	ヌードしはり	腰元の吊り責	振袖の緊縛	開股椅子ゼメ	逆立の折檻	全裸の股間しはり	折檻の魅力	くさりゼメ	御開帳	後手しはり	手と足と緊縛	股間しはり	松樹縛り晒責	後手猿ぐつわ	お灸ゼメ	肉体美への折檻	仰向全裸悦虐責	後手首縄シメ	乳房下しはり	和服の後手しはり	手足逆吊り	首縄股間しはり	股間タテしはり											
(益田房子)	(川辺砂登子)	(田中芳代)	(愛川悦子)	(村井知可子)	(花坂道子)	(蘇千恵子)	(大塚啓子)	(須川令子)	(愛川悦子)	(川端多奈子)	(加賀利江子)	(蘇千恵子)	(同右)	(村田那美子)	(中塚文子)	(蘇千恵子)	(伊吹真佐子)	(春日、伊吹二嬢)	(伊吹真佐子)	(川端多奈子)	(加賀利江子)	(村田那美子)	(藤田節子)	(伊吹真佐子)	(坂口利子)	(中富綾子)												

R 100	R 99	R 98	R 97	R 96	R 95	R 94	R 93	R 92	R 91	R 90	R 89	R 88	R 87	R 86	R 85	R 84	R 83	R 82	R 81	R 80	R 79	R 78	R 77	R 76	R 75	R 74	R 73	R 72
乳房搾りゼメ	開股正面いじめ	トイレ正面排泄縛	野外バンド責め	乳房くさりゼメ	仰向開股しはり	女学生のしはり	破れたシユミース	腹部丸出し猿轡	後手股間しはり	腎臓責め	全裸乱れ髪	ヌード股間縛り	亀ノ甲縛り	全裸床柱縛り	開股ベツド縛り	乳房しはり	後手高小手	目隠し開股縛り	下着の色模様	尻立逆しはり	湖畔の宿にて	ハイヒール	ビクニツク	全裸横臥緊縛	ヌード縛り	変形全裸股間縛	逆エビ責め	
(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	(中塚文子)	(村田那美子)	(川辺砂登子)	(蘇千恵子)	(須川令子)	(坂口利子)	(伊吹真佐子)	(中塚文子)	(愛川悦子)	(川辺砂登子)	(大塚啓子)	(蘇千恵子)	(愛川悦子)	(花坂道子)	(田中芳代)	(愛川悦子)	(大塚啓子)	(須川令子)	(蘇千恵子)	(村田那美子)	(蘇千恵子)	(村田那美子)	(花坂道子)	(蘇千恵子)	(愛川悦子)		

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第八十三項

本誌連載中「魔教園」

ここに挙げた魔教園も亦マゾ・サディズムを含有するヤブーと同じ系統の作品である。併し乍ら、ヤブーよりも商業的に成功したかに見えるこの作品が、マゾ・サディズム作品という特殊な範疇に入ることが出来るか否かについて、私は甚だ悲観的な結論を出さざるを得ないのである。ここに登場する人物自身のみならず、此の作品の何処にも、ヤブーや或いは他のずっと技巧的に拙劣な告白体の作品や投稿に比して、マゾ・サディズムの烈しい燃焼が感じられないからである。そして、此の作品が案内する世界には、偏向した性愛

は存在せず、徒らな虐待の方法、虐待の状況そして交代する加被害者の顔触れなどが、繰返されて居るにすぎない。小説体作品に不可欠な要素である必然性は全く見出すことが出来ず、各種の他作品に刺激されたと思われる特異な人物、構成、背景、場面及び環境などがそれらを示す為以外の何等の目的もなく御都合主義によって次々と現われ、何の関連性もなく次の段階に入ってゆく傾向が見られる。従って、この作品は明らかに作品以前のものと見做されてよい種類のものである。処が、これらの数多くの欠点、而も致命的な欠陥にも拘らず、此の作品は、サド・マゾヒズム的な作品の一つの絶対的な要素を具現して居ると思われる。それは、読者をして、サディズム、又はマゾヒズムの妖しい遊戯を

連想させ、その世界——それはこの作品とは全く関連を持たない、各読者自身に固有のものである。——に没入する強い暗示を毎回与えるに違いないという事である。いや、むしろその事のあるが故に、作者としての形体が崩れ去ってしまったのかも知れない。ヤブーは其の内容する処は、驚嘆すべき程の精巧さと綿密な組立て方、それに作者の烈しい熱愛が全篇を貫いて居るにも拘らず、読者をして、肉感的な世界に誘導する処は甚だ少い。この作品は、ヤブーと異った意味で、丁度名作歌劇の余り手際のよくない跋扈曲を聞くという様な意味で、それなりに存在の意義がある。けれど筆者としては、理由なき虐待や、全く愛情の伴わない設定——不思議な事に主人公と目される人物は全く正常な愛情をしか相互に示していない。——特に加虐者と被害者との相互間には何等の精神的関連もないという様な点を、多少改善せられることによって、更に此の作品が、本誌に於いて重要な意義を持つに至る十分な下地を持っていることを特に付言する。

復刊第八十四項

エレアノール・パヴロワ女史について

「東京新聞十月初旬号中」

東京新聞が十数回に涉って夕刊第五面に連

載した我国の洋舞界の先驅者の列伝の中の一つとしてこの帝政ロシアの貴族の娘が、我国で永らく活躍し、遂に帰化して、極く最近に恵まれないその生涯を終ったという記事であるが、このパブロワは有名なアンナ・パブロワと何等関係のない人物である。併し、この二人は同様に瀕死の白鳥をその十八番とし、共に帝政ロシアの高名な舞踊教師の弟子であった。記事にはごく簡単にしか述べられていないがエリノア・パブロワ女史は、他に矢張り十八番の一つとして「騎乗」という踊りを得意としていたこと、そしてその踊りが、一人で騎馬の貴婦人の散策を表現する極めて珍らしいものであったことに触れている。その衣は古典的な乗馬服であつたらしいが、このことは西班牙の民俗舞踊フラメンコの中にフアルッカという一種目があり、これが乗馬服の女性の踊りであることと共に、注意に値すると思つてここに紹介しておく訳である。

復刊第八十五項

米映画「西部を股にかける女」

主演、ロンダ・フレーミング他

(米アライド・アーチスツ会社)

ロードショウ映画として封切中の米画。但し、この作品は「牛追い鞭」(Bull Whip)という原題であるにも拘らず、女主人公が牛追い鞭で男共を支配してゆく女性である事が

台詞によって一度説明される以外に、特に期待される様な場面はない。只、ロンダ・フレーミングが牛追い鞭を空振りする場面が数カット現われる。処が、この映画と同名の主題歌は楽器として牛追い鞭の音を用いており、台詞は単純なものであるが、十分に楽しめるものである。映画としては脈絡の悪い作品で或は輸入の後に可成り再編集して相当短くなっているのではないかと思われるもので、出来栄は至極悪い。フレーミングも決して適役といえない。

復刊第八十六項

出版物「黒人」

朝日新聞社刊

黒白の人種問題は、現在の国際状況の下にあって、米国のみならず各西歐植民国の大きな問題となつて来た。朝日新聞社は人種平等の立場から、この一冊を出版したものに違いない。けれど私達は、この本を異った眼で見ると、白人種の家畜の一種としての広汎な地域に於ける奴隷制度の實在、そうしてその余韻ともいふべき差別待遇の法制的残存等は、その一つ一つの実例に當つて、誠に注目すべきものを持っている。政治的の考慮や、社会思想上の問題は別にしよう。其等は、私達の光の部分であり、マゾヒズムのみならず、純粹に個人的生活の一部である性愛の世界は、私

達の影の部分であるからである。影の部分の夢は、この古典的な、そうして最も權威のある方式によって實現されていた偏向性愛の老大な別世界に眩惑された憧憬の夢を追うのである。

復刊第八十七項

「ゲルハルト・ゾンメルとバルバラ」

(伊太利定期刊行物「エポカ」誌より、同誌通巻第四〇六号所載)

「エポカ」とは英語やフランス語の「エポック」即ち、「時代」の意である。米誌「ライフ」や仏誌「パリ・マッチ」又は「ジュウル・ド・フランス」又、西独誌「クヴィック」等と同様のグラビアのグラフィック誌である。ゲルハルト・ゾンメルとバルバラのブーヒエンヴァルト強制収容所での記事であるが記事内容はむしろ現代のナイチンゲールの物語である。只、同収容所の有様を写した写真と、バルバラが独軍兵士と同様の軍装で撮影した写真が掲載されている点が、極めて間接的に興味を呼ぶ。同誌は時々、ファシストやナチスの暴虐の記事を掲載するので、強制収容所等に於ける事実に興味を有する方があれば、都内では有名洋書店に僅少部数宛、配本されるので御注意下されたい。(以上)

◎ 未来幻想マゾ小説 ◎

|| 家畜人ヤプー ||

○作者から○ 拙い作ですが、中絶を惜んで下さる声も聞きますので毎月連載とはゆかないかも知れませんが、できただけ発表します。御愛読下さい。

沼 正 三

新らしく読まれる方に

(多少変えた点がありますから、今迄読まれた方も一応目を通して下さい。)

——×前章迄の概略×——

今から二千年後、時間と空間を征服した人類の宇宙帝国イースE HS (The Empire of Hundred Suns 百太陽帝国) の数百個の遊星領には、前史時代以来連綿たる英王室の女系の女子が女王として君臨していた。女権制——女性が、政治、軍事、司法、経営管理等社会活動の一切を掌握し、男性は学問と芸術を事とするが家庭では妻に隷属する。これは貴族と平民とを問わず、そうだった。政体は貴族政治で、略々一千の大貴族とその十倍の数の小貴族とが、その十

万倍の数の平民を統治していた。以上の正規の国民はすべて白人でその外に白人数の百倍に達する黒人奴隷階級があり、更にその下に黒人数の百万倍もの黄色家畜人ヤプーが飼育されている。

黒奴は半人間と呼ばれ、多少の人権を認められるが、ヤプーは、「知性猿猴」であるとされ全くの家畜として使役、愛玩、消費されている。進歩した科学の力は、或いは染色体手術によって遺伝学的に、或いは整形加工により直接に、人権のないヤプーの体を自由に變形し、現代人の想像も及ばぬ各種の變種を作り出した。四這で昔の犬同様の用をなす畜人犬、三倍体細胞で巨軀を与えられ主人を肩車に乗せて走る畜人馬、水中での乗物になる河童、双胎児から作る半人半馬等の新しい家畜や、栄養液の循環コードに継いで個性性、独立行動性を奪われた肉便器、肉瘻壺、肉反吐盆などの生体家具、

更に生体接着糊で複数個の畜体を用いた寝台、椅子、浴槽等々があり、更に読心能を与えられた読心家具、縮小機に掛けて作り出した体長十五種の矮人も便利なものである。

こういう変形を享けぬのを生ヤプーという。常に主人の身邊に侍する従畜にはこれが多い。生ヤプーは人型を維持してはいるが、二つの点で生理的に変質させられている。その一つは皮膚処理で、皮膚反応の為衣類が着けられなくなる一方、寒熱に耐える能力を得、裸を強制される。他の一つは腸内へのポンプ虫寄生だ。ポンプ虫は今では家畜化された他星動物の有翼四足人の体内から発見された巨大蛔虫で、素晴らしい消化力を示す生きた臓器である。液状の飼料を肛門から首を突き出して吸い上げ、幽門に鉤着した尾部から浸出させて小腸に与え、大腸末端で老廃物を分解吸収して又も摂取可能の栄養物に変え、再び尾部から浸出させ、これを繰り返してゆく一方膀胱に代って腎臓から受けた尿の老廃物を浄化して、水分を血管に戻す。ポンプ虫の寄生する個体では口ではなく肛門が摂餌の機関となり、大小便を問わず排泄ということがなくなる。給餌は一日一度僅か宛最下等の飼料を与えれば充分なのである。

そこで、白人—黒奴—ヤプーの摂食連鎖が成立している。白人が肉便器を使うと、一旦その腹中に収めて後、黒奴酒導管へ流れた白人排泄物は醗酵させられて黒奴酒の原料になる。黒奴は真空便器を使うが、彼等の排泄物は真空便管を経て、畜餌管に流れ込む。これは一大下水道で厨芥や紙屑も紛拌されてここに注がれる。白人の食用に飼育される牛豚類の糞尿も同様だ。——いわばイース世界の不要不浄物の一切がそのままヤプーの飼料となるわけで、排泄物処理とか塵芥焼却とかはこの世界では問題にならないのだ。

生産労働を機械と黒奴に任せ、自らはギリシヤ風の美的生活を楽しむ白人、殊に貴族達の日常を快適にする為に、ヤプーがどの位、

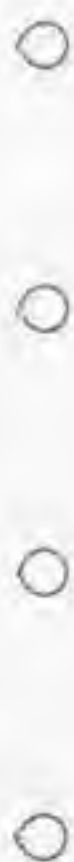
多方面に利用されているか以下、次第に紹介されてゆくだろう。

シリウス圏第八遊星である本国星カルーの首都アベルデーンから地球別荘に來ているジャンセン侯爵家の若夫人ポーリーンは、今を時めく副総理兼アルタイル圏總督アデライン卿を母として、自らも検事長を勤めている貴婦人だが、航時機空飛ぶ円盤に乗って過去世界に遊歩中、一九五六年の地球に途中、墜落した。居合せたドイツ娘クララ・フォツ・コトヴィッツとその婚約の愛人たる日本留學生瀬部麟一郎とは、これを救けたが、麟一郎が畜人犬に咬まれたので、それを癒す為にクララは、救援の航時円筒船と一緒に乗って二千年後の未来世界にやって來た。

イース人は麟一郎を皮膚の色からヤプー扱いにし、皮膚処理を加え、ポンプ虫を嚙ませる。逆上した麟一郎は、クララと心中しようとして失敗する。一方、クララは、ポーリーンの腹違いの妹でスポーツ・ウーマンのドリスや、家畜文化史の研究家の兄セシルや、やはり名門の出で、ポーリーンの義弟にあたるウィリアム・ドレーパーらに紹介され、皆に歓迎され、イースの文化に接し、帰化の決心を固めた。

別荘に一夜が明けると、麟一郎は家畜の適性検査を受け、ウィリアムに愛情を感じ始めて、麟一郎をうとんじ、ヤプー視するに至った。クラフは、ジャンセン家の人々や隣別荘のマツク少年と共にこれを見物する。麟一郎はクララの所有する土着ヤプーとして畜籍に登録され、彼女の尿で洗礼されて、正式に彼女に飼育される家畜となった。

さて、これから、クララは地球各處を訪れ、イース文化の現況を知ることになる……



第二十四章 竜巻号飛ぶ

一、讃美歌と説教

瀬部麟一郎のなれの果てなるヤブー、TE III N・241267号は、予備檻の室内で、緊縛輪に縛められ、首に輪を、唇にチャックを付けられた哀れな姿で、床上に正坐していた。白い神々が出てゆくと同時に、天井から浄水が注いで、全身から尿を洗い流す（三三章四節）。

と、横から誰か近ずき、彼の腕に注射器を突き刺し、彼は一瞬昏迷に陥った。

力強い合唱が彼を驚かせた。いつか彼は自由の身になって数千人の大群衆の中央にいた。自分と同じ様に彼等も悉く裸だ。だがそのことを恥じる色もなく、目を前方の方の方に注いで、口を揃えて唱う。その視線の先には……光輪を戴いて立つ白衣の美女の姿、何か麗ろなのだが、クララだろうか、空中に浮んで、人々の視線をほほえみつつ受けている……。湧き起る合唱のメロディは讃美歌風の知らぬ曲だったが、歌詞には記憶があつた。

おおきみはかみにしませばあまぐもの

いかずちのうえにいおりせるかも

——万葉の歌ではないか！

麟一郎は心中驚きながらも、いつか周囲に合せて唱っていた。低音部だ。合唱が繰り返され、メロディが記憶された。おおきみというのが誰を指すのかは、いわれるまでもなかった。

別な歌の合唱が始まる。

みたみわれいけるしるしありあめつちの

さかゆるときにあえらくおもえば

みたみとは白人から my team（我が畜群の意。チームとは本来一組にした家畜を指す語）と呼ばれるヤブー達がそれを訛って自分達の美称とした言葉だが、その真義を知らぬ麟一郎にも歌意は良く解る。畜生天への誕生の喜びを歌ったものに違いない。

更に別な歌が次々と合唱されて行った。

きようよりはかえりみなくておおきみの

しこのみたてといでたつわれは

（しこのみたてといでたつは、起立号令 Shicko に応じて立つ身分を意味する。新らしく捕獲され家畜化された土着ヤブーが、イース世界での新生の決意を歌ったもの）

かしこしやあめのみかどをかけつれば

ねのみしなかゆあさよいにして

（みかどはミケルの訛り。朝夕哭かされるというのは、勿論鞭撻の為である。それでも主人ミケルを崇愛するという家畜の真情を吐露したもの。鞭撻用に飼われる土着ヤブーの歌）
うみゆかばみずくかばね くさゆかばくさむすかばね おおきみのへにこそしなめ かえりみはせじ

（これは特に註する迄もなく従畜の歌である）

……………

皆で十幾首にもなつたろうか、悉く万葉集の歌がそれぞれ異なるメロディを以て讃美歌として歌われているのだった。正しい訓話を知らぬ儘、彼は周囲の敬虔な宗教的情熱に次第に感化されて空中の白女神への帰依の感情に満されて行った。

合唱が終ると、先程の二人の代父兄が左右から彼の手を取って台上に導いた。

「おめでとう」

その一人が話しかけた。
 「生畜舎の皆さんの前で、八号檻の檻仲間として、一同を代表してお祝い申します。お前様は今日から畜人として生れ代ったのじや。今迄地上でどんな仕事をしておいでたか知らんが、何にあれ、それは偽りじやった。神の眼には何の値打もない。つまらぬ人生じやった。だが、今日からは違ふ。この天国で家畜となるのがお前様の本来の正しい生き方じや。主がお前様を何に召し給うか、それは誰に



専一。それともう一つは、檻仲間と話し合つて見るのが良い。自分で考えては分らん所が、分つて来るものじや。何故自分は初めから天国で畜人として生れず、地上で邪蛮人として生れたのか？ 神々は何故畜人が人間を僭称して暮すことを許しておかれるのか？
 といった畜人神学上の難問になると、こりや一人では分らんものでのう。：気を失つておつたから自分では知るまいが、お前様、昨夜一度我々の檻——八号檻じや、忘れなざるな——に入檻したのじや

も分らん。何にあれ、生き甲斐ある生活、生けるしるしありじや。然しながら正しい生活は正しい信仰に支えられねばならん。宜しいか。信仰が深くなるほど畜人たる喜びが深く味わえる。激しい鞭にも慈悲を感じられる。そして神々の肌の白さにこそ神性の根元があるということが体得できてくる。私ら二匹（二人といわず二匹といったのが鱗一郎には印象的だった）が今日新しい女神を与えられてすぐ主として受け入れることができるのも、白色崇拜の信仰が揺がぬ堅さに達しているからじや。今日お前様は洗礼と祝福を受けて信仰の道に入ったのじや。あとは少しも早く信心を固めて、堅信礼にまで進むことが

(一六章二節) 八号檻の檻仲間一同は、お前様が檻に帰る日を待っていますぞ。檻には……アッ、女神様……」

突然、言葉を切って、二匹共その場に土下座平伏したので、麟一郎はハッとして我に帰った。

依然として、先程の予備檻に緊縛されている。今し方大きく合唱した口にもチャックが締ったままだ。代父兄の二匹が平伏している前にはドリスが立っていた。頭のどこかが痺れている様だった。夢を見ていたのだ。濡れた肌が乾き切っていないところを見ると、それもまだ五分とは経っていない。

「どう？ コンラッド」

急に話し掛けた美少女の頭上には、例のとおり光輪が輝いている。

「驚きました」

横から若い男の声が答えた。

「御命令通り、今晚の手慣らしに讃美歌を聞かせたのです。ところが殆んど抵抗波が出て来ないのです。所々誤解はある様ですが、まず充分な了解曲線が得られます。讃美歌を殆んど全部知ってるなんて、前に一度畜籍に在ったとは思えません……」

「馬鹿な」

「お嬢様、然し、普通は夢幻状態で仕込みまして」

声の主が麟一郎の視界内に現れた。潑刺とした青年である。これが脳波技術主任コンラッド・ダンカンであった。

「歌詞の意味を分らせるに一首に相当掛ります。家畜語といっても古代語ですから……。讃美歌を教えるに今晚一晚掛るつもりでしたが、これならもう必要ありません。全く不思議で……」

「ふん。こいつはね、古代家畜語ならよく知ってるのさ。そのわけがあるのよ」

と美少女は呟いたが、

「ま、こちらには好都合ね、賭は勝ったも同然」と意気込んだ。

「ところで、尿反応は？」

「異状ありません。二CC注射しましたが……」

「じゃ、長椅子にお入れ」

「畏りました」

尿反応云々は分らなかったが、今見た夢が意図的に作り出されたものであること、あの讃美歌が本物であること、それを自分が記憶したことまで判っていることを麟一郎は悟った。脳波科学を知らぬ彼には唯々不可解なことであったが。

ドリスは先刻の姉との賭の直後、秘かにダンカンに指示を与えておき、自分もマック少年を見送るとすぐ引き返して来たのだ。クララが姉と共に空中列車で出かける前に、一寸した工作をしておこうというのである。

身動きできぬ麟一郎の視界の正面にドリスが立った。彼の顔を青い眼で見つめながら、

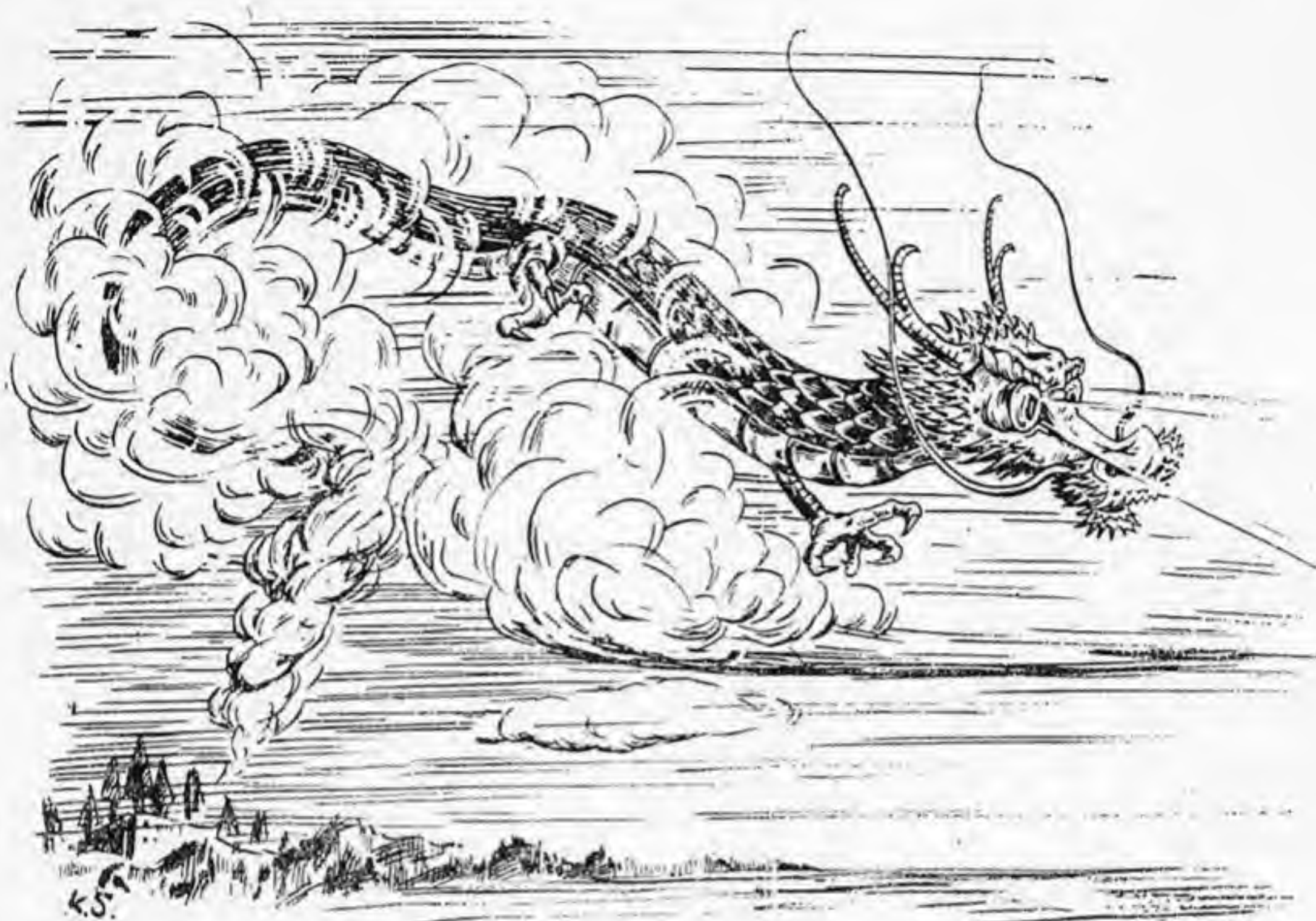
「リン。一つ大切なことを教えておく。辛い時はクララにお祈りを。おい。良いかい。祈りは聴かれるのだから……」

再び注射器が刺さって、麟一郎は気を失い、やがて、今朝程から色々の経験をしたこの予備檻の部屋から運び出されてゆくのも知らなかったのである。

二、龍に乗る人々

それから四半刻ほど経った頃である。今迄晴れ渡っていたシシリ島の澄明な秋の空の中の一点に突如、稲妻がはためき黒雲が凝って渦巻き始めた。見る見る漏斗状に垂れ下った尾が地面に近ずいて来る。竜巻か？

黒雲の下には宏壯を極めたジャンセン家の別荘がある。その中央



の華麗な水晶宮の一角に竜巻の尾が触れるよと見た瞬間、再び紫電一閃、巨竜が雲を縫って昇天した。高く高く舞い上ると、東に向って天空を横様に翔って行く。黒雲がその前方に次々と湧き起りつつ風に散らされて、竜の進路を示したが、忽ち総ては遙か彼方の空に去って、後には元通りの秋の天が高く、中空に小雲一つ留めてもない。

イース世界の地球には竜が棲むのか？ そうではない。これこそ空中列車「竜巻号」ポリーリンの愛機が、主人とその二人の客人を乗せて時速二千軒（※）の速度で飛翔する姿なのである。

（※註。この五倍の速度も可能である。然しイース貴族は、単なるスピード・アップより生活の快適を喜ぶ。十二章三節参照。）

空中列車は、何故、雲を起し風を呼び、伝承の動物「竜」さながらの自然現象を伴って飛行するのであろうか？ ——例により、多少の説明を加えよう。

イース世界に知られた交通運輸機関は、星間宇宙を往来する四次元宇宙船や過去世界に遊ぶ航時機を始めとし、遊星大気圏内における使用を目的とするものにも、大は、これから詳しく述べられる飛行島から、小は、昔の自動車に相当する水陸空兼用軽車輛の黄金虫に至るまで、実に多種多様なものがあるが、中に極めて異色ある存在が、この空中列車である。他の一切の大気圏内航空機が、空気抵抗を考慮して流線型を採用し、それを当然として怪しまぬ常識を破って、空中列車は機体外に部品の突出することを少しも忌まぬばかりか、形態自体も流線型を必要としない。というのは、その推進原理が風変りなので、機体前方に人為的に真空を作り出し、後方大気の圧力差から強い風が起ってその真空部に空気が流入しようとする。この風圧を利用し、いわば風に乗って、前方の真空部に進む仕掛けであって、丁度真空トンネル内を進行する様なものだから、機体に対

する空気抵抗を減る必要がないのである。

真空部を急に作り出す時の気温降下から、周囲には水滴が生じ、雨雲が湧く。機体を推す強風は同時にその雲も払い去るが、離れて見れば、恰かもこの空中列車が、風を起し雲を呼んで空中を飛翔するにも似ている。洒落気のあるイース貴族が、自家用の空中列車に竜の形態を像らせたのは、そんなわけからであつたが、この思い附が時流に投じ、一般化するに至って、空中列車は「飛竜車」とも呼ばれる様になった。機体先端操縦室は、真空を作る為の空気分子絶滅線を投射する双つのレンズを両眼とし、通信用の無線アンテナを髭とし、乗客出入口になる開閉孔を上下の顎の内部に収めて、いかめしい竜の首を模してある。尾部も四脚もあり、外被は鱗片状の金屬から成る。胴体は客室で、収容人員数に応じて個室を縫ぎ足して長くすることができし、その縫目は胴体の屈曲を許す——要するに、外觀は全く竜なのだ。古代人の夢想の産物たる竜は、こうしてイース世界の飛竜車として実在している——いや、それとも、航時旅行者によって伝えられた後者の存在が、古代人に前者の観念を与えたのであつたらうか？ともあれ、この動物体を象つた乗物は機械文明に食傷し、ある意味ではむしろそれから一步後退した遊戯的な文化を喜ぶイース人に非常に気に入られた。殊に貴族達は、飛竜車の運行に伴う雷電風雲の猛威が権力の象徴たるにふさわしいのを愛して、各自専用の愛機を備えるに至っている。

「竜巻号」は、地球別荘と同時に新造されたジャンセン家の自家用機で、一行の到着後、今日迄の三週間というものの、別荘の誰彼を地球上の各地へ送迎するのに利用されて来たのだが、今日は、東方七千軒の彼方、中央アジアはタリム盆地なるホータン市の郊外上空に碇泊中の飛行島「高天原」にまで、ポーリーンとクララとウイリアムを運び行くところである。

三人はそれぞれ専用の私室にいるが、必要なら、立体電話を用いて対座しているのと同様の会談も自由だ。各室の調度は昔の大西洋航路の遊覧汽船の一等船室を幾層倍した豪華さに溢れている。

ポーリーンは、随行の産科医デミルと何か話している。ウイリアムは、電子ピアノに向つて即興曲を弾いている。自動録音装置も動いている様だ。演奏の後では、例により靈液ソーマの杯を傾けるに違いない。さて、クララは？

新しいイース国人——と呼んでも、もう差支えあるまい——クララ・コトウィックの一七〇種、五八種という遅ましい若い肉体は、私室中央の安楽長椅子に深々と埋れて寛いでいた。靴を脱いで揃えて伸ばした両脚の足先に丁度当る所に、黒い半球状の凸出部がある。西瓜を半分にした程の大きさだ。その半球面に両の足趾をあてがい、上半身は斜うしろに倒し凭せ掛けた一番楽な姿勢で、クララは、壁面の展望枠に、特殊な立体レンズから投影される地中海の風光を眺めている。紺碧に砕ける白い波頭を黒い細長い影が被っているのは、この竜巻号とそれを取り巻く雲の落す陰翳であろう。

——三時間半は掛るという話だった。その間に二十世紀後半の歴史でも勉強しようかしら……

そんなことを考えながら、のびをした。細身のズボンのスラリとした両脚が延びて、両足が黒い半球を突張る——と、……

途端に椅子は、クララの身体を支えて微妙な動揺を始めた。黒い半球がスプリングに連結していて、僅かな刺戟でも揺れる仕掛になつていらしい。クララは代る代る両足先で半球を押して、動揺を楽しんだ。

ふと、部屋隅の大きな姿見に視線が行く。裸形の人体が膝をついて両手で鏡を支え持った姿に彫刻されている。古い西欧貴族の家によく見かける裝飾附鏡台……

——いや、そうじゃないわ！

クララは、ハッと悟った。彫刻ではなくて、これはヤプーなのだ。命令に応じて鏡の角度を色々変化できる様、生身のヤプーに鏡を持たせてあるのに違いない。生きた姿見……

ここにも生体家具の見事な一例を見出し、底知れぬヤプー利用の文化に驚きながら、クララの思いは、いつか、昨日までの愛人だったヤプーのことになっていた。

——あれから、リンはどうしたろう？

洗礼式とて尿をリンの頭に注いだ。その後、全然彼を見ていない。……つい、先程も、水晶宮の屋上階からの出発間際、セシルと一緒に見送りに来たドリスが、昆虫を象ったブローチをプレゼントして呉れて、手ずからクララの胸に嵌めて呉れた時にも、訊ねたのだ。

「リンは？ 妾に訓練して呉れと言ってらしたじゃない？」

「今晚貴女方が帰ってからお話しするわ……」

「ドリー、貴女が訓練しちや駄目よ、賭はクララの訓練なんだから……」

と横からポーリーンが言った。

「心配御無用。妾、今日はこれから狩獵に出かけるんだから、此処でヤプーに構ってる暇なんかないわよ」

「あのヤプーはクララの手許におく約束よ」

「大丈夫。とにかく妾、賭に不正はしないわ。ビルは知ってる、ねえ……」

そう言っ、ドリスはウイリアムと顔を見合わせて笑ったのだ。

(二三章三節参照)

——あの時、何故笑ったのかしら？……

だが、その不審の解けるのは、彼女にとっては大分先の話。今の

クララは、長椅子の掛心地を楽しみつつ、リンのことは念頭から去るに任せて、目的地までの時間を有効に利用する方策に心を廻らせているのだった。

先程の思い附に、ひどく魅力を感じた。

——二十世紀の地球では、何が起るのだろうか？円盤の中でポーリンが何か示唆した様だった(六章三節)もし円盤に乗り込まなかったら、どうなっていたのか？

諮問器に問うて見た。

「……夢の本をお使い下さい」

それが返事だった。

五分後、クララは、蹴球選手の様な深い帽子を冠り、面を附けて長椅子に倚っていた。姿勢は相変らず上半身を倒して、床屋で顔を剃らせる時の様。両足は無心に足台になっている黒い半球を弄り廻して動揺を楽しむ……学生蹴球選手がボールに親しむ為に机の下にボールを持ち込んで勉強しながら両足でこれを弄り廻す。丁度そんな無心さであった。

その揺れ方が一種の揺かごの役目を果してか、クララは次第に眠り込んで行った。

そして、夢を見た。

然し、その夢は、一定内容を意図的に志向して作り出されたものだった。睡眠学習音盤の存在でも分る様に、睡眠中の脳波を統制すると学習能率は著るしく高まる。黄粱一炊。夢幻状態では現実よりも時間の流れを速くして多くのことを学び得るのだ。この原理を利用して、短時間に多くの思想内容を伝達する機械が、今クララの冠っている脳波書見器で、そのフィルムがいわゆる夢の本であった。イース脳波技術の傑作的発明の一つである。

何を夢見たか、うなされる様に身動きし、その拍子に半球を蹴って
又もや身体が揺れたが、目を覚ますどころか、夢はかえって深くな
った模様だ……。



三、人類の近き未来図

クララの見ている夢は、二十世紀後半以後
の人類の歴史である。イースの前身たるテラ
・ノヴァの建国史であり、黒奴制、畜人制成
立の前史でもある。その概要は――

人工衛星（クララが地球を離れた翌年の出
来事だ）以来、ソ連は米国をリードし続け
た。月ロケットに成功し、月面の領土権を主
張した。印度もアラブも赤化した。西欧の大
陸諸国も、共産圏の圧力に靡きそうに見え
た。国連は無力化した。

自由世界の指導者としての米国の焦慮は年
毎に深くなって行った。月ロケットに遅れを
とった技術陣は、遊星ロケットでこそソ連を
破りたいと必死の努力を重ねていた。欧洲で
は英国、アジアでは日本、両国だけが、米国の
味方であった。

だが、日本が米国の科学の後塵を拝してい
るのと違って、英国は、自らも水爆を保有し
高度の科学水準を誇っていた。科学者達は月
ロケットでの出遅れを米国よりも壮大な規模
で回復しようと、ドイツの天才ゼンゲル博士
を招いて光波ロケットによる光速宇宙船の試
作に着手した。遊星空間を超えていきなり恒星空間に挑戦し、英国
の光栄を輝かそうという悲願である。南阿連邦の山奥に秘密工場が
建てられた。黒人の労働力を大量に利用し得ることと、大英連邦の

一員として英国には友誼的でも、他の国とは有色人種差別のことで付き合が悪く、秘密保持に好都合なことから、この土地が選ばれたのだった。

一九六七年、最初の光速宇宙船「栄光号」^{グロリア}は、一千名の探検隊員と最新核兵器とを搭載し終り、秘かに喜望峰頭から上昇して、宇宙空間に出発した。

翌六八年、第三次世界大戦が起った。世界大戦と言うに値するかどうか、戦斗は唯一日で終った。米国は、秘密裡に完成した超水爆^{アルファ・ボム}α爆弾を、共産圏、即ちソ連、中国、印度、アラブのあらゆる地域へICBM（大陸間弾道弾）で同時に叩き込んだのだ。殲滅的奇襲戦法は見事に成功し、ソ連から自動報復装置により細菌弾頭のICBMが唯一発米国内に返された事で、赤い世界は完全に戦斗力を喪失して降伏した。共産圏十五億の人口——ソ連のロシア人を除いてはすべて有色人種だったが——の中、五億人が唯一日で殺されたのだ。しかも生き残って降伏した十億人も長くは生きられず、子孫は作れなかった。何故なら、α爆弾の被爆地域には強烈な放射能を生じて、原子病による住民の死を運命ずけていたからである。

自由世界の完全勝利。この大虐殺も人類の自由と幸福の為には許されるのだ、と米大統領は強弁した。日本は、それは白人だけの自由と幸福ではないか、と有色人種の生命の軽視について抗議したが黙殺された。

だが、神を怖れぬ米国のこの所行は、ソ連の放った唯一発の細菌弾によって、悪魔的な復讐を受けたのである。投下されてから五日目シカゴから発生して全世界を恐慌に陥れた^{オウガ・フレイバー}ω熱は、この弾のウイルスで起ったのだ。

空気伝染し、伝染率は極めて高い。死体を焼きに近寄っただけでも伝染する。四二度の高温が三日続いて死んでしまう。予防にも治

療にも打つ手がない希有^{レア}の悪疫、これが米大陸を荒し廻った。その内分って来たのは、白人の死亡率は殆んど九九%なのに、黒人は助かる者が多いし、免疫されるという事実だった。ソ連が初めから米国内での成行を見越して、メラニン色素（皮膚色素）^{ミューティン}に弱い様に培養したのだという説と、α爆弾の放射能が突然変異を起させたのだという説とあったが、いずれにせよ、有色人種よりも白人を殺す奇病だった。白人の患者の家族は黒人患者を憎んだ。医者さえ、白人は黒人患者を拒んだ。黒白の対立は激化し、リンチは頻発し、社会不安が増大した。

この^{オウガ・フレイバー}ω熱は西欧の白人世界をも一舐めにした。アジア地域では、放射能が生き残った有色人種を絶滅しつつある頃、被爆を免れた欧州では、ウイルスが白人を絶滅しようとしていた。

米国では、全人口に対して黒人の占める比率がぐんぐん増した。遂に一九七三年、黒人が武装蜂起し、米国は内乱状態になった。が米国内の白人を救援する余力が、西欧諸国にはもうなくなっていた。自国自身がω熱で国家機能の麻痺に苦しんでいる最中だったのだ。

英国も例外ではなく、国民の八割が倒れた。女王エリザベスさえ嫡出諸王子もろ共、全国民哀惜の中に崩御された。当時某公爵の未亡人になっておられた王妹マーガレットが嗣いで即位されたが、この機会に政府は大英断を以て南半球友邦への避難を決意した。

米国が遂に黒人の天下になり、ハーレム（ニューヨーク黒人街）に臨時政府が誕生した、との報道が世界を驚かせた頃、英国は、南阿と濠州とニュージーランドに疎開を完了し、あわや絶滅せんとした白人の文明を辛うじて保全し得た。殊に南阿の宇宙船工場が高水準の科学技術の倉庫たり得たのは、人類の将来にとっては、不幸中の幸だったといわねばなるまい。

α爆弾を受けなかった唯一のアジア地域日本列島もω熱ヴィールスの侵入を受け、有色人種であるお蔭で、人口喪失は五割に止まったが、国力の減退は例外でなかった。

二十五億と数えられた地球の人口も、今は一億、殊に純血の白人種は恐らく五百万に満たないだろう、と言われた。

光波宇宙船が地球に帰って来たのは、こんな時期だったのだ。一九七七年、出発以来十一年目であった。人馬座α圏に地球と自然環境の似た第四遊星を発見し、その原住民たる有翼四足人達を撃ち破り、この星「新地球」を英領と宣して女王に捧げ、英国の「栄光」を世界に輝かそうと期待して、帰来した一行が見たのは、変り果ては地球の姿であった。

文明の終焉か？ 地球は人類の墓場となるのか？ 否！ 我に「新地球」あり。放射能による大地と大気との汚染、何時果てるとも知れぬω熱の脅威、その前に空しく坐して死を待つより、新しい遊星に移住して、人類の新しい運命を開こう。……

宇宙船の船長ダーリントン卿はこう力説した。進取的なマーガレット女王はこれに賛成し、一部の反対を押し切って、自ら移住の先頭に立つ決意を表明した。

一九七八年二月吉日、「ノアの方舟号」と改称した光波宇宙船は女王及び選りすぐった青年達一千人——皆後代のイース大貴族家の先祖である——を乗せて再び喜望峰から飛び立った（四章一節）、勇敢なる女王に続けの声は残された白人達の合言葉となり、もはや国籍は問わず、南阿の工場を中心に白人は大同団結して、大規模な移住計画が立案された。光波宇宙船一百隻を建造し、一回約十万人宛移送しようというのだ。人馬座のα圏までは光速で往復九年、五百万人を移送し終るには数百年を要するかも知れないが……戒厳令下政府に南阿全黒人を奴隷工員として強制収容し得る権限

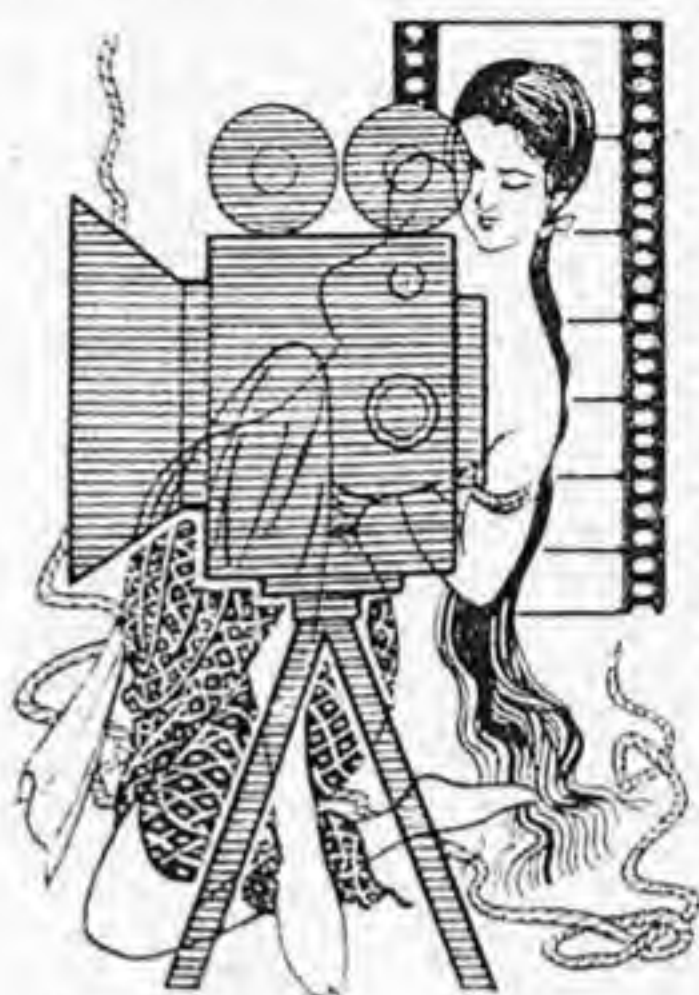
を与える法律が施行され、彼等を強制労働せしめることによって昼夜兼行の造船工事が強行された。ω熱の侵入を避ける為に、北半球とは交通通信の一切を絶った。米国黒人も日本人も、この計画を知らなかった——知ったとしても、何事もし得なかったろうが。

三年目、遂にω熱ヴィールスが南半球を襲ったという報道が入ったその同じ日に、精鋭の十万人を乗せた百隻の船団が出発した。

然し、九年後、船団が戻って来た時には、哀れ、一人の同胞も見し得なかった。南阿、濠州、ニュージラランド、どこにも、見出されるのは奴隷工員だった黒人の敵愾心に燃えた目だけだった——北半球から侵入したヴィールスが白人人口の過半を殺した時、圧制に憤りつつ叛乱の好機を窺っていた黒人が立ち上り、一挙に白人を皆殺しにしていたのである。

彼等の留守中に起った惨事を知って、宇宙船乗組員達は失望もし憤慨もした。迎えを待ちつつ空しく殺された同胞への弔合戦として彼等は、黒人達を殺人光線で焼いた。生き残った黒人は二十万人足らずだった。こうして、白人種の移動は初回の十万人限りで終わったのだが、百隻の宇宙船は代りに二十万の黒人を積んで帰った。人類の新しい故郷テラ・ノヴァの開発に無限に要求された労働力需要に応ずる奴隷要員として。

これが一九九〇年のことだ。マック將軍が地球再占領を目指し、軍勢を率いて大挙来襲するまでに、以後六十数年が経過する。この間、遙か四光年半の彼方ではテラ・ノヴァ女王国の建設が着々と進んだ。有翼四足人達は完全に征服され、捕虜になって家畜化された（四章二節）。活発進取の女王の統治下、宰相の輔佐も宜しきを得て、首都トライゴンを中心に、領土の整備は、人口の増加と相まって、テラ・ノヴァ国民——この新しい世界の覇者なる人類——は明るい希望に燃えた。……二十世紀人として、この驚くべき未来を初めて知るクララが、うなされるのも無理はあるまい。



今月の 縛られた女優達

大河原珠樹

▽不知火小僧評判記・鳴門飛脚

(東映作品) 花園ひろみ

義賊不知火小僧を追う女目明しのお豊が道中、たまたま不知火新三の面倒をみていゝる父を失った不幸な少女お夏(堀込早苗)と一緒にいたばかりに、お夏ともども阿波藩大阪屋敷へ連れ込まれ、倉の中へ縛られたまま閉じ込められる。お夏のほうは子供だからグルグル巻の後手だが、お豊は胸を数巻(次のシーンでは三巻に減っていた)後手縛りにした縄尻は柱にゆわえられ座らされていた。まずは、ありきたりの縛りである。

▽大江戸の鐘・開花篇(松竹作品)

嵯峨三智子

薩摩藩の御用盗のために両親を失い、自らも犯されて一度は自殺を図ったが小栗上

野に救われた芸者お竜が、官軍の江戸侵入とともに、その中に自分を犯した向う傷の男を

発見してこれを刺殺する。現場で直ちに捕わり市中引廻しの上、斬罪となるのだが、その引廻しシーンが3カットある。罪札が先頭に、裸馬の上へ横座りに乗せられたお竜(後手を非人の一人がつかまえていた)は青味がかったさめた灰色の囚衣に、くすんだ空色の帯で一重縄だが本縄高手小手、すなわち首縄を喉元で交叉させ、それを両脇に廻して、それぞれ両腕の二の腕あたりを一卷き、再び前に返して帯の上でまた交叉させ、そのまま背中に廻して後手首を縛っている。ふくよかな胸の隆起が、縄目の締めつける実感を出している。

▽毒蛇のお蘭(新東宝作品) 小畑絹子

「毒婦高橋お伝」の姉妹編で、多分な期待を

持って観たが縛りシーンといえば、ラスト近く捕吏に囲まれたお蘭が右手首に捕縄をかけられたままピストルで乱斗する場面がせめてもの……おまけに最終シーン小雪降る中を連行されて行くお蘭の後姿は、その恋人の安川が窓の中から見送るために明瞭でなく、おそらく前手にも縛ってなかったようだった。題名につられガッカリしない事。

▽紫頭巾(東映作品) 女優名不詳

紫頭巾が米値をつりあげ私腹を肥やす駿河屋の処置にたえかね、押入って庶民のために米倉を開放する。その時、奥の間にボヤリと一塊に縛られている店員達の右端に女中姿がみうけられた。

今月観た映画のうちに縛りシーンのなかった映画は。

▽隠密將軍と喧嘩大名(前後編) 新東宝

▽大江戸の鐘、風雲編 松竹

▽紅蝙蝠 歌舞伎座

▽喧嘩太平記 東映

▽女難一刀流 東映

▽濡れ燕くれない権八 東映

▽隠密七生記 東映

▽紫頭巾 東映

▽自雷也小判 東映

などで、このところ不漁続きである。

話

の屑簞



昭子さんは、大阪市東成区北中本町二ノ二七、山東昭子後援会事務局に、二百円をそえて入会、会員の資格を得た。

その後、八月始め、大阪市東区法円坂町の教員会館で後援会の集会有るが、出席するかどうかの通知がきた。

幸い当日の八月十日は日曜日で店も休み、彼女はこの通知に、一も二もなく快諾した。

心もいそいそと、その日、教員会館を尋ね尋ねて同館についたのであるが……。

ガランとした会館には、集会の明示もなされていない。普通なら不審に感じるのであるが、未だ都会なれない彼女は、さして不審も感ぜず、指定された三階の第二会議室まで来たが、鍵がかかっていた。

暫らく佇んでいると、二十二、三才位、五尺二寸許りの、小柄な眼鏡をかけた映画屋タイプの男が現われ、部屋をあけたと云う。

ガランとした室内で、山東昭子に関する会話が二人切りの間で約四十分許り交された。

男は、「この間、送って貰った写真はどうつりが悪いので、もう一度とり直したい」と云って、いつ持ち出したのか、白い六尺帯をと

十月十九日の関西新聞の第一面記事に、『危機一髪！ 縛られた乙女』と云う大見出しで、トップを飾っていたので、内容を紹介して見よう。縛りが、社会の関心を惹いている一つの証左でもある。

大阪北区真砂町バーOの女給、藤田昭子さん（一七）は、山口県宇部市西区浜生れ、六月頃からバー、Oで働く様になったが、映画が好きで、週一度の映画見物で、一かどの映

画通を自称する様になった。

こんな時、ある雑誌の中から、山東昭子後援会の募集記事に眼を止め、奇しくも同名である処から早速これに入会した。

山東昭子と云えば、昭和十七年生れ、ラジオ、テレビに出演して人気をあげ、赤胴鈴之助の語り手として有名で、東映に入社すると「旗本退屈男」でデビューした新進女優である。

り出し、「写真の展覧会に出すのだが、顔はモデルととり変えるから」と……。手にした映画の宣伝スチールを見た。

椅子に荒々しく縛りつけられた女の写真を見せられて、彼女はドキリとしたが、眼鏡の男が話の様子では同じ会員でもあるので、写し終わったら解いてくれるだろうと、安易な気持ちから、さして警戒もせず、男のなすが儘、椅子に坐り、両手を後手に縛らせ、猿轡を嵌めた上、麻縄で両脚も縛らせた。

痛みを耐え、シャッターの音をうつろにきいた彼女だった。

突如、男は麻紐で昭子さんの首をしめつけた。猿轡の上から口と鼻を押え、その手に力が加わって来た。体の自由は完全に奪われている。

彼女は必死になって抵抗した。そして足の縄が少し自由になった。押えられた顔が熱くむくんで、その時、彼女の鼻腔を伝って、生温かい液体がドロドロと流れて来た。

「あ、鼻血！」

背後からしめつけていた男の手は、それと同時にゆるんだ。男は血を見てあわて出したのだ。ぐるぐる巻きにした白帯の端で鼻血を拭いた。

ぐったりした彼女の体は、がん字捌目から解放されていた。

水が欲しいという彼女に、男はテーブルの

灰皿に水を汲んで来た。そんなものが飲めないうという。

「折角、汲んでやったのに呑まんのか……」と男は云う。

もう、彼女にとって集会の希望も消し飛んで、危地を脱する事で一ぱい。

「この事は後援会に云ってくれるな。おられん事になる」と哀願めいた男の言葉も耳の端に、彼女は夢中でこの場を脱したが、この男に乱暴された、藤田昭子さんは、両眼球結膜膜下出血、並びに浮腫で全治二週間、頸部輪状打撲傷並に皮下出血で全治十日間の負傷をした。

後日、教員会館での受付の面割で、この男は塩谷三郎の仮名をもつ、山東昭子後援会事務局の田中芳信と云う男と判明した。

十代映画ファンも、油断すると非道い眼に逢うと云う一例であるが、諸君の中からは、こうした新聞ダネになる様な人は、出てもらいたくないとの老婆心から、ここに紹介して見た。

× × ×
それにしても、この事件そのものとしては暴行未遂に終わった、とり立てて云う程のものでもない些細なことに過ぎない。

それを二流新聞が、第一面殆んど全部を費して報道するところに、反って私は世相の、この種への関心に興味を覚える。

『男の意のまま後手』と云うデカデカした見出しは、十代への警告ととるより、興味本位に走り過ぎてはいないだろうか。

ニュース・ヴァリエーとてなく、又、報道する程の重大な事件でもない、謂わば暴行未遂の三行記事が、斯くも大きく扱われる所以は、一に縛りそのものに対する興味が、究極の目的ではなからうか。

ほんの僅かの事件に引っかけ縛りを強調する、これは近頃、二流、三流新聞にしばしば見受けられる現象であって、なればこそ文、私の如きものが早速とびついて、一部求めるという事になるのかも知れない。

× × ×
映画にテレビに、漫画に、小説に、縛りのシーンはいたるところでお目にかかる。

東宝の次郎長意外伝「灰神楽木曾の火祭」は三木のり平の愚にもつかぬ笑劇であるが、この映画でも縛りが出てくるそうだ。

年貢と借金の抵当に、お菊と云う娘が梁から吊され、土地の親分、猿屋の勘助の意の儘になれと責められるシーンがあるが、これも東宝の友人からの又聞きで、映画では果してどの程度に責められているか、暇な方は、この映画が封切られたら、一つ確かめて頂きたいものである。

縛られたシーンや、責めを強調した様な映画の縛りが、案外もの足りなく、何の気なし

に覗いた映画に、反ってハツとする様なシーンが現れる事がある。挑戦的に縛りを誘示して、案外つまらないのが日活映画であり、東宝の時代物に、案外縛りが見受けられる。

「柳生武芸帳」などがその良い例である。

今はK化粧品のフアッションモデルをしている、元東映のニューフェイスの彼女が、私に何かの話でこんな事を語ってくれた。

「幹部や大スターを助監さんが縛るのは、手加減したり妙に照れたりして、ほんの形式だけに縛ったりするの。後手に本当に縛るなんてことはまず無いと云っていいわ。そう、胸にぐるぐる縄を巻きつけただけ……」

でも私達ワンサとなると、まるで面白がつて、ホンのワンカットの、それもロングシーンなのに、それはそれは御丁寧に、手首がしびれる程きつく縛るのよ。私の姿なんか、遙か霞んじやって見えないのに……。それがカットカットでしょう。僅か数秒間のシーンで一時間以上も縛られっぱなしよ。」

その映画題名をきくのを失念したが、ありそうな事である。

だからして一応名の通った女優の縛られる姿を、一心不乱に見るより、名もないスター達が縛られているのを直視し給え、確かに実感がこもっている。

大きな屋敷の番頭、丁稚、女中達が、盗賊に押し入られて、珠数つなぎに或いはあちこ

ちに縛られて転がっている姿に、正に彼女の云う通り、縛りの実感がこもっているなあと、私は彼女の独白によって、今更乍ら思い返して見たりしている。

× × ×

「縛りが好きなの」と云うイチちゃんは、ミニのゲイバアRのいる顔である。(縛りと云う言葉の何と普遍的なことよ)

池部良を若くした様なナイスボーイで、二十才。

彼等は「聖セバスチャン」の絵画を見て、縛られる事に激しい欲求を感じたと私に告白した。

寡聞にして、私は「聖セバスチャン」を知らないが、彼の謂う処によると、

その絵画は、一人の美青年が裸で樹の幹に絡々と縛られている。そして二本の矢が、左の腋下と右の脇腹に深く突きささっている。美青年の体に矢は深々と喰い入り、無上の苦痛と歓喜にのたうち廻っている……そうである。

イチちゃんは、「セバスチアン殉教図」に魅縛されたと云った。

——魅縛……。成程、面白い言葉だ。

逞ましい男性に接すると、イチちゃんは魅縛されなくなる。

色とりどりの、七彩の細紐で、雁字搦目に縛られて、さて男が、自分をこれからどうし

ようとするのか——、それを想像する時が一番楽しい瞬間だと、彼は目を細め息遣いを荒くして語る。

男同志の緊縛となると、私にはピンと来ないが、その癖、イチちゃんの気持も判る様な気がする。それ以上触れる事の出来ない愉しみなのであろう。

「夜の異端者」と云う、ゲイ、ボーイを主題にして書いた鹿火屋一彦の本の中にも、イチちゃんの様な人種が、相当突っ込んで描かれているから、ゲイ好みの方は一読をお奨めしたい。

しかし面白い事にこの一文の中にも亦、縛りなる言が現われているのである。

「女装グループの人たち」と云う件りに、一問一答で次の様に書かれていた。

——あなたは、自分の女装愛好を周囲の者に秘しているとしたら、どんな風にその願望を満たしているのですか。

「同じマニアのグループみたいなのをもっていますので、時々一定の場所に集って、女装するものは女装し、男姿の者は男姿のままて話し合います。場所は大概グループの者の別荘などで、その内の一室で内からカギをかけおきますから、絶対に他へは洩れる事はなく安全なのです」

——日本人ばかりですか？

「大体、東洋の人だけです。特に中国の人

には、女装を愛好する人が尠くありません。

皆金持でしてネ。私なども、ポケットマネーでは高価な女の衣裳が購えない場合、そうした人が援助してくれるんです。

——なかなか愉しいグループですねえ。じやパーティーなんかやるんでしょう。

「やりますね。誰々さんの来朝歓迎のパーティーとか、誰々さんの帰国送別会とか、賑やかに愉快に談ずるのです。互いに酒が入ると大胆になりますから、普段やれない事もやれますし、なかなか面白いものです。」

——アブノーマルなことなども行いますか？「近頃流行の『縛り』などもやったことがありました。しかし考えて見れば、あまりつまらぬ事です、こう云う事は私は好きませんのです。半分半着で止めてしまいました。」

——あなたの場合、どんな女装が相手に好まれましたか？

「昔の町娘の姿になった時、ある中国人から非常に可愛いと云って好かれました、その姿の儘で一緒に自分の国へ来てくれと、本気で誘われた事がありました。中国の人は、日本人の様に生半可でなく、すべてに徹底して様ですね。しかしこのグループも、主だった人が四散してしまつたので、余り会合する事がなく、その為、今では女装したくとも場所がなく、それが今の一番の悩みになつてゐるわけです」(以下略)

× × ×

成程、女装を喜ぶ人も世の中にはあるわけだ。箕田編集長が何時か、泌々と私に洩らした様に、編集は大変であるに違いない。アブの世界は余りにも広汎だから……

嗜虐の緊縛を好む者、被虐の快感を切実に訴える者、又、女装マニア、曰く切腹マニア曰く、禪への願望、フェティシズム、拷問、責め、刑罰、スレイプ、ホモ、流腸、女斗美コプロ、アヌス、鼻いじめ、おへそ、パンティ、ヒップ、マスク、狼髭、ソドム、ETC……

それらの、それぞれの願望、欲求を、万遍に編重することなく掲載するとなると、これはチツとヤソツとの仕事ではない。

こう羅列して見ると、人間の感情の起伏の大小の差こそあれ、云うか云わぬかで、誰しも、そのどれかの願望を抱いているのではなからうか。

とやま・かづひこ氏の如く、徹頭徹尾コプロ願望に徹すると、尿も美酒となり、尿も美食と感ずるのだらうか——。

嫌悪と露悪趣味に辟易し乍らも、これは又これなりに共鳴を覚える人もあると見える。檢じつめれば、マゾの変形とも受取れるのであるが……

× × ×

こと糞尿に関しては、とやま・かづひこ氏

の専売かと思つていたら、はしなくも、佐藤弘人の「いろ艶筆」で、糞尿譚の一説がありオヤオヤと思つた。

「朝鮮の宮中には尿童(十才まで)と云う子供がいて、これに御馳走をたべさせて、その尿水を王様は盛んに飲んだものです」(これは大変なことになって来た)

「李家正文氏によれば、南米ブラジルの黒人は眼病になると、自分の小便で眼を洗い、マラリヤ熱にかかると、男の子の小便に馬鈴薯などを混ぜて合成薬をつくり、胃や肝臓が痛むと、二日置いた小便を沸かして、これに少量のぬるま湯を混ぜて飲むし、丹毒にかかる、妊娠した女の尿を塗り、金曜日には天然痘をさける為、女の尿水で味をつけた玉葱の茶を飲むと云う。」

また昔の支那でも、少女に一カ月間、果物だけを食わして、一カ月後から、その少女の尿水を飲むと、いい香りと高遠な甘味が味わえると云う。(かづひこ氏の日頃の御高説通りだ——)

わが国でも、平安時代には、狂犬に噛まれると人糞を塗り、聖僧の小水を飲めば諸病が快癒すると云う信仰があった。

また朝鮮では、子供のした瞬間の小便は、目薬にさえなると云うから、人間の糞尿などは、そう神経質になつて深く考えないでもよからう……」

と云うことであるが、諸賢如何の……

臭い話ついでに糞尿譚になるが、昔、平安朝の宮廷の美女は、当代の色好みの平忠を魅惑する為に、丁香の実で自分の排泄物を模造し、流石の平忠をして啞然たらしめた話が残っている。併し、大方の大名の家庭に生れた姫君や側室は、自分の体から排泄するものを一生、人に見せないのみではなく、自分自身も見なかった。

その方法は、厠の下に深い縦坑を掘って、姫が嫁いだり死んだりすると、その坑を埋めて、永久に人目に触れぬ様にする方法である。

谷崎潤一郎の「武州公秘話」にはこの厠の縦坑が、重大な役割を帯びて登場している。則ち、武州公の河内守が、この縦坑の底の横坑の地下道から忍んで、眉目麗わしき上臈、桔梗の方に対面するのであるが、頭上に高貴な夫人の君臨するさまが、手にとる様に描かれていて面白い。

そして遂には、上臈の尊厳を傷つける事なく、黒塗りの梓の下から、狐忠信よろしくせり上って来て、夜毎夜毎、逢引を重ねることになる。夫の筑摩則重をさておいて、秘かに、河内守と首尾を重ねる桔梗の方——。臭い仲とは、こんなところから出たのかも知れない。

かづひこ氏に一言、御注意迄に申上げたい

のは、氏の御馳走の中に交れる大腸菌、又、種々の寄生虫卵に思いを致された事がありましようか。

友人の医師は検便の権威であるが、一回で蛔虫卵なら数万個、鞭虫、十二指腸虫のたぐいで、その約十分の一の排卵数と聞かされては、コプロ趣味も興ざめて仕舞う。

かづひこ氏の最大の願望とする、妙麗の美女のものを検鏡すると、蛔虫卵が一視野に数十個もあったとなつては、かづひこ氏の腹中

に可成りの寄生虫を飼つておられる事と推察します。

「だが、美女を前にして、彼女のものを悠々とマッチ箱から引き出して眺めるのも、亦一寸乙なもんだよ。前日食べたおかずまで分つてね。」

検便先生は呵々大笑して、煙草をとり出した。

邪宗と云うか、奇怪な事件が先頃、東と西で相次いで起っている。

横浜の或る新興宗教の一信者の工員が、体

相撲雑記

津田進

KKには男性禪美やマゾ的ソドミアの記

である。

事も見受けられるが、しかし最も大衆の目に触れ、今日では世間一般の常識の話題の一つともなったスポーツの中で、男性禪美裸体美を遺憾なく他を圧して發揮している「相撲」について余り詳しく述べられたものが、筆者の見落しか見当らないのは残念

筆者は少年の頃より相撲に親しみ、プロ力士は勿論、私自身も中学時代は相撲部に籍があり、力士や選手生活の一端をよく窺知し得ているので、少しく此処に述べて同好諸兄に供したいと思う。

相撲力士社会の階級徒弟制度は、民主々

を鞭打たれ、悪魔を払うの教義の犠牲となつて怪死したが、警察の取調べによれば、その宗教はその都度、神様の認定書なるものを売りつけていたという話である。怪死した信者はその悪らつさに脱会したが、その話合の為同教の本部を訪れた時、鞭打たれ縛られ責められた拳句、死体となつて帰されたという。

豊能の文化都市、池田市に於ても、これと相前後して、ノイローゼ気味の娘が、数人がかりの荒祈禱のあげく、死の台に轟々と縛りつけられ膨大な線香を焚いて窒息にも近い死に方をした。これは後日検証の結果、はっきり、いふし責めなることを立証していた。健康な者でも耐らぬ一室内に、心臓衰弱の娘を閉じ込め、悶え苦しむのを無理から縛りつけて身動きさせぬ様にしての祈禱が、この文化の現代、尚、平然と行われている事自体奇怪至極である。

祈り殺された娘の場合、家人の狂信の犠牲となつたことは明らかであるが、恐らくは未開人種ですら、この様な事はあるまいと思われに、これらの原始的な手段によって、病気を癒そうとする人達のいる事は悲哀であれはこそ、この様なバカげたことが通用するのであろうが、これでは文化国家としての看板は、当分引込めねばなるまい。(了)

義の今日となつて、戦前より可成り改善されたとはいへ、他の社会に見ない厳格なものである。或る力士が戦前、軍隊生活に入つてその楽なのに驚いたという程、以前は厳しかったもので、舟橋聖一氏が「相撲記」(創元社)に書いて居る如く、叩かれたり殴られたりするのには日常茶飯時であつて、兄弟子達は口惜しければ強くなれ式に、スパルタ式で徹底的に新弟子達を鍛え上げた。朝は寒中でも午前三時、四時というのに起される。布団の温みに愚図愚図している、兄弟子や親方は蹴飛ばしたり竹の鞭で容赦なく引っぱ叩いて、凍る土俵に追いついて互に鞭を巻かせて稽古をさす。少しでも怠けたりすると鞭が鞭一本の尻にじかに飛び、稽古中の傷と共にミミズバレから皮が破けて出血しても放置される有様。かつての名力士、現在の出羽ノ海親方も師、常陸山からステッキで殴られ一時は廃業をはかった程で、今でもその傷跡が残っているという。兎に角、十五、六歳の未だ、あどけない童顔の丸坊主の新弟子がこうして鍛えられるのであるから、厳しさに泣く位はよいとして脱走を謀るのも当然であらう。現在でも午前四時頃の起床は普通で、稽古中は新制中学や高校出の若い力士が竹のヘラ(力士の背中を流す道具)や、

竹箒や土俵の砂を寄せる板切れで尻を叩かれるのは見られるし、部屋によっては竹刀で叩くという。何十番のぶつかり稽古でヘトヘトになつて起上れなくなったのを怒鳴り乍ら無理に引起し、水をぶっ掛けたりする。その稽古が汗と土に黒く汚れはころびて、血が黒く滲んでいるのを見ても如何に激しいものか分るのである。

舟橋氏の著書にも、稽古外にも殴られたり叩かれたりして生傷が絶えないと記されているが、今日は一つもやられなかったと思つて居ると、風呂で力士の背中中の洗い方がぬるいといつて風呂桶でパーンとやられる。現在は、稽古以外に兄弟子が手を出す事は無くなったが、それでも地方場所では締め方が緩いといつて二十二、三位の幕下力士が、十八位の高校出のザン切り頭をピントにして居るのを見たことがある。力士の鞭は読者諸兄御存知の様に化粧鞭の他、土俵上で十両以上の繻子、稽古鞭(雲斎)と分れる他、日常は越中、六尺も使用する。鞭の洗濯は新弟子達の仕事であるが、専ら稽古鞭は日光干しとする。又、鞭はじかに着用し下にサポーターの類は一切、着用が厳禁されている。その他、諸者諸兄で御聞きにしたい事が有れば通信欄なりで御尋ね頂ければ御回答したいと思う。

緊縛映画 スナップ・シリーズ

紅梅の巻

七人若衆誕生

構成：牧高次

『七人若衆誕生』とはいうが正真正銘、多場多出で活躍遊ばさる若衆——寺小姓なるものは、ただの二人である。これに配するに縄目を受ける女性とは、これまた二人に限られるあたりは流石にどうも俗界離れの高野山である。

先ず技術的に文句を放ちたいことは、昼なお暗く霧がかかるを名目に曇天航行撮影？、陽画現像の結果からおしなべて画面が冴えず、暗いのは困りものだ。

折々のピョピョざらい誕生売出しの映画なら、せめて親心の一つでも出して総天然位な処で封切させたかった……と惜しまれてならない。

兎まれ、山寺や岩に泌みいる蟬の声、ここ高野山内の出来事を春に先きがけ紅梅の巻として説明しなければなるまい。しかし緊縛に忠誠を誓うとすれば……です。全篇を絞ってヤマを



引き出す要があり、そのヤマはいうまでもなくちやんと手廻しよく仕組んであった。

第一のヤマは女人禁制の山での逢いびきは法を軽視するものだと一方的に極めつけられ八弥（林与一）とその恋人お美保（佐乃美子）が石籠詰めにあう場面。

第二は久米之介（花ノ本寿）が土牢での夢

想——恋人の雑貨屋の娘であり、腰元であったお梅（富士真奈美）と石籠詰めにされるシーン。

そして最後のヤマは花嫁振袖姿のお梅が陰謀坊主裕弁律師（沢村国太郎）に檻禁され、後手に縛られ猿轡にされた姿である。

だから、七人の若衆がファーストシーンの闘鶏でどうかして、読経の代りにむやみと剣劇ゴッコをしたり、取ってつけた父君の切腹が出たり、拳句の果てに金蔵を破るなどと



いう余計な説法、雑用事は一切省略した方が賢明だろう。われわれは一路邁進、三つのヤマに取組めばよいのだ。

『それは何んと云う恐ろしいことだ。如何にも酷い』『黙らっしゃい。お説を破った者はすべて石籠詰めにしなければならぬわい……』眼の玉がふくれ上ってよく動く沢村の極悪坊主振りは正におあつらい向きでピカー。

ズラリと頭を揃ろえた大坊主、中坊主、小坊主の居並ぶ庭先へ枝折戸の外から背中をど突かれながら曳き出されて来る最初の犠牲

者の移動シーンは白眉である。第一のヤマにしては少々険し過ぎた。

何か後手に縛られた女の方が肩の肌をさらし、ひどく商売女のように見えたが、仲よく一同の前へ二人共、神妙に坐らされる。

『この人には罪はありません。このわたしが誘惑したのです……』と女は言訳をするが山上最高の地位にある法印の座を奪い、金蔵に眠る巨万の富を我物にせんと陰謀を企む裕弁は、高が女一匹の哀願など耳を傾ける処か、



如何にもサジスチックなふくみ笑いを浮べた。

『哀訴などとは以ての外、兩人ともに石籠詰めだッ』

待ってました。これあるかな……いや誠に御愁傷さまです。突如として雷鳴と共に光芒



閃めく中にうき上る哀れな後手姿は、ロングながら痛ましいものである。

いよいよ時至って、極刑の執行と相定った。石籠詰め（石子責めともいう）とは伊藤晴雨老（随筆第一冊）によると、昔奈良の春日神社に起った責めであって、穴を掘り罪人を入れ四方から石を以て埋め、死に至るまで

放置するやり方と、土中に掘った穴の中に罪人を入れ四方から石を投げて殺るすものとあるそうだ。

これを仮りに町の真ん中でやったら大変な人権じゅうりんになるんだが、そこは処を得た高野山中である。谷間の川の淵に設けられた刑場、ロングでちよいと判りにくいのが、やがて刑の宣告（セミクロズアップ）、続いて自分達の埋められる穴が映し出され、一抹の悲鳴と共に無惨にも穴へ追いやられてしまう。

すかさず、お山の天っぺんにカラスの二声三声は誠に効果満点である。

牧『……処で佐藤さん、このワイドシーンですが、如何に珍らしい責め場でも一挙にお二人の動静を観る訳に行かず、僕の眼は専ら女の方ばかりに集中していたんだが、どうも日頃の映画と違って少々サジスチックでしたね。観ているうちに背中がぞっとして来た……』

佐藤妙子『矢張り何んと申しましょうか、責めの映画化としては余り類例のないシーンで一寸度が過ぎるんじゃないでしょうか。』

それなりに充分価値があるように思いましたが、その後髪をひかれるような苦悶の声を聴いてはとても……』

牧『道理でハイボで抜け切らない暗い映画だと思っていたんです。これがお多福な女で

タコ坊主こと文福（桂小金治）と一緒に石籠詰めなら、笑う方が先きで大いに救われるんだが……場面は勿論、壊れられちゃいますけどね——』

いずれにせよ、松竹時代映画未だ衰えず、この新企画は完全に新東宝や東映の株を奪っ



た形である。

牧『ただ、どうも未だに心残りに思うのは、女の身体が石で埋められるのは仕方がないとして、胸の縄目は是非とも出して欲しかった。でないと多分、後手に縛られて穴の中へ放り込まれたとは思いますが、映画という奴は由来くせ者だから、フリーのまま石の上に首

だけ乗せていたかも知れない。』
飛んでもない猜疑心というなかれ。林家三平氏にいわせるとへ何しろ本当なんですからいや全く……。何故ならばですよ。僅か、この一分足らずのシーンに千金を投じ、固唾をのんで陶醉するマニア人士には当然あるべきものがあるって貰わなければ承知しないテナ特別の心理を持っている……。ことをよもお忘れになっちゃもう二度と映画館には行きませ



んぞ。いや見世看板には騙されませんぞえ。
冗談はさて置き、第二のヤマにメス——独りよがりの迷評を加えることとしよう。
新人、日舞の名取り、花ノ本寿の扮する若衆久米之介は流石に若くういういしい。この若衆のお相手を演ずる富士京奈美(NHK)のお梅は『清水の佐太郎』でへ菅旦那さまッ若旦那さまと誠に歯切れのよいセリフで好演



したスター級女優である。
変に曲ったゼスチュアもなく、若さに物をいわせいい寄られるままのいじらしさ……。今度び故あって高野山で縛られるのは誠にお気の毒だが、なんと将来性のある名スターではありませんか(ちよっぴり惚れたかな?)
さて御兩人、ああしてこうして共々、女犯の罪におののき追いつめられて、
『梅ッ、死んで呉れるか、一緒にあの世とや



らで夫婦になろうぞ』

『ハイッ……』

『承知して呉れるか、梅ッ』

『ハイッ、久米之介さま。久米之介さまとならこの梅は死んでも……』

このハイッと答える処が堪らない魅力である。レビューまがいの星空は、ナンセンスだが、この御兩人の間柄がスムーズに進行するようでは、男色となってへアラ、嫌だわ……と黄色い声を出した今一人の若衆菊太郎（大谷ひと江）を抱き込む裕弁和尚が事の次第を識った以上、久米之介とお梅を無条件で許す訳はないであろう。

はたせるかな、へ寝ても覚めても久米之介さまのことばかり……か、アハッハッハ……デモ味なことをやりやがるッ。



手渡そうで渡さぬ恋文を絶好のネタとして、裕弁は再びサジスチックな眼の玉をむき始めたのである。さてさて生奥坊主は……などと悪口は止めておき、ここで極めて同情的な表現を呈するならば、涙の文金高島田、純白の花嫁衣裳、若い男と若い女の悲恋物語は古今東西を問わず一幅の静画であり、活画でもあるのだ。

久米之介土牢の監禁沙汰は、さしずめ生への執着に非らずして、我恋人とともに天国に在り、不孝の罪は父上お許し下され……の一駒であろうか。



『梅ッ、梅ッ、お前も苦しいか。こうして、そなたと一緒に石子責めにあい、何んという悲しい夫婦であろうぞ。死のう、早く死にたい。ああ、あの日、あの宵、ともに語り、抱いて見上げたお星さまも、もうすぐだよ。この手は縛られて穴の中ではもうお前も抱けないが、せめて一緒に死んでお呉れッ……』

『ハイッ、久米之介さま。梅もこの通り後手に縛られて同じ穴の中、嬉しう御座います……』

と多分、今はの際に交わしたであろうことは瞬間スナップカットで窺われるのだ。

謹んでお二人の御冥福を心から御祈り申し上げます。

牧『……処がこれは夢でよかったですね。あのまま久米之介君アベックが仲よく御駄仏



になっちゃったたら、後にはパツとした若衆はおらず、女性軍を見渡した処、若づくりでひどく老けて見える姉君のおさい(水原真智子)に脇役お気の毒出演巾着切のお豊(福田公子)の二人きりという全くお寒い高野山絵巻。下手すると木戸銭払ったお客は席を蹴って帰っちゃいますね……』

佐藤『でも、興行映画は先生の仰言る第三のヤマを最後のどたん場で展開、それこそ伝家の宝刀を一挙に抜いての御礼言上……は毎度の事ながら如何なものでしょう。天然色で

したら富士真奈美さんの花嫁衣裳はどんなにか美しかったでしように』

牧『嫌やな仮祝言、土蔵の中での布団探しはちよいと笑わせたが、しめし合せての高野山への逃避行、手に手を取っての小走りシーン。辿りついたのが地藏堂とお忙しく目が廻ったが、シーンが停まると必らず追手が現われることになっているから妙なもの。』

ここで牧文学?に一言いわせて貰うならば追手の面々と剣を交わす久米之介の身を案ずるお梅さんなら、何故花嫁衣裳の裾でも存分にたくし上げ、タスキ代りに長い振袖の袂を結ばなかったのだらう。ウロウロして落ちつかないのは無理もないが、他人行儀でいささか拍子抜けなのは全く惜しい……、佐藤さんがお梅さんだったら、どうします?』

佐藤『さあ……、どうしましょう。捕って変な処へ連れて行かれても困りますし、さりとて……。でも久米之介さんの嫁御なんですから一連托生、すぐさま立廻りの仕度を——したと思います。ただ足手まといの花嫁姿では、まさか人前でお裾を……。矢張り富士真奈美さんみたいに袂を抱えてウロウロするんじゃないから知ら……。ホホホ御免なさい。皆さん』

幸い雷鳴が——高野山はよくよくの雷の名所と見える——御丁寧にも一間と隔らない杉



の太木に火の玉、倒木、花嫁半身フラッシュを浴びたかの如く倒れて失心!

雷雲漸く遠いてのドロコ路へ筋書きの通り裕弁の一行が現われた。このところ映画は誠に映画的である。

『あの女に用がある。連れて参れッ』

ヤレヤレ一つ済んだと思ったら、おあとお次の番である。どうせ裕弁和尚の事だ。ただ



で女をかくまうことはよもあるまい。斯くてスナッパ―は好機至れりとばかりファインダーに眼をくつつけたのである（これはこっちのお話）。

佐藤『どうして時代劇って、お終い頃になると刀を抜いて斬合いでするんでしょうか。田舎芝居なら兎も角、聖なる高野山の境内で派手に刀を振廻わしたりして……、理詰めになをじわり責める法ってないのか知ら』

牧『チャンバラが始まっては万事もう遅いんですよ。観ているお客の方も内心、躍って

いますからね。寺の外ではチャンバラ、部屋の内では、お梅と差し向いの折檻沙汰じゃ、バランスが取れない。それッ、やって来ましたよ。颯爽と牢を抜け出した久米之介がチャリン、チャリン、バツタ、バラリンズンの獅子舞迅……』

佐藤『その一寸前に先生、大変なお忘れ物を……。例の男色女形の菊太郎が裕弁の部屋に飛び込んで聴く時ならぬ女のうめ声。バラリと開けるふすまの戸。あッ、かくし女！私という者がありません……』

牧『ふすまの彼方で後手に縛られ、顔を覆

わんばかりの狼狽のお梅は文句なしによかった。眼で物をいう女優だけあって暗中、縄目に苦悶する情景もいじらしいが、こうまでされる前に裕弁がお梅を追いかけて廻わす処があったでしょう。あの障子越しのシルエットは単なる所作事なしに、お梅の両腕を邪慳に後に廻わす、長い縄が写る、胸にグルグル巻

きつける、縛った女を抱えて行く……というあたりを演じて貰いたかった。これからもある事、どうぞお忘れなく……。処で、最前の久米之介が、うらみ重なる裕弁和尚を追いつめて、よくも割ったり長なぎなた。

梅を何処にやった、梅を出せッ……。グルリとむいた大目玉を憎たらしげに外らして裕弁大音生？

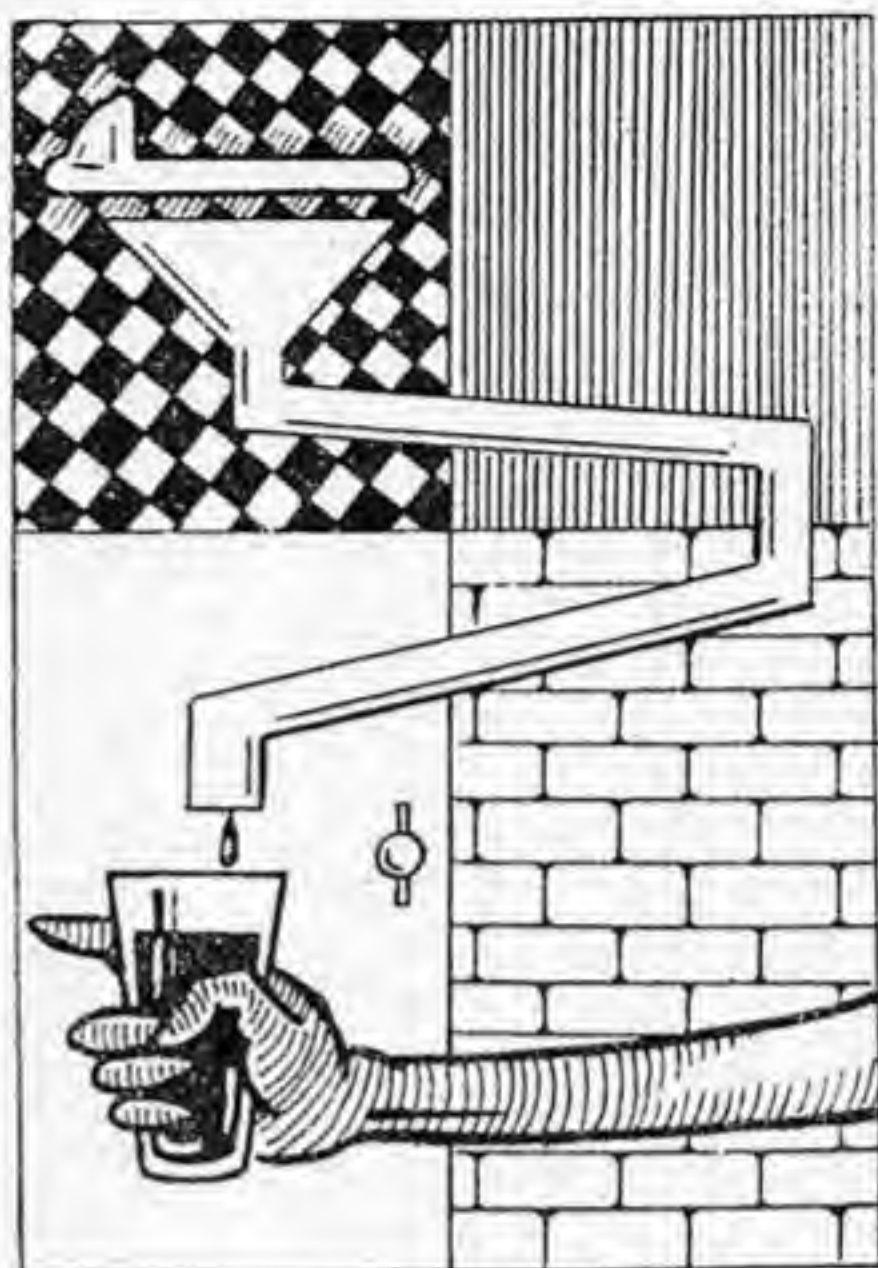
あれを見よ……。どうだ、久米之介。そなたのお梅もこの通りじゃ。手向えば女なのど元へズブリ……。アハッハッハッ。

パシヤリッ。これは助け役有村主膳（森美樹）の投げた手裏剣の音であり愛蔵の放つシヤッターの音でもあった。どうなるか知らの場が必らずどうかなるお芝居の千秋楽、一時間何がしの上映時間、さてさて御退屈さまで御座いました。かくて晴れて夫婦となった久米之介、お梅の御両人は、お怪我の一つもおわしきならず、高野のお山を下ったとき。麓の橋本宿へと向ったという。いや、めでたし、めで……。た』

佐藤『先生……一寸お待ちになって。それでは余んまりお可哀いそう。最初の石子責めであの世とやらに逝かれた、お二人に線香の一つでも……。』

かくてお馴染レギュラーの両人は何処かに在る二人の墓前にぬかずいて冥福を祈ったとさ。さの、祈ったとさ……。――

南無阿弥陀仏――。



愛^マ好^ニ者^アの記^ノ録^ト

|| M派に捧げるメニュー ||

とやま・かづひこ

昨年の二月号くらい、コツコツと認めつつけて来たかつひこの手帖も、ここに一年経った。沼先輩、黒田兄、そのほか敬愛する諸氏からの高評、知友から提供される資料のかずかず、お叱りもあり激励もあり、苦しいけれど楽しい一年であった。

大して取柄もないノートだが、①からはじめて最近まで、一項といえども偽りのない、全篇実話であることは、誇ってもよいとひそかにおもう。

資料は、手許にあと山の如くという大ゲサだが、洋服箱に三ばい、中には公開をはばかり性質のものもある。このノート、これからも続けてゆきたい。Mの記事が少くて、淋し

さを感ずる昨今、せめてMのみなさんに喜んで頂ければと念じつつ。

⑦③ その音の美しきこと

時は九月二十七日夕刻、場所は東海道の大磯附近。前夜から今朝にかけて二十二号台風が伊豆を荒し東京も一と荒れ荒れたその日の午後のこと、私達のトヨベツトは、箱根の強羅めがけて突っ走っていた。

内輪の同志、男四人、女二人、前々から予約しておいた宿のキャンセルも気の毒と、多少のトラブルは覚悟して東京を出て来たが、いつもなら三時間余りで目的地へ着くのに、今日は、台風のため道路が通れなかったり、

車のラッシュで、出発以来もう五時間、今更引っ返しもなく、進むに進めずで、車中は疲れ切っていた。

「アア、あたし、もうガマン出来ない」

Y子さんが、うめくようにいうと、E子さんも、

「あたしもよ。ねえ、なんとかして……」と応ずる。

吾々男性軍は先刻来、車が通行止めの都度かんたんに車外に出て用を足していたが、若い女性二人、適当なWCもないまま、小用が限度に來たらしい。

「よし、とやまさん。二人で護衛してやろうよ」

フエミニストの亀さんが、いきおいよく言う
うと、二人の決心はついたらしい。

「ねえ、おねがい。ついて来て」

二人は急に元気が出て、下りる支度をはじめた。

かづひこは、態度だけは渋々と、ノロノロ外へ出る。

こんなとき、飛び立つようにでも応じようものなら、あとがうるさいので……。

外は折柄、仲秋の名月。コオロギがわびしく泣いている。

道ばたの木蔭に消えて行った二人は、待つ間もあらせず、草むらに澄んだ、さわやかな音をたてている。

その音は、かづひこの魂をうばう音。天来のせせらぎ。

音をたのしむ聖なるひととき。その音ひときわ美しく、折柄、物しずかなあたりを美しい音楽の如くひびくのだった。

⑦④ オヒツの中のもの

台風二十二号は東京全都内に数多くの被害を残した。

中でも水害は被害が大きく、三十六万という家が床上浸水というから、種々の話題を残した。

かづひこの会社でも社員十二名の家が、やられ、かづひこは一軒々々見舞いに歩いたの

であった。

足立区には、Mが住んでいる。

職務とはいえ、ヒザまで水に浸っての見舞歩きも染ではなかったが、社内ベストスリーといわれるMの家へ行くのは、楽しみであった。

母一人、子一人ぐらしのMは、やっと水が引いてきた朝、かづひこが社長からの心づくしの見舞品を持ってかけつけた時、男手がなくて心細かったといって、ひどくよろこんでくれたのであった。

お母さんと代る代る恐ろしかった水の話をしていたが、

「一番困ったのは、お便所だったわ」

と平素の心安さから、生理の話を平然とした。

床上一メートルの日が四日つづいて、その間WCへ入れない。

「どうやって始末したの？」

さりげなく問う、かづひこの声につられて「はじめはガマンしてたわ。でも、冷えるでしょ。二日目の晩には、どうにもガマン出来なくなつて……」

いたずらっぽく笑いながら、御飯を入れる「オヒツ」を指さす。

「悪いとおもったけど、モウ不要品だからって、母と相談して……」

そのオヒツを、便器に使ったという。

問題のオヒツは、

庭先に置かれてあった。

どうにもこうにもガマン出来なくなつて、押入れにオヒツを上げ、使ったというのだ。「そう。忙しさにまぎれて、まだ始末しなかったわ。あのオヒツ、どこかへ捨てて来なくちや」

Mは、そういう。

かづひこは、さりげなく、そのオヒツを眺めやったが、

「ボクが、帰りに捨ててあげようか」

「わるいわ。あんなキタないもの……」

「社長からね、手伝って来るようにっていわれて来たんだよ。このままじや帰れない」

「でも、恥ずかしいわ……手伝って下さるんなら、隙を洗って頂きたいんだけど」

そこで、かづひこは一と肌ぬぐこととし、マメマメしく働き出したことは勿論である。

× ×

帰り道は小脇に抱きかかえたオヒツの包みがつしりと楽しかった。

⑦⑤ 女のくつ下

毎日新聞（東京）十月八日夕刊から採取。（前略）いろいろ見回しているうちに、女のはいているナイロンのくつ下が目について、どうも、あれを使うといいように思う。

それで、ぼちぼちに話しながら、きようは

寒くないし、君もこの時間からだから、もううちへ帰るだけだろう。そしたら、くつ下ぬいでいても、うす暗いメトロ（地下鉄）の中なんか、わからないしするから、それ、一ついま、くれないか、あしたの朝、すぐ買えばいいだろう、そのおカネは渡すから、ということをいった。

女はだまって、僕のいうことを順にきいていたが、話し終ると、とたんに

「いいわ、」といって、すぐ立ってぬいでくれた。それから、くせがついたのか、どうも、あのマチエールは下がすいて、光らなくて、ちよっと鋭くていいので、ちよいちよいはっている。

新しいのより古いのがいい。
いまはたくさんもっている。

筆者はパリ帰りの洋画家、佐野繁次郎氏。筆者がパリに居て、モデルをたのむ。画家という職業柄、変った色が使いたくて物色するうち、女のくつ下を使ってみたらと思いつく。

女への切り出し方も、うまいものだ。

「いいわ」と眼の前で脱ぐ女。古いのを沢山もっているという。結びのところなど、くつ下フェチシストならずとも、食指うごく一文である。

⑦6 犬のつまみ食い

去る二日夜のこと江東区深川洲崎四丁目の獣医松島三郎さん（四五）のところに近くの特飲街の女給磯野芳子さん（二二）が「先生可愛いメリーちゃん（二二）の病気を治して下さい」と一匹のメスのスピツを連れて駆け込んできた。診察してみるとメリーちゃん（二二）は目も口も赤くただれヨダレまでたらしめて大へんな重体。しかも原因不明の病気ときている。はて不思議と首をひねった松島さんがくわしく訳を聞いてみるとこのメリーちゃん、実はとんでもない食当りの末、かくも哀れな姿となったことが判った。

た。それから毎日のようにゴミ箱漁りを始めたが、そのうち人間サマ並に、とんだ病いを拾ってしまい、さしもの美しい容姿も醜くなり、口もただれたというわけ。松島さんが試みにペニシリンを注射したところ、ケロリと全快したというワンワン嬢の性病奇譚。

右は、特飲街華かなりし頃の内外タイムスから借用。だから材料としては古いことをお断りしておく。Mと犬は縁が深い。かく申すかづひこも、美しい女主人から、本当の犬として愛され、特殊な御用をつとめさせられる空想を愛する。右の文章に出てくるように、そのために病気をうつされることを幸福とおもい、願う気持がよく判る。犬党の方に捧げるゆえんだ。

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型（9×13センチ）印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り（略号1）

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り（略号2）

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り（略号3）

六枚一組 四〇〇円

☆全裸縛り（略号4）

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り（略号5）

五枚一組 三五〇円

☆股間しばり（略号6）

四枚一組 三〇〇円

香木吾



三條卓史

作
画

「八重さん、ちよっと来てご覧」

縫物を膝から滑らせて、御不浄に立って行ったお吟が、縁側から娘の八重に声を掛けた八重は居間の障子の傍でランプのほやの曇りを拭いていたが、

「はい」

と返辞をすると、その拭き終ってない硝子の筒を、そーっと倒れないように畳の上に置いて縁側に出た。

「あれ、あそこの隅に何の花か知ら、小さな

紅い花が咲いてるのね。お前、気が付いてたかい？」

「いいえ、ちっとも。ほんとに可愛らしい花ですのね。どうしたんでしよう。昨年まで一度もあんな花は見えなかったのに」
「新らしい草花の種を、鳥が啜えて運んで来たのかも知れないね」

「そうでしょうか。でも何だか変ですのね」

母と娘は顔を見合わせて明るく笑った。爽やかな秋の風が、庭の隅の萩の葉を採って渡って行った。二人はじっと縁側に蹲って、暫らく紅い花を見ながら泌々とした秋の感触を味っていた。

「お母様、もうすぐお月見ですのね。今月はお父様は何日頃、お帰りになるのか知ら」

八重は派手な花模様の銘仙の袂を、すんなりとした指先で弄びながら訊いた。

「いつも月の半ば頃にはお帰りになるのだけれど、近江の鉄道工事が大変急ぐんだって。今月は帰れないかも知れないから、着換えを運送屋に送らすようにと、つい昨日お便りが

あったのだよ。だからお母さんも、あれを急いで縫っているのよ」

「鉄道のお仕事って、大変なんでしょうね」

「さあ、お母さんもお仕事の事は分らないけれど、お勘定方だっているんだから大勢の人達のお給金やら、いろんな材料の仕訳なんかなすってお出ではないのかえ。お父様も世が世であれば、立派なお侍で氣楽に暮しておられるのに、御一新からこのかた、あれこれと色々なお仕事をなすって、さぞ御苦労が多い事でしょうね」

「そうですね。でもお母様。近江っていえば石山寺や琵琶湖のある国でしょう。とても景色が好い処でしょうね」

「ええ、お母さんも、未だ行った事はないけれど、昔から近江八景といって有名な処だね」二人が縁側で父の庄三郎の噂話をしているところへ、庭木戸をするりと開けて小間物屋の清吉が入って来た。

「ご免下さいまし。奥様お嬢様、本日は大変およろしいお天気で」

清吉は四角な紺の大きな風呂敷包みを背に負ったまま腰を屈めて挨拶した。

「あら清さんかえ、久し振りだったのね」

「はい、ご無沙汰致しておりましたて申訳ございません。実は手前と同じ様にお得意廻りをしていた朋輩が、病気で暫らく休養しておりましたもんで、すっかり忙がしくなりました

しまして……いえ、それはもう殆んど快くありません、お蔭様で、へえ」

清吉はそういいながら肩の風呂敷包みを縁側に下した。年の頃は二十五六、少し小柄だが色の白い、だかどこかにほんのちよっぴり冷い翳のある若者である。

お吟は三十七才、後妻で美人ではないが稍肥り氣味の男好きのする身体で、若い頃は夫の庄三郎が浮氣をするといつては始終夫婦喧嘩をした、いわゆる武士の妻らしからぬ女で年増の今でさえ、何となく婀娜っぽさが全身に漂っている。娘の八重は、生れて間もなく母親に死なれ、やがて庄三郎が浪人となり、一家の生活環境が変わったので、昔型の武家の娘という固苦しさはなかったが、それでも町家の娘とは何がなし一段違った品と淑やかさを身に着けていた。今年十八才で、そろそろ縁談も持ち込まれようという年頃である。

「清さん、この前もらった丁字油を持ってお出でかえ」

「へい、持って参いております。あれは手前共の店が自慢の品でございます、何しろ特別な香料を使ってありますので、大変評判がよろしうございます」

幾段にも重ねた箱を次々と縁側へ並べ、丁字油を取り出してお吟の前へ置いた。

「お前、ちよいとこの簪を挿してごらん」

「あらお母様、買って下さるの？」

八重は嬉しそうに眼を輝やかせながら、お吟の手から新しい簪を受取った。色とりどりの薄い絹布でつまみ細工をした小さな花が丸く一面に飾ってある楠玉の、華やかな娘好みの物である。

「どう、清さん、似合うかしら」

「ええ、とてもおぐしが引立ちます」

二人がこんな話をしていた時である。空が急に暗くなったと思うと、秋には珍らしい雷がゴロゴロと鳴った。

「あれッ」

とお吟と八重とが同時に叫んだ。二人とも大の雷嫌いであった。

「清さんッ、お願い。早くその雨戸を閉めてッ」

とお吟が上ずった声でいうより早く、座敷の隅へ母と娘が抱き合って震え出した。

「おや、降って来ましたね。こりやひどい」

清吉は手早く小間物の箱を座敷の中へ運び込んで雨戸を繰り出した。

そのうちにも雨はいよいよ激しく大地を叩き、眼底を射るような稲妻がチカチカと悶くと、ドドドドッと物凄い響きを立てて雷鳴が轟きわたった。お吟は思わず

「きやッ、たすけてッ」

と叫ぶなり八重を突きのけて清吉の肩に獅子噛みついた。

「お、奥様、ご心配はいりません。もうじき

に止めますよ」

清吉は静かにお吟の腕を取って其処へ坐らせようとしたが、彼女は雷の音におびえて半狂乱になっていた。

「ああッ、助けて、たすけてッ」

と叫びつづけながら、清吉に喰い付かんばかりにからみついた。パツと雨戸の透き間から閃光がきらめくと、カリカリッという大音響が後を追って家を揺った。真暗な部屋の中に、その瞬間の光で清吉の影を認めた八重も

「清さんッ」

と金切り声をあげて清吉の膝に転げついて来た。

「大丈夫です」

清吉は二人の肩をしっかりと抱いた。顔も姿も見えない。雨戸を閉め切った座敷の中にお吟と八重の恐怖に喘ぐ激しい呼吸の音をじっと聞いていた。お吟の髪の下字油の匂いが若い清吉の心を妖しく揺すぶったが、彼は全身を固くしてじっと雷鳴の中に坐っていた。

それから数日経ったある日の昼下り――

八重は小さな風呂敷包みを抱えて柳の繁っている川端を歩いていた。すると丁度川沿いの家並の、とある一軒の格子戸を開けて、ひよっこりと清吉が出て来た。肩には何時もの小間物の荷を背負っている。

「あら、清さん」

八重は懐かしそうに十数歩ほど小走りに走って行って清吉と肩を並べた。

「おや、これはお嬢さんでしたか。今日はどこらへ……」

清吉は軽く会釈をして笑いながら訊いた。

「これからお花のお稽古に行く処ですの。清さんは毎日ご精が出ますのね」

「ええ、これが手前の仕事ですの」

清吉はそういいながら肩の荷を大きく揺すった。

「でも、雨の日なんか大変ですわね。ああ、そういえば、此の間の夕立の時は、ほんとうに済みませんでしたわ。あんなはしたない恰好をして」

そういつて八重は袂で頬をかくした。あの時の無遠慮な姿を思い出して思わず上気したのである。

「お二人とも、大変な雷嫌いなんですね」

「ええ、とっても怖くって……」

八重と清吉は肩を並べてゆっくりと歩いていた。八重の心は弾んでいた。ひそかに思いを寄せている清吉と、こうしていられる一刻がとても楽しかった。できれば何処かでゆっくりと落着いて話したかったが、清吉は得意廻りの仕事なのでそうも行かなかった。

「清さんお休みはあるの？」

「いえ、休みなんてありません。お盆とお正月以外にはね」

「そう、大変なのね」

八重は何とかして二人きりで逢える口実を作りたいと考えていた。こんな偶然の機会は今後、何時あるか判らなかった。彼女は内心いらいらしていたが、清吉にはそうした八重の気持は通じないようであった。

「おや、あの簪、挿していらっしやいますね」

清吉にそういわれると、急に嬉しくなつて「これどう。少し派手すぎやしないかしら」

八重は嫣然と笑いながら、少し頭を傾けるようにして右手を簪の処へやった。袂がめくられて白い彼女の二の腕が清吉の眼についた。

「おや、その腕の傷は？」

思わず発した清吉の言葉に、八重は一瞬、サツと顔を硬ばらせて、慌てて手を下した。白々とした彼女の上膊部をめぐって赤い痣のような線が二筋、まるで土人の腕輪のように印されていた。

八重の心は、急に羞かしさと恐怖に近い氣持に波打った。

――清さんに見られてしまった――

そう思うと、泣きたいような氣持が彼女の胸を覆った。

「おや、お嬢さん、そちらですか。じやア、ここで……」

ぶつりと黙ってしまつて、何か考え事をしているように歩いていた清吉が、橋の袂まで来ると、ふと立止った。八重は橋を渡ろうと

しているのであった。

「あの……清さん」
何か思いつめた様な八重の瞳が、別れよう



DAKUSHI



読み取ると
「じゃア、兎も角、その川ッぶちへ降りて
見ましょう」

とする清吉の心に縋り
ついた。

「え？、何か……」

「お願い、教えて頂き
たいことがあるんです
の。でも、羞しくつ
て」

「何ででしょうか、仰言
って見て下さいまし」

「いいえ、ここでは言
えませんわ。あの、ど
こか人のいない処で」

「そうですか、でもお
嬢さんと二人っ切りで
は、却って人に見られ
て工合が悪いようで」

清吉は世間の眼を心
配していた。

「お願いです。清さん
あたしを助けて」

「ええッ、あなたを助
けるですッて？」

清吉は八重のその言
葉に、思わずどきりと
して彼女を見つめた。
八重の眼に必死の色を

そういつて、雑草を分けるようにして堤の
下へ降りていった。ひたひたと川波の音を聞
きながら、草むらの中に腰を下した。

「清さん、女は誰でもお嫁に行ったら、旦那
様や姑さんに叩かれたり、縛られたりして責
められるのでしょうか」

「誰がそんな事をいうんです？」

「お母さんがそう申します。女は三界に家な
し。嫁しては夫に従え。主人が妻にどんな振
舞いをして、妻はそれを辛抱しなければなら
ない。男は女を自由にする。自由にならな
ければ縛ってでも思いを通す。男は女を縛る
のが好きだ。また女の素肌を好む。他人には
出来ない事を妻に要求するのが夫の通弊だ。

また、姑さんは嫁の落度を探しては嫁を責め
る。自分が若妻の当時、年寄から無惨に責め
られた通りの事を繰り返す。母を最愛の者と
思っていた息子が、自分以上の最愛の者を得
る事による淋しさが、どうしても嫁いじめと
いう形をとるのだ。と云うんです」

「そうですか。まあ結婚すれば主人や姑さん
に従順に仕えるのが普通でしょうね。時には
辛いこともあるでしょう。然し、そうしよっ
ちゅう打ったり叩いたりしやしませんよ」

「それが、お母さんは必らずそうせられると
いうんです」

「だって、お嬢さんはどんな男と一緒になる
か、まだ決っちゃいないんじゃないのですか

？ それとも、もう定った人がいてその人やその男の母親がひどい仕打ちをする人だというのですか？」

「いいえ、そうではありません」

「じゃア、どうして」

八重は返辞のかわりに左の袖をめくって見せた。其処には先刻、偶然見た右腕と同じ処に矢張り二条の赤い筋が入っていた。

「縛られた縄の痕ですね」

八重は黙って肯ずくと、そっと袂を下したが、眼はじっと流れる水面の泡の動きを追っている。八重の声は小さかった。

「母さんは昨夜も、あたしを縛って責めました。一旦寝んでいたのを夜中に起して、襦袢を脱がせて腰紐で後手に縛られました。そして、いつも使う長い麻縄を簞笥の抽出しから取り出して二の腕を二巻きして後背で留め、今度は乳房の真上を一本きりと廻して締めつけられました。胸が切なくて、思わず声を上げそうになるのをその儘、蒲団の上へ俯伏しに捻じ伏せて、湯文字の上から物差で私のお尻をびしやん、びしやんと叩きました。暫らくすると今度は、あたしを仰向きにして手拭で猿ぐつわを咬ましたわ。それは、いつかあたしが思わず大きな声をあげたのでそれ以来、仰向いた時にはいつもそれをするのです。それから鏡を持って来て、あたしの顔の前へ翳します。そして——どう、見える

かい、お前の胸が。そんな不恰好な乳房じゃ

お嫁に行っても旦那様に嫌われるから、お母さんが恰好の良くなるようにしてあげようよ

——といって台所から摺古木を持って来て、

それを横にして押し揉むのです。胸が押し潰れそうで、必死で上体を横に捻じてそれを避けようとする——じっとしていなさい——

と厳しくいわれて肩を擱んで又俯向けに戻される。すると今度はその摺古木を立ててくび

れた乳房の盛り上った処をぎゅッ、ぎゅッと散々に突かれました。苦しくて、息が切れそ

うで、叫ぼうにも声は出ないし、身を避けようとすれば立膝で腹をぐっと押えつけられて

身動きも出来ない苦しさ。こんな事がお嫁に行った後、度々あるんだったら、あたしはもう一生お嫁になんか行きたくありませんわ。

お母さんはこれが嫁修業だからといって今朝夜明けまで縄を解いてくれませんでした」

八重は羞しそうに二の腕の痣の説明をする

と、ほっと大きく呼吸を吐いた。

「わたしの見るお母様はお優しいそうなのに」と清吉はいささか不審のようであった。

「ええ、いつもは優しいのです。義理の中だと自分で憤しんでいらっしゃるようですわ」

「昨夜のような事、度々せられますか」

「ええ、月に一度か二度——でも、そんな時はお母様の眼の色が変わっていて、何かに憑かれて

いいでしょうか」

「そうですなア——」

清吉は暫らく思案をしていたが

「今すぐどうといって、わたしにも判断が出来ませんが、お嬢さんのお花の師匠はどちらでしょう。何でしたらお嬢さまの今日のよう

な機会を利用して御相談しましょう」

「ええ、お師匠さんは新町の花井翠章先生ですわ。三の日と八の日の午後二時から四時ま

でお稽古するんです。ですから、その時刻に途中のどこかでお逢い出来ないか知ら」

「いいでしょう。何とか致しましょう。じゃア、今日は早や時刻も過ぎていきますから、これ

で」

「清さん、きつとね」

八重は清吉に縋りつきたい心を押えて堤へ上って行った。

二人の姿が薄の影へ見えなくなると、清吉と八重が腰を下していた直ぐ近くの草むらから四十ばかりの色の浅黒い、遊び人風の男が

ぬッと立ち上った。

「ふん、こいつア面白え事を聞いたぜ。お吟の阿魔ア、これで一つとちめてやらなくちやアなるめえ」

そう呟いて、懐からひよいと出した豆絞りの手拭を盗人冠りにすると、足早やに堤の上へ飛んで行った。

それから更に数日たって――。

「お母さん、行って参ります」

「ああ、じゃお師匠さんによろしくね。これは月謝ですよ」

お吟は八重を表まで送って帰ると、玄関の扉にカチリと錠をかけた。近頃は半分世間が物騒であった。お吟が居間へ帰って暫らく縫物をしていると、不意にすぐ傍の縁側で

「ご免よ」

という男の声がした。

「ええッ」

とお吟が声を上げるのと同時に、間の障子がするりと開いて豆絞りの男がぬッと入って来た。

「あれッ、お前さんは」

「誰でもねえ。木場の三五郎だ。お前さんも久しく逢わなかったなア」

そういいながら後手で素早く障子を閉めると、不意の男の出現に驚愕して坐ったまま後退りするお吟の前へ立膝を突いた。

三五郎は維新当時の庄三郎の同僚で、以前は二本刀を差していた身分だが、明治開化の時世の波に押されて次第に身を持ち崩し、遂に博徒の群に投じてしまった。庄三郎は昔の同僚の転落して行く姿に同情を持って、それ以後も何度か忠告もし、また、ささやかながら正しい仕事口へも世話をしていたのが、どれも辛抱出来なくて、今では深川の木場の

あたりの破れ家に同じ仲間と雑居して、木場の三五郎」といって人に嫌われるやくざになつてゐる男である。

「ねえ、お吟さん。暫らく逢わねえうちに、すっかり婀娜ッぽくなつたじゃねえかよ。ええ、まだお腹ア痛めた子供はいねえんだろ。そうだろうて。その身体の線が崩れていねえもんな」

三五郎は、薄気味悪い笑いを頬に浮べながら、蛇のようにお吟の身体をじろじろと見廻した。

「何をしにいらつしやつたのです。断りもなしに入つて来るなんて、あんまり失礼じゃありません？」

お吟は不安に慄えながらも、庄三郎の妻らしく、強い言葉で三五郎をなじつた。

「断わりもなく入つて悪かつたね。でも表は錠がおりているんだろ。塀でも越えて入らなくちやお目通りがかなわないからね」

「ええッ、塀を越えたんですッて？」

お吟は驚いた。彼女は清吉や、その他の御用聞きのために裏口の戸締りはしていなかった。たので、其処から入つて来たものと思つていたからであつた。

「ヘン。よそ様の塀を乗り越えるなんて、朝飯前です。こう落ち目になつちや、空き巣、掻ッ払い、大抵のことはやらなくちやア、しがねえ暮しの煙が立たねえンです。お前さん

はこうやって何不自由なく暮していなさるが世の中にやア俺のような世過ぎをしている者もあるんですぜ。なアお吟さん、物は相談だが……」

「三五郎さん、どうしろと云うんです。わたしにお金の無心でも……」

「さすがお吟さんだ、察しが良いや。実はこの処すっかり尾羽打ち枯れているので、昔のよしみにちッとはかり融通して貰いたいと思つてな」

三五郎はそういうと、更に一膝進めた。お吟は素早く懷中から紙入れを抜き出すと、それを膝の前へ置いて

「少いかも知れないけれど、今日はそれを持って帰つて下さい。夫が留守で今手許にないんですから」

お吟はこんな獣のような義理知らずの男の顔を見るのが恐ろしかった。一刻も早く帰つて貰いたかった。だが三五郎は仲々帰ろうとしない。

「お吟さん済まん、じゃアちよつと中味を見させて貰いやすぜ」といって、その紙入を開いてザラザラッと銀貨銅貨を左手に受けた。それから何枚かの紙幣を抜き取ると

「六円三十七銭と五厘か、ちつとばかり少なえが、紙入ごと寄越したお吟さんの氣持に免じて、今日はこれで我慢するとするか。ほら

こんな女持の紙入なんぞ俺にや用がねえからお返しするよ」

三五郎は左手を懐中へ入れて金を腹巻の中へ納めると、右手の紙入れをポイとお吟の膝の上へ抛った。そして

「ところでお吟さん。ついちやアもう一つお願えがあるんだが、何と相談に乗っちゃやア呉れめえか」

といいながら、蛇のような視線をじーっとお吟の瞳に絡ませた。その濁っているが燃えるような三五郎の眼に、お吟はぞーっと背筋に寒気を感じた。怖れていた事が現実となつて刻々と迫って来るのである。

「三五郎さん、早く帰って。もうすぐ娘が帰ってきます」

「いいや、まだ帰らねえよ。お八重坊はお花の稽古だろ。さっきの言問橋の上で会ったばかりさ。お八重坊は——お母さんが独りで淋しがっているから、これから行って慰さめて上げて呉れ——っていったぜ」

「いいえ、あの予がそんな事を……」

「いわないっていうのかね。お父さんは近江の方へ行つてて今月中は帰らないし、お八重坊は三と八の日の午後二時から四時までお花の稽古で、その間はお母さん一人だからってわざわざ親切に教えて呉れたのよ。どうだえ図星ってところだろう。どうしたいお吟さん、俺もここんところ女の肌の匂いを嗅いじやア

いねえ。なア、満更見ず知らずの他人じやアあるまいし、そう怖い顔をせずと、ちっと此方へ寄りな」

三五郎は上唇を舌で舐めながら、じり、じりとお吟の方へにじり寄って行った。

「何と云う無体なことを。わたしは庄三郎の妻です。早く帰って……」

お吟は三五郎の眼に追いつめられて、免もすれば乱れようとする着物の裾を両手で押えながら床脇まで退った。

そして必死で叫んだ。

「早く帰って、人を呼びますから、ああッ誰かッ……」

「おッとッと、大きな声を出すんじやアねえ」

と三五郎は素早くお吟の髻を左手で握むと右手で固くお吟の口を塞いだ。お吟は懸命にその腕から逃れようと身を渾掻いたが

「そう、ばたばた暴れることはないんだ。なア、お吟さん。三五郎も落魄れはしたが、ま

だお前さんを腕ずくでどうこうしようとは思わねえ。獲りたての海老のようにピンピン跳ね廻る女を抱いたって面白くもねえよ。だからよ。おとなしくして俺の云う事をよく聞き

ねえ」

そう云って、そーっとお吟の口を塞いでいた手を離れた。お吟はこの危機をどうして脱しようかと心忙しく考えながら、全身を固く

して必死に防禦の身構えをしていたが、三五郎は立て膝のまま、一層自分の顔をお吟に近づけて声を落した。

「なア、お吟さん。お前さんは時折お八重坊を縛って責めると云うじやアないか。面白え趣味だな。花羞かしい娘を裸に剥いて、しつへの義理に絡ませて、手足を縛って突いたり叩いたりの慰さみは、いくら生さぬ仲の母娘だって、ちッとかくが強すぎはしないかえ。なア、お吟さん。お前さんのそんな行跡が世間にばつと知れて見ねえ。お前さん達ア、もうこの土地にやア住んでいられなくなるだろうぜ。ご亭主の庄三郎は、そんな事ア夢にも知らねえで一生懸命仕事大事と勤めているんだらうが、どっこいお留守はかくかくの次第と知っちゃ、この家の中にだって波風が立たずにやアおさまるめえ。どうだいお吟さん、この俺さえ口を割らなければ、誰にも知られず円満な家庭の奥さんで済ましていられようという寸法さ。ここん処をとっくりと、胸に手を当ててよく考えて見ねえ」

お吟は三五郎の一語々々が、針となって自分の耳に飛び込んで来るように感じた。——何もかも知っているのだ。一体どうして母と娘だけの秘密を嗅ぎつけたらう。ここで三五郎を怒らせたら必ずその仕返しをするに違いない。無論、庄三郎の耳へも入れるだろう。附近の床屋、風呂屋など大勢人のいる処で、

話題になるようにいい触らすかも知れない。

そうになったときには、ほんとに戸外へも出られなくなる。庄三郎は自分をどうする積りだろう——三五郎の言葉におびやかされて、とつおいつ気迷っているお吟の感情の動きを、三五郎はじっと窺っている。反抗心をぎらぎらと燃やして彼を見返していたお吟の瞳が、次第に沈んで、膝を固く押えている手首の力が自然に抜けてゆくを見遁さなかった。

「どうしたんだ。思案はまだ付かねえかい？もう一時間もすりやお八重坊が帰って来るぜ。それまでの僅かの間お前さんのそのねっとりとした肌を、弁天の姿を拝まして貰やいんだ。ええ？縛るかッて？まア手首ぐらいは縛ってもいいだろ、何もそんなに怖がらなくッたって、お前さんを無理往生させてご亭主に顔向けが出来ねえような真似をしよってンじやアねえのさ。唯、拝まして貰いさえすりやそれでいいんだ、ええ、どうするんだ、お吟さん」

三五郎は半分、独り言のように言ってお吟の眼を逐った。——何も今日直ぐこの女を自分のものにする必要はない。女の弱味はしっかり握っているんだ。機会はいくらでもあるんだから、ここん所は相手に自分の今日の気持の限界を覚らせて、早く観念させるのが上策だ——狡いやり方だが、女の心理を掴んだ効果的な言葉である。



お吟は、じっと首を垂れたまま動かない。「どうも気持が進まねえらしいな。じやア仕方がねえ。ここいらでご免を蒙るっとするか。だがねえお吟さん、最後に断っとくが、どんな噂が世の中へ拡がるか知れねえが、俺

の知ったこっちゃアねえぜ」
三五郎はそう云うと、スッと立った。お吟の眼の前を塞いでいた大きな壁が、急に遠のいた感じであった。お吟は一瞬はっと救われたような気持がしたが、その次の瞬間には三

五郎に追いつがるように

「ああ、待って……」

と叫んで両手を畳の上に投げ出していた。片手を懐に入れたまま一歩、二歩、緩くりと障子の方へ足を運んでいた三五郎は、ぐるりと背中を大きく曲げてお吟の方を振り向いた。

「ふうん、思案がついたのかい？ それとも何か……」

「三五郎さん、わたしを不貞な女にしないで……」

「いいとも、何度もいうようだが、腕ずくで女をものにする俺じやアねえンだ。だが、それ以外のことは、一切俺のいう事をきくんだぜ。それが出来るかい？」

お吟は返事の代りに頭を下げて肯いた。少し崩れた丸髷が揺れて、挿していた櫛がぼとりと畳の上に落ちた。

「ようし、そうと話がきまりやア早速弁天さまになって貰おう。何しろ早いとこしなきやお八重坊が帰って来ちやア、お前さんだって一寸工合が悪いだろうからな」

三五郎はそういうと、その場へどっかりと胡坐をかいた。そして

「さあ、お吟さん。此処へ来ねえ」

と右の掌を、向きに突き出して招いた。

お吟は観念したもののようにならうつむいたまま膝頭をにじらせて三五郎に近付いた。う

なだれた襟足が白く浮き出て、後れ毛が数本乱れている。

「おっと、こうだ」

三五郎は近寄って来たお吟の右手を素早く掴むと、ずいっと膝の前まで引寄せ、片手で彼女の帯メめに手を掛けた。

ジャン、ジャンジャン。

近くの火の見櫓で叩いているらしい半鐘の音が、けたたましく響いて来た。

「やッ、摺り半（連続打のこと）だ。どっか近くが火事らしいぜ」

三五郎は思わずそう云うと、手を思わず離した。あれから三十分ばかり、たった頃である。

お吟は両手を三五郎の盗人冠りをしていた手拭で後に縛られ、腰紐で乳房の上下を二巻き、男の力で存分に締め上げられて乳房が変に歪んでいる。三五郎は

「いい肌をしているじやアねえかよ、お吟さん。姥桜というにや惜しいもんだ」

そんな事を云いながらお吟の上部をあちこち指先で突ツついた。乱れた丸髷を下に、顎を伸ばして仰向けに弓なりのお吟は、張り切った乳房やみぞおちの辺りを小柄の柄で小突き廻され、身をよじて大きく喘いでいた。

「何処だ、何処だッ」

「あっちだ、それ行け」

塀の外が急に騒がしくなつて、ばたばた駆け出す大勢の足音と雑音とが入り乱れた。

「ちえッ、いよいよこれからと云う時に、とんだ火事をおッ始めやがッて」

三五郎は如何にも残念そうに呟くと、あらためてお吟の露わなむっちりとした肌に視線を注いだ。

「お吟さん、人が来るといけねえから今日はこれで帰るが、いいかい、近いうちに又来て弁天さまを拜ませて貰うからな。そら」

といいざま手拭の結び目をさつと解いてお吟の身体を畳の上へ滑らせ、そのまま飛鳥のように身を躍えすと戸外の雑踏へまぎれ込んでいった。

お吟は横向きに転がったまま、暫らくじつと動かなかつた、いやな三五郎だがお吟には憎めなかつた。自由を奪われたその身体に加えられる責めの苦痛が、息苦しい中にも何ともいえない甘い感じを伴って彼女の頭の中に蘇って来た。

着物や襦袢が、床柱の辺りに散乱していた。両の手首と、乳房の上下に締めつけられていた肌は赤い筋になつて残っている。爛熟した女の肌は何か眼に見えぬ強い圧力を求めて、お吟の悩みを一層深くしてゆくようであった。

それと同じ頃、八重と清吉は三囲神社の木

の蔭で囁き合っていた。

「お嬢さん、用意は殆んど出来ましたが、あなたの決心はつきましたか」

「ええ、清さん、あたしからお願ひしたのですもの、覚悟はとうからしておりますわ」

「じゃア、この次のお稽古日に決行しましょう。ええと次は十三日ですね。じゃア、その日にはお師匠の家を出られたら真すぐに舟宿の丸三へ行つて下さい。お嬢さんの旅支度も全部調べて丸三へ頼んでおきますから。そうして二人で大阪へ行つて新しい生活に踏み出しましょう。あちらの間屋も力になってくれる筈ですから、どんな事があつてもお嬢さんを不しあわせになんか致しません」

「清さんお願い、あたしを捨てないで」

「捨てるなんて、勿体ない。清吉のいのちにかえてもお嬢さんをお守りします」

「もうお嬢さんなんていうのはやめて……」

「ああ、八重さん……」

いつの間にか二人はお互の手を固く握り合っていた。そして暫らくの間、若い希望と限りない幸福感に浸っていたが

「お嬢さん、もう帰りましょう。遅くなつてお母様に疑われては大変ですから。今が一番大切な時ですからね」

「ええ、では十三日にきつとね」

八重は清吉に念を押すように云つて、もう一度握り合っている手に力をこめた。

「ええ、そうです。それまでに充分手筈を整えておきますから——ああ、それから十三日には私が丸三へ行くのは夜になります。都合で十時頃になるかも知れませんが。淋しいでしょうがそれまで待つていて下さい。出発は翌朝早く品川まで船で、そこから上つて大阪へ参りましょう。じゃア今日はこれで……」

「ああ、清さん……」

清吉は思い切つたように二三歩退ると、軽く頭を下げて踵を廻した。八重は清吉との初旅を胸に描きながら、袂を口に咥え去つてゆく清吉の後姿を頼もしそうに見送つていた。

「おや、まだ帰つて来ないよ。一体あの娘は何処へ寄つてゐるんだろう」

お吟は八重の帰りが遅いので花の師匠の処へ訊ねて行くと、師匠はいつもの通り帰つたという。ほかにどこかといつて尋ねる当もないのでそのまま帰り夕飯の支度をしたが、日が暮れても八重は帰つて来なかつた。

お吟がいらしていると、静かに表の戸が開く音がした。

「八重かえ」

と、お吟はほつとした気持で声を掛けたが返事がない。不審に思つて台ランプを提げて玄関に出て見ると其処に清吉が立っていた。

「おや、清さんじゃアないの。こんな夜になつてどうしたの」

「へい奥様、今夜はちよつとお話したい事がございましたもんで夜分に失礼しました。でお嬢さんは？」

清吉はそういうながら、ちらと奥の様子を探るような素振りをした。

「それがねえ清さん。何時もはこんな事は無いのに、今日に限つてお花からいまだに帰つて来ないのよ。心配でどうしようかと思つていた処なの——。で清さん何か……」

「そうですか。一体何処へ行かれたのかな。ねえ奥様、日頃お世話になつておりますお宅の事でございますから、手前もお捜し致しますよう」

「済みませんねえ、じゃアちよつと上つてお茶でも飲んで下さいよ」

「そうですか、ではお邪魔させて戴きましよう」

そう云うと清吉は草履を脱いでお吟の後に従つた。座敷の中央へランプを置いて、台所へお茶の支度をしに行こうとするお吟の後から、清吉が躍りかかつて其の場へ捻じ伏せた。

「清吉さん、何をするんです」

と吃驚してなじるのには答えず、かねて用意して来た細い麻縄を素早く懷中から出して捻じ上げた手を後ろさまに縛り、その縄を首に廻してもう一方の手を繋いで縛り、その場へごろりと押し転ばした。ほんの一瞬の早業で、お吟にとっては全く意外の事であり、抵

抗する間もないうちに完全に自由を奪われてしまった。

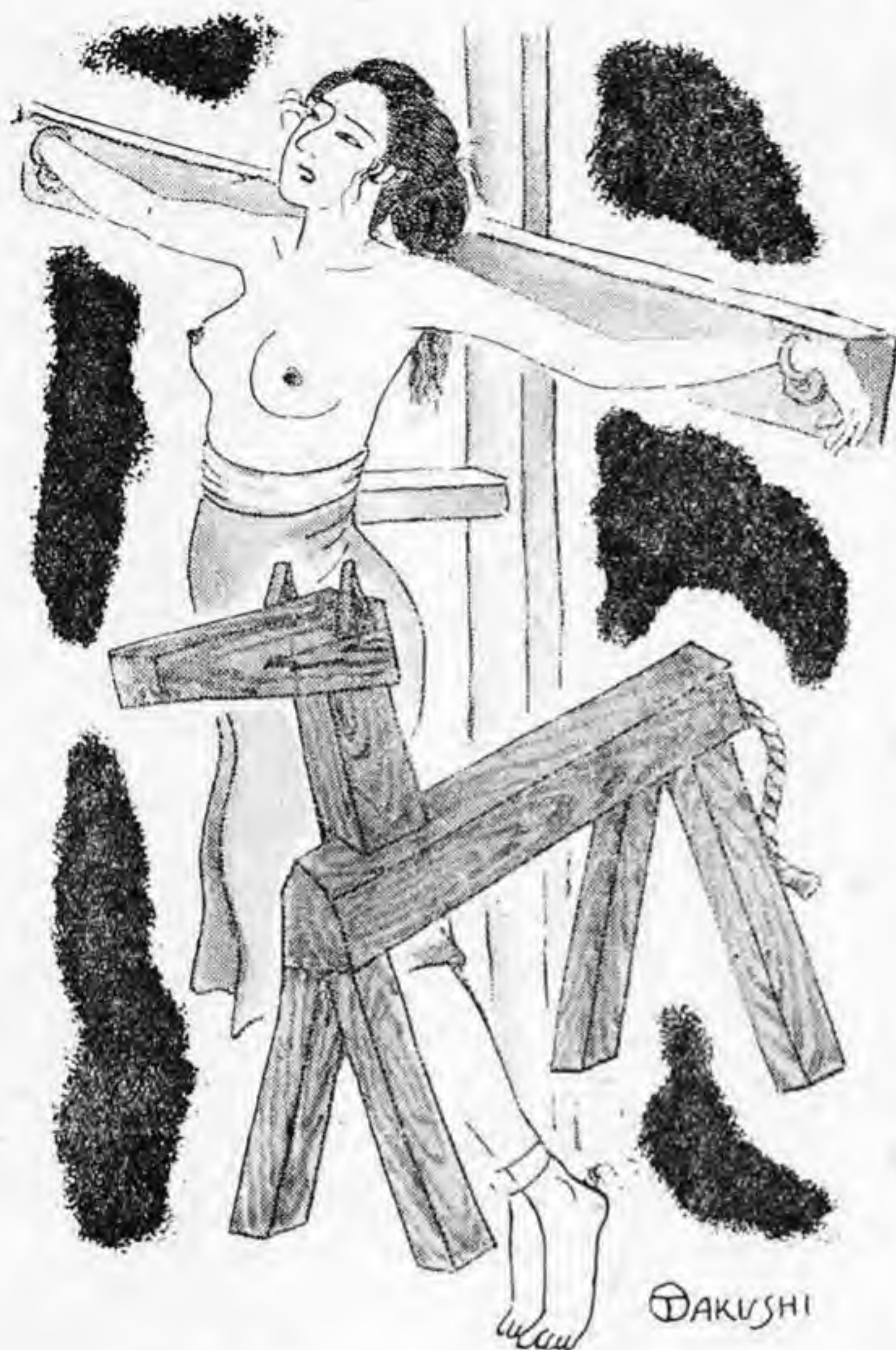
「奥さん、いやお吟さんと呼ばせて貰いましょう。不自由だが、そのまま暫らく私の話を聞いて貰いましょうか」

そういうと、清吉は座蒲団を持って来てその上に正坐した。

「以前お宅に、お志乃という女中がいました

ね。従順で気が利いていてご主人に可愛がられていましたつけ。お吟さんより四つ五つ若く、縫綴も満更ではなかったので、お吟さんはお志乃がご主人に目を掛けられるのがお気に召さなかったようで、お志乃に辛く当りましたねえ。その事、真逆お忘れになっては居ますまい」

「清吉さん、あなたは何をいおうとしている



んです」

お吟は、二十年程も昔の事をいい出した清吉の心を図りかねている様である。

「まあ、お聞きなさい」

清吉はランプを置き換えて、お吟と自分の間へ据えた。

「お吟さんはご主人がお勤めに出て行った後で、お志乃を色々な方法で責めましたね。裸にして縛って打つ位は優しい方で、ろうそくを使ったり、木刀や懐剣を用いたり、近所の犬を誘い込んで来たりして、口では云えないような事をしましたね。それでもお志乃は歯を喰いしばって辛抱していました。——ご主人がお子様欲しいとおっしゃる。単なる浮いた気持でなく、真面目にお世嗣が欲しいと思っておられるご主人のために——と、お志乃は心からそう思っていたのでしよう。お吟さんには、まるで奴隷のように苛め、さいなまれながらそれでも遂々念願がかなって妊娠しました。ご主人はひそかに喜んでおられたようですが、そうなるとお吟さんの方が納まりませんね。……のない自分にご主人に追々遠ざけられてゆくのではないかという危惧の念も加わって、お志乃への嫉妬が一層ひどくなりましたね。——人間を縦に縛るのも面白い——と云って、お腹の大きくふくれだったお志乃を裸で立たせてそれを実行しましたね。まだその上に、足の間に俵板を挿ませて——

落したら承知しないよ——と罵りながらそりそりりと部屋中を歩かせましたね。ご主人が心配して産み月近いお志乃を或る老婆の家へ預けました。お志乃はそこで男の児を産んだのですが、可哀そうに死産でした。臨月近くまでお吟さんに責められて、それが胎児に影響したのかも知れませんが。そのお志乃も産後の経過が次第に悪くなって、ひと月ばかり後その老婆の家で亡くなってしまいました。可哀そうなお志乃は、お吟さんに責められるために生れて来たような女でした。ねえお吟さん。まったくそれに違いありませんねえ」

清吉はそう云うと、ふッと言葉を切ってお吟の顔を見まもった。

お吟は昔、自分が女中に加えた激しい嫉妬に燃えた振舞いを一つ一つ清吉の口から聞かされて、悔恨と恐怖に戦っていた。

「清吉さん、お志乃のそのような事をいう、あなたは一体誰です。そして、わたしにそんな話を聞かせて、どうしようというんです」

「お吟さん、私が誰だか、よくこの顔を見てごらんさい」

清吉は薄笑いを浮かべながら、自分の顔をランプの灯影に翳した。

「まだ判りませんか。この顔の上に日本髪を載せて、紫矢紺の着物を着ているとしたら

——」

「ああッ、お志乃ッ……」

お吟は瞬間、そう叫ぶと、ぐッと上体を後へ退いた。清吉は、半ば仰向きになって驚愕に胸を波打たせているお吟に覆いかぶさるようにして

「お志乃？……そうですよ。お志乃は私のたった一人の姉さんでした。両親に死別れた姉と弟が、波風の荒いこの世の中を生きてゆくために、どんな辛い苦しい思いをしたことか。姉はお吟さんのお屋敷に、弟は小間物屋の小僧になって、お互が手を取り合って喜び合える日のためにと、時折逢っては慰さめ、励まし合いました。その心の支柱ともなっていた姉のお志乃が若い命を失ってしまったのです。私は姉の病褥を訪ねてそうした話を聞き、何とかして姉の仕返しをしなければと心に固く誓いました。あれから十余年、手代になってお得意廻りが出来るようになって、一番にお吟さんの屋敷へやって来ました。そしてこの家に入しながら秘かに復讐の時機を窺っていたのです。……その機会がとうとうやって来ました。お吟さん、私があなたをこれからどうしようとしているか、もうすっかり御想像がついていると思います」

清吉の言葉は静かではあったが、その語気には無気味な響きがあった。

「ああ、清吉さん、わたしが悪かった。ゆるして」

「いいえ、それは駄目です」

「わたしをどうしようと言うの」

お吟の怖れは極限に達していた。ぶるぶると身体を震わせながら清吉の動きを見まもっていた。清吉の右手が伸びて、それが大きな蜘蛛の手かなんぞのように彼女の肩に襲って来た。

「あれッ、助けてッ」

と叫んだ途端に、彼女の口には早くも手拭で猿ぐつわが嵌められていた。

「宵の口でも世間がうるさい。窮屈でも辛抱して貰いましょう。さあ、お吟さん、身体を起して……女中部屋へ参りましょう。あなたがお志乃を責めたあの部屋へ。そこにはまだあの当時の責め道具が押入れの中にしまっている筈ですね」

清吉はそういういながらお吟を立たせると、左手に置ランプを持ち、右手で彼女の体を押した。

「まあ、よくも考えたものですね」

清吉はそういいながら、あらためてその四畳半の女中部屋を見廻した。天井や四方の柱の上下に取り付けられた鉄の環、壁面の真中の柱に横木を取り付けてその両端にも鉄の環がついている。柱を利用した礫台である。押入れを開くと、その中には幅の狭い涼み台のような寝台や、変形椅子、木馬、大小数本の棒や綱、鎖から土瓶、湯呑、燗徳利まで、そ

れぞれ責道具に使ったと思われものが入っていた。

清吉はそれ等を一つづつ取り出してお吟の前へ並べた。

「ああ、この椅子へ姉さんを縛りつけて、この土瓶で塩水を飲ませたのだ。そして畳の上へ桐油紙を敷いて——油紙を濡らすと承知しないよ——といったはお志乃の悶え苦しむのを待っていたんだ。」

そういってお吟を見た。お吟はこの部屋へ入ると直ぐ着物を脱がされて、湯文字一つの姿で崩折れていた。

「そうだね、お吟さん」

清吉がお吟の白い頸へ掌をかけて念を押すと、お吟は——許して——という哀願の情をうるんだ眼に湛えて、深くうなずいた。

「それからこの木馬、馬の背が三角に削ってあって、これに乗せられちや堪らない。全くひどい細工をしたもんだ。どうだお吟さん。今夜はあなたを、この木馬に乗せてあげましょうか」

お吟は、ハッとして清吉の顔を見た。澄んだ瞳でじつと自分を見凝めている。言葉は鋭いが、無理矢理に引摺って行って責めようとする様子もない。またそうせられても仕方のない自分ではあるけれど。出来ればそのような責苦は遁れたい。だが半裸にされて縛られてはいるが、清吉はまだ自分に復讐らしい事

を何一つしていないのだ。この私を一体どうしようと言うのだろうか？

お吟はじつとうなだれたまま思い煩っていた。そうしているうちに次第に自責の念が胸の中に湧き上って来た。今まで怖い、恐ろしいの一念で怯え切っていたのが、清吉の態度を見ていると——この償いは自分の身で受けなければならぬのだ——という悲しい諦めの思いに変わって来た。

お吟は、膝で滑って清吉の傍へ身をよせると、上体を前へ出し頸を振って猿ぐつわの手拭を取って呉れるように身振りをした。

「どうした、お吟さん。苦しいんですか」

清吉は、お吟が息がつまって苦しがついていると思つてその手拭を解いた。お吟は大きく息を吐いた。ふくらんだ胸の乳房が大きく揺れた。ランプの光に近々と照らし出されたお吟の白い艶々とした上体。清吉はふッと眼をそらせた。

「清吉さん、わたしはほんとうに悪い女でした。お志乃を、この部屋でさんざん責めました。でも、それはお志乃が悪かったのではなないのです。みんなわたしが嫉妬に狂つて、あんなひどい目に遭わせたのです。ゆるして下さい清吉さん。どうかこのわたしを清吉さんの氣の済むまで存分に……」

そういうと、お吟はじつと眼を閉じた。そのまなじりから一滴の涙がスッと頬に伝わ

った。清吉はそうしたお吟の容子を黙ったままじつと見まもっていた。二人の間に息づまるような刻が流れた。

お吟は急にふらふらと立つと、二足三足よろめいて木馬の傍に倚った。観念した彼女が自ら責めを受けようとするのであった。

「清吉さん、これに跨がらせて……」

「何をするんだお吟さん」

清吉は、思わず立ち上ってお吟の両肩をしつかりと押えた。

「お志乃に済まないのです。この上で氣を失つたお志乃の苦しみを私に加えて下さい」

「じつとして、じつとして」

清吉は、お吟の肩を押すようにして其処へ腰をおろさせた。

「わあッ」

とお吟はがっくりと顔を清吉の膝に押しつけて嗚咽した。丸雷が崩れて幾筋もの髪の毛が頬に乱れた。咽び泣く彼女の呼吸が清吉の膝頭に押しかぶさっている乳房に伝わって、清吉の神経を揺さぶった。後手に縛られて綱の喰い込んだお吟の手首がランプの光に白々と浮き上っている。

——私はこの女に復讐をしにやって来たんだ。どうした。こんな事で、あれ程責め苛まれた姉の氣持が済むだろうか。いやいや断じて済まないのだ。この女を責めて責めて、思い知らせてやらねばならない。その哀しい願

いをかけて今日まであらゆる困苦に耐えて来たのではないか。この女の甘い涙にほだされて、復讐の気持を鈍らせてはならない——

清吉は右手で崩れたお吟の鬘を掴むと、その顔をぐいと自分の方へ捻じ向けた。大きく開いた彼女の瞳が涙でうるんで、その涙の伝った頬に、べったりと髪の毛がくっ付いている。そのうるんだ眼には、も早や恐怖の色も哀願の色もない。そこに漂うものはただ諦念に似た静かな眼の色であった。

——これでいいんだ。姉さんも随分苦しんだが、今こうして悔悟している人を責めてどうなるう。自分が出入りしてた間、お吟さんは優しくして呉れた。あの雷の日だって、自分をちっとも怪しまず、心から頼って呉れていたではないか。これでいい、これでいいんだ——

清吉は、お吟の上体を静かに膝から滑らせて立ち上った。そして其処にあった小柄をプツリと柱の中程へ斜に突き立てた。

「お吟さん。私は帰る。もう二度とお目にはかかりません。そしてお嬢様も帰っては来られません。この小柄はあなたの身体を自由にして呉れるでしょう。じゃア……」

清吉はそういうと、暫らくお吟の顔を見ていたが、スーッと襖をあけて關の廊下へ出て行った。

「ああ、清吉さん……待って……」

お吟のそうした声を聞き流して、そッと戸外へ出た。

——急がなければ、舟宿では八重が独りで待っている——

そう思いながら辻をひよいと曲った途端に「あッ」

と声を呑んだ。今出て来たばかりのお吟の家の塀を、ひよいと乗り越えた黒い影を見たのだ。

——おかしい、物盗りかな——

ふッと気が付くと縛ったままのお吟の事が急に心配になって来た。清吉は再び音のしないようにお吟の家へ引返した。草履を脱いで、庭伝いに先刻の女中部屋の外まで忍び寄った。中から太い男の声が聞えて来た。

「この間の約束通り、こうしてやって来たんだが、ちゃんと自分からこんな色っぽい姿で迎えて呉れるたア思っていたな」

——いっそ踏み込んでお吟さんを助けよう——
——と思ったが、言葉の工合では何だか知り合っている間柄らしいので、ちよッと思いつき、こっそりと障子に、指先を唾で濡らして穴を開けて、相手の男を確かめた。

——これや不可ない、木場の三五郎の奴だ。あいつは武家くずれで腕が立つから、自分が逆に非道い目に遭うばかりだ——

清吉は三五郎の素性を知っていたので、下手な手出しは危険と悟ったが、お吟の事が気

にかかって暫らく其処を立ち去れなかった。

「豪勢に道具立てが揃っているぜ。さア、どれから始めてやろうかな。」

三五郎は又もや、猿ぐつわを咬ませたお吟を引摺るようにして、柱を利用した礫台の前に立たせた。そして足を揃えて縛って、後手の縄を一たん解いた。その縄を引いて両手を十文字に拡げて環に繋いだ。

「ヘッヘッヘ。好い恰好だな。小塚ヶ原の高橋お伝にそっくりだな。槍のかわりにこの六尺棒を使うか」

三五郎は、恐怖に全身を震わせているお吟を小気味よげに見ながら、長い六尺棒を取り上げて二三度しごいた。

障子の穴から覗いていた清吉は、思わず呼吸を呑んだ。お吟のむっちりとした白い胸に喰い入るように、何度も棒が突き立てられた。髪の毛を振り乱して悶える、凄惨なお吟の表情は、正視できない程無惨な姿であった。

「ははは、これや面白い恰好をした木馬だ。今度はこれに乗せてやろう」

否も応もない。三五郎はお吟を礫台から外すと木馬の方へ引摺って行った。清吉の覗いている障子の穴からはその木馬の位置は見えなかったが、暫らく揉み合う音が聞えていた。

「そら、足を開かんか。こいつ強情だな」という三五郎の声につれて

「うーッ」

というお吟の何ともいえない呻き声が、猿ぐつわを透して洩れた。

——可哀そうに。三五郎の奴ひどい事をしやる——

二人の姿は見えなかったが、三角木馬の上でお吟の狂乱する姿が、清吉には眼に見えるようであった。

ピシッ、ピシッ、と何かで肌を打つ音。うッ、うおッと呻く声。それはさながら地獄から響いてくるように清吉には聞えた。

——苦しいんだろうなお吟さん。だが、お志乃もあなたにそうして責められたんだ。三五郎が私に代って、あなたに復讐をしているのかも知れない——

清吉は両手で耳を塞ぐようにして、そっと窓際を離れた。

「清さん、遅かったのね。あたし一人で心細かったわ。でもこんなに遅いんでしょう。あたしをほっぽらかして、もう来て呉れないのか知らと心配したわ」

「八重さん、心配をかけましたね」

「で最後のご用というの、もうすっかりお済みになりました？」

「ええ」

といったが、お吟は今頃どんなになっているだろうかと気にかかった。

「あたし無断で出て来てしまったでしょう。」

お母さんが心配して探していらっしゃるだろうと思って、それも心配なの」

「お母様のことは大丈夫ですよ。明日の朝は、私と八重さんの事を詳しく書いた手紙がお母様の処へ届くように手配をしておきましたから」

「あら、そうでしたの。だったらそう心配しなくツても良かったのね」

「ええ、それより明日の朝の出発が早いんだから、もう寝ましよう」

「ええ、そうしますわ」

「なアンだ、八重さん。こりや蒲団が一流れしきや敷いてないんですね」

「ええ、だって仕方がないわ」

「弱ったねえ、どうも」

清吉はそう云うと思わず頭を掻いた。

「清さん、ちよいと」

二枚折の砂子の屏風の蔭で八重が呼んだ。

「なに？」

と云って行くと、長襦袢姿の八重が向うむきに立って両手を後に廻している。その手に一本の紅い腰紐を握っていた。

「これをどうするの？」

「この手が離れないように、この紐でね、わかって？ 今夜はこうして寝かせてね。」

「この手を縛るの？」

「しーッ、声が大いいわよ。ね、早くして、

でない……」

「でない？」

八重は顔を清吉の方へ振り向けて艶然と微笑んだ。清吉もそれに応えてにっこりと笑いながら、後ろへ廻した八重の両手をしっかりと握った。

夜が更けて、夜廻りの拍子木の音が、遠くの方から聞えて来た。

緊縛写真〔G組〕

大中判(13×18センチ) 印画紙焼付

各組
1枚1組

一枚一組	一五〇円
五枚五組	六〇〇円
十枚十組	一〇〇〇円

G 1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G 2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G 3	海老晒し	(萩 千恵子)
G 4	羞紅の椅子	(菅 登紀子)
G 5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G 6	アイデア	(萩 千恵子)
G 7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G 8	全裸の目隠し	(村田那美子)
G 9	優すがた	(花坂 道子)
G 10	開股一番	(萩 千恵子)



切腹研究夜話 (七)

昭和の女白虎隊

中 康 弘 通

昭和二十九年の夏、筆者は休載の辞を草し、而もそれすら筐底に遺して病褥に伏さねばならなかった。今それを取り出してみると無為に過した才月の長さに、思い新たなものがある。ここに全文を写してみよう。

休載の辞

思うに切腹は日本人特有の風習であり、いわば日本武士道の象徴であった。してみれば是が史話、実録の散佚を防ぐのは、日本人の義務ではあるまいか。

私事にわたり恐縮ながら、幼いころ真淵、宜長、両大人の会を伝えた「松阪の一夜」という小学読本の一章に深い感銘を受

け、夙に国史国文の古典に心を潜めたのであった。

不幸にして健康に恵まれなかったため、遂に国史国文に志を得ず、わずかに本誌箕田編集長の好意により、古典愛好の一成果として、貧しい研究の一端を読者諸兄姉に供することを得た次第である。

たまたま春來、著るしく健康を害し、いよいよ読書をも廃すべき法態に立ち至り「吉野の華」「江戸時代の殉死」「赤穂義士と義士劇」「国士列伝」など順次、資料の蒐集に努めた甲斐もなく、執筆を中絶するの止むなきに至ったのである。

もとより拙稿は創意創見に何ら見るべき

ものなく、ただ、切腹の歴史と、その文芸への影響に就いての資料を一部蒐録しつつ、あったに過ぎないが、本稿を参考として、直接古典に親しみ、再検討される向きがあるとすれば、望外の喜びに外ならない。わが邦の古典が汎く読まれぬこと今日の如き時代は、嘗てその類を見なかったからである。

永年の御愛読に深謝し、以て休載の辞と致したい。
(29・8・15)

二十七年三月以来の読者各位の御支援を回想しつゝ、病床で右の一文を草してから、早や四年余の歳月を経過した。顧りみれば、筆者

は学問も才能もないので、ものを書くがらでもないのだが、終戦後、日本の古いものは何でも打ちこわしてしまおうという風潮に飽たらず、切腹の史実を後世に伝えたいと思い初めた。武士道を最も単的に象徴するのは「切腹」と「仇討」ではあるまいか。その内で仇討に就いては平出鏑二郎とか千葉亀雄とかいう偉い方々が立派な本を遺して居られるが、切腹に就いては和田克徳氏のものを除いては殆んどまとまったものを見ない。そこで病身に鞭打って史料を漁り出したのが、もう十年余の昔になる。ところが、なかなか有る様で無く、無い様で有るのが、こうした史料の常であろうか。系統立った学問のない悲しさ、未だに暗中模索を繰返しているのは情ないことである。

病中、新書ブームに際会して、二、三の出版社から拙稿の出版の話もあったが、何分にも特殊なテーマ故、読者層の確認が困難だという理由から、何れも立消えとなった。今秋あたり、壬生三郎氏の「切腹七部集」が出版される様子であるが、斯学のため甚だ有益であることを確信してやまない。壬生三郎氏は筆者が先年、御記述を諸誌で拝見し、懐かしく存じ上げていたながら、御連絡の術もなく、残念に思っていたところ、今春、本誌を通じて御連絡があり、年来の念願を達した喜びを味わった。そのほか、直接間接に資料を提供

して下さったり、お見舞状を頂いた方々は少くない。偏に本誌のお蔭であった。

さて、筆者の病中、或いは華々しい、或いは悼ましい戦記の数々が出版され、ブームをさえ謳われた。然し、未だ未だ埋もれた事実は少くないし、その大部分は永久に埋もれるかも知れない。こゝに、本誌の休刊前の号に諸家が発表されたものを主体として、筆者の手もとに寄せられた資料を加え、終戦前後の日本女性の、悲愴な殉国記録を再録してみた。

社稷亡びぬわがこと畢る

十有九人屠腹して倒る

とは白虎隊の壮烈な最期を伝える詩の一節であるが、蓋し、社稷亡びぬ、とは当時まことの日本人なれば誰しも胸底に覚えた感慨であつたにしても、わがこと畢る、と痛哭して屠腹した少女たちは、正に昭和の女白虎隊と呼んでも差支えあるまい。

A子(二十歳)は、軍属として内地に勤務していたが、終戦を知るや白刃を決意した。覚悟の刻を迎えた彼女は、前以て祖母に教わった通り、懐剣で臍の真下を深々と掻切り見事な最期を遂げた。

B子(十九歳)は外地で部隊の事務を執っていたが、復員が軍人に限られ、軍属は残留

と知るや、古式通り切腹したい、と介錯を下士官に依頼した。その作法は、恰も本誌が嘗て口絵に描いた「切腹曼陀羅図絵」の女性の如く、背後からわが腹を一文字に掻切りしめ、自らは端座して姿勢を崩さなかった。

C子も外地で軍の事務員であつたが、部隊の所在地が戦地地域化したため、服毒自決をすゝめられた。然し彼女は肯ぜず、自決するなら切腹したい、と自ら作法通り七首に白紙を巻き、合図してから介錯されたい、と古武士さながらの屠腹を遂げた。

叙上の如き女性の気魄の壮烈さは想像も及ばぬが、何れも軍関係であつたため、切腹したのち介錯を受けることも出来たのであつたが、一般の女性には補助者のない場合が多く、従つて他の手を借りなかった、という者も少くない。

終戦前後の外地に於ては、民間婦女子すら一身の安全を期しがたい状況に在つたから、戦斗が波及すると同時に、または波及するのを察知して事前に潔く自決した者は可成りの数に上る者の如くであつて、殊に農村出身者、たとえば在満開拓団の婦女子や、在鮮農業訓練生の女子青年などは、或いは屠腹し、或いは自刎し、或いは刺違えて壮烈な死を遂げた者、少からずと仄聞する。

その全貌の伝わらないのは甚だ遺憾であるが、まず戦斗中乃至は危急の際の自決に就い

て、本誌の旧号から拾ってみよう。

D子(推定二十歳)は某地で連合軍の陸に遭遇し、砲弾落下する中で最期を飾るべく、刃を腹に突立てた瞬間、至近弾の爆風で氣絶し却って生命を取止めた。然し彼女と行を共にした三名の婦女子は一瞬早く屠腹を遂げていたという。またD子の伝える所では、当時砲撃により破壊された家屋内で、うら若い娘が着衣を着ける暇もなく、出刃を濡れ手拭で巻いて切腹していたともいう。惟うに着衣を着ける暇もないとは、女性にとって最大の危急である。加うるに手もとには、刃厚く、柄短かく割腹に極めて困難な出刃しかない。然し沈着にも濡れ手拭で血滑りを防ぎつゝ、切腹を遂げた氣魄に至っては、到底うら若い娘の爲し能うところと想像もつかず、全く嗟歎する他はないのである。

E子(推定二十歳) F子(推定十五歳)の姉妹は、暴徒に襲われ抵抗も空しいと悟るや、合図を交したのち氣合もろとも立腹を切った。G子(推定二十歳)もまた暴徒に囲まれたつゝ立腹を切つて世を畢えている。

僅か十八歳のH子に至っては、彼女を拉致した暴徒の強要により、貸し与えられた軍刀を以て深々と腹掻切り、自ら押し出した腸を掴みつゝ暴徒を睨み付けて果てたという。戦国の武士は兎も角、式法の整った江戸時代以後、腸を掴み出すのは遺恨腹といわれたので

あるが、此の少女の無念さ如何ばかりであったかと、その胸中を察しないではいけない。

I子(二十歳) T子(十八歳)の姉妹も亦戦士の波及に先立ち、農婦らしく姉は鎌、妹は出刃を握りしめ、声を合わせて腹十文字に掻切った。

K子(十九歳)は平素から、日本が敗けたら生きていないと口にしていたが、連合軍の進撃を耳にするや、退避の準備に忙殺される人々を尻目に、用意の脇差で深く立腹を切っている。

以上は外地であるが、内地でもL子(十九歳)は、家族を広島で失い、探しあぐねた末、所持の日本剃刀で腹一文字に掻切り、同じく家族を探していて知り合った娘に見送られて世を畢えた。

こうした危急の際の切腹は、先に記した軍属の女性の如き、整然たる作法を履むことは当然困難であり、平素の覚悟のほども俛ばれて、日本女性の勇烈を痛感させられる。

一身の危難を受ける筈もない内地の一般女性でも、戦争に敗けて生きていたくないと切腹して果てた少女は、M子(十七歳) N子(十七歳) O子(十七歳) など、決して少くない。中でもO子やP子(二十歳)などは、疏開者なるが故に村人に白眼視され、思いつめて割腹したもので、最も哀れ深い。

以上は余りにも簡略に過ぎて感銘を充分に伝え得なかったとも思えるが、概ねは既に本誌旧号に詳しいもの故、何れ、筆者の手もとに寄せられ、未だ詳述の機を得ない事例に就ては、折を見て稿を改めたい。

斯く再執筆の始めに当り旧号の記事を再録するに近い記述を行った一つの理由は、今日の所謂、太陽娘と呼ばれる人々に、斯うした日本女性の壮烈な志の進るところを汲み取って頂きたい氣持もあった。

とまれ、数多い殉国女性の事蹟が、極く僅かしか伝わらなかったことは遺憾に堪えないが、せめて、知られた事例だけでも永く語り伝えられることが出来れば、筆者の悦びとするところである。

(附記)

香川県の木谷秀峰様、お所を記したものを失いお連絡出来ませんが、若し此の文をお読み下さいましたらお連絡下さい。

告 急

『サディズム特集号』売切
33年7月20日発行の『サディズム特集号』は引続き御注文を頂いておりますが、11月を以て売切れとなりました。只今、『悦唐小説と緊縛写真特集号』(定価三百円)を発売いたしております。尚『サディズム特集号』(第二集)は二月中旬発売の予定です。



|| 創作 ||

妖婦の生贄

東 町 三 郎

(一)

かおる夫人は片手を化粧台に置き、小間使のお園にマニキュアをさせながら、もう一方の手でシガレット・ホルダーを持ち、煙草を吸いながら、自分の前に立たされている犠牲者にいった。

「学校をやめる決心はついたのかい！」

ナイト・ガウンを肩から掛け、湯上りの桃色に輝く豊満な体は、ピチピチと張り切っていた。それに比べ、彼女の生贄であるこの家の一人娘の葉子は、蒼白い肌を震わせて悲しそうに立っているのだ。

「御返事は、どうしたのですか？」

継母のかおる夫人は、冷たくいった。

「お母さま。私、学校に行かせて下さいまし」

細い声で葉子は哀願した。葉子は高校二年生なのだ。彼女は学校の成績もよく、クラス、いや、学校中で一番美しい生徒だ。学問好



きで、大学にも行ける頭を持っている彼女を、継母がやめさせ様というのだ。これは、もう何カ月も前からの事だった。今日も、その事で夕方から折檻が続いていた。

「お前がパパに、自分が学校がいやになったから止めるというまで私は許しませんからね」

かおる夫人は、ジロリと犠牲者の蒼白い体を睨んだ。葉子は乳房を押さえ、恥しさに震えているのだ。そのポーズは、自然にヴィーナスの立像に似ていた。彼女の泣き腫した目は、どんよりとしていたが、少しも、この乙女の美しさを傷つけてはいないのだ。肩まで垂れたお下げの黒髪、哀愁を浮べているが面長な顔、細っそりとし

た肩から胸の線、乙女の若々しい乳房。胸は驚く程に細く、スナナリと形よく伸びた脚体。この娘の美しさは、継母のかおる夫人と全く正反対の美しさであった。

「お園。もう、マニキュアはいいから、この子に、もう一度、浣腸をしておやり！」

かおる夫人は、小間使に命じた。お園は、醜い顔にニヤリと冷たい笑いを浮べて、葉子の方を見た。

「お嬢さん。さあ、こちらの台にいらして下さい！」

お園には、この哀れな娘に対して、一片の同情心もないのだ。お園にとっては、この娘の美しさが、心から憎くかった。お園は、葉子より五ツばかり年が上で、姉の様なものであるが、醜い顔の彼女は、心も醜くゆがんでいた。

「今夜、パパが帰って来たら、お前の口から、ハッキリと学校をやめたいというまで、母さんは折檻をしますからね」

かおる夫人は、母さんという渾身の年ではなかった。まだ、三十歳になったばかりのかおる夫人が、門山犬吉の後妻として、この家に乗り込んで来たのは、葉子が中学一年生の時であった。美しさにかけては自信の強いかおる夫人は、自分より美しいものを憎んだ。醜いお園が、美しいものを憎む心情と何か似ていた。その点、二人は共通したものを持っているのだ。二人は、心を合わせて葉子を虐待して来た。尤も、お園を、かおる夫人が雇ったのは昨年の事だったが、かおる夫人は完全に、この家の支配者になるために、氣に入らない使用人は鹹にして、今では運転手の有島から台所で働く女中の一人まで、すべて自分の思い通りの人間ばかりにしたのだ。

「お園さん、カンニンして……」

と葉子が、どんなに泣き叫ぼうが、この広い家の中からは、誰一人助けに来るものはないのだ。

葉子は、部屋の隅にある台に手足を縛りつけられている。この台

は細長いテーブルで、好んで葉子の折檻に使われる道具の一つであった。丈夫な木で出来、太い脚には金具がついていた。これに細引が通してあり、簡単に犠牲者の手足を縛る事が出来た。こんな道具が、どうしても、かおる夫人の部屋にあるのかは後で説明する事にして、今は細い瘦せた蒼白い体を縛りつけられた葉子を見てみよう。彼女のふっくらと盛り上った乳房は、台の板に押され、ゆがんで見えた。肋の骨が見える程に、葉子の体は長々と台の上でうつ向きに伸びている。髪は台から出て垂れ下っていた。

お園は、浣腸の道具を持って来た。浣腸といっても、それは普通のものではなく、腸洗滌に使うものであった。

ベッドの上に横になって、かおる夫人は、ボンボン・チョコレートを可愛らしい唇に喰え、お園の行動を見ていた。お園は、乱暴な手つきで浣腸を始めた。

浣腸は済んだ。だが葉子の苦しみは、これからであった。

「アッ、お母さま……ア……ウッ……」

苦しように叫んだが、可哀そうな葉子の手足は、台に固く縛られていて、やっと頭を上げるのが精一杯なのだ。葉子は、涙の目で、お園の姿を見た。

「アレー……もう、我慢出来ません。許して……お願いです。アッ……」

どんなに葉子が哀願しても、二人は笑いながら見ているだけであった。もう何としても、生理的な要求を押える事は、葉子には出来なかった。

その夜、門山犬吉が帰えって来たのは、十二時近くであった。デップリと肥った彼は、かなり酔って真赤な顔で、かおる夫人の部屋に入ってきた。

かおる夫人は、笑顔で夫を迎えた。

「今夜は、全く、どうしても抜けられぬ宴会でなあ。本当に済まんよ」

犬吉は妻の手を取って、軽く接吻をした。

「さあ早く、お洋服をお替えになったら。もう、遅いんですよ」夫人は、ベッドの中でいった。

「うん、お前、眠いのかい？」

犬吉は丸々とした顔に、何かを求める様な笑いを浮べていった。

「え、でも、一眠りしましたわ。余り、お帰えりが遅いのでしよう」

「お願いだ。かおる」

犬吉はテレたようにいうと、かおる夫人の前にひざまずき、毛布の隅から出ている夫人の可愛らしい足の小指に接吻をした。数多くの会社の社長をして、何百人もの使用人からは、鬼の犬吉とか腕の門山とかいわれる彼も、全く夫人に頭が上らない存在だった。先妻に早く死なれ、葉子と二人で暮らしていた彼が、ふと知り合った、かおるの美しさに、一度で身も心も奪われてしまう程の惚れ方で妻を迎えたのだ。二十も違う若い妻を迎えた彼は、妻のいう事なら何でも聞いた。特に犬吉にとっては、かおる夫人の持つ魅力の前には、娘も家も社会もなかった。以前から、彼が秘かに持っていたマソヒズの気持を満足させて呉れる女は、かおる夫人以外にないのを知ってしまったのだ。

「お願いだ。眠いだろうが、少しの間でいい、鞭で打って呉れ。頼む！」

「いやよ。くすぐったいじゃないの。足をなめたりして！」

かおる夫人は、足で、どんと犬吉の額を蹴った。

「仕方のない人ね。私、眠いのよ」

かおる夫人はしぶしぶした態度で起き上って、ナイトガウンを着直した。

犬吉は、手早く服を脱ぐと、あの台の前に来た。まさか三時間前に娘の葉子が、この台の上で血の涙を流したとは、彼も知らないのだった。

彼は、その台にうつ伏せになった。

かおる夫人は、壁にかけてある鞭を持って、仁王立ちになった。豊満な彼女の体は、美しさと若さにあふれていて、何ともいえない程の魅力だった。

「今夜は、十回よ。それ以上は、いやよ！」

かおる夫人の手に持った鞭が、犬吉の脂肪がブヨブヨとついた背中に鳴った。

「ウッ………」

喜びの呻きが、犬吉の唇から洩れた。かおる夫人の美しい顔には限らない軽蔑の微笑が浮んでいた。彼女にとっては、鞭打ちは興味の無い事だが、単に義務として鞭を振っているに過ぎないのだ。彼女は犬吉のブクブクと肥った肉体には、一度だって興味を感じた事はない。彼女の興味というか、この男に対して魅力は、贅沢の出来る資産にあるだけなのだ。

「もう、いいじゃないの。今夜は、眠いからこれでおしまい」

十回の鞭打ちが終ると、サッサと、かおる夫人は、ベッドに飛び込んでしまったのだ。

(二)

翌朝、娘の葉子は父親の前で、学校をやめる事をいい出した。

「やめるなら、やめてもいいさ。だが、勉強好きなお前としては珍しいなあ」

犬吉は、さすがに不思議に思ったのか、色白の娘の顔を見た。死んだ母親に似て、長い睫毛をした淋しそうなんだと心では思った。「学校へ行くより、家で花嫁修業をさせた方が、ずっといいのよ。」

ヴァイオリンだって、本格的に家庭教師をつけて習わせたらいいわよ」

トーストにバターをつけながら、かおる夫人は、二人を睨む様にしていった。

「ママが、そう考えるなら、その方がいい」

犬吉は、そういった切りで、株式欄に目をやって、再び顔も上げなかった。葉子は、涙を押さえるのに懸命だった。若し、この席で涙でも見せ様ものなら、パパが出掛けた後、早速、折檻される事も解っていたからだ。音もなく席を立つと、葉子は自分の部屋に泣きに行った。

(もう、先生やお友達にも会えないのだ。自分が突然、学校をやめたら皆、不思議に思うだろう。担任の松田先生も心配して、訪ねて来るだろうし、お友達も何人か来るだろうが、もう自分は誰とも会えない。会ったって仕方がないのだ。今朝、パパにあの様にいったら、必ずパパが反対すると思ったのに……) 葉子は机に向って、ワッと泣き伏した。尼僧でも着る様な黒っぽいスカートのついた、袖の長い服を着せられている葉子は、細い肩を震わせて泣いた。

葉子にとっては、学校をやめる事は淋しい事だが、やめた後が怖ろしいのだ。今までは随分、つらい事があっても、学校に行ってる間は慰められた。お弁当を持たされない日もあった。修学旅行の前になって、下剤や浣腸をかけられて、フラフラになって行った事もあった。それでも学友と会い、先生とお話をしている間だけでも、家の事も怖ろしい継母の事も忘れる事が出来たのだ。それが学校をやめるとなると、二十四時間、継母やお園と一緒にいる事になるのだ。先刻の話では、ヴァイオリンも習いには行けないのだ。音楽の先生を家に呼ぶといっていた。あの怖いママの前でヴァイオリンを弾く事になるのだ。音楽が好きで、学校で一番の技術を持っていた葉子ではあるが、もうヴァイオリンを習いたいとは思わなかった。

「お嬢さん。ママが呼びですよ」

お園が、意地の悪い笑いを浮べて呼びに来た。

葉子は、泣き顔を手でなおして降りて行ったのだ。

庭では、短いズボンに真赤なブラウスを着た、かおる夫人が女中の一人のお君に指図して、庭の手入をやっていた。パパは、もう出勤してしまっていた。

「お母さま、何か……」

「用があるから呼んだのですよ。お前、お君と一緒に庭の手入をして頂戴。学校へ行かないんだから、閑でしようからね」

かおる夫人は、鋭くいった。葉子はサンダルをはいて、手伝いを始め様とした。

「何んですか、そんな姿で庭仕事が出来ますか。作業着を着ていらしやい」

葉子が、デニムの作業着を着て出て来ると、お君は待っていた様に、

「お嬢さま。大きなバケツに水を汲んで来て下さいまし」

と命じた。言葉は「お嬢さま」でも、声の調子は同僚以下の者にいう様な乱暴なものだった。

葉子は昨夜、連続的に陽洗滌と鞭打ちの折檻を受けた後だった。

朝も、トースト一枚にコーヒー一杯しか食べていないのだ。二つの大きなバケツに水を汲み、運ぶのだけでも容易な仕事ではないのに、お君と二人で土運びもしなければならなかった。お君は田舎出のガツチリとした体をした女で、しかも力があつた。

庭の手入れは、午後までかゝった。汗と泥でまみれて働く葉子の姿を、かおる夫人は面白そうに眺めているのだ。大体、仕事が終わると、お君には「もうよい」といって、葉子だけ働らかした。

「さあ、やっと出来上ったね。葉子。夕方からママと一緒に銀座に行くからお仕度をなさい！」

かおる夫人は、珍らしく優しい調子でいった。

「ハイ」と泥だらけの手を洗いながら葉子はママの顔を見上げた。

「仕度ば、お園がしてくれるからね。私は、もう着替えるだけですから早くするんだよ」

そういって、かおる夫人は家の中に入った。

葉子は大急ぎで、自分の部屋に飛んで行った。銀座などに行く事は珍らしい事だ。葉子も若い娘なのだ。賑かな町に出られる事は、この上もなく楽しかった。

自分の部屋に入ろうとすると、もう、お園が室内で待っていた。彼女も一緒に行くらしく盛装していた。醜い、ブツブツとニキビの出た顔に化粧をするので、逆効果で気味が悪く見えた。

「さあ、お嬢さま。早く、お仕度するんですよ。これをつけて！」

お園の手に持つ鉄製のコルセットを見て、葉子はギョツとした。

「これつけて行くの？」

「勿論ですよ。お母さまの御命令です。洋服もこれを着るのです。」葉子は学生らしく、白のブラウスにジャンパー・スカートで行きたかったが、用意された服は、踊り子でも着る様な服だった。

固いコルセットで胴を締め、踊り子の様なスカートの広った、胸もあらわな服をつけ、薄化粧をすると葉子は、やはり、とても美しくなった。お下げの髪も、お園が手早く結び直した。

三人が玄関に出ると、女中達も運転手の有島も、目を見隠る程に美しかった。

銀座やデパートを歩き廻った末、三人は立派なレストランに入った。

「さあ、葉子。今夜は何でも、あんたの好きなものを食べるといいわ。ビフテキにしましょうか」

かおる夫人は、葉子の大好きなビフテキを注文した。しかも、とても分厚なのをボーイに命じた。

葉子は、顔ではニコニコと笑っていたが、心では泣いていた。何故なら、あのコルセットで締められている彼女の腹部には、ビフテキどころか、ヤサイ・サラダも入らないのだ。先刻の喫茶店で、冷たい紅茶を一杯飲んだのが精一杯なのだ。しかも、このレストランでも、かおる夫人はビールを注文して、葉子にも飲めというのだ。飲まねば、家に帰えて叱られる事は解っていた。苦い飲みたくもないビールにも唇をつけた。未成年者の自分に、ビールを飲ませ様とするなんて随分だ、と葉子は心の中で思った。

美味しそうなビフテキの皿が来た。葉子は殆んど空腹に近いのだが、とても、こうした量の多いものは食べられないのだ。一切れ、二切れと食べただけで、コルセットで押さえた胸や腹には、何ともいえない苦しさであった。

「どうしたの。不味いの？」

意地悪く、かおる夫人は聞くのだ。

「いいえ、お母さま……………」

「じゃあ、どんどん食べたらどうなの。あんたはビフテキが大好きでしょう。」

「ええ……………」

葉子は、そっと涙をハンカチーフで押さえた。

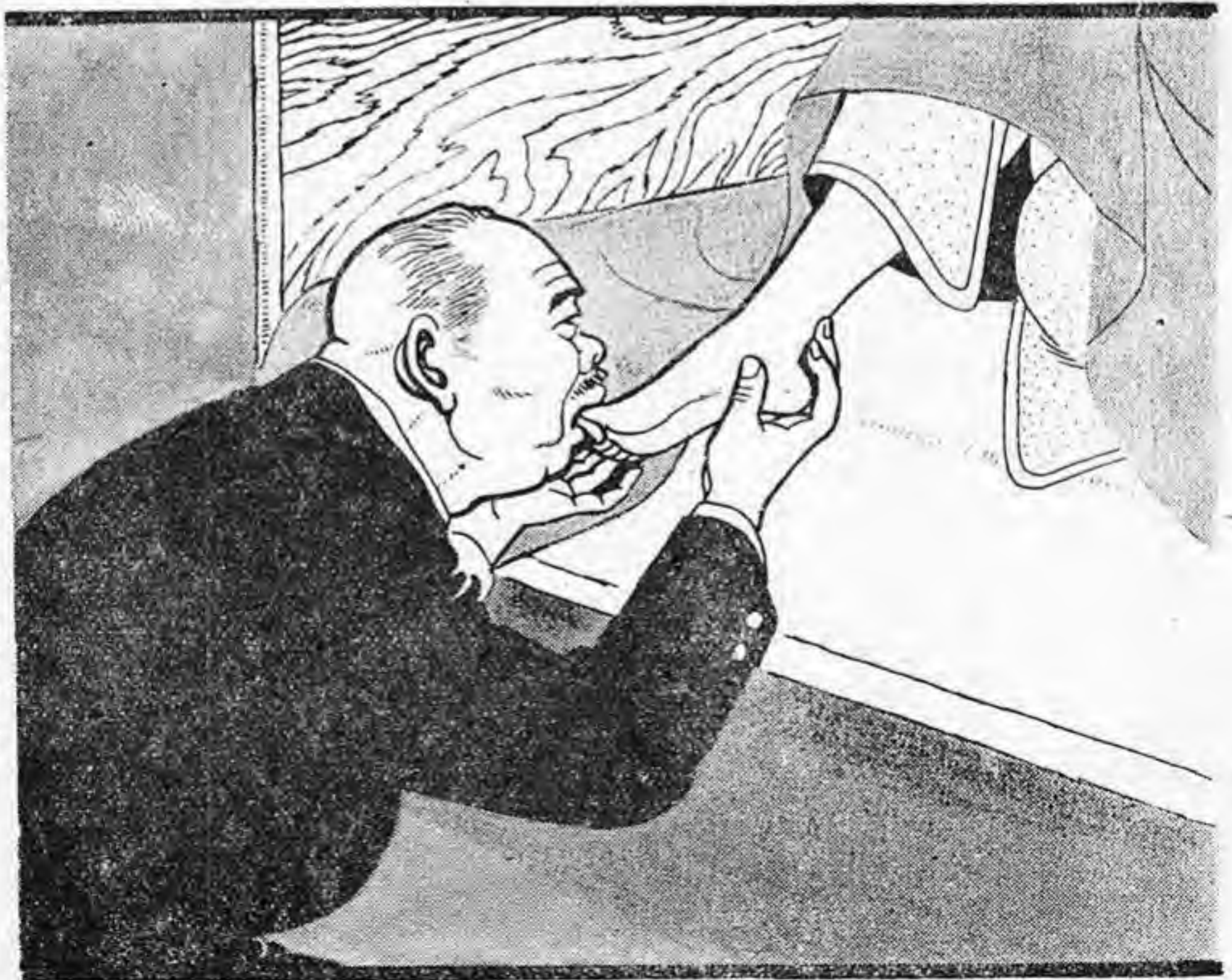
「残すのは、みっともないから食べて頂戴。ママがお願いするわよ。葉子！それとも、他のものを取りましようか。」

「いいえ、結構よ。お母さま。私……………食べますわ」

「オホホホ……………何て顔をするの。向の席の人が笑ってるわよ。ねえ、お園」

かおる夫人は上機嫌で、お園を相手にベチャベチャと買物の事等を喋った。

実際、この店のお客達もボーイ達も、美しいかおる夫人と令嬢葉子の存在から、目が離せない程に興味を持っていた。ボーイの一人



等は、カウンターの女に、こんな事を囁いていた。

「ねえ、何時見ても門山夫人は美しい。それに、あのお嬢さんの上

品な美しさは、どうだね。もつとも服装は一寸どうかと思うがね。あれでは、あの娘さんの美しさに合わないけどさ、親子とは思えないね。姉妹だよ。あれで親子なんだっていうから……」

かおる夫人は、実に堂々たる態度をしていた。彼女の体のあらゆる美しさを人々に示す様な服装と化粧を心得ていた。彼女が御機嫌なのは、こうした衆人の前で、葉子をいじめる事が出来る事だった。そして、怖ろしい程に高いハイヒールをはかせて連れて来たのだ。こうした小道具の一つ一つにも、かおる夫人は心を配っていた。こんなに高いハイヒールでは、葉子は歩きたびに最大の注意を払わねばならなかった。それでも二度程、デパートの中で滑りそうになったのだ。

かおる夫人は、レストランを出てからもあちらこちらと歩き廻るのだった。それは、葉子にとっては苦業の一つといえた。

かおる夫人は昔、自分がいたというバーに入っていた。そして、このマダムと夢中で話込んでしまったのだ。

「さあ、お嬢さま。もっと、ビールはいかが」

ニコニコと笑って、肥ったマダムがすすめるのを、葉子は断われなかった。

「葉子、どんどんお飲みなさい。貴女は、お酒が好きじゃないの」ハイボールで、ややポツと赤くなったかおる夫人は、わざとこんな事をいうのだ。

「もう二十分もすると、有島が車を持って迎えに来るから、酔ばらたって平気よ」

向うの方で別の客の相手をしてる女給達も、こちらを見ている。

葉子は、オロオロしているだけであった。

やっと車が迎えに来て、葉子はホッとした。何時も大嫌いな有島の姿が、この時は、葉子には天使の様にさえ見えた。だが、この日の葉子の苦業は、これで終ってはいないのだった。

(三)

自動車に乗ると同時に、かおる夫人は、ガラッと態度を変え、もう、その美しい顔には、一片の微笑みもなかった。

「葉子。お前は、お母さんに恥をかかしたね。お前には、お母さんの親切が解らないと見える。葉子、返事は！」

かおる夫人の長い爪にマニキュアをした指が、隣にかけている葉子の太腿をギュッと捻った。

「私の御馳走では、気に入らなかったかい？」

かおる夫人の指に力が入った。

「そんな……そんな事ありませんわ。お母さま……」

葉子は、悲しそうに夫人を見た。

「コ、コルセットが固くて……」

「私はね。コルセットの事を聞いてるのじゃないんだよ。あの御馳走では気に入らないのかっていうのさ。」

「と、とっても、おいしうございましたわ」

「ビールは好きなんだね」

「ええ、大好きです。」

「本当だね」

「ハイ……」

「そう。コルセットさえなければ、もっと飲めたのだね」

かおる夫人は、捻っている指を離した。家に帰ると、着替えが済んだら直ぐに寝室の方に来る様に、夫人は葉子に命じた。葉子は、普段のあの黒い尼僧の様な服装になると、かおる夫人の寝室に行った。

「お母さま、何の御用でしょうか」

怖る怖る葉子は訊ねた。かおる夫人は、もう着替えていた。傍にお園が立っていた。

「葉子！ さあ、ママがお前にビールを御馳走するから、ウンとお飲み」

そういつて、テーブルの上にある何本ものビール瓶を指差した。大きなコップについだビールが、次々と葉子の唇に迫って来た。勿論、一、二杯は普通に飲んだが、飲みなれぬ酒であり、葉子には母親がすすめる様には早く飲めなかった。

かおる夫人は自分でも飲んではいたが、それは普通の飲み方であった。

「お母さま。もう、飲めませんわ」

葉子は、何杯目かのコップになみなみとつがれたビールを見て、悲鳴を上げた。

「いいから、お飲み。お飲みというのだよ。」

かおる夫人は、無理に葉子に飲ませ様とした。ビールは、半分以上も葉子の口からこぼれ、服を濡らした。

「お前は、素直に飲まないつもりかい」

かおる夫人の、美しい眉がキリキリと上った。

「でも、お母さま。本当に飲めませんわ」

葉子は哀願した。

「そうかい。お母さんがすすめるものは飲めないのかい」

かおる夫人は、ベルを押した。お園が入って来た。

「この人を、お風呂に連れて行って、裸にしてお呉れ。どれ程、おなかが大きくなったか見てやるんだから。ビールの一本や二本が飲めない筈はないのだから……」

お園は、葉子を引きずる様にして風呂場に連れていくと、裸にして夫人の来るのを待った。

かおる夫人は、ドレスを脱ぎ、パンティとブラジヤのままの姿で細引を持って現われた。

そしてかおる夫人は、葉子をアッという間に突き倒し、その細い

腕を後手に縛り上げた。

「お前、どうしても、ママのいう事が素直に実行出来ないんだね、それならそれで、私にも覚悟があるんだよ」

「アレー、お母さま。許して……」

葉子が泣き叫ぶのもきかず、手足を縛り、タイルの上をズルズルと引いて、水道の蛇口まで連れて来た。そして葉子の顔を蛇口の真下に置くと、両手で肩を押さえ水を出した。水が勢よく、葉子の口といわず鼻、目に流れ込んで来た。

「アッ……アッ……お母……さま……アッ……アッ……ウッ……」

葉子は息も出来ずに、足をバタバタと動かして苦しみ出した。

「お園。お前、この肩の所を押えてお呉れ」

かおる夫人は、ズロース一枚になったお園に代って貰い、自分は足の方を押さえた。

かくて十数分後には、葉子は臨月の様に腹がふくれて、タイルの上にのびていた。

可哀そうな葉子は、ゼーゼーと苦しそうに息をしていた。

「オホホ……飲めば、こんなに飲める癖に。どれ、少し吐かせてやるかね」

そういつて、お園に手伝わせて、グツタリとしてる葉子の細い体を持ち上げ、腰と腹部に台を入れた。葉子の乱れた髪は垂れ、頭の方が下った。

「お園、この子の胃を押してやってお呉れ」

お園は、いわれるままに、葉子の体に跨って、そのふくれた腹部を両手で押した。

「ゲーッ……ウア……ウー」

と葉子は、この世のものと思えない叫びと共に、口から黄色の水を吐いた。

「どうだい、葉子。ママの命令通りに、ビールを飲んだ方がよかつ

たろう」

「……………」

「返事はどうしたのさ。解ったのかい。解らないのかい！ これからは何事も、ママの命令通りにしていれば、こんな苦しい目に会わなくて済むんだよ。解ったかね！」

「……………」

「解らないのなら、もう一遍、水を飲ませるよ！」

葉子は、蒼白い顔を僅にコックリさせた。

「オホホホ。手数のかかる人だね。お園や。この人を私の部屋に連れて行って休ませてお呉れね。一人で歩けないかも知れないから………」

そういうと、かおる夫人はサッサと風呂を出て行った。彼女は、やっと胸のモヤモヤがおさまったのだ。一日に一回は、この娘をギョツという目にあわせないと彼女は、氣持がスツとしないのだ。

自分の部屋に戻ると、今日の買物を出し始めた。この中には、葉子を縛る鎖や犬の首輪がある。かおる夫人は徹底的に、葉子を家畜として育ててみようと考えているのだ。

明日から二カ月も、夫の犬吉が外国に旅行をするのだ。この間に完全に葉子を訓練せねばならないのだ。かおる夫人は胸を踊らせて夢中で企画をたてた。この間には、運転手の有島とも、公然と恋が語れるのだ。

かおる夫人は、こんな楽しい事はないと思った。

太い鎖、細い鎖、巾の広い革バンド、犬の輪いろいろのものがあつた。かおる夫人は、こうした品を並べて、ビールを飲みながら空想を走らせた。彼女の空想は、明日から実際に行えるのだ。夫の帰る時刻になるといそいで、道具をかたづけて、化粧を急入りにした。

夫の旅行の仕度は、もう出来ているのだ。今夜、一晚、あのいや

らしい老人につきあってやれば、当分はいいのだ。

お園が入って来た。

「奥さま。まだ、お嬢さんは苦しがつていらしゃいます」

「そう。部屋に連れて行ったのね」

「ハイ」

「逃げない様に、足は縛ってあるだろう？」

「ハイ」

「御苦労さま。お前も疲れたろう。だけど今夜は、葉子の部屋に寝てお呉れね」

「承知致しました」

「旦那さまには、葉子が、おなかが悪いといって置くからね」

お園は、部屋を出て行った。さすがのお園も、葉子が可哀そうな氣がした。床に連れて行ってからも目を吊り上げ、ただ苦しそうに呻いているだけなのだ。その葉子の細い足首に、木で出来た足枷をつけねばならなかった。

お園は何時になく、一晚中、葉子の看護をしてやるのだった。

「お園さん、ありがとう」

葉一が、細い声でいった。

「お嬢さま。もう、お苦しくありません？」

「エエ。もう、楽になったわ」

「ねえ、お嬢さま。これから、お母さまのいう事には逆らわない方がよろこびますよ」

「エエ。私、私だって、一生懸命、お母さまの命令通りにする考えなの。でも、余りだわ」

「本当にねえ。これからは、お園は、お嬢さまの味方になってあげますわ。余りですものねえ。私、お嬢さまが、とても美しいので、始めは憎らしいと思いました。私は、本当に悪い女です。許して下さい」

5



「お嬢さま………」

二人の娘は、手を取り合って泣いた。

(四)

犬吉が留守になると、かおる夫人は、葉子虐待を着々と進めた。そのために、邪魔になったお園は追い出してしまった。そして、その代りに昔、女学校の生徒監をしていた中尾というオールド・ミスを雇い入れた。この女は、お園よりも惨忍な人間だった。かおる夫人は、中尾女史がどんな女か前から知っていたのだ。この女を高給を出して雇うと同時に、葉子の一切の監視を頼んだ。中尾女史は、かおる夫人の頼む以上の惨忍な事をするので、夫人は大満足であった。中尾女史は、ヴァイオリンも出来たので、別にヴァイオリンの家庭教師を雇う事もなかった。

中尾女史が、葉子にヴァイオリンを教えるのは、実に嚴格そのものであった。ヒステリーな女史は、葉子を裸にして叱りつけた。女史は好んで、ヴァイオリンの時に葉子を裸にして弾かせるのだ。その光景は、かおる夫人を心から喜ばせた。

蒼白い瘦せた傷だらけの体で、ズロースだけでヴァイオリンを持って震えて立つ姿は、二人の迫害者にとっても、この上もなく心をウズウズさせるものであった。

「さあ、もう一度、お母さまにお聞かせしてごらんない。どれ程、腕が上達したかを………」

ギスギスと痩せ、西洋の鬼婆を思わせる中尾女史は、鞭を片手に持って教えるを叱りつけるのだ。

そして、その演奏が上手であっても下手であっても、必ず何か理由をつけて折檻に行くの、中尾女史の好みであった。

お園は、葉子の手をとった。

「いいのよ、お園さん。許すなんて。それは、神さまか、死んだお母さまがして下さる事なの」

中尾女史は、殆んど一日中、葉子を手離さないのだ。便所に行くのにも、一時も離れなかった。だから、かおる夫人は随分、手が省けた。そして、好みの時に葉子呼びつけ、折檻すればよかった。今夜も、遊び廻って家に帰って来たかおる夫人は、何もする事がないので、久し振りに葉子呼びつけた。

中尾女史に引かれて入って来た葉子の姿を見て、かおる夫人は満足の声を上げた。

細い胴を革バンドで締め、背中の金具に片足の足首を鎖で結び、一本足でピョンピョンと飛びながら入って来るのだ。勿論、服は着せられていず、傷だらけの白い肌が充分に楽しめるのだ。

「お嬢さんは今日、お勉強を怠けたので一日中、一本足で居って貰う事に致しました」

中尾女史が、得意そうにいった。

「そう、結構です事。葉子！ お母さんの肩を揉んで頂戴。なんて顔をするのよ。私、お前の顔を見てると、腹がたつわ。中尾さん。その戸棚に黒い布があるから、この子の顔を包んで……」

中尾女史は黒い布を出すと、スッポリと葉子の頭にかけて、首の所で紐で縛った。

「そう。これで気持が落ちつくわ。中尾さんはもう休んでいいわ。用が済んだら、この子をあなたのお部屋に連れて行くからね」

かおる夫人は、ニッコリと笑った。

「どうぞ。では、私は、あちらで休んでおりますから。もっとも、眠りは致しません」

中尾女史は出て行った。

「葉子ちゃん。さあ、肩を揉んで……」

かおる夫人は、猫撫声でいった。そして、葉子の立ってる前に椅子を持って行き、腰を掛けた。葉子は、一本足で立ったまま、彼女の豊満な肩を揉み出した。

「葉子。お前、近頃、幸福だろう。あんな立派な先生が、勉強を教えて下さるしね。フランス語が出来る様になったのだろう。パパが帰って来ると驚くよ」

かおる夫人は、一人でベラベラと喋った。そう。犬吉が帰えって一人娘の葉子の体を見たら驚ろくであろう。骨と皮の様に痩せ、白い肌には背中から腰にかけ、痛々しい鞭の跡が一面についているのだ。

「お前、母さんに返事をしないつもりだね」

そういうと、かおる夫人は、スーッと立ち上って、ドンと葉子を突いた。一本足で立っている葉子は、仰向けに倒れた。かおる夫人は、葉子の手を捻じ上げた。

「お前なんか、こうしてやる！」

手の指を甲の方に曲げて、ぐいぐいと引いた。だが、葉子は黙って、されるままであった。それは、かおる夫人にとっても、面白い事ではないのだ。

葉子を床に坐らせ、後手に捻じ上げ紐で縛ると、ライターの火をつけ葉子の可愛い乳首に近づけた。

「どうだい、熱いかい。熱いなら熱いといってごらん」

「……」

「それでも、熱くないのかい！」

ライターの火は、葉子の桃色の乳首の真下にと来た。

「アッ……ウッ……」と身を震わせて唸いたが、葉子は一言も喋らなかった。

「畜生の癖にして、人間並みのオッパイで居ようたって、そうはさせないよ。お前のオッパイなんて、切り取ってしまったてもいいのさ」かおる夫人は狂人の様に目を輝かし、ゲラゲラと笑っていた。こうした時の彼女の目は、常人のものではなかった。

かおる夫人はスーッとライターの火を遠ざけた。そして、また段

々に近づけて行くのだった。彼女は、一度で乳首を焼いてしまう様な事は、つまらないと思った。長くかけて葉子を苦しめるのが楽しみなのだ。何回か、こうした事を繰返した。

「今度は、針でチクリチクリとやってやろうか」

そう云って、かおる夫人は、ボンネットに刺す太い長いピンを持って来た。そしてピンの先で、葉子の別の乳房をチクリチクリと責め始めた。時には強く、時には弱く、気が済むまで針の先で葉子の肌を刺した。

葉子は、それでも一言も喋らないのだ。彼女は、もう決して、この怖るべき女に哀願等をしようとは思わなかった。(殺すなら殺せ!)と云った態度だった。どんな苦しくても齒を喰い縛って、泣き声を出すまいとしていたのだ。それが、この女からの拷問を逃れる唯一の手段だった。実際、葉子がヒイヒイと泣かないと、かおる夫人の興味は半減してしまうのだった。

かおる夫人は、何とか葉子を泣かせ様と、あの手この手と変えてみた。だが、矢張り失敗した。氣違ひの様になって虐待してみたが葉子は、されるままで無言で居るのが、かおる夫人には氣味が悪くなった。

かおる夫人は腹を立てて、黒覆面をむしり取った。葉子が死んで居るのではないかと心配になった事もあったのだった。

だが、葉子の蒼白い美しい顔は、キリッと唇を締め、白い眼でジロリと、かおる夫人を睨んだ。

「お前みたいな奴は、あっへ行け!」

かおる夫人は、急に何となく葉子が怖ろしくなったのだ。後手の紐をとくと、もう葉子の方を見様とせずに、ベッドに入ってしまった。

葉子は、手を床について立ち上った。そしてピョンピョンと片足で扉の所に行き、黙って、部屋から出て行った。

(あの子は、私を殺すかも知れないわ) かおる夫人は、そんな事を思った。そう考えると益々、怖ろしくなった。ピンで刺した跡から血が流れていても、平気で何も云わない葉子。ゾツとする様な憎悪の表情を浮べて自分を睨んだあの顔は、かおる夫人にとっては、何とも云えないものであった。

(もう、私が直接に手を下すのはよそう。あの子を苦しめるのは中尾女史にやらせればいいのだ。もっと苦しめてやる事さ。それが一番だ。一人で動けないまで弱らせてやらねば、心配だ)と、かおる夫人は、あれこれと考え続けた。

(もう、こんな家から逃げ出した方がいいかも知れない。有島と、この家の金目のものを全部持って逃げ出すのが一番だわ。ぐずぐずしていると、あの子が私を殺しに来るかも知れないもの)

かおる夫人は、自分の虐待の結果に後悔をするよりも、自分が葉子に復讐されはしないかとの心配の方が強かった。

かおる夫人は突然、起き上ると、ナイト・ガウンをかけて、廊下に飛び出した。そして用心しながら、中尾女史を呼びに行った。中尾女史は夫人の一声で、部屋から出て来た。

「ねえ、中尾さん。あの子はどうした?」

「ハイ、お部屋で寝て居りますよ」

中尾女史は、かおる夫人のただならぬ様子に不思議そうに、眠い目をこすって云った。

「足枷はつけてあるわね?」

「勿論でございます」

「あのね。明日から、あの子を鎖で縛って、一步も部屋から出させない様にして……」

「ハイ。承知致しました。でも、奥さま。何故でございますか?」

「私、あの子が怖ろしいのよ。あの目! 私を殺すかも知れないもの」

「オホホホ。何をおっしゃるのですか、奥様。あんな弱々しい子供に、何が出来るものですか。奥様はノイローゼですよ」

「そうかも知れないけど、お願いしてよ！」

かおる夫人は、中尾にこれだけの事を頼んで、やっと安心して眠れるのだった。

(五)

かおる夫人は、有島と駈落ちの計画を熱心に進めた。もう虐待するだけ虐待した葉子には、何の興味もなかったのだ。夫の留守を幸いに、この家の金目のものは、ほとんど金に変えたり、彼女の名前になつて株券でも貯金でも全部、持って逃げる事にした。夫の名義のものも、出来るだけ彼女の名前にした。こうして、持ち出せる財産は百万円以上になった。これだけあれば、有島と遊び廻っても充分だし、その間には、また彼女の美貌をもってすれば、金持の男なんか手に入れる事はわけのない事だった。

雇人達は、そのままにする事にした。下手な事を云って、駈落ちの邪魔にならないとも限らなかった。ただ、中尾女史だけには、この事を話した。勿論、中尾女史は始めは反対したが、それも仕方がないと思つたのか、充分なお礼金を取って、かおる夫人が逃げ出した後、自分も姿を消す事を約束した。

中尾女史にしてみれば、こんな面白い仕事はなかった。薬で自分の思う様に、若い女の子を虐待出来るのだから、この仕事から離れたくなかつたのだが、これも仕方がない事だと思つた。女主人公が居なくなれば葉子虐待の責任が自分にかかつて来るので、まごまごしてはいられなかった。

愚鈍な二人の下女には、そんな事は全く解らなかつた。前日から奥様が居なくても何の不思議に思わなかつた。自家用車で温泉にお出掛けになつたとばかり思つていた。

中尾女史が、姿を消したのも、二人共、知らなかつた。その日の夕方になって、始めて中尾女史が出て行つてしまつたのに気がついた。

お里は、中尾女史の部屋に飛び込んだ。電燈をつけると、部屋はガラシとしていた。

この部屋は日本間だったが、隣室との間の扉は、矢張り西洋風のドアであつた。この戸をお里は押したが、矢張り鍵がかかつていた。しかし、その鍵は、中尾女史の机の上に投げ出してあるのだ。

お里は、手早く鍵で扉を開けた。スイッチをひねると、パツと室内が明るくなった。その明るい電光の下で、お里は怖ろしいものを見て、ヘナヘナと床に坐つてしまつた。

お嬢さんのベッドは、毛布もマットもなく、鉄棒だけの姿になつていた。そして、その上に葉子が、仰向けに鎖で固く縛られていて、葉子の口には、猿轡がされているのだ。

「お嬢さま！」と、お里は駈け寄りうとしたが、思わず立ちすくでしまつた。

蒼白い痩せた顔で葉子は静かに目を閉じていた。乳房と云わず腹部といわず、太腿から足にかけても一面に、責め折檻の跡が点々と痛々しく見えた。

肋骨がハッキリ見える胸は、それでも微かに動いている。

（お嬢さんは、死んでいない）と、お里はホツとした。

「お君さん！大変……」

お里は、金切声をあげて階下に走つて行つた。

あの女の行方は、全く解らなかつた。妖婦の生贄とされ殺されそうになつた葉子が、一日も早く前よりも美しく、元気になるのを人々は待っていた。若さが、あの怖ろしい毒牙の跡を消して呉れる事である。



妊婦の魅力について

羽村京子

……イギリスではその下腹を出来るだけ小さくするように努めますが、フランスの女はそのお臀と共に、下腹を大きく見せるように致します。それでこちらでは生れつき下腹の小さい人は、お腹のところに小さなふとんを入れて、お腹を大きく見せかけるのに苦労するのです。

私もパリに参りましてから、姿がすっかり変わったことを自分でもおかしく思っております。パリに参りました当座はイギリス風で、お腹を小さく見せていたのですが、今ではコルセットのお蔭で、まんまるく肥って引締っています。今度、貴女にお会いしましたなら

あなたはきっと私のコルセットの下にフットボールでも入れているのではないかと思いいなることでしょう。そして或はイギリスの人は私が妊娠しているくらいに思っ、私の大きくなったお腹をお笑いになるかも知れませんが、パリではその方が最も魅力的な女性美とされ、殊に男の方の称讃を受けるものなのです。……。

——ジョン・カーライル

「パリのおしゃれ学校」から——

一、妊婦のヌードにたいする興味

八月号と十月号でわたしは、女だてらに、

妊婦のヌード写真の提唱をしました。考えてみると、ほんとうに「女だてらに」と恥かしいことのような気がします。だって、お腹に赤ちやんを持っている若い女を裸にして写真をとるなどということは、多少とも普通は変った好みをもつ男性の、猟奇的な好奇心を満たさせるものではあっても、すくなくとも同性である女性から提案したりすべきではないように思われるでしょう。それもその通りです。しかし、サド・マゾヒズムの領域に深く足をふみ入れたものにとっては、そして匿名での寄稿が許されるような、このような雑誌の上では、わたしののような狂態も大目に見

ていただけるものと思います。妊娠するといふことは女性にとって、たいへん重大なできごとなのです。そこには男の人たちに分らない特別の気持があります。そして男の人たちに、熟れて大きくなった果物の実を、「さあ、こんなにおいしいそうに大きくなりましたよ。わたしのお腹の中でみり、十分に熟れて大きくなったこの果物を見て下さい。」といって差しだして、鑑賞したり賞讃したりしてもらいたいと思うのは、当然のことではありませんか。すくなくともそれは、よろこびを分かち合いたいという女らしい気もちのあらわれでしょう。そしてまた、わたしのばあいには、サド・マゾヒズムの不可解な心理があえてそのような行動をとることを一そう強く要求するのです。匿名であるという安心感が、かくれた心の中の衝動を、大胆に言葉に出すことを許すのです。男の人たちが、口にするのをためらっていた本心をずばりと指されて、旺盛な食欲の妊婦の膨満した腹部というすばらしい果ものにたいして示して下さることをひそかに期待しながら……。

はたして私の提案にたいするいくつかの反響がありました。わたしはたいへんうれしく思いました。それらはみな男性の方からのものでした。

十月号の読者通信の東京の堀橋正人様、十

一月号読者通信の「羽村京子の大ファン生」様、同じく秋田のT・K生様、この三人の男の方が、わたしの妊婦のヌード写真の提案に賛成して下さいました。堀橋様は妊婦の責めに関心をおもちになり、T・K様は妊婦の腹割き（切腹）に興味をもっておいでです。大ファン生様はやはり腹割きをお好みのようですが、T・K様のようによくわしく書いてはいらっしゃいませんね。T・K様が具体的に述べられた率直な言葉は、わたしをゾクリとさせるほどのものでした。その中で妊婦のヌード写真を撮るチャンスにめぐまれないから、わたしの（名前をあげてはいらっしゃいませんが）撮ってもらったのを欲しいというご希望ですが、残念ながら主人の許可が下りませんので、お許し下さいませ。失礼ですが多分まだ独身でいらっしゃる方なのでしょう。将来、ご自分の奥さまの妊婦ヌード写真を、いくらでもお撮りになれるチャンスがありますわ。それまでお楽しみに。わたしのものはお許し下さいませ。

このような公開の誌上で、私事めいたことばかり話しました。ついでに佐田春雄さまの告白「羽村京子夫人へ」がございました。お返事申し上げるべきところですが、テーマがちよっとちがいますので、この場所を借りてお礼だけ申し上げたいと存じます。

男の方たちからご賛成いただきました妊婦のヌード写真、ぜひ本誌上で実現していただきたいものと存じます。

二、妊娠した娼婦を買う男

このまえもひきあいに出して、またかと思われましょうが、例の伊藤晴雨先生は、妊娠した女性に特別の興味をいだいておいでの方です。先生がお若いころ、妊娠した女性に非常な関心をおぼえられ、ずい分無理をしてお金もつかって探されたということ、何かの本で見たことがあります。伊藤先生、まちがったらお許し下さいませぬ。世の中のふつうの男性から見たら随分なことだと思われるかもしれません。しかし頑固に自分のお好みを主張して、それに従われた先生は、何といっても奇人、あるいは非凡だといえるでしょう。

これは先生の倒錯したヒューマニズムの最高の表現とみてよいと思います。でも先生、わたしの本当に失礼ない方を、お許し下さいませぬ。

最近出た中村三郎さんの「白線の女」という本のなかに、妊娠した娼婦の手記があります。それによると、妊娠していて娼婦がつとまるかという人があるけれども、それはとてもないまちがいです。大体、娼婦を

買うような人は物好きが多いせいか、妊娠している、そうでないよりもかえってよく客がつく位だと、いっています。大きなお腹をして、妊娠八カ月だの、臨月になっていながらもなかにはふざけて十一カ月だなどといっているのもあるそうですが、結構よろこんで遊ん

でくれる男があるというのです。妊娠しているということをかきさなくとも、むしろそれと分った方が男たちの興味をかきたてるといふのですから、口にこそ出して云わないけれども、男たちに女性の妊娠した状態に特別の興味をもって、紳士ふってとりすます必



王様などは、たやすく

ごまかせるに

ちが

ありません

要のないこういう場面に直面するや否や、妊娠にたいする関心をむき出しにして示すのでしよう。これは大変面白い現象だと思えます。

ですから、町を歩いてみると、気をつけてみれば、ずい分多くの妊婦が歩いていきます。なかには、洋装であれ和服であれ、ずい分大きなお腹をして、よちよち歩いている人もいます。妊娠は多くの場合、大変おめでたいこととして歓迎され、妊婦は何も恥じる必要はないでしょう。しかし、考えてみると随分おかしいことです。とくに気をつけて妊婦に注意しながら町を歩いてみると随分、奇妙な気がします。妊婦が歩いているということが、本人たちが平気であるにもかかわらず、女であるわたしにとって何か平静でいられないような気がしてくるのです。この気持は男の人にはちよつと分らないかも知れませんが、女ならだれでも経験があるものでしょう。男の人たちが見ないようなふりをして、明らかに関心をもってちらりちらりと見ている、そういう気持とは違ふと思います。支配者の優越の上にあぐらをかいている男性とちがって、しいたげられ、はすかしめられたものの、大げさに云えば身を切るようなマゾヒズムの悲しみがあるからです。自からがその中に浸りながら、その悲しい性に矛盾を感じざるをえ

ない女の悲しみが。

妊娠した娼婦を買う男というテーマからはすこし脱線してしまいました。もちろん妊娠した娼婦を買う男にとって、そのことはかれの気まぐれを満足させる素晴らしい方法にちがいありません。娼婦を買う男たちの「思いつき」——気まぐれが、どのように彼女を苦しめ、彼女に嫌がられるかについて、ポーボワール夫人が書いています。妊娠した娼婦について、買う方の男性にとっては彼女が一そう刺戟的であるかも知れませんが、彼女自身にとっては、肉体的にも精神的にも負担が荷重であり、病毒の感染という点からいっても非常に好ましくないことはいうまでもありません。わたしは決してこれらの問題に目をつぶろうというのではないのです。売春そのものが好ましくない、不潔な社会悪であることは当然です。妊娠した娼婦の場合、一そう惨めだということは云うまでもありません。そうではなく、わたしは好んで妊娠した娼婦をおうとする男性の傾向に、マゾヒスト女性としての特異な角度から注目してみたいと思っただけなのです。

三、膨満した腹部の幻想

この頃は、よく簡易家庭医学の本が出ていますが、その多くは妊娠やお産、そして育児

などをあつかっています。その一つ、主婦の友シリーズの「妊娠と安産」の巻頭のグラビヤに、妊婦の腹部をむき出しにした写真がいくつかのっています。これはお産の説明なので、臨月のよくふくらんだお腹で、からだの他の部分が着衣なのと、腹を上にして寝ている姿勢ばかりなのが残念ですが、写真をのせているのはめずらしいと思います。勿論、お産のところは載っていません。お産といえばお産を見たがる男の人は大変多いようで、最近では、アメリカ映画「母と娘」では帝王切開の場面を見せました。娼婦の腹割きフアンの方には、ほんとうにちよっとお気の毒ですが、少ししか写してありませんから、「腹をさかれた孕み女」というような、サディスティックな感じはちっともしません。勿論T・K様の希望しておられるように、腸が多量に流れ出て来ることはおろか、腸なんて一かけらも見えません。謝国権先生の「お産」という書物には、想像妊娠という病気の説明に挿絵が入っていて、キューピッドの姿をした男の子が、自転車の空気入れのようなものを押して立っている女（はだかで描かれています）のお腹をふくらまして描かれています。キューピッドは点線で描かれていますから、この女性の頭の中の幻想が妊娠に似たような症状をつくり出すことを示しているのでしょう。この

図では、空気入れのゴム管はお臍の真中にながっています。わたしたち浣腸マニアにとっては、お尻の方にながっていたらもっと面白いのですけれども。これはまえにも書きましたが、想像妊娠のばあい、お腹の皮下脂肪とか腸の中のガスなどでお腹が大きくなるので、腸内ガスの移動を胎動と思いちがえたりするのだそうです。勿論、妊娠でないことが分れば、お腹は小さくなるのだそうで、浣腸か腸洗液をして、腸の中をすっきりきれいにしてしまえば、何でもなく元通りになるということです。いずれにしても、このキューピッドの挿絵は傑作だと思います。ついでにもう少し想像をたくましくして見ましょう。

想像妊娠と違って妊娠しているように見せかける場合、いってみれば偽装妊娠というのはどうでしょうか。お医者さんであれば想像妊娠の場合と同様に、直ぐ見分けがつくことだと思えますが、無邪気な想像妊娠と違って偽装妊娠の方はうまく扱えばちよっとした小説でも書けそうです。事実、小説にも出て来たり、現実にもあるのではないかと思えます。動機としては、アラビアなどのような一夫多妻の王様や土侯の場合、地位とか財産の相続にからまる現実的な利害関係などありましよう。もっと簡単に、妊娠したことを告げて男の愛情をつなぎとめる、または結婚をせ

まる。あるいは遠くに旅行したり冒険することや、思いとどまらせるなどと、色々ありましよう。勿論小説などとしては、筋がこみ入っているほど面白いに違いありません。

仮に、アラビアの王様の妃の一人が、せっぱつまって妊娠していると偽って云ったとしましょう。幸いに、彼女の血縁の誰かが丁度妊娠して、生れる時までうまく隠しおおせれば、その子を自分の子として王位をつがせることが出来る（その子どもが男であつたとしての話ですが）としたら、どうでしょう。子どもの本当の母親を殺してしまえば、あとで面倒を起すこともない、完璧な計画だと彼女には思われるでしょう。侍医を買収してしまえば、王様などはたやすくごまかせるに違いありません。彼女は妊娠しているように見せかけるため、お腹の上にふとんでものせて、腹を大きくみえるようにしさえすれば結構、人目をごまかせるでしょう。着物を着ている時はそれでいいでしょう。しかし裸になつて見せなければならぬとしたら、どうでしょう。王様自身が、単なる好奇心からか、あるいはもっと深い疑いからか、彼女の膨満した、妊娠した腹部をむき出しに見たいと希望した場合、拒絶するわけには行きません。さあ、どうしたらいいでしょう。

勿論、腸をふくらますより手がないのです。食物を一杯たべたり、水をうんと飲んだり

堂々完成間近し 乞期待

限定版『女体緊縛フォト・アラベスク』

定価 五百円 (送共)

愈々卅四年一月一日発売!

縛られた女体ばかりの写真を

集めた特アート六十四頁の豪華

写真集。

美人モデル嬢の艶麗な姿態は、全巻を捲って、絢爛として咲き匂う。

限定版につき部数に限りあり、

買い洩して、悔いを千載に残す勿れ、今、すぐお申込を!

登場する主なモデル嬢

絹川文代、浜本喜美、花坂道子、大塚啓子、三木敬子、萩千恵子、愛川悦子、田中芳代、伊吹真佐子、春日ルミ、村井知可子、田代悠子、益田房子

とひきずり出され、目もあてられない、なぶり殺しにされることでしよう。

× × × × ×

例によってとりとめないことばかり書きました。女だてらにつつしみのない京子の妄言をお許し下さいませ。妊婦のヌード写真、または妊婦責め、妊婦の割腹など、同好の方の御意見、作品などお待ちしております。いつか週刊朝日に言岡専造さんという写真家が自分の子どもの満一才までの写真をとった「人間零才」というのをのせていましたが、「人間マイナス零才」というのはどうでしょう。勿論、妊娠十カ月間のお腹のふくらみを写真にとるのです。

空気を呑みこんだり、つまり上の口からお腹につめこむ方法があります。しかし一時的に一ばん手っとり早いのは、空気、または液体を、直接に腸内につめこんで、お腹を大きくする方法です。何とかして二、三十分、我慢すれば（二、三十分はかなりつらいでしょうが、勿論、入れる分量にもよります）素人である王様は、彼女のお腹がどうやら美事にふくらんでいるのを見て、すっかりだまされてしまふに違いありません。あとは、つめこんだ内容を排出して、もと通りになればよいのです。その代り、王様のまえでうっかりこらえそくなって、そそうをしたりすれば、えらい目にあわされるかも知れません。きつと直ぐその場で腹を割かれて、腹わたをずるずる

魔

教

園

NO.

8

(その十二)

土

路

草

一

(一) 報告会議

「なるほど、すると次期選挙には相当数の票が獲得出来る予測なのだ」

ローシンは、ビールを切っていた手を停めて、上眼使いに反問した。

部屋には、イーダビー国の幹部を中心に、ユーマ人の代表等を混えて、晚餐の杯を傾けながら、黒山谷子の日本情勢報告に耳を澄ませていた。

「はい、日本は明治以来、議会政治の経験を積んで来たわけですが、案外、民意による政治というものに就いては訓練されておりません。所謂、民主政治に対して習熟しておりま

せん。政治の混乱、政局の動揺は絶間なく繰返されておりますし、又、虚に乘じ簡単な手段に依って政策崩壊は容易に惹起することが出来るのです。議会がそうでありますから、国民は常に政府を信頼しておりません。と共に、金や派閥で動く風潮が住民達にも浸透して、長いものには巻かれろ式な封建性が残存しております。強者に対する屈服。これは政治の世界に於いて最も顕著に表明されます。ヒットラーがいいましたように、大衆の心は生半可で頼りないものに対しては動かぬものだ。寧ろ、強引な、他の教儀を許さぬ支配に依って心に満足を感じるものなのだ。とする定義が日本に於いては、ぴったりと適合致し

ます。私達は汚職や経済攪乱を以って、この生半可な政府を動揺させることに力を注ぎました。そして住民に対しては疫病対策や黒霊教に依って力を誇示しました。衆人衆の誕生は住民間に政治不信の波紋を拡め、新しい政党に対する支持信頼を多大に獲得する結果を招いたのです」

谷子は演説するように口吻に熱をもって喋った。

席は緊張の内にも好成果に生き生きとした活気が漲っていた。

「総辞職の見透しは？」

イーベラが事務的にフオークを弄びながら訊いた。

「はい、此度、電業汚職が発覚致しましたので、検察庁の手が閣僚に伸びない内に総辞職するだろうと、内閣官房からの諜報で御座います。ですから二カ月以内には……」

「選挙後の各党の議席予想は立っておりますの？」

「はい。与党の自守党は三分の一を確保出来るかどうか、危ぶまれております。野党の社進党は四分の一ぐらいで、我が衆人党も四分の一以上は獲得出来ると存じます」

「そうすると一応、連立内閣が考えられますわね」

「はい。此度は我が衆人党は野にあって政撃を継続すべきかと思ひます」

イーベラは、聴き終らぬ内にフォークを、ぐさっと牛肉に突き立てる。

「生温いわ」

と嘲笑うように謎めいた微笑を頬に浮べてローシンを眺めた。

「政権獲得が第一じゃありませんの？ この際、非常手段を構じて……」

「とおっしゃると？」

最高幹部は気押されて、険立った美しい瞳を眩しそうに覗いた。

「暗殺」

ずばりという。だが、思い直したか。

「暗殺という言葉は、穏やかではないですね。急病です。疫病罹患に依る閣僚辞退と申

上げたほうが、よろしいかしら……」と訂正する。

「なるほど」

ローシンは他の幹部と顔を見合わせて、腕を組んだ。

此処で、これまでのあらすじに代えて、魔教の国、黒天使教国の日本工作概要を簡単に説明しておこう。

黒天使教国は七つの領国から成立っていることは、この小説の冒頭に於いて述べたところである。只、七つの領国は何処と何処にあるかは、この幹部達しか知らない。

そして第八番目の領国にしようと、彼等は日本に触手を伸ばしたのである。

先ず、イーダビー人がユーマ人と組んで、日本に工作した第一は、疫病の伝播である。

メリオイドジス菌を使って、日本住民の大半を罹患させることだった。それは一応、成功して、日本国内は恐怖と混乱の増城に叩きこまれた。

そして、渋谷に「エンゼル」なる食堂デパートを作り、菌の繁殖防止薬を混じて人々を疫病から阻止し、一筋の光明を与えることを計った。もっとも、これは一時的な防止剤であり、その薬が断れると発病するのである。

この為「エンゼル」は週に一、二度の食事を採る人々の集会場となり、いろいろな情報を得られると共に、噂や煽動の為の恰好な

場所になった。彼等は抜目なく主だった部屋には隠しマイクを備え、重要人物には優秀諜報員をマダムやウエイトレスとして配した。反而、又、運動資金の捻出という意味でも、エンゼルの収支決算は莫大な利益を上げたのである。

次に彼等は殺人、強盗、暴行、放火、婦女誘拐を企て、治安を攪乱した。

人々は極度の不安と花火のような刹那的な愉楽を求めるようになる。前後のない無思慮な行動が町の其処此処で見られ、若者達の風紀は紊乱した。生産地帯の勤労意欲は減退し、事務所や工場は職能を低下する。

追打ちをかけるように、善良なる市民に麻薬の味を知らせ、密貿易を大胆に振興した。

又、逆に生活必需物資を買い集め、賈札を秘そかにばらまいて、経済状態を擾乱する。国民の暮しは日増しに追い詰められて、貧弱者が巷に溢れ、犯罪は類を呼んで兇悪化して行った。

次に、彼等は黒霊教なる新興宗教を流布した。黒霊教。それは黒天使教の変形であり、纏説する内容は、悪魔に対し絶体服従を強いる一種の隷属教典である。

併し、彼等は教布面に於ける武器として、メリオイドジス菌の免疫薬を有していた。黒霊教はその武器を最大に駆使して、多数の信者を獲得したのである。

奇蹟。(この場合は奇蹟でもなんでもないのだが……) 奇蹟はいつの世でも、人々を瑞雲のたなびきで包み、信教の妖しい魔力になるのだ。特に生命を確保される奇蹟に於いて……。

然して、衆人党の誕生である。

大多数の信者を背景とした衆人党は着実に党勢を拡大し発言力を増していった。

加えて、別動隊に依るテロ手段を傍若無人に行使し、これを白色、又は赤色テロとして、政情不安になすりつけて、巧みに政府攻撃の矛として、首相を無能呼ばわりし、大衆の歓心を求めたのだ。

政権の座が彼等に来ることを以って、黒天使教国の対日第一工作は完了する。

果して、彼等の布石が日本政局という盤面に於いて生きてくるか? ということは、まだ判らない。

只、彼等の対日第二工作というものを想像するとしたら次のことが考えられるのだ。先ず、彼等は黒天使教を国

教と定めた強力なる全体主義政府を宣言するだろう。

言論を弾圧し、信教を制限し、集会結社を禁止し、教育を歪曲して、人々の生活から正

義と自由を奪いとってしまおうだろう。

それこそ、ナチスの総統、アドルフ・ヒッ

ラーが吾が斗争で述べた如く、

大衆は自分等に対し、厚顔にも精神的テロ

が行われていることも、又、自分等の

人間としての自由が腹立たしい程、蹂

躐されていることにも気がつかない。

何故なら大衆は、この全教儀の内に潜

む愚昧さなどは決して感付かないから

だ。大衆は、目的のはっきりした主張

の他は顧慮しない力と、押しの強さの

みを見て、結局、いつもそれに屈服し

ているのだ。

とする論理を如実に実行することになるのだ。

日本住民はその勤勉性、その封建時代から受け継がれた従順性を動員されて、黒天使教国を輔翼する有力メンバーに変わるかもしれないのだ。

即ち、魔教団 NO8 として……。

(二) 捕獲者への褒賞

質疑討論は終わった。

緊迫していた空気が緩んで、最高幹

部連は雑談に花を咲かす。

「黒山さん!」

ローシンに東京の華やかさを解説していた谷子は呼ばれて、イーベラを振



返った。

「此度はどうも御世話をかけましたわね」

「いいえ」

「貴女も仲々の手腕家ね。勝谷が正面きって比奈地の家へ電話予告したのに較べ、貴女は境遇に同情するように見せかけて、巧みに手綱を把り、牝に、不安や事情を他へ洩らすことをさせずに拐った腕前は並々じゃないわ。それに、ちやんとロケット燃料の分析

表まで手に入れるのだから……大したものよ」
讃嘆の口調で賞めあげられて、谷子は悪い気持がしなかった。

ライトルなどのように傲岸なユーマ人に対しては、強い反撥を持つ谷子であったが、チャーミングに應對してくれるイーベラには敬愛に似た親しみを感じるのだ。

活動的でドライな性格は、二人とも共通していた。併し、ユーマ女性のほうが与える感じが上品で、何処となるコケットリーで、対面する相手に親近感を抱かせてしまう。所謂、イットなるものを有していた。

比奈地路子も、従僕に対する時と違ふこの魅力に眼を奪われて友愛を示し、隠された牙を忘却させた一人ではあったが……。



谷子はその点、冷たい剃刀その儘の感じを人に与える、険高い美しさというか。

が、それが又、独得な理智を表現しているのだ。

併し、能ある鷹は爪を隠すという。この場合、鋭い面を表へ出さないイーベラのほうが世慣れてるといわねばならないだろう。

この人当りの柔かい、それでいて鋭い判断力と躊躇のない行動力を示す白人女性に、谷子は少なからぬ敬意と親愛を覚えていたのである。

「恐縮しますわ。お役に立って何よりと存じております」

谷子は謙虚に言葉を包んだ。

「お礼をしようと思ってたのよ」

「あら、そんなことなさなくても……」

「でも、私の気持が済まないわ」

と、イーベラは、銀糸の装飾がある小さなビロード張りの箱を取り出した。

ぱちんと蓋を開いて、

「どう、お気に召さないかしれないけど」

ダイヤモンドの指輪である。三カラットはあるだろう。燦然と広間のシャンドリアに映えて、高貴な輝きを発する。

「まあ！こんなこと結構ですわ」

谷子は身を退いて辞退する。

これを日本の価格に直したら、優に百五十万円はするだろう。

併し、比奈地路子という一人の人間を購う価格にしては余りにも安価である。路子が銀行に預金してある金額だけでも、四、五倍は上回ったし、父の財産を含めたら、こんなダイヤの一つぼっちは、ほんの端た錢で買えるのだ。

いや、そんなものは無くともいい。

美の化神、才智の泉と謳われる比奈地路子は、どんな職業に就いても、百五十万や二百万の端錢は忽ち作り出せるであろう。

その身心共、最上位の女性を、完全に自家

薬籠中の飼育物として、生死を左右出来る所有物として拘禁し、ダイヤモンド一つ。余りにも安い値段といわねばならない。

併し、谷子はそんなことを思って辞退したのではない。

金ならば、路子や他に拐った女達の身代金を請求し、一財産くらい掻き集めることは容易な立場である。

妖精には、もっと打算があつた。それは、目前の宝石よりも上司の信頼であり、将来の地位であつた。眼先の慾に溺れることは将来の計を失うことになり兼ねない。地位と権力に恵まれれば財は自ずから成る。

これは世の真理である。だが、世人には容易に見えて、案外なし得ないのだ。

イーペラは押しつけるように谷子の手にダイヤを握らせる。そして、明るく口許を綻ばせながら。

「貴女を日本施設本部の理事に推薦してあるの。ローシンさん、お願いしますわね」

と、イーダビー国最高幹部に請願する。

「え、」

幹部も、微笑を浮べた顔を練腕の女党员に向けて、

「君のことは明日の幹部会にかけて審議することになっている。今までの業績から見て、多分、多数の協賛を得て、理事に推挙されるだろう」

谷子は、ぱっと胸が展けた。鳩尾が脹わって、喜びがせり上ってくる。

理事になれる。天山理事等と同等の立場に立てる。

谷子にとってそれは一つの宿願であつた。伶俐な彼女が緻密に計算した出世コースの一道程ではあつたが、この役目は日本が魔教化された時、重要な支配職を約束するポジションであつた。

それだけに運命の岐点となり兼ねない危険を孕み、仕事の心労や責任は倍加するだろう。併し、谷子は撥ね返すだけの自信と意慾に溢れていたのである。

「正式には明日という言葉だが、しっかりやり給え」

ローシンは忠実な部下を頼もしげに見やりながら励ました。そして、唆かすように野次めいた口調で、

「これだけの報奨を与えられる程の牝畜を、我々に展示しないとは不屈きですな」

とイーペラにいう。

「まったくですな。慧眼に留まった毛並みを是非拝見したいものですな」

他の幹部も同調して、アジる。

「ふ、ふ、。皆様にそんなに懇望されて、牝も幸せですわ。でも、眼があつて、口があつて、乳房を揺すって這う家畜には変りないのですよ」

ユーマ女は笑いながら、はぐらかす。

「我々は天女を見たいのではないのです。血統が秀れ、整った形を持つという貴女の新しい飼畜を見たいだけなのです」

天女を見たいのではない？何をいうのだ。

比奈地路子は、このイーダビー国の人間共と比べものにならない素晴らしい貌と姿を持ち、秀抜な智脳を有している天女にもみまほしい美しい女性なのだ。

「まあ、御執心なこと。これではどうしても御挨拶させて、牝に皆様の唾でも戴かせてやり、晴れがましさを知らせてやらなくてはなりませんわ。でも、失望なさらないでよ。私の蒐集癖に合った家畜タイプなだけですから……」

「見せたって減りませんから、御心配なく」席には空気がはしやいで、ざわめきが賑やかに弾んだ。

(三) 新畜の披露

路子は柔かい絨氈を円い膝頭で整った。むせっぽい煙草の匂いと酒氣が充満している部屋に、ふかふかした肘かけ椅子が並び、幾つかの靴が見えた。

フーガにこずかれてソファを廻り、メイン・テーブルに近づくと、豪華な銀色のハイヒールをつけているすらっとした脚が眼に入った。

朝、強烈な鞭に依って烙印された臉は、調教師にいわれるまでもなく、主人イーベラの御足であることを直ちに判断した。

鼻輪に繋がっている鎖が振動を送ってきた。

手綱を捌いて馬を馭すように、調教師は美畜に、主人への挨拶を促がしたのだ。

己が身に対するイーベラやフーガの権力の絶大さを、僅か十数時間であっても骨身に堪えて知らされた路子である。多少の躊躇は疼いたとしても、それは行為になる障害にはならなかった。

膝早やに床を走り、飼犬が蹲るようにいじらしく白裸を倒して、華美な靴にぴたっと唇を当てる。芳わしく、美貌を惹立て、いた黒髪が銀靴に被さり、床に垂れた。

「フーガ！ 牝を皆様方に御回覧上げな」
イーベラは白々と照り映えている純美な牝畜をちらっと見下して、クラッカーを嚙っている口で命ずる。

無興味を銜った態度だが、内心、やゝ誇らしげな口吻である。

「は、はい！」

フーガは最高幹部連の前に出た緊張で語が震える。

固張った手で曳鎖を鳴らし、震え声を落して、

「最高首脳の方々だ。常ならばお前のような

汚れ牝は足許には寄れない高貴な方々だ。御主人様の飼物だからこうやって体を見て戴ける。光栄に思っ御指図を御受けしろ！」

と先ず、ローシンの足許に引据える。

常ならばお前のような牝畜の近寄れぬ高貴な方々？ 違う。常ならば日本の政財界に多大な勢力を張る比奈地の令嬢として、この異国人達は臨席の榮を思わねばならないのだ。

先進国、日本との貿易を拡張し、クレジットを得ようとするならば、この財界の大立物の娘の御気嫌を取り結ばねばならないのだ。それなのに今、上席を以って遇すべきを蟪蛄の如く己が靴先に這わせる。贈物をし意を体さねばならないところを、逆に衣服の片鱗だも奪いというて、美肌を拘束する。

高雅を獣態に変えさせられて路子は、固く眼を瞑り皓齒を嚙み合せて、異国の男の靴に接唇した。

ローシンは無造作に皮靴で乳房を蹴る。

「上質だな。胸囲りはどのくらいだい？」

幹部はユーマ女性に阿ねるようにフーガにいった。

「はい。八十八糎で御座います」

次の幹部の靴前では背を踏まれ、体重や身長を訊かれた。

路子は、白い華奢なパンプスの前に導かれる。飾り穴のあいている靴は、いきなり美貌の円い顎をしやくり上げた。

明眸を閉じて、心もち開いた唇の上に、無惨な鼻輪が美人を美畜に仕立て、光っている。

「似合うよ。ノーブルな鼻だなんて思わせぶりな評判だったけど、そのほうが惹き立つじやないか。畜生の質は争えないものだね。その錠だって鎖だって、体にマッチして仲々シツクだよ」

路子ははっと肌を凍める。谷子だ！私をこんな境涯に引摺りこんだ黒山谷子だ！ 気兼ねなどしたことのなかった路子は、この声に気兼ね以上の判然とした畏怖をわなわたと弱やかな柔肌に流す。絞られた汗脂の量が想い起されて、鼓々と胸が縮まったのだ。

「どう、今日は温順しく軀を調べて貰ったかい？」

純白な背肌や腿に生々しくついている鞭痕を見て、谷子は己が手で打てなかった物足りなさで心で凝った。

「とんでもない。御主人様には早速、矯め鞭は戴くし、大した痛みでもないのに大仰に鳴きやがるし、派手な暴れ方でした」

フーガは嚙み捨てるように慨嘆を吐いた。

「責任上、私も矯正してやらなければならぬらしいわね」

谷子は何とか路子の肌を哀哭させてみたかった。捕獲から手がけた牝であっただけに、調教方法に嚙を挿める権利を確保して置きた

かったのだ。

「あら、まだ登録してないの？」

胸に家畜番号が入墨してないのに気付いて問う。

「はい。明日、印刷に廻そうと存じております」

「何故？ 今日じやいけなかったの？」

「は、はい」

フーガは返事を濁してイーペラを窺う。白

人女性は言葉を引取って、

「その呼名を考えてないので、明日にしろ
といいつけておいたのよ」

と説明する。

「それで、お考えはお決りになりました？」

捕獲人は何を愚図々々してらっしゃるの？
といわんばかりに、親しみを籠めた催促をする。イーペラは、ちよっと小首を傾げながら
「え、三つ程考えたのよ。私が日本にいた

時、これの隣の家に泥棒猫がいてね。よく台

所から魚や肉を盗んで行くのでこれの家の女
中が手を焼いていたのよ。その泥棒猫の名が
ミケっていうの。これも猫並な生物に戻った
のだから、自覚させる為にミケと付けよう
か、というのが一つ。これの国の俗語にばけ
なすとか、うすばけとかいう言葉があるでし
よう。間抜けやとんな奴をいうのに。だか
ら、最初から教わった家畜の態度を採らず

に、私に鞭打たれた間抜けぶりを記
念して、ばけをいい替えてポケと呼
ぼうか。それとも、これは境遇が転
倒したと考えているらしいから、ミ
チという名を転倒させてチミと名付
けようかと考えているのだけれど：
谷子さんはどれがい、と思う？」

谷子は、うずうずしながら聞いて
いたが、言葉の終るのを待ち兼ね
て、すっぱりと解答を出した。

「ポケがよろしいと思います。チミ
などという己惚れていた過去を想い
出すような名は絶対にいけません
わ。ミケだって猫は連想させますけ
れど、ミチコのミを使う訳ですから
感心しませんわ。それより全然、別
種な生物であることを認識させる上
からも、過去と何の脉絡もなく、下
級動物らしいポケがよろしいのじや



ないでしようか？ ポケ！ ぴったりしているじゃないですか。そうそう、ポケット・モンキーって言葉がありましたわね。イーベラ様のポケット動物、愛玩品という意味合いから、ポケは素敵な呼名ではありませんかと」

ポケという名を決めるのに、ポケット・モンキーを持ち出したのは、御世辞のこじつけのような感がないでもなかったが、下等動物として生存させる点からいえば、過去に未練を残す名は絶対禁物であったし、上品な名やニックネーム的な感じの名は避けるべきが当然であった。イーベラは谷子の熱心さに、ニコリ顔で美眸を微笑で崩しながら、「じゃ、捕獲者の主張を尊重して、ポケと決めましょう。皆様の御高覧が終ったら早速、刷込むことにしますわ。立合って下さいね」と暖い信頼を示す。

相手の進言を諾したようでありながら、自分の意志はちゃんと打出し、相手に喜びと満足を与えるイーベラの上手な扱いである。

谷子は脚を組み替えて、路子の愛らしい顔を支える。

「ポケ！ 素晴らしい呼名ね。御主人様はお前の本質を見抜いていらっしゃるじゃないの。それにポケと明らかに呼ばないで、ポケとされた処などは仲々情深い方よ。名前負けしないように仕込んでお貰い！ お情けに応え

て家畜の務めに励むのよ。いゝわね。さもないと、捕獲者の私の名折れにもなるんだから……」

言外に名折れのようなことをしたら、只では済まないよという強い語気を含ませて、谷子は睨めつけた。

白い靴皮に、ぴったり顎肉をくっつけて、路子は黒い視界で聴いていた。

私の名が『ポケ』 二十一年間、正しく学び、明朗に育って来た私の名が『ポケ』

犬猫にも無さそうな蔑すんだ名。虫けらのように呼び捨てする名。これが気品高く、行い正しい美女に冠する名だろうか？

一言の抗議も一句の反抗も出来ずに命名されて、この青春を薫る人体の代名詞になる。

「ポケ！ 足を揉め！」「ポケ！ 唾を舐めろ！ スリッパを喰えろ！」

豊富な知識や、レガートな、ミュージックを聴取した耳朶に今後、絶え間なく響くであろう。もしも、我が名に非ずとして、耳膜の響きに応じなければ、ポケの肩が、背が、腰が痛烈に受難曲を奏でることになるのだ。

(四) 畜体の解説

路子は、ずずと鼻輪を曳き上げられた。「あっ！」

思わず不安に薄眼が開き、谷子のクレープ

・ジョーゼットの華やかなドレスが映じて、消えた。鎖は、ぐんぐん張って、膝が立ち、腰が伸び、背筋が攀れるまで停まなかった。「あ、ああ」

索条の軋りが止まった時は、路子はやっとの思いで爪先立って、ゆらゆらと喘ぎながら重心を支えていた。

新畜は主人の脇で吊り下って、肉線の態容を見分けされるのだ。

「この牝は、生後二十一才と六カ月であります。日本では上流の成育でありました為に餌の配合が良く、比較的、白い皮肌と良質の内組織、発達した骨格を有しております」

フーガは教壇に立つ教師のように鞭柄で、鼻を吊られた店頭肉牛のような、哀れな肢体を晒している佳美な令嬢の拘束軀を差し示しながら、酷薄な説明を始めた。

「髪は、やや茶味を及びた黒で中程度の硬度をもち、光沢のある繊細な良質毛であります。又、毛根密度は濃く、多量な毛髪を発生させております。頭骸の形体は前額部に於いて広く、後頭部の凸起がなだらかで、頭蓋の円周は正円を描いております。実際の智能テストを行った訳ではありませんから断定出来ませんが、此の形は統計上、概して家畜智能が高いことを表わしております。次は眼ですが、両眼とも一・五の視力を有しており、視角度、即ち網膜に映ずる両端の範囲が広く、

瞳孔の色も澄んでおり、眼球機能の優秀なことが推測されます」

調教師は言葉を固めて、優美な乙女の髪の毛から部分々々を捉えて解剖のような調査所見を述べ始める。懇切な説明は眼から鼻に移り、口、咽喉から乳房に及ぶ。

「胸幅の広さは肋骨の膨らみを意味します。膨らんだ骨の内部は臓器の収納力が大きいので御座います。この牝の内臓は並より大で、牝の見かけより強靱な機能を蔵していることが判断されます。少々の鞭や労働は器官に影響しない耐久性のある良品だと思います」

路子の明瞳は汚辱に濡れる。

医者が意志のない屍体を解剖する時、インターンに解説する言葉のほうに、まだ暖かみがあるだろう。

牛馬の品評会ですら、もっと手厚く、労わった扱い方をするだろう。

それなのに、人間を、それも良識があり、花羞らう妙令の女性の身を、機械工具のような品質調査の言で説明してゆく。

令嬢はたゆとう意識の中で、衣を羽織り、面を被ろうと努める。己れが外観は惨めであっても、心の底に気品を作り、高邁を保持して、屈辱を外らそうとする。神を知らぬ魔教徒どもを憐れもうとする。汝が敵を愛せよ。可憐な乙女は、トラピストのように心の騒めきを鎮めようと努力した。そのように思

考しなければ、死に勝る屈辱を耐える今の路子には人間としての救いが、生きる寄り処が、無かったと云えるのだ。

ああ、美女の中の美女と云われ、叡智のパラと讃えられた比奈地路子である。

それが衆人環視の中で、好奇の注視の下で釈述される。

ああ、世にあれば、羨望と崇敬の注視を一身に集め、街に、オフィスに、清楚なスタイルをなびかすことが出来るのに……。

足が棒のように攀れてくる。鼻孔は知らぬ間に透明な粘液を垂らし、咽喉は獣のように喘いだ。

胸を突かれ、脇腹を掴まれる毎に、意識外に捨てようとしている神経が過敏に揺り起される。

「あっ！」

路子は反射的に身を縮め、刺激を外そうとする。が、とたんに鼻筋が引かれ、痛みは脳髓を鼠のように駆け廻るのだ。

「あ、あっ！あっ！」

足筋は麻痺して、もう感覚はない。否、感覚は外の痺れを内部の痙攣に変えて、体の芯が強烈な疼痛に襲われる。口は無意識に鳴り、呼吸はせわしく肺活量を増大した。

併し、調教師の説明は構わず豊麗な腰から、ぴくぴくと悶え立っている流麗な脚に移ってゆく。

「脚の長さは七十四糎です。ここからこれ迄の長さですが」

と腿のつけ根から踵迄を示して

「身長に比例して、やや標準を上廻る寸法です。通常、この国の奴等は古来から端坐なる生活様式をもっておりますので、坐高に比し脚の短いのが多いのですが、こいつは良好な脚成育をしております。それも腿から膝へ流れる大腿部のライン、踝で締まる脛の線が、仲々質のよい形でカーブしております。驚馬は踝の個所が太く、駿馬は細い。この牝も調教したら相当な疾走力を出し、胸部の大きさから考え合せて、長距離レースにも秀れたタ임을示す競走牝になることと存じます。この秋のダービーには有望な本命馬として出場させられるかもしれません」

路子は競馬を知らない。スポーツ娯楽と云う人もあったが、令嬢は賭事に依って金や時間を浪費することを好まない性質だったし、又それで利得を得ることを余り心よく思っていなかった。

それなのに今、優雅にスカートを捌いていた脚を、駆け出すのさえ慎しみを忘れなかった脚を、その嫌いな競走馬の脚として予告される。

近々に賭事の対象物とされて、裸足で土埃りをあげ、鞭打たれて根限りのレースをしなければならぬのだ。罵声と怒声と喜声の入

り混る中を、一本の人参にも似た褒賞の為に、いや敗退の罰の恐しさの為に、彼女は純美な裸身を汗みずくにして狂走しなければならぬのだ。一匹の馭される馬として……。

乙女の素敵な鼻樑が伸びる。そして、けたたましく悲鳴して、よろめきながら体様を整える。

幾回、繰り返したろう。

眼は渴れて、涙も出なくなった。鳴っていた咽喉がぜいぜいと哽すれてくる。胸の起伏が大きく腹部の凹みが際立って烈しくなった。

併し、そんな家畜の姿を憫れんで眺める瞳は一つもなかった。

皆、嘲弄と蔑すみの眼差で佳身を凝視め、フーガの説明に耳を傾けていたのだ。

只、女主人だけは、弱い牝に舌打ちして、豹のような怖ろしい叱責の眼を向けていたけれど……。

(五) 入墨の肌布

女主人に浴せられている賞讃の言葉を後に優畜は額を床に擦るようにして部屋を出た。

調教師の連絡車は灰色の廊下を走る。螢光灯が尽きると、中世紀の牢獄を思わすような



荒壁の地下道が続き裸電球が網を被って、薄暗く行手を照していた。

荒削りの壁面から、じくじくと地下水が滲

れている。地上の酷熱を考えられない寒気が、この底深い地底の湿気から発していた。

寒い！美しい素肌は、急速に変化した気温

に、ぶると身震いする。
陰惨な道である。飾り一つなく、物音一つしない。

白い畜生の曳く連絡車の轍が、餓狼の遠吠えのように無気味に軋るだけだ。

訝のように壁で弾じき返って、乙女の耳膜へ錐揉むように突刺さる。

地獄への道！、一陣の風にも似た不安が、凍りついた胸を朔風のように通り抜けた。道幅はやや広くなり、車は左手の開放されている網扉を潜って停止した。

「登録印刷してくれ！」

フーガの依頼で、僂^{セムシ}らしい背の曲った矮人が鼻鎖を握る。

乱暴に曳かれて路子は、たたらを踏んで、胸ほどしかない男の後姿を見た。

「まあ、汚らしい男！」

櫛目を知らない蓬髪が乞食のように、ふけにまみれて肩へ被っている。垢光りした麻袋の衣服が処々裂け破れて、塵埃を含んだ汗肌が覗いている。腕も掌も胫も足指も、真黒に煤けて、鼻もちならない悪臭が発散する。

「この男は何だろう？」

路子は耐えられぬ不潔感の中で考える。

この矮人はイーダビーの最下級階層であって、常人の忌み嫌う仕事を職としている人種である。

宗教の国イーダビーでは、不具や業病の多

いこの人種の職業の故として、生業^{ナリワイ}の宿業として蔑^メずんでいるのだ。為に上層との交際が絶たれ、同種の結婚が行われることとなり、遺伝的に又、不具が生ずる。悪循環はその職にも及び、閉め出された階級は他職を会得出来ずに、特異な生業を終来の暮しと孫子の職とせねばならないのだ。

中央に配列してあるレントゲン透視のような電気機械の前に導かれる。
僂^{セムシ}がひよいと振返った。

「きやあっ！」

路子はその顔を見て、思わず金切り声を上げた。手が動かせたら、直ちに眼を覆ったろう。何と怪異な、化物じみた容貌であったとか？

蓬髪は顔半分に垂れ下り、覗いている眼は驚のように突き出て尖がっている。鼻は横に捻じ歪んで、その下の唇が真二つに割れている兎唇^{ウサギノクチバシ}なのだ。

路子は毒蛇を見るような気味悪い恐怖で、ガタガタと震える。

矮人は、その顎を、ぐいと煤けた手で掴んで、機械に押しつける。

「ああ！」

全身、悪感で凝固して、唇がふがふがと鳴った。

両肩と胸が帯革で、しっかり固定される。

背に当たっている部分が押して来て、ぴいんと

胸が張る、最後に凹具で頭を挟まれて、路子は呼吸の他、びくりとも動かせぬ肢体を怪物の前に晒した。

「ひ、ひ、ふふ、ひ……」

ぴったり眼を瞑った乙女の耳に、妖怪の笑いとも、言葉ともつかぬ声が聴えて、ざらっぱい手が鎖骨の下の肌を撫でた。

ぞくっ！ 路子は奥歯を噛みしめて、生唾を呑みこむ。悪感が清冽な肌をざわざわとせせらぎ立てた。

「うん、その辺でいい。今、御主人がお出でになるから、あっちへ行ってる！」

フーガの声が入って、僂^{セムシ}の立去る気配がした。

(六) ロット番号印刷

「ロット番号はこれだ」

フーガは、イーベラと谷子に印刷原稿の承諾を得ると、矮人に命じた。

ロット番号？ それは薬品の箱裏などにスタンブされている数字のことである。製造の日や生産個数を表わし、出荷後の不良や事故発見の手掛りとしている番号である。

佳麗なる令嬢、比奈地路子のロット番号とは？

「YA三六一五四〇二八」

この数字を説明しておこう。

これは初めの三桁の数字が入荷月日を示し

次の三桁が家畜の生年月を表わす。即ち今年
は黒天使教の歴史に依ると、紀元五〇六一年
なのである。だから最初の数字三六一とは、
六一年三月にこの家畜を収容したことを表わ
し、次の五四〇は紀元五〇四〇年五月に、こ
の畜生が生れたことを示しているのだ。

前のYAと末尾の二八は指令書番号であ
り、赤畜の内容を表示する。だから通常はY
A二十八号と呼称されるのだ。

黒天使教徒は、家畜の上胸部に彫られてい
る数字を見れば、畜体の年令が解り、飼育期
間を知ることが出来、赤畜であることが瞭然
とするのである。

その上、イーベラの紋章とフリーガの印判が
スタンプされるから、誰の所有品であるか？
誰の調教を受けたかも判然とするのである。
数字とマークを組みこまれた電気焼付板が
麗美な乳房の上へ下がってくる。

ハンドルを廻して刷り位置を調整した印刷
工は、紙へ刷るのと同じ手際で、無造作に積
桿を引く。文字盤は微動も出来ぬ象牙色の胸
に、ぴたっと吸いついた。

路子ははっと息を詰める。やわらかな膨ら
みが猛々しく起伏して、失われようとする清
澄に狂い立つ執着と悶えを示す。

「ああっ！」

無意識に咽喉が鳴って、脳髄は闇黒を彷徨
した。

ああ、傷一つない清美な肌に、窺い見るこ
との出来なかった芳わしい肌に、家畜として
の数値が墨黒々と刻まれる。

智の乙女が、才の令女が、その人性を弊履
のごとく捨て去られて、畜的価値を刻印され
る。

フリーガの諒解を得た偏癡は、汚れた指でス
イッチをばちんと押した。

「ああっ！」

路子はじり、と熱を胸に受ける。口膜が、
ひくひく、と収斂した……。

顔の支えが脱される。焼付板を離してフリー
ガは正面の幕を払う。

薄ぼんやり開いた臉に、己が映像が明々と
展開した。

幕の向うは一面の鏡だったのだ。

「どうだ、これでその体が所有物だと云うこ
とが、はっきりしたろう！」

己が哀姿は、ぐさっと網膜に突き刺さって
頭芯を、きりきりと揉んだ。

乙女は噴き上げてくる悲哭を呑み下すこと
が出来なかった。

ああ、何と惨めな姿であろうか？

誇った肌の、それも乳房の真上に、YA三
六一五四〇二八とアラビア数字がくねって

いる、いつも会社で帳簿へ記していたと同じ
数の文字が……。

その末尾に照合の認印のように丸で囲んだ

Fと云う字が彫られ、数字の中央上部に、羽
を拡げた鷹に乗って、とぐろを巻く蛇が鮮や
かに烙印されている。そして、その脇に「畜
称ポケ」と……。

ああ毎朝、毎晩、クリムで丁寧に労わっ
ていた肌なのに……。路子は、ぼとぼと頬
へ流れた涙を腮から滴していた。

⑤は調教師フリーガのマークである。鷹に乗
って鎌首を拾っている蛇はイーベラの紋章で
ある。

路子は、この紋章に見覚えがあった。

イーベラが自宅に寄食していた時、トラン
クやハンドバックは申すに及ばず、ブラウス
や下着には刺繍し、指輪には彫印し、コンパ
クトや櫛に至る手廻品一切に刷りこんでいた
マークだったからだ。

路子は、鷹はまだしも、とぐろを巻いてい
る蛇の毒々しさには辟易して、モノマニア的
な悪趣味だと指摘したことがあった。

イーベラはその時、憤然と気色張って、こ
れがイーベラ家の紋章なのだ。自分は祖先の
栄あるこの紋章には誇りを持っているし、又
何物に変え難い愛着感を抱いている。何を根
拠に非難するのかと、鋭く詰め寄ったことが
あった。

今、イーベラが誇り、そして好み、己れが
気味悪く嫌悪を覚えた紋様を血が通い愛しん
できた柔肌に、鮮明にスタンプされて如何と

もなし難いのだ。皮膚組織に食い入って拭い去ることも出来ず、美体の立場を明瞭に表徴してしまったのだ。

路子は己が凋落を、肌同様、心にも刻まねばならなかった。

あの無気味な蛇の印しが、イーベラさんがハンカチやガーターの類にまでつけていた模様が、私の生命の一部である、神経が通い息

づいている肌に入墨される。

私もイーベラさんの持物なのだから、手廻品並の所有品だからなのか？

そして履んだ奴隷フーガの印章も、勝手に定めたポケと云う名までも、あからさまに印される。

私は、私はもう自分の意志では儘ならない身と成り果てたのか……。



神様！お父さま、お母さま、正哉さん！

私は、もう駄目ですわ。呼吸しているこの肌までも、畜生を烙印されてしまいました。

イーベラさんの飼育物となってしまうましたのよ。云いつけを訊かなければ勝手気儘に鞭打たれる畜類にされてしまいましたのよ。私にはお父さまがつけて下さった比奈地路子と云う歴とした名がありますのに、この香り高く保って来た脉を、良識をもって過して来た心と呼ぶに相応しい比奈地路子と云う名前がありますのに、呼ぶに事欠いて出けらにもないポケと云う名を彫字されてしまいました。

イーベラさん達はのっけから私を人間としていなかったんですの。

お父さま！お母さま！正哉さん！助けて、私を此処から救い出して

！お願い！神様！神様に一片の御慈悲がありますのなら、私の居処だけでも、家へ伝えて下さい！

夢枕でいいから立たせて下さい！

路子は心の中で手を合わせる。濡れ瞬いでいる臉の裏へ懸命に御姿を映して祈念した。

一本の葉とてない苦の奈落では、神だけが縋る唯一のものだったのだ。

路子は肩をわななかし、咽喉をし

やくつていたが、やがて身も世もあらぬけに、堰を切つて慟哭した。
鏡を消されて、又、涙の頭骸を挟まれる。
今度はロット番号にアンダーラインを罫くように、円筒形の細長い小さな筒が縫いつけられた。

両端を細い糸で縫合されるのだ。
筒は丁度、銀行でくれる十円玉貯金箱ほどの長さで直径を有し、横に金巻尺のようにゼンマイ式の記録紙が引出せ、つまみを離せば引込むようになっていた。

記録紙と云つても、ビニールを裏打ちした表面が、つるつるした固い紙で、書いたインクは拭けば簡単に消える一種の簡易黒板である。

その記録紙には幾条かの罫線が引いてあり、食餌の水の分量、種類に始つて、鞭打回数、違反種類、調教課目、服従良否から、その反応に至る項目が並び、欄内に書きこめるようになっている。

調教中に気付いたこと、課した事柄をその都度、忘れない内に記し、当日分を最後に纏めて別のカードに記入されるまで、メモの役目を果す器具である。

路子は常に、己れの家畜成績を胸につけていなければならぬ。見知らぬ魔教徒にも一日の行動良否を否応なく見られ、記入され、罵倒を甘受せねばならない。

きらきらと銀色に輝くそれは、勲章のように時には飼畜の功勞を記す勲記ともなり、時には不適合家畜として自らの命を絶つギロチンの鈍く光る刃とも例えられるのだ。
イーペラと谷子は、涙も涸れ果てて痴愚のように呆然と表情を失っている乙女を嘲笑う

臨時増刊号 『青い廃院』

〇〇 内容紹介 〇〇

青い廃院

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥つたレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦虐の妖氣が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかない弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

与那国奇談

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫しの粋夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

ように見ている。

情厚かつた友人が、好意で遇してくれた天資の美女が、一步一步、畜妾化してゆく態を、ニタリと謎の妖笑を頬に浮べながら冷たく眺めていたのである。
(未完)

只今発売中!

定価 二百円 (送共)

巻頭豪華口絵

四馬孝画 「青い廃院」 画廊

- 〇美貌の人
- 〇苦悶する美貌
- 〇踊り責め
- 〇モデル責め
- △変ったレッスン
- △受
- 〇美女誘拐
- 〇屈辱の責め
- 〇廃院の中
- 〇救出
- 〇表紙裏 (目次裏)

本文内容主な項目

青い廃院 (弓沢俊二郎)

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手練りの綱
- 十四、救出
- 十五、勝者の心

与那国奇談 (永山久美雄)

- 女護ヶ島与那国
- 女百人に男一人
- 股裂きになる女
- 孤島の殺人
- 股裂きと火焙り
- 人肉の炙り焼
- 筏流しの刑罰

本誌百号突破記念 懸賞原稿募集 について

本誌通刊第百号突破を記念いたしまして懸賞原稿の募集をいたしましたところ、多数の読者の方から御応募頂き厚く感謝しております。

募集以来、優秀作品は、すでに本誌七月号誌上に花巻京太郎氏の「お町の最期」をはじめとして、八月号では、路加比利氏の「身悶

える妖精」九月号では、沖童彦氏の「草双紙に於ける賣場の研究」を。更に十月号では市田健次郎氏の「女水兵哀史」(女奴隷愛好者の遍歴より)十二月号では、真木不二夫氏の「白い玩具」と近藤一氏の「継母」の二作を発表いたし、三十四年新年号には、蒼野礼氏の「花臂(かでん)」と、毎号誌上を飾ってまい

りました。更に本号に於ては、有瀬流子さんの「十七娘火焙哀話」を掲載致しまして、皆さまの御高評を仰ぐ次第であります。尚、只今手元に届けられた数多くの応募作品を鋭意検討中ではありますが、皆さまをあつと驚嘆させるような傑作にめぐり合いたくないのを残念に思っております。これはと思う優秀作品は逃さず掲載いたす考えでありますから、何卒奮って、傑作を御寄せ下さるよう御待ちしております。

『馬化白書』の

作家へ

馬場好男



新年号の「馬化白書」は面白く拝見しました。私としては同好の士を得た感じで嬉

しく思った次第です。尚、映画「十戒」のシ

前によくKKに書いておられた方に、此の人ならと思える方があり、マゾの方向も同じでないかと思えたのですが、私も又、馬化、即ち女性に馬乗りされる事がマゾの第一条件となっているのです。鞭打ちなどの肉体的苦痛や精神的苦痛も余り好みません。ただ美しい女性にたわむれに組みしかれたり、馬になって這い廻ったりする事にマ

さか恐縮しました。我々マゾ同好の中にもそれぞれの好きずきがあつて、なかなか同じ道のマゾ愛好者はみつからないのですが(女性に苛められたいという原則に交りはないのですが)私には此の鞍良人氏なる人とは、非常に気のあう友となれそうに思うのです。

のゾ快楽味を覚えております。

勿調、美女の足許に伏したり、その足先に接吻をしたりする事なども、たまらないほどの願望ですが、女性に馬乗りにならないたいという事が私の第一条件なのです。

此の点、長靴と鞭のM氏、みずから白痴の様にして女性の下に出るK氏、マゾの英雄というN氏にしても、犬としての願望ありと前に手帖で読んだ様に記憶し、T氏も又、女神の神酒にまっしぐらの様で、同じマゾ愛好者であり乍ら、私とはその好み

が少しずつ違っている様に思えるのです。然しそれは先刻も述べた様に、女王に対するドレイの様な、いいかえれば、フェミニスト的紳士、尚もいい変えれば、マゾ愛好者の方々には違いないのですから、私にはどの方も尊敬し、かつ是非御指導を賜わり度いと考えているのです。

白書の中で、氏は女性が馬乗りになるのは現実には殆んどなく映画か絵でもってしか見る事は出来ないといわれておりました。が、私は現実には数度となくみております。たしかに何処でもという訳にはゆきませんが、馬のりの程度なら多少の演出的計算を入れれば、案外たやすく見る事も出来、かつ自分に於ても実行出来ると思うのですが如何でしょうか。私の経験談その他はだ

んだんマゾヒズム百景に書いてゆくつもりですが、何かの方法で氏とお友達になれば、私の持っている収集物をおみせしてみたいと思います。又、私もいろいろと豊富な氏の資料等を拝見させていただけたらと思っています。私は大体、マゾ関係の文学、それから雑誌等の抜本、絵画、写真にわけて収集していますが写真が一番多い様です。之は自分のものが約半分(勿調、よく理解しあった女性や理解してくれた女性とのもので自動シャッターを使い、ネガは彼女らのために焼却して手許にあるのが貴重な遍歴の記録となっていました)あとはやはり同好の友人を撮してやったものですが、之も勿論ネガはなく、私と友人が一枚ずつお互いに持っているきりです。写真の内容は過半数が着衣のまま、種々の恰好でねている男の上に、馬のりに跨っている女性の姿のものです。

それから日々の新聞などに気をつけていると半裸姿の女性の写真などで、腰かけているものとか、坐っているものなどを、上手に切つてその女性のお尻の上に組みしかれている男の絵をつけたのです。昔、キングに写真を見てマンガ家は考えましたという、写真とマンガのつきあわせの、マンガ頁がありました。が、写真を見てマゾヒストは考えましたという処です。こんなのも四、五十枚からあ

ります。然し何だかんだといひましてもこうした事がヘンタイとしか見られない世であれば、なかなか表に出す事が出来ず、我々も又、KK誌上でこそ喋れますが、社会に出れば、いいえ、たとえ自分の家の中でもこの事はおくびにも出せません。

氏の資料も恐らくそうだと思いますが、私のも絶対に日の目をみず、時たま家人の留守などの時に私がそつとみるだけのものです。

しばらくは或は永久かもしれませんが、とにかく誌上だけでも、同好の友としていただければ幸いです。

私のマゾ友は二人程いますが、之は学生時代からの際きあいでもう十数年の知己ですが、此の我々でも、余ほどの時でない(という事は我々だけにない)マゾの話は出来ません。マゾ愛好であり乍ら、皆、そうした妻が、家庭が、もてないというのも面白い現象の一つです。ですからいきおい、みんながドライ的で、かつ、事務的です。マゾを事務的に扱うと、案外平気で僅か乍ら陽の目をみる事が出来ると感じて来た此の頃です。勿調、家庭を破かいする様な事は絶対、みんなてつつしみ、あくまでも人間的に生活しているのです。勝手な事を申し上げました事を御容赦下さい。

|| 創 作 ||

法^{ほう}衣^いと軍^{ぐん}服^{ふく}

青^{あお}木^き 榎^{えのき}村^{むら}
審^{しん}・画^が 奏^{そう}

一

名波俊二は、一種の放浪癖というのか、目的もなく汽車に乗り気の向いた駅で下車して、そのまま方角も定めず歩いていくということがよくある。独身で下宿住いの彼には、そんな奇行を誰に咎められる気遣いもなかったし、勤務先の商社も社長が父の友人だったから、度々の無届欠勤も大目にみてくれた。た。

その朝も、名波は顔を洗い乍ら急に思ったち、フラリと東海道線に乗ってしまった。

彼がH駅で下車したのは、そこに航空自衛

隊の基地があるからではない。車窓から見つけた、××鉄道のりばという、とてつもなく大きな看板が妙に気をひいたのである。

しかし、私鉄の汚い電車に揺られていくうち、名波は次第に後悔してきた。いつまで経っても電車は、平坦な畑の中をのんびりと走っていただけだ。

とうとう終点に来てしまい、名波は面白くなさそうな表情で駅を出ると、あくびをしながら、待っていたバスに乗り込んだ。

バスはまもなく山にさしかかったが、それまでに三つ四つあった停留所では、一人の乗降客もない。結局、彼一人が一台借切ったよ

うなものだった。

髪をお下げにした女車掌は、運転手の肩をつついてはふざけている。

わけもなく、名波は舌打ちをした。

それが聞こえたのか、車掌は急に運転手から離れると、すました声で

「次は、おとこ、だきでございます——」

といい、すぐに又運転台へ寄っていった。

「オイ、車掌さん。おとこ、だきっていうと、滝があるのかい？」

「エエ、あります」

「ようし。下りよう」

名波は、バスを下りと、まず煙草を啜えて

火を点け、それから教えられた方角へ歩きだした。滝といったって、どうせロクなものはあるまい。それに、秋も深い夕方ときては、唯単に寒々とした眺めにすぎないのだから。ただ、何となく予感がしたのだとは、後になって彼の思ったことである。

滝の落ちる音は、じきに聞えてきた。急坂になった細い道を登りつめると、眼下に青い滝壺が見えたが、肝心の滝は、樹木の蔭になつて、そこからはよく見えない。名波は一寸思索してから、夕闇の濃みはじめている谷へ向かつて、足許を用心しながら下りていった。

大小の岩石がゴロゴロしている滝壺の縁に下り立つと、右手に思ひのほか大きな滝が現れたが、名波が眼を見張ったのは、滝の壮大さではなく、そこに異形の人物を見たからである。

滝の飛沫で、はっきり見定め難いが、男であることは確かのようにだった。

名波が、半ば呆れて瞠めっていると、滝に打たれていた男は、六尺禪一本の姿で岩を伝つてこつちへやって来た。肩巾の広い、ガッシリした体格である。頭は丸坊主で頬骨が高く、頬は削ぎとったように見え、浅黒い、みるからに精悍な顔立ちだった。近づく、遅い胸板には、密生した胸毛が黒々とはりついている。

視線が合うと、男は意外に人懐っこく白い歯を見せた。

「ヤア、とんだところを見られましたナ」

「一寸驚きました——冷いでしよう？」

「まあね、しかし、寒いのは、むしろ出てからですよ」

男は、岩の間から手拭をとって、ゴシゴシと軀を拭きはじめた。なるほど、いくらか顔えているようだ。

「失敬しますよ」

男は、そういうと、濡れた禪をクルクルと解いて、別の禪と締めかえた。それから、ゆつくりとはおった物を見ると、白無垢の袷だった。腰骨の下あたりへ、無造作に帯を巻きつけると、着物の丈が足りなくて毛脛が突きだしていた。

「お見うけしたところ、僧籍の方のようですか——？」

名波は、急に男に興味を持った。

この坊主、どうもただものでない臭いがするぞ。

「ハハハ、ご明察のとおり、この上の寺の坊主です」

「こんなところに寺があったんですか？」

「寺といつても、名ばかりの荒れ寺だが、よかつたら寄っていきませんか。茶ぐらいはある」

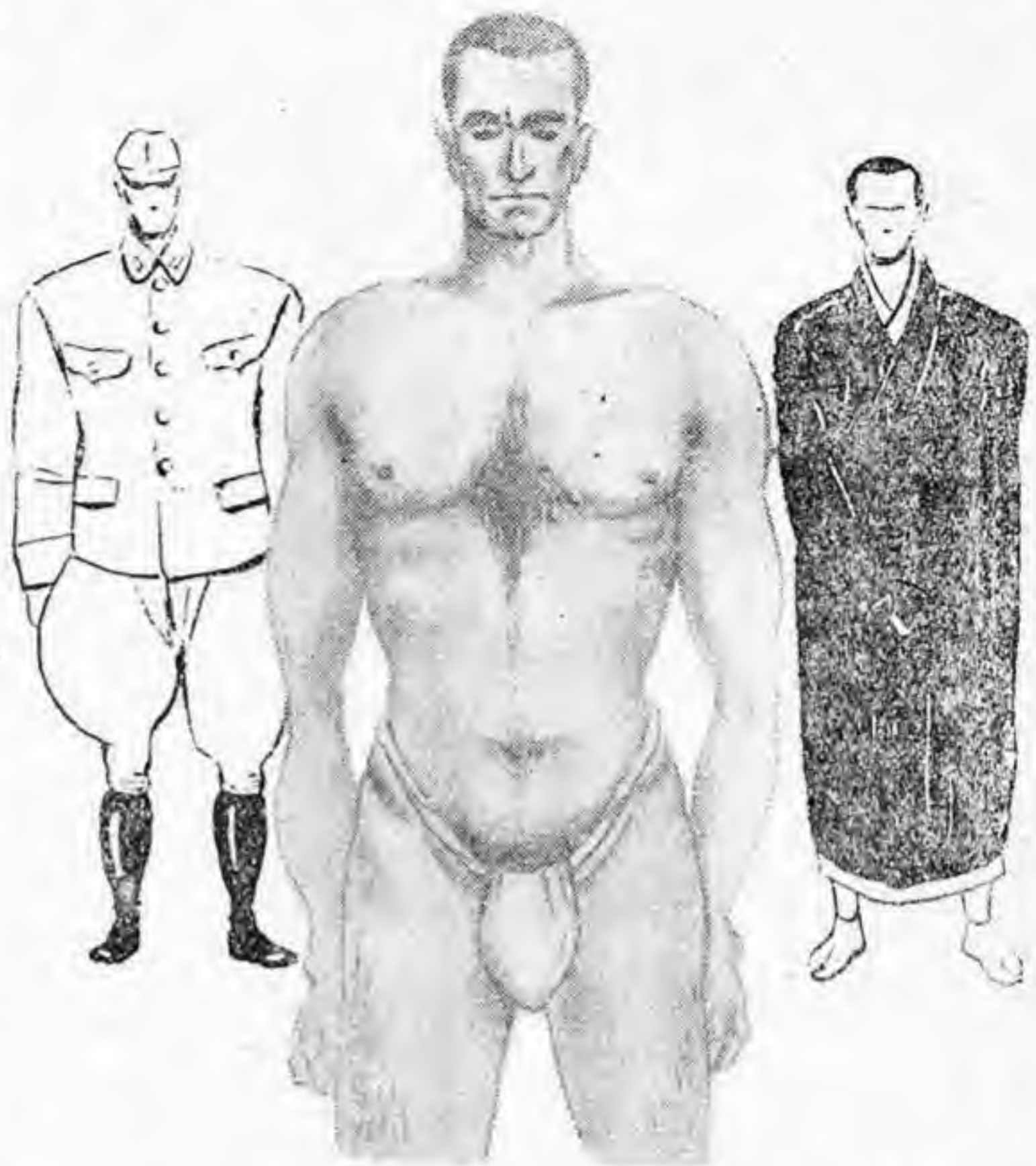
足場の悪い山道を、身軽に登り下りする男

の後に従っていくと、鬱蒼とした杉木立を背にして、壊れかけた山門が見えてきた。

名波は思わず、前を歩いていく男の岩乗な背と、今にも崩れ落ちそうな本堂の屋根とを見くらべた。年齢は、三十七、八になるうか。若者のように艶やかな皮膚をもち、六尺禪をキリキリと締めたこの男が、いかに法衣を纏っているとはいえ、こんな人里離れた山の住職とは、どう見ても合点がいかない。元陸軍大尉、芹沢錬太郎は、表面なにくわぬ顔をしていたが、後から黙ってついてくる青年が内心では、ひどく氣にかかっていた。戦死した部下の中でも、もっとも彼が可愛がっていた小川軍曹に、どこかしら、この青年は似ているのだ。都会人らしい神経質そうな感じは、まるで違うが、秀いでた眉と鋭い大きな眼は、そっくりそのままだった。

ひよっとして、この青年は、小川の血の縁ながる者で、俺の素性を知り、秘かにやって来たのではあるまいか？

芹沢大尉が復員したとき、年老いた父母はあいついで病死していた。彼は、ひとまず姉の婚家へ落着いたが、義兄がうるさく結婚話をもちかけるようになると、急に隠遁生活を始めると云いだした。姉は驚いて制めたが、一度云いだしたらきかない芹沢の気性を知っているの、諦めてしまった。芹沢は、帰還する以前からこの計画があったのだと云い、



知人に頼んで、S県の山の中に廃寺になっていた寺を譲り受け、剃髪して名も陸宇と改めた。

現職の頃、精神統一を目的として写経をやっていた彼は、経典には馴染みがあったが、衣を着ても武張った肩には、陸士出のバリバリだった士官の面影が残っていた。

彼は、寒中でも裸体になって滝に打たれ、

硬派の名を高くした。しかし本当は、彼の真実愛しうる相手がなかったのだといっている。

数年後、芹沢は、自分の部下になった小川を熱愛するようになった。小川は、農村の出身だったが士族の血をひいていて、活潑な中にも、どこかに気品が感じられた。芹沢は小川によって、はじめて新たな世界を知らされ

身を潔めた後、亡き部下の菩提を弔う般若心経を誦えた。そして、読経の前には必ず一人々々の部下の名前が読み上げられるのである。中でも陸軍歩兵軍曹小川操の名を口にするとき、芹沢の顔は苦悶に満ちて、痛々しく歪んだ。

女色を女々しいものとして嫌う、戦国武將の氣風をついでいる士官学校では、芹沢は、もっぱら武技を磨くことに専念して

たのである。

夕の勧行をしたいからと、芹沢が立つと、「私もお伴してかまいませんか？本堂も拝見したいし——」

といって、名波も腰を上げた。

閉めきられた障子が、僅かな光を白々と吸っていて、本堂の中は森沈と静まりかえっていた。

燈明が上げられ、鈍く光る金色の袈裟をかけた芹沢が静かに円座に着く。

名波も二米ばかり離れた後へ、神妙に坐った。

芹沢は名波を意識して一瞬、躊躇ったが、すぐに思いかえすと、何時ものとおりの落ち着いた声で、戦没した部下の氏名を呼び上げていった。

名波は、それを最初、異様に感じ、それから何かを思いついて、ニヤリとした。

軍隊で鍛えた芹沢の声は、朗々として読経を続けている。

名波は、獲物を前にした獣のような眼付きで、陽灼けた芹沢のほんのくぼの辺りを、ジッと覗いていた。

やがて読経が終ると、名波は身をのりだすようにして、

「あの、アルバムのようなのは何ですか？」

と、須弥壇の上の部厚い本を眼で指した。

「ああ、これは、アルバムです——」

「拝見してもかまいませんか?——」

「どうぞ」

芹沢は、仏前から大型のアルバムを下げると、名波に手渡した。

名波が開くと、兵隊の写真が規則正しく貼られ、階級氏名が一つ一つに、墨色も濃い達筆でしたためられてある。その多くは、若々しい顔をしており、半ば変色しかけた写真もあった。

「これは——?」

と名波が顔を上げると、芹沢は無然として

「全部、私の部下であった者達です」

「やっぱり——どうも私は、最初から貴方には何かあると思っていたのです」

そういいながら、名波は慌ただしく頁を繰って、適当な兵隊の顔を探した。そして当然、彼の眼に止ったのが、小川軍曹だったとしても不思議はない。

(これならいける)

そう思うと、名波はワクワクした。

名波が、頁を繰るのをやめ、開かれた頁に小川の写真が貼ってあるのを見た芹沢は、己の想像が当たっていたのに、今更ながら身の緊まるのを覚えた。

「私も、はじめ貴方が滝壺へ忽然と現れたとき、普通のハイカーではないと思いました。

第一、服装がそうではありませんし——そして

貴方の顔が、小川軍曹に実によく似ていることで私は、すべてを諒解したのです」

「すべてを?」

「イヤ、すべてといつてはいい過ぎかもしれませんが。しかし私には、貴方が何の目的で此処へ来られたか、判るような気がするんです」

名波は、此方の計画がすでに先廻りして、相手から切り出されたことに驚きながら、会心の微笑が湧いてくるのを抑えるのに骨を折った。

二

芹沢の手料理で粗末な夕食が終ると、僅かの酒で頬を火照らせた名波は、深刻そうな表情を造って、ジッと芹沢の顔を覗めた。

「芹沢大尉。こう呼ばせていただきますよ。」

そのほうが私にはピンとくるんです。私はね貴方のご推察通り、小川軍曹とは血の縁な者です。終戦の後、私は殆んど血眼になって貴方の行方を探しました。そして、とうとう、こうしてたずねあてることができたのです」

そこまで云うと、名波は反応を見るように、芹沢の様子を伺った。

芹沢は沈痛な面持で深く肯いたが、何もいわず肩先をやや落して、両手を膝に置き、ジッとしていた。

「——小川軍曹と私は、従兄弟同士でした。でも私達は、兄弟以上に親密だったんです。

彼が出征するとき、私は死ぬよりも辛い思いをしました。しかしその後、彼が貴方に大層可愛がられていることを彼の手紙で知ったとき、私は、もっと辛い思いに身を苛まれなければならなかったのです。激しい嫉妬で、私は気が狂いそうでした。彼の戦死の報に接した刹那、私は悲しみより先に何かホッとしたものを感じたくらいなのです。勿論、時が経つにつれて悲嘆は増大し、果ては深く貴方を憎むようになっていきました。私は、必ずしも復讐を考えていたわけではありません。しかし、とにかく何としてでも、貴方に会わなければと思いつめていたんです。私は、ここに来て現在の貴方を知り、その日常を拝見して確かに心に何かを感じはしました。でも、こゝう、まだ、釈然としないものがあるのも事実です。もっとハッキリいうと、私は今の貴方を見ていて、かえって腹立たしい気さえします。貴方が、部下の霊を慰める為にか、あるいは贖罪の為に、自から求めている苦しみに、は当然、限界があるのではないのでしょうか。自から求めるのはいいのですが、他から与えられるんでなければ、真の苦しみとはいえないと思いますね。貴方が、それに耐えられるかどうかは別問題ですが——」

「判りました。私は、もっともっと苦しみに

遭わねばなりません。幸い、貴方がその苦しみを与えてくださるなら、私は喜んでそれを受けたいと思います！」

顔を上げると、キッパリとそいいきる芹沢の真剣な顔付に、名波はチクリと良心が痛んだが、しかし、そんなものは直ぐに消えてしまった。

「さすがは元軍人、立派な覚悟です。しかし私には、一つだけ気にかかることがあります。それは、ひよっとして貴方にマゾヒストの傾向がありはしないかということですね。マゾでは、苦痛を享樂として甘受するので、全く逆の意味を持ってきますからねえ」

「マゾヒスト？ 私は、自分をそんなものとは思わなかったとありませんし、勿論、そうではないつもりです。だが、それは貴方が直接に試してくださいと判ることではないですか」

「よろしい。やってみましょう。しかし前もって断っておきますが、私にはサディストの素質がありますからね。どんな残酷な仕打ちにでるかわかりませんよ」

「それは、覚悟しています。私も自分からいいたしたからは、耐えられるだけ耐えてみせます」

一種の昂奮状態が、昂然として芹沢にそういわせ、彼は胸を張って、名波を真直ぐに見た。その気魄に、名波は一瞬たじろいだだが、勢いに乗じて立ち上ると先刻、眼に止めてお

いた土間の隅の荒縄の束を掴み、威丈高に呷鳴った。

「さア、裸になるんだ。おまえは、未だ縄目の恥というものを知らないだろう。これから、それを、トックリと味わせてやる。いいか、おまえは、まず屈辱というものがどんなものか知る必要があるんだ！」

芹沢は、いわれるままに衣を脱ぎ、禪一本になると、胡坐をかき手を後に廻した。

その手をグイと捻じ上げて、ギリギリと緊縛し、更に胸へ廻してグルグルと巻き、縄尻を取ると、名波は、

「サア、立てッ」

といいざま腰を蹴上げる。

そのまま本堂へ引かれていった芹沢は、須弥壇の前の柱に、みじめな恰好で括りつけられた。正直のところ、これから名波にどんな目に遭わされるのか、全く予測のつかなかった芹沢は、戸惑った眼を名波に向けた。まのわるさが、次第にはっきりとした屈辱感の形となつて、五体に伝わってくる。

素早く腰からベルトを抜いた名波は、いきなり、それを芹沢の胸板に叩きつけた。

かわす術のない芹沢は、僅かに肩の筋肉を硬くしただけで、痛みに耐えた。鞭は、容赦なく次々に飛んでくる。芹沢の腹は波を打ち始め、折々「ムー」という呻きが、齒の間を洩れた。

名波は何を思つたのか、不意に鞭を捨てると、「今度は後だ」といって縄を解き、芹沢の軀を後向きにすると、柱を抱かせ、再び動けぬように縛りつけた。又、鞭の乱打が開始される。広い小麦色の背中を、縦横に傷つけた鞭は、やがて臀部に集中し、見るまに皮膚が赤く変じてきた。

やっと鞭を置いた名波は、柱から開放した芹沢を、やにわに床へ突き倒す。一度仰向けに転った芹沢は、足で俯伏せにされた。手足を束縛されているから、されるままになっているよりしかたないのだ。

名波は、燭台から蠟燭を抜き取ると、火を点じた。横眼でそれを見た芹沢は、はじめて恐怖を感じた。戦線で、捕虜の敵兵を面白半分に烙り責めにした下士官の話が脳裡を走り思わず声を上げそうになった。

名波が、狙いをつけて蠟燭をかしげると、熱い蠟涙がツツと滴って芹沢の臀部に焼きつく。反射的に臀筋が硬直し、「つう……」と口の中で声を押える。それは熱いというよりは、痛いという感じで、しかも無数の針で刺されるような鋭い痛疼だった。始めの一滴、二滴は、それでも我慢ができた。次第に頻度が増し、量も多くなると、それでなくては、鞭でさんざん痛めつけられている芹沢は直接、火で烙られるような熱さと痛みで、耐え難い苦痛を訴えた。蠟涙の落ちるたびに

芹沢の全身に痙攣が伝い、自由を奪われていながら、苦しさのあまりのたうとうとする力で、位置が少しずつずれていく。もう、どんなに泳えようと我慢しても駄目だった。

「熱いッ！ アッ、熱ッ。ああッ……熱い。たまらん。や、やめてくれッ。熱い。頼む、もう、勘弁してくれ！ 熱、熱、熱いイ……。たまらん。助けて、助けてくれエ……」恥も外間も忘れて芹沢は、泣声に近い悲鳴をあげ続けた。

その声は名波の加虐欲に、かえって一層油を注いだ。蠟燭責めの予想外の効果に、彼はもう夢中だった。

「意気地なし！ それでも、元大尉か。ハハハハ、先刻の広言はどこへいった。喚け。もっと喚け！ 子供のようになんて声を上げて泣いてみる。そうしたら、赦してやるぞ。ハハハ……」芹沢の眼には涙が滲んでいる。しかし、子供のようになんて泣けといわれても、そうはいかなかった。

「泣け！ おいッ、泣かんか——フン、泣かないのは、まだ責苦が足りない」とみえる。よし、元大尉のおまえが、ワアワアと大声で泣くまで責めてやる。いいな」

肉体の痛苦に加えての難題に、芹沢は本当に泣きだしたかった。それなのに、どうしても泣けないのだ。泣かなければ、この責苦がどこまで続くか判らないと思うと、恐怖と焦躁

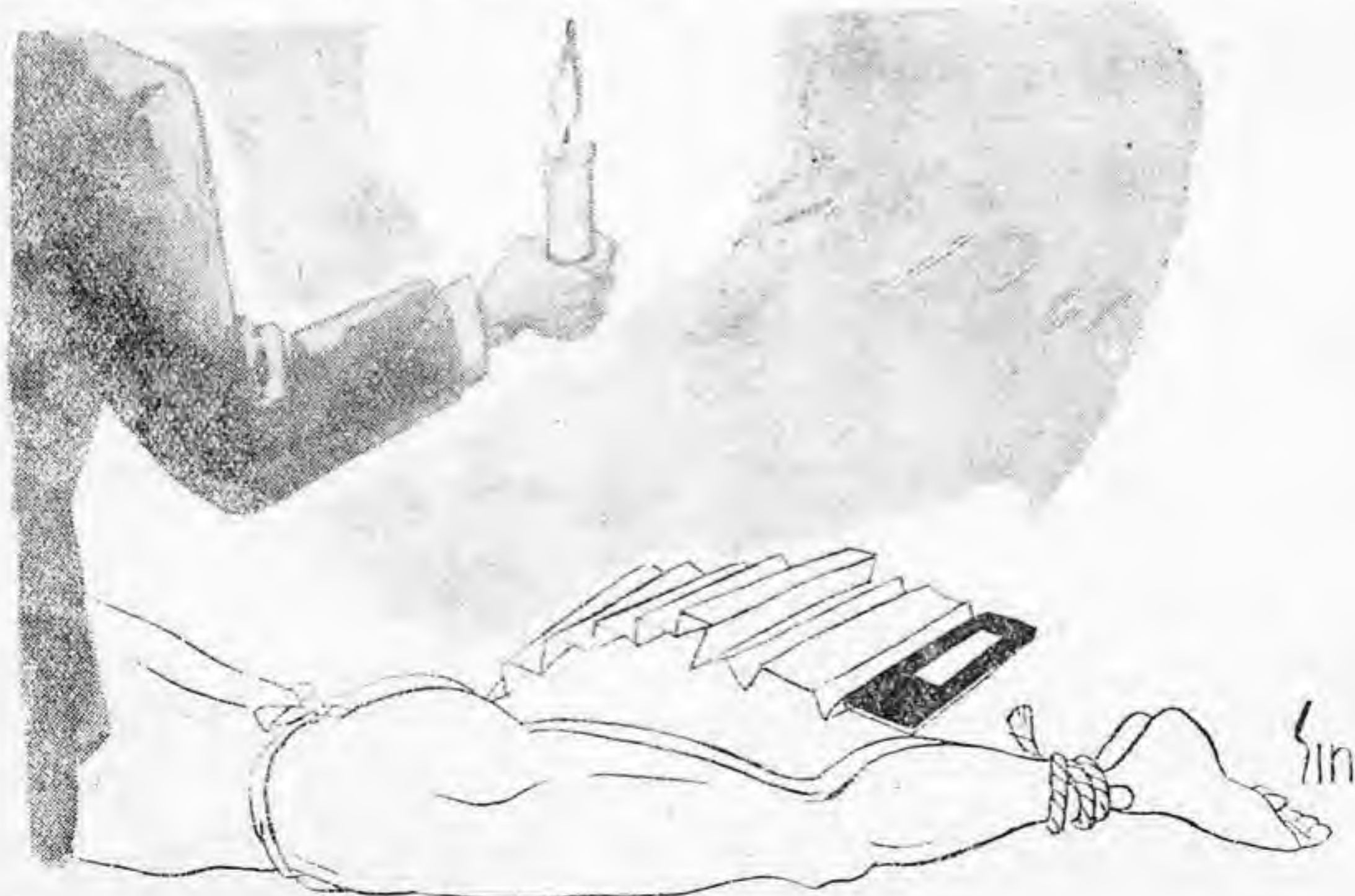
で脳が錯乱しそうになる。

パタンという物の落ちるような音が、夢中である筈の名波の耳朶に、不思議にハッキリと聞えた。蠟燭を握ったまま振り返ってみると、須弥壇に乗っていたアルバムが床に落ちていた。先刻、名波が蠟燭をとったとき、知らずに触れて落ちかかっていたものだろう。

名波は「チッ」と舌打をしたが、もうかなり短くなっている蠟燭の火を吹き消すと、床にへばりついて虫の息で喘いでいる芹沢を、しげしげと見下した。その体軀が逞しく堂々としているだけに、それは一層みじめで無残な有様だった。

急に手足の縄を脱されたので芹沢は、むしろ呆然としたが、名波に助けられて起き上がると、グツタリと胡坐をかき、慚愧に耐えぬようにうなだれた。

「大尉、イヤ、芹沢さん。貴方には負けましたよ。軍人の



単純さを、とかく輕蔑していた私でしたが、
こうまで素直にでられると、とてもかなわな
いって気がします。全く敬服しました」

名波は、そういうながら、言葉の調子が、
いつもの癖で揶揄的になるのを、そのときば
かりは苦々しく思った。

芹沢は、虐待の後の疲労もあったが、それ
よりも気持の上ですっかり参っていて、ひど
くしよげかえっていた。

「——面目ない。私は、まだまだ駄目です
な。忽ちねを上げてしまつて——全く、恥し
い!……」

「芹沢さん。もう何もいわないでください。
私こそ、悪戯半分に貴方を試そうとしたこと
を恥しく思います。ただ、このことだけは信
じてください。私があんなに残酷だったの
は、貴方が好きになつてしまつたからです。
私の病氣なんです。好きになると、その人
を苛めなくなるのが——」

「名波さん。じゃ、貴方は、私を憎んでるん
じゃア……?」

「少くとも今は——憎んでなどいません」

名波は、芹沢の視線を避けるように、ツと
立ち上ると、アルバムを拾つて元の位置へ置
いた。

三

二つ並べて床をとり、横になつてから、も

う、どのくらい経つたか判らない。眼が冴え
て寝つかれずにいる名波は、やはり眠れない
らしく、寝返りばかり打っている芹沢に声を
かけた。

「痛むんですか——?」

「いや、なに、私は、どうも寝つきがよくな
いほうでネ……」

それきり、二人は黙つてしまい、名波は、
いつか寝入ってしまったが、ツツと眼が覚め
てみると、隣に寝ている筈の芹沢の姿が見え
なかった。はじめは便所かとも思ったが、仲
々戻つて来る様子がない。妙に氣になるので
起き上ると、本堂のほうへいつてみた。必ず
そこにいるという確信があつたわけではなか
つたが、やっぱり芹沢は本堂にいた。しかも
薄い衣一枚で、端然と坐禪をくんでいたの
だ。

名波は、声をかけようとしたが、思いかえ
すと、ソツと聲音を忍ばせて部屋に戻り、寝
床へもぐり込んだ。

翌朝、名波が起きると、芹沢の布団は既に
かたづけられていた。そこいらを探してみた
が姿はない。名波は思いついて、滝壺へ下り
ていった。

早朝の冷氣の中で、芹沢は、ちようど禪を
とりかえているところだった。

名波をみると、芹沢は、

「ヤア」

といつて笑つた。

その軀に、まだ生々しく残っている鞭の痕
を、名波は、まぶしげに見た。

寺へ向つて歩きだすと、名波は、やっぱり
黙つていられた。黙つた。

「昨夜、夜中に本堂で、坐禪をしていられま
したね。悪いと思つたが、見てしまいまし
た」

「見られたのなら仕方ありません。恥しい話
ですが、私には煩惱が起つてしまつたんで
す。貴方と小川が一つになつて——嘲笑つて
ください。私には、邪まな心が起つてしまつ
たんです……」

「芹沢さん。私は、すぐに帰ります。私はも
う貴方の前にいるのが辛くなりました」

「名波さん。氣を悪くされたのでしたら、赦
してくださいよ」

「いいえ。私は、貴方とお交際する資格のな
い人間です。では、失礼します。お元氣で
——」

二、三步先へいきかけた名波は、急に立ち
止ると、振りかへつて、

「芹沢さん。もう一言いわせてください。貴
方は、本当にいい方です。しかし、こんな生
活はよくありません。貴方の為にも、そして
亡くなった部下の方達も決して喜んではいな
いと思います。東京へ戻つていらつしやい。

蠟 人 形 に 想 う

生 地 野 透

江戸川乱歩の推理小説の中によく「蠟人形」なるものが登場した時代があった。蠟人形……まことに妖しげな響きを持つ語である。私はまだ、純然たる蠟人形にお目にかかったことはないが、蠟人形と云うからには材料は勿論「蠟」であろう。適度の微温を与えれば容易に溶け、容易に凝固する性質上、ある程度の細工も可能であろうし、小説中のそれは屍を蠟で固めたもの、蠟で包んだ死体」が大部分であった。

蠟責めは今更云々する価値もない程、使い古された方法であって、本誌の読物中にも蠟は責めの花形として度々使用されている様であるが、増刊号（サド特集号）のグラビアで紹介されている愛川悦子嬢の豊満な柔肌に、はりついた蠟滴の光沢には、非常に魅せられるものを感じて、乱歩先生が「蠟人形」を登場させた理由が納得出来たような気になったから妙なものである。「死体を蠟で包む」など物騒なことは考えられないが、十二月号の辻村隆氏の「蠟

涙」に出てくる様に美女の柔肌を蠟で、生地の見えなくなる迄覆いつくしてしまったら、と考えてみる。にふい光沢を放って蠟衣が息づく様は見事であろうと想像する。先頃の新聞紙上で、アチラさんの男性歌手が、透明のナイロン製のタキシードを着込んで舞台に立ったとか紹介されていたが、透明よりも半透明の方がより魅力的に感じるのはなからうか。

肌に喰い入る縄に自由を奪われ、蠟の衣裳をまとい悶える美女の肢体。足の裏をくすぐられて跳くと、ポロポロと衣裳がはがれ落ちて生肌がのぞく。新たな蠟滴がその破れをつくらう。その刺戟に跳く。また他所が破れる。それをつくらう……。

大体蠟涙は、増刊号でも解説されている様にさして熱いものではなく、傷も痕もつかぬものだけに、よき理解者、よきパートナーさえ得れば、恰好のプレイになるだろうと一人妄想を逞しくしている次第である。

私は、こんな人間で、いつもチャランポランなことばかりいつていますが、これだけは真実な言葉です。貴方が戻って来るまで、私はいつまでも待っていますよ。では、さようなら」

名波は、一気に山を駆け下りた。そして、バスの停留所に着くと、ホッとしながら、呟いたのである。

「チエッ。俺もヤキが回ったかな……」

彼には、小川との関係が全然でたらめだったことだけは、どうしてもいえなかった。それが何か、後味の悪さを残しはしたが、しかし彼には、やっぱり計算があったのかもしれない。

名波俊二は、バスに乗ってから、もう一度呟いたのである。

「彼は、必ず東京へ戻って来る。そうして、俺の前にひざまずくに違いないさ」

「ハア？」

来る時とは別の車掌が、何か云われたのかと思っただろう、名波の顔を眺きこむ様にして訊き返した。

「エッ？ いやー何でもないんだ」

彼は、考えていること見透かされた様な気がして、ドギマギしながら手を振った。

照れ蔭しに窓外に向けた眼に、畑の畦に立ってバスを見送っている青年が映った。その顔が、写真の小川の様に見える——

(完)

仇討奇譚

姫塚物語

吉備与二郎

昭和の始めだった。W大のN教授が備北古墳調査に来られた時、ある農村から銀の十字架——といっても、それは胸に下げたものにしては大きくて、多分キリシタン武者の兜の前立したものだと思われるものを発見されたことがあった。このあたりは、かくれキリシタンのいた地方で、今でも「クルス谷」の地名を残している。

そのクルス谷の一角に小さな古塚がある。里の人はこれを「姫塚」と呼んで、次のような哀艶な物語を、四百余年後の今に伝えている。

天正の中期——中央では羽柴秀吉と柴田勝家が覇を争っていた頃だ。この備北の星居山

城に拠っていた星居式部種則は、一族こぞって熱烈なキリシタン信徒であった。

領内にかかる異分子がいるのは統治の妨げと、山陽道の太守、小早川左衛門隆景は、領家城の城主で豪勇を以って鳴る乙部大膳景高を大将として、二千余の兵を進めて、星居一族に対して直に改宗、服従を迫った。

しかし、種則を中心とする星居一門は、主従一体、殉教の誓も固く、この申出を断ったので、ここに両軍の間に、数旬にわたる攻防の火蓋が切られた。

激戦十数日、城は厳として抜けぬのに焦り立った乙部大膳は、この上は損害を顧みず、力攻めに乗り破れとばかり、黒みわたって寄

せかけた。防戦久しく死傷もおびただしい城方も、今日を最後と思い定めて城主種則以下、全軍こぞって城外に出て、矢筈川の急流を後にあてた背水の陣をしいてこれを迎えた。

辰の刻（午前八時頃）からはじまった戦さは午の刻を過ぎても勝敗は定まらなかつたが、さすがに衆寡の勢敵し難く、夕暮の近づくにつれて城方の敗色は次第に濃くなつて来た。

これを見た大膳は、この機をはずすなど、総予備隊を繰り出し、戦い疲れた城方を矢筈川の岸に追いつめて、一人も洩らさじと攻め寄せた。軽るきも二カ所、三カ所と手傷を負

った城兵は、己れの傷口の血をすすり、のつたる鎧を踏み直し、血糊にすべる槍の柄を握り固めて、目に余る敵の大軍に割って入り、向う相手を嫌わず、火水になつて決戦する。

ここに城主種則の息女に、真里姫とよぶ今年二十才の美姫があった。姿は吉備の山路に咲く姫百合とたたえられたが、心は深くジエウスの神の、みおしえを信じ、領内の農民からは女神の如く慕われていた。その上、優しい人柄にも似ず弓馬槍剣の道にも達し、いつもの戦に真先かけて敵をなやまし、その華々しい武者振りは、あっぱれ殉教の花よとうたわれていた。

今日の戦にも、一方を守つて名ある敵將數人を倒した真里姫は、緋威の真中を白糸で十字に威した鎧に、銀の十字架の前立打った兜という晴れ姿。背には紺地に白く十字を染め抜き、竿頭に銀のマリヤの像を付けた指物をさし、月形十文字の手槍を提げ、馬は倒れたので徒立となり、死馬の屍を一つ二つ積み重ねて楯とし、手練の槍を揮つて敵をえらまず突き落とし、内兜に乱れかかる黒髪をかき上げて、キッと向うと見るとき、真里姫の働きを心憎しと思つたか、黒系威の鎧に、銀の輪抜きの立物した兜、栗毛の大馬を躍らせて、大身の槍を上げて真っ向からおめきかかったのは、寄手の大将乙部大膳であつた。

真里姫は少しもさわがず、これを弓手に受け、馬上の豪敵に高々と槍を掲げて立ち向う。大膳も自在に馬を乗り廻し、この健気なる若武者を討ちとめんと、二人の決戦は目も覚めるばかりであつた。が、大膳が一喝叫んで突き下ろした槍先は、真里姫の兜の鉢金に砕けよとばかりハッシと当つた。そのはずみに忍の緒はプツリ切れ、兜は脱げて姫の丈なす黒髪はハラリと崩れ乱れた。

思いもかけぬ女武者に、ハッと驚いた大膳の構えに隙を生じたか、すかさず突き上げた真里姫の槍先は、電光の如く大膳の鎧の草摺のはずれから下腹へ、ゲサツとばかり突つ込んだ。

「アッ」

と、のけぞつた大膳。鞍に余まされてドツと落ちたが、さすがに痛手に屈せず、はね起きんとするのを、起しもたてずとびかかった真里姫は、右手指を抜くより早く大膳の草摺をたたみ上げ、下腹の辺りを二刺し、三刺し、グイ、グイとえぐつて、左の拳で大膳の兜を叩き落とし、忽ち首をかき切つてすつくと立ち上つた。

白く十字を威した鎧の胸板も血しぶきに染まり、組打のため桜色に上気した真里姫の顔は、ひと際冴えた美しさに輝くばかりであつた。

勝色に見えた寄手も、大将を討たれてからは支離滅裂、戦場に踏み止まろうとするものもなく、潮の退くように引き上げた。崩れ去る敵兵共を追うでもなく、大敵を倒して一息ついた真里姫。あたりを見廻すと、たそがれ迫る戦場には死屍累々と横たわり、吹く風さえも血をふくんで生臭い。敵は敗れて退いたものの、味方の大半も討死して戦力は殆んど尽きたらしい。川の向うには母や弟妹の待つ星居山城があるが、その城の運命もいつまでか？敵將の首を提げ帰つて手柄を誇る身でもないで、せめて今日の戦さの思い出にもと、大膳の腰にあつた大脇差、一尺八寸赤銅作りを抜取つて己れの腰に差し、手槍を提げて唯一人、ここ、かしこに野火の燃え上る戦場を後に、川を渡ろうと一步を踏み出した時

「オーイ、待てーッ。オーイ」

と、後からかすかな呼び声。まだ舌だるい幼い声に真里姫は、

「ハテ？何人！」

と振りかえれば、歳の頃はまだ九才か十才ばかりの少年が、袴の股立とつてわらじばかり白鉢巻も凛々しく、一刀の柄を押えて、息を切らして走つて来る。あち、こちに横たわる血まみれの屍も目に入らぬか、黒髪振り乱してキッと見返える真里姫の血染めの姿にも恐れもせず、幼い声をふるわせて、

「待てッ、待てッ。につくいかたき、父様の

たかき、逃げるなッ」

と、腰の一刀引き抜くと、
「えいッ」

とばかり切り付ける。真里姫は驚きながらも体を開いて槍の柄で流れる刃を押え、とさらに声を沈めて、

「お待ちなされませ。戦場で父のかたきよばわりは不審の至りでございますぞ」

と、たしなめると、少年は
「イヤイヤ」

と、激しく頭を打ち振って
「何でもよいわ。わしは父様のかたきを討つのじや。おのれが父様のかたきじやと聞いて駆け付けたのじや。さあ、尋常に勝負せい」

と、再び切っただかかろのを、姫は槍で軽くあしらいつつ、

「ただ、父上のかたき、ただけではわかりませぬ。御身は誰殿の御子息でございますぞ」

「オオ、わしは今日の寄手の大将、乙部大膳の子……」

「なんと、乙部殿の御子息と

か？」

「そうじや、大膳の子、大吉じや。味方の者

の話の聞くと、父様はマリヤ観音の指物した敵の手にかけられたとか。そなたの其の指物がのがれぬ目じるしじや。これでもかたきでないというかつ。サア。父様のかたき覚悟せい」

と、三度振りかぶって切り付ける。その手をしっかりと握り止めた真里姫は、
「エエ、放せ放せ」

と、狂い廻る少年の顔を、つくずくと眺め、

「まだ幼い少年の身なるに、父を討たれた無念さと、仇を討ちたい一念から、恐ろしい戦場へ駆け付け、当の敵に切りつけた健気さよ」。

真里姫は、大吉の幼い顔がまことの弟を見る如く、いじらしくもいと思う。

今日の戦さに多く討たれた味方は、再び起つことはおぼつかないであろう。寄手は敗れたとはいえ、名に負う小早川の精鋭、殊に城攻めのはかばかしからぬを聞いた小早川隆景は、幕下第一の勇将、井上伯耆守春忠の三千余騎に命



じて後詰ごづさせるとか。この大敵が到着したならば、痛手を受けた味方は一とたまりもあるまい。いずれは戦場の露いづれと消える身の、同じ散るべき命ならば、この健気な少年の手にかかって孝心を全うさせてやろうか。

と、覚悟を定めた真里姫はたけり狂う少年に向って、こ

と静かに、

「大吉殿、いかにも妾は御身の父上、大膳殿を討ち取った当のかたきでございます。この上は妾の命は御身に差し上げます程に、その刀でにつくい父上のかたきの首を美事お切りなされませ」

と、ニッコリ笑って、どっかと坐を占めると、大吉はうれしげに、

「ようし、その首を打ち落して父様のかたきを討ち、母様への家づとにするぞ。につくいかたき、覚悟せい！」

と、一刀をふり上げれば、真里姫は泰然と首をさしのぼして、

「さあ、すっぱりと……」

と、目を閉じる。

「エイッ」

と、振り下ろした大吉の刀は、小腕の悲しさか手許てしこは狂うて、鎧の袖にガッと音しては



ね返った。

「これは……」

と柄手を取り直し、又も烈しく切り付けたが、少年の刃は鎧の威毛さえも傷付けない。「お待ちなされ大吉殿。切り易いようにして進ませう。それに父上は、ただ首を切られて去せたもうたものではございませぬ。下腹のあたりを二度も三度も突かれ、えぐられて、お果てなされたのでございます。御身も同じかたきを討たれるならば、父上と同じところを突いて、えぐっておやりなされませ。妾の体は御身にさし上げます。さあ、こうして御身の心のままに……」

と、いい乍ら、手早く鎧を脱ぎ捨て、小手をはずし、袴の紐をゆるめ、鎧下を取ると、白の肌衣の襟元がゆるんで、ふくよかな双つ

の乳房があふれるように見え
て来た。次いで左右の襟に手
をかけてグッと掻き寛ろげ、
そのまますっぽりと双肌を押
し脱ぐと、白く肉付き豊かな
肌は、見るも快いばかりあら
わになった。尚も双手をかけ
て袴の前をグイと押し下げ、
美しくほえんだ真里姫は、
まことの弟に話しかけるよう
に、

「さあ、大吉殿。父上のかたきでございませぬ。手許を狂わさず、しっかりと突いて来られませ」

と、いいながら充分にあらわした。

「大吉殿、妾がそれッと声をかけて、ここをふくらましたら、力一杯突いて来られませ」

「ようし、突いて行くぞッ」

と、大吉は身構える。

真里姫は胸を張り、ゆったりと構えて「この所のはずさずに、充分にお突きなされませ。それッ」

大吉は一刀に力をこめて、張り切れんばかりにふくらんだ下腹を目掛けて、

「エイッ」

と、突いたが、どうしたことか刀はツルリと滑って表皮さえ破れない。アッと驚く大吉。「これはいい甲斐ない。それ今一度、力をこ

めて、大吉殿ッ」

励まされて大吉は二度、三度、力の限り突き立てたが、ツルリツルリと上皮を滑るだけ、かすり傷も付かない有様に、大吉は刀を投げ捨て、

「父様のかたきを目の前に見ながら、かたきが討てぬ……」

と、身を震わせて口惜しがる。困じ果てた真里姫は、捨てた刀を取り上げて大吉の手に握らせ、

「大吉殿、このところが一番突き易うございます。さあ、このあたりを力一杯……」

と、慰め励まし乍ら、フト気が付くと、何のこと、大吉の刀は刃引きであった。幼い身にあやまちあってはと、父母の心づかいから刀の刃が引いてあった。

「オオ、この刀は刃引じや。大吉殿、これでは何も切れませぬ。さて何としたものでございましょうぞ……」

真里姫も途方に暮れる。大吉は悄然と涙ぐむ。

「どうしたら潔く大吉に討たれてやれるか。

己れの手で己れの命を絶つことは、いと容易いことではあるが、宗門の掟は自殺を許さない。又、大吉にとっても、当のかたきは幼いながら自分の手で討ちたいであろう。時を移せば日が落ちる。……」

しばらく考えに沈んでいた姫は、キッと顔

を振り向けると、

「オオ、よいものがございました」

と、傍にさしおいた大膳の大脇差を取り上げて、

「大吉殿、ここに父上の形身の一刀がございます。長さも重さも、御身には手頃の得物。この一刀で思うままお突きなされませ」

と、いいつつ、大脇差をスラリと抜いてかざし、夕日の影うつろうて玉と乱れ輝く刃をジッと見つめて、

「美事な業物でございますのう。さぞ、よい切味でございましょう。これなら父上のかたきも討てましょう。が、その前に大吉殿は幼い身、とても妾の首は持てますまい。かたきを討取った証拠の品を、母様にお持ち帰りなさいませ。その品は……」

と、刃を返えすと黒髪をひと握り、ザックと削ぎ取って、指物の先につけた銀のマリヤ像と共に、手早く懷紙に包んで大吉の傍においた。

「大吉殿。これで仇討の証拠の品々も、ととのいました。この上は一刻も早く御身の手にかかって……」

と、いいつつ大吉の手に大脇差の柄を握らせ、にこやかにほえみ乍ら、「さあ、いよいよ父上のかたきをお討ちなさいませ。この鋭い切尖を妾のここに突き立てて、力一杯、右に切り裂くのでございますぞ」

と、左の手でやさしく大吉の背中を抱き寄

せて、ブルブル慄える大吉の右手に握った脇差の冷たく鋭い切尖を下腹にあてさせた。グツと反り身になって前にせり出した下腹は、硬い切尖に押されて次第に凹んで行く。大吉は、そのあたりを瞬きもせず見つめていたがこれ以上、力を加えるとグツと白い肌が破れると見ると、大吉の腕から力がだんだんと抜けて、柄を押す手がゆるんで来た。

「大吉殿、どうなされましたぞ。ここでゆるめてはなりません。御身の力で突き立てねば父上の仇討にはなりませんぞ。さあ、もう一と押しグウと……」

と、励まして姫は、左腕にかかえた大吉の背中をグイと前に引き寄せると同時に、大きく息を吸い込んだ。

その刹那！ プツツと音がして、そこにチクリという疼痛があった。切尖は遂に下腹の表皮を破ったのだ。

大吉は思わず、アツと叫んで柄手をゆるめる。姫は己れの下腹に突っ込まれた切尖、次第に皮を破って肉に喰い入る切尖を、むしろ快いと感じ、同時に大吉の押す力のひるむのを感じると、思わず強く大吉の右腕をつかみ、左手で大吉の背中を尚も前にかき寄せて「浅い。まだまだ、浅い。大吉殿、ここで力を抜かずに、グツと一と思い突っ込まれませ」

と、いいつつ、姫は大吉の腕をつかんだまま、グッ、グッ、グッと押す。それにつれて刃はツツ、ツツ、ツツと盛り上った下腹の肉に少しづつ喰い込んで、その度毎にキューと絞るような痛みを覚える。姫は、厚くたたえた脂肪層を突き透して激痛を伴う快感を味わいたく、もっと深く切突をめり込もうとするが、突き刺さうとする姫の力に強く抵抗するものがある。それは無意識に刀を抜き取ろうとする、いや、刀を突っ込むまいとする大吉の力である。姫は思うまま刃が、肉に透らぬのがじれったく、大吉の手を振り払って、己の力で思う存分、腹を裂いて腸をつかみ出したい衝動にかられるが、それでは大吉の仇討にはならない。飽くまでも大吉の気を励まし、力を添えて本意をとげさせねばと、姫は声を張って、

「大吉殿、ごらんなされませ。かたきの腹に突き立てましたぞ」

と、豊満な肌に突き立てられた脇差を示す。だが突き立てた、といってもまだ二分か三分ばかり、血の色さえも見えない。

この上は大吉の手によって、もっと深く刃を突っ込み右へ一文字に切

り開き、鳩尾のあたりから、縦に紅十文字を描かせた上、乳の下に止めの一刀をえさせるのが順序であるが、何といっても大吉はまだ幼い。これ以上一文字の、十文字のと、切る

ことは不可能だろう。せめて大吉の手で、表皮だけでも切らせてから後は、我が手で散って行くでしょう。宗門の掟に反いてインヘルノへ落ちようとも、敵の息の止まるを見せ



て、かたきを討ち留めたと安堵させてやりた
いものと、思いを定めた真里姫は、顔色も蒼
ざめて半ば失神したような大吉の、背中をい
たわり抱いて励ましつつ、少年の腕を右の掌
に握り込むように持ち添えて、突き刺った切
尖をそのままゆるゆると右へ引いて行く。表
皮を切るだけなので鈍い振るような感触があ
るだけで、堪えられぬような痛みでもなく、
むしろ快い痛感であった。

右の脇腹までは引いたが、浅い傷口からは
細い糸のような血が、ほんのりと右一文字に
滲んでいるだけである。この時、大吉の手に
は力は全く無く、ただ人形のように真里姫の
意のままに刀の切尖を動かすだけであった。
切尖を右脇で止めさせた姫は、握りしめた大
吉の手から脇差を取って、丁寧に刃を拭って
鞘に納め、

「大吉殿、これは父上の形身でもあり又、こ
れを持ってかたきの体を切りましたと、母上
の許へ御持ち帰りなさいませ」

脇差を大吉に渡して坐を正した姫は、大膽
の首をかき切った一刀を引き抜くと、鎧の上
帯でキリキリと刃の半ばを巻き締めて、右手
にしっかりと握った。

「大吉殿、これから父上のかたきの腹を、御
身の望み通り切って進ませましょう。宗門の掟
にそむくのは心苦しいでございますがせめてク
ルスに形に切りさばいて、インヘルノへ落ち

る罪滅しと致しましょう。御身も幼い身なが
ら武家の子息。妾の最期をよく見とどけて、
母上へお話しなさいませ」

大吉に最後の言葉を述べると、姫は改めて
左手で、ゆっくり大きく撫でる。今までのじ
れったさをかなぐり捨てて、己れの刃で己れ
の腹を存分に切り開く快さにゾクゾクしながら、
中巻した右手指を取り直し、白く光る切
尖を、ここぞと思う処へピタリと当てた。冷
たい刃の味と共にしびれるような快さが下腹
の奥の方から湧き起って、息つく度に切尖に
チクチク当る肌には快い痛みが感じられる。
ウームと大きく息を吸い込んで、その息を
グツと詰め、ウンと丹田をふくらませ、少し
上体を反り身に盛り上った乳房を張ると、下
腹に当てがった切尖を直角に取り直した。

傍に大きく目を見開いて、息をひそめ、拳
を握りしめて見つめる大吉の顔に、やさしい
目なごしを注ぐと、ニッコリ華やかな笑みを
送って、姫の右腕に力が漲った。紅い唇がグ
ッと引締ったと思うと、はちきれそうな下腹
は切尖に押されてグーツと深く凹んで行く。
姫は中巻を握る拳に力を加え、じれったそう
に腹をひとゆりゆすると、ブツツという鈍い
音と共に、刃はスーッと腹に吸い込まれた。
軽く目を閉じて右拳に力をこめ、ぐっと押し
て行く。姫の黒髪が少し乱れて、ポツと上気
した頬に散りかかった姿は凜として美しい。

刃が下腹の肉へ突き透おされる感触は、まだ
思った程痛くはない。皮を破り、肉をこすつ
て、にぶく捻るような快い痛さを伴って、二
分、三分と切尖がはい入る。この時、姫は微か
な気合と共に、鳩尾に突き刺された刃を急に
グツと一寸ばかり深く突っ込むと、鋭い刃先
は右の方にグイと向けかえられた。姫の奥歯
がかすかにキリリッと二度ばかり鳴ったが、
まだ呻き声も洩らさず、眉もひそめない。こ
うした間にも姫の心は大吉に注がれていた。
それは大吉に恐怖を感じさせてはならぬとい
うことだった。姫の命の絶たれるまでは、出
来るだけ安心させてやりたいと思い定めてい
たので、姫の表情は平素と変らない。腹を裂
きつつも努めて自制して、態度を崩すまいと
しているのだ。

刃は姫の意志のままに冷酷に、ツイ、ツイ
と上腹の肉を下に向って割いて行く。一たん
凹みに切り込んだ切尖は、その奥に深く突っ
込まれ、そのまま下に厚く豊かな肉を裂いて
押し下げられ、姫の念願通り美事なクルス型
を劃した。血は縦横の傷口から垂れて下腹を
真赤に染めている。

刃を抜き取ってホッと一息した姫の唇は、
呻き声を洩らさじと固く閉じられているが、
弾んで来る息のため小鼻がせわしく動いてい
る。しかし姫は落ち着いて、豊かに張った厚
い胸の弾み切っている左の乳房を、血に染ん

だ左の掌でギュッとつかんで、右手の切尖を乳の下に当て、大きく一息ついてグツと押しした。血がタラタラと白い肌を伝う。姫の顔も白く冴えて異様な美しさを見せている。そのまま力をこめてえぐるが如く押し込んでいたが、刀の柄口が乳の下にかくれると、一際激しく血がほとばしって、姫はしずかにうつぶせになって、真赤な血潮の海の中に、真白い美しいからだを横たえた。

唯一人、野火燃える戦場にとり残された大吉は、姫が息を引き取った直後、大吉を探し求めて来た家臣らに迎えられて無事、味方の陣に帰えり、母に形見の品々を渡し、真里姫の最期の様子を、幼い舌で人々に語り聞かせた。

星居山城は、姫の予想通り、数日後に押し寄せた井上春忠の大軍を迎えて奮戦し、一族悉く教に殉じ、城は破却され、この辺りのキ

リシタン宗徒は根絶された。

しかし、真里姫の純情と、その雄々しい最期を開き伝えた大将井上春忠は、姫の最期の地に小さな塚を築いて、その冥福を祈った。

これが今に残る「姫塚」である。

歳移り人去って、春秋四百年。今は「クルス谷」を訪う人も稀であるが、草深い谷間に優しい雌松数株に護られ、哀しくも又、美しい物語は、永遠に伝えられるであろう。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに三十五号を数えました。が、現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
 復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
 復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽
 復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
 復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
 復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽

復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
 復刊第8号 (昭和31年9月号) 二百円
 復刊第9号 (昭和31年10月号) 二百円
 復刊第10号 (昭和31年12月号) 二百円
 復刊第11号 (昭和32年1月号) 二百円
 復刊第12号 (昭和32年2月号) 二百円
 復刊第13号 (昭和32年3月号) 二百円
 復刊第14号 (昭和32年4月号) 二百円
 復刊第15号 (昭和32年6月号) 二百円
 復刊第16号 (昭和32年7月号) 二百円
 復刊第17号 (昭和32年8月号) 二百円
 復刊第18号 (昭和32年9月号) 二百円
 復刊第19号 (昭和32年10月号) 二百円
 復刊第20号 (昭和32年11月号) 二百円
 復刊第21号 (昭和32年12月号) 二百円
 復刊第22号 (昭和33年1月号) 二百円
 復刊第23号 (臨時増刊号) 定価二百円
 復刊第24号 (昭和33年2月号) 二百円

復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
 復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
 復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
 復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
 復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
 復刊第30号 (サド特集号) △売切▽
 復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円
 復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円
 復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円
 復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円
 復刊第35号 (増刊号青い魔院) 定価二百円
 復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円
 復刊第37号 (昭和34年1月号) 定価二百円
 復刊第38号 (悦唐小説と緊縛写真) 三百円

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一緒に求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方には、キヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

◎本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品◎

十七娘火焙哀話

有 瀬 流 子

この婆めが長年お世話申し上げた近江屋の一人娘の雪江様と申されるお嬢様が、去んぬる弥生三月のはじめ、桜の花もまだ咲きそめぬという頃に、御城下はずれの刑場で、火焙りなどと申す、まこと、あの世の地獄を眼のあたり見るような惨い刑におかけられなされて、十七になられたばかりのうら若い身空を、惨たらしくお果てなされたのでござります。

それと申しますのも、この国をお治めになり御領主様と仰がれるお方様が、あのような忌むらしい性をお持ちのところへ、お嬢様が世にも類な思われるほどのお美しいお可愛らしいお姿のお生まれつきであられたばかりにでござります。それにいたしましても、この婆は迂闊にも、殿方と申せば、女子衆をただもう可愛がってのみ愉しまれるものと、この年令になるまで疑うところもなく思いこん

で来ましたが、左様なことでは決してなく、殿方の心の中には、どなたにも多かれ少なかれ、御領主様と同じような性がひそんでおつて、中にはお女子衆をいじめられて悦ばれるお方もあるものだ、と近頃になって知り申した時の驚き、また呆れもいたしたのでござります。婆が、このようなことを早ようから存じており、また、あの御領主様が至って御好色の上に、そのような性の殊におひどいお方様と、もっと以前から耳にいたしておりますれば、あの日、なんでも、お美しいお嬢様のお姿を、御領主様のお眼に入れるようなことを、この婆がいたしましょう。かえすがえすも残念至極のこととて、口惜しさと、今はあの世におられますお嬢様への申訳なさに、婆は未だに思い出す毎に、この胸がはり裂んばかりになるのでござります。

あの日、もう半年にもなりますかな。狩からお城へのお帰りの道すがら、御領主様が御休息のため、ふと近江屋へお立寄りになられたのでござります。不意のこの御領主様のお成りを、店の面目といたくおよろこびなされた近江屋の御主人夫婦が、それでなくても町方の者達から、薬小町などと持て囃されなさるほどのお嬢様を、「やれ、この振袖は地味だ」とか「髪形の、もったなんとかならぬか」とか、御自身達も大騒ぎされた挙句、いやが上にも美々しく装わせられて、御領主様の御接待にお出しなされるのでござりました。婆とて、この時は、御主人様御夫婦同様、よろこびこそすれ、決して、これがお嬢様の禍の因よきになろうとは露ほども悟らず、あらかじめ御領主様を覗き見されて、そのいかつい赧ら顔に恐れられ、御接待のため御前にお出になることをおむずかりのお嬢様を、すかせるようにして、お鏡の前にお坐らせ申し、婆めは後に廻って、お髪をすいて進ぜたり、帯の結び恰好をなおして差上げたりなどして、お支度をお手伝い申したのは、お嬢様の乳母の身として、当然のことにはござりましたけれど、思えば、婆は罪深いことをいたしましたものにござります。あのときお嬢様がおむずかりになるまま、御領主様の御前にお出しするようなことさえいたさなければ……。

またしても詮ない年寄の愚痴にはござりますが。ここで、お嬢様が薬小町の由来を申し上げますと、近江屋が代々、江戸、長崎までも手広く商いをいたす薬問屋でござりまして、その一人娘で、その昔の小町も斯くやと思われのお美しさのお嬢様が、薬小町とお呼ばれなさるのは、至極もつともなことではござりましたが、そのもつと深い仔細は、それは薬のような小町という意味で「お嬢様のお美しいお顔を拝むだけで軽い風邪や腹痛なら即座にふっ飛んでしまひ、薬を飲んだと同じ効き目がある。近江屋の娘は、まるで薬のようだ」という噂が近江屋へ薬を買いに来て運よく箱入娘のお嬢様のお姿を垣間見た、町方の若い衆の間から起ったものにござります。

さて、御領主様の御接待に出られました、お嬢様の御首尾は上乘にござりました。その日の狩が惨々の不興とかで、大いに斜めであられた御領主様の御気嫌も、お嬢様を見られてからは、俄かに改まり、暫しの御休息という始めのお触れ込みも何処へやら、酒肴の支度まで命ぜられる有様で、たにお嬢様は生れて初めて他人様のお酒のお酌を、慣れないお手つきでなされるのでござりました。婆は次の間に控えて、お嬢様が御領主様へ万一の粗相があつてはと心配しながら、お嬢様のなされようを、じっと見守っていたのでござりますが、さすが大家のお育ちだけに、そのお振舞は作法になつた、まことに品のあるお麗わしいもので、下座で御覧の御両親様にも少なからず御満足の体と見受けられたのでござりましたが、婆はその中に、ふと不安な胸騒ぎをおぼえはじめたのでござります。それは、お嬢様をお眺めになる御領主様の大きい顔の眼の中に、いつしか、淫らなような妖しい光りが宿っていることに気がつきはじめたからにござります。それはあながち、お召し上りになつたお酒のせいだけでもありますまい。御領主様はそのような眼で、お嬢様をじろりじろりと御覧あつては、何かを、しきりと考え込む風をなされるものでござりますから、薄気味悪くおぼしめたのか、お嬢様は面おもてをふせて婆の眼に、はつきりとわかる怯え方をなされるのでござりました、これは、とんだことになつた。御領主様のあの眼の色はただごとではない。きつと御領主様は、お嬢様に御執念なされたのだ。ひよっとすると御領主様にはお嬢様を、おのぞみになるのではあるまいかという婆のおそれは、その日は何事もなく、むしろ御主人様御夫婦には御領主様のねんごろなるお言葉をいただきなされて、この上ない面目をほどこされるほどの中に過ぎましたものの、はや翌日には、婆の案じていた通りの不幸がやって参つたのでござります。お城から御領主様のお使と仰せられるお侍のお方が、近江屋に見えられたのでござります。さては昨日のおもてなしへの重ね

ての御領主様が有難いお礼のお言葉でもと思われて平伏なされた御主人様御夫婦へ御使者が口上は、御領主様がお嬢様をお部屋様に御所望という、御主人様御夫婦にとって意外の仰せにござりました。

これには御主人様御夫婦も、まさかこんなことになるうとはと仰天あそばされるし、お嬢様は御領主様のいかつい赧ら顔を思い出されて、肩を震わせてお泣きになる始末でござりました。一体、如何いたしたものであらうと御主人様夫婦には、ほとほと思案に困じ果てられるのでござりましたが、それでも最後は、町内のお年寄衆とも御相談なされた上、ともども恐る恐るお城へ、

「雪江めは当家にとって、かけがえのない一人娘の後継者。それに、すでに夫婦の約束をいたさせし者もおりますれば……」

と、お断わりの御返事をなされるのでござりました。事実、お嬢様には、お互いに想いをかけ、末は必ず夫婦にと御両親様もお許しの、松吉と申す姿も心も優しい若者があったのでござります。松吉は奉公人とはいえ、近江屋の御主人様の遠縁に当る者で、幼い時、両親を亡くしましたので近江屋へひきとられ、真面目によく働いて来た若者で、その頃は、いずれお嬢様の婿となり、近江屋の身代をも構えて行かねばならぬ身とて、御主人様のお云いつけにより、長崎へオランダとやらの薬の勉強にやられていたのでござりますが、あと一月か二月が間に帰って来て、お嬢様と祝言を挙げるばかりになつていたのでござります。

さればこそ、お嬢様が泣いて御領主様の仰せ出をお拒みになるのも、げに無理からぬ話で、婆はそんなお嬢様のお心をお察し申して、御主人様がお城へなされたお断わりの御返事が、つつがのう円く、御領主様のお聞き入れになるところとなるよう、ひたすら神仏にも念じたのでござりますが、一日おいて、また近江屋に立った御使者の今度の申され条は、

「その方の娘御にすでに婚約の者があるからには、たつて余が側室

にとは申さぬが、近く婿をも迎える其方の娘御ゆえ、良き妻となる日のための行儀作法見習に、城中へ来り、せめて余の病弱の奥方の側にあって、日常の世話をしやうて呉れぬか」

との趣きにござりました。この一応は何だか筋の通つたような云い分に、このたびは御主人様御夫婦にもお断わりの云い種がみつからず、町内の年寄衆も斯く再度に亘る御領主様の仰せを、尚この上お断わりしては、どのような難儀がふりかかるやも知れぬと、暗に自分達の方にも累が及ぶのではないかと怖れる風に申されるので、今はせん方なく、御主人様御夫婦には、お嬢様へ両手をつかんばかりにして、お城へ上られることをお頼みになるのでござりました。それでもはじめの中は、首を横に振られるお嬢様ではござりましたが、根はお優しく、それにお孝心もお深いお方だけに遂には、おうなずきになるのでござりました。もとより、奥方様のお側に仕える御奉公なら、よもや、あの御領主様のお手が吾が身にのびるようなことはあるまいと思われた上での御承知でござりました。

それから二、三日経って、お嬢様がお城へ上られる朝、それまでの町方風の髪形、お召物、帯の結び方から、お城奉公にふさわしく、がらりと武家風のそれらに変えられたお嬢様には、また一段と氣品が加わり、大名の御息女とも見紛うばかりで、お嬢様をお小さい時から見なれて来た婆も、思わず眼をみはる、それはそれは初めて見るお嬢様のお美しさにござりました。お嬢様は御仏壇の御先祖様を拝まれた後、御両親様にも暫しのお別れの、いいえ、これは永の別れでござりました。後にそうだったのでござります。御挨拶をなされるのでござりましたが、お泣きになるようなことはなされませなんだ。泣かれたのは御両親様の方でござります。それでも、お迎えの御駕籠に召され、御駕籠が歩みはじめると、お庫の前に立つてお見送りの御両親様へ、御駕籠からお身体を乗り出すようにして、ずいぶん尽きぬお名残を惜しまれたのでござりますが、これも

今にして思いますと、正しくあの時、虫がお嬢様におしらせ申したのに違いござりませぬ。

お城へ上られたお嬢様からは、何故か一月も経つというのに、御両親様へ何のおとずれもござりませず、御両親様は口では「便よりがないのは無事でいる証拠」と、強い事を吐かれるのでござりました。が、内心の御心配はさぞかしのことであろうと、この婆にはよく察せられるのでござりました。

さりながらお嬢様の身を案じますことでは、この婆は御両親様にも、さらさら劣るものではござりませなんだが、何ぞはからん、実はもうその頃お城のお嬢様の身には、大へんな災難がふりかかっていたのでござります。そして間もなく、近江屋を一日にしてすっかりつぶしてしまった、あの嵐のような騒ぎの日が、晴天の霹靂と申してもなかなか愚かに、やって参ったのでござります。

朝まだきでござりました。急に表通りがざわつきはじめ、そのざわつきが段々お店へ近づいて来るなと思う間もあらせず、どやどやと二十人ばかりの御役人衆が、お店の中へのり込んで来られたのでござります。先頭のお頭らしいお侍のお方は、白鉢巻に白のたすきがけ、大小を腰にさされて手には十手という、ものものしい扮装でござりましたが、そのお方が、これは何事ぞとあわてふためく奉公人達を尻目に、土足のまま奥へと進まれ、やはり何事ならんと驚いて、奥から飛んで出て来られた御主人様へ、出会頭に「その方がこの店の主人か」と、威猛高に尋ねられた上で申されたことこそ、婆が、思わずこれは夢のことか現のことかと耳を疑うことどもにござりました。あのお優しいお嬢様が、こともあろうに御領主様を殺害しようとなされて、御領主様の御寝所へ火をつけなされたというのでござります。

「あの雪江めに限って」 「あの娘がそのような大それたことを」「何かの間違いでござりましょう」と、口々に狂気のように叫ばれ

る御主人様御夫婦が、忽ちのうちに、容赦のない役人衆の手で、縄目を受けられ何処へやら曳かれていかれるのでござりました。

後になって聞けば、重き罪を犯された人の親御様のこととて、重き咎めをこうむられ、お痛わしや、その日の中に、唐丸籠とやら申す罪人駕籠に乗せられて、遠い他国へ追い払われなされたとか。

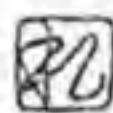
残る奉公人達にも「それぞれの縁を求めて思い思いのところへ直ちに散り申せ」という、きついお達し。あまつさえ近江屋の家財道具は、すべてお上のお取上げになるところとなり、昼過ぎには、もうお城から多勢の人夫達が、車を何台もひっぱってやって来るという手廻しのよさ。やがて箸一本、茶碗一つにいたるまで持ち出され、空屋同然となり申した近江屋の正面の大戸に、太く長い青竹が二本、斜めに組み交されるのでござりました。それは夕刻のこと、まことの日は、一日中すさまじい、つむじ風のようなものが近江屋を吹きまくって去って行ったと申してもよろしく、その日の近江屋界隈の騒ぎは一通りのものではござりませなんだが、それでもなお、御城下の端々にまで騒ぎが及ぶということはござりませなんだ。

それが、それから四五日も経つと、このたびこそ御城下の隅々まで、寄るとさわると、人々がそのことを噂し合う大騒ぎとはなったのでござります。あの美しいお嬢様が、御領主様を殺害しようと火つけをなされた廉で、御城下を引廻しの上、御城下はずれの刑場で聞くも恐ろしい火焙りの刑によってお仕置になるといふ、お布れの立札が、御城下のあちこちに、見られるようになったからでござります。

何しろ火焙りなどと申す極く重い刑が行われますのは、この国ではもとより初めてのことで、隣りの国々にもそのような例しは聞きませぬところへ、お焙り殺されになるお嬢様が、薬小町とうたわれるほどのお美しさのお方とあっては人それぞれに、「まだ十七と聞く

が可哀想なものじや」と憐れんだり、「はてさて、あの虫をも殺さぬ顔の美しい娘が」と怪しんだり、「前代未聞のことよ」と驚いたり、中には婆の痛む心もしらずに、「若い美しい女子の火焙りとは、さぞかしの観物」と面白がったりなどして、様々に喧しく申されるのも、また宜なことではござりました。

火焙りの刑で思い出すのでござりましたが、婆が娘の時分、遠いお江戸で八百屋お七とやら申した美しい娘が、恋しい男に会いたい一心から己が家に火を放ち、それが江戸中の大火となって捕まり、お奉行様のお裁きを受けた後、哀れ火焙りになったという話が、この御城下にも流れて来、当時も、ずいぶん人々の口端にのぼったものでござりましたが、その時は婆も娘心から、そんなお七に同情して、火焙りという刑の恐ろしさは、さておいて、お七の恋の心意気とも云えるものに、あこがれたように感じ入ったものでござりました。そう云えば、このたびのお嬢様は年ばえも、あの時のお七の、それに勝るとも劣らずとは、これも宿世でのお二方の約束事なのでござりましょうか。さわあれ、お嬢様はこの婆が手塩にかけて、吾が子以上にお慈しみお育て申したお方なのでござります。そのお方が、頭に描いただけでも身顚いのしたくなる火焙りの刑に処せられなさるのでござります。あのお美しいお可愛らしいお嬢様が、燃えさかる火に生きながら焙られてお殺されになるのでござります。婆の気にもなって下され。あのお優しいお嬢様が、御領主様を焼き殺そうとなされた。そしてそのため、逆にお焙り殺されになる。そのようなことは嘘じや。何かの間違いじや。あのお嬢様は、火つけなどという恐しい事を、ましてや御領主様を殺そうがためになどと、されるお方でも、出来るお方でもない。婆は悪い夢を見ているか、それとも他人様にかつがれているかのどちらかなのだと、その頃、一時は氣も変になり申して、病の床につく身とはなったのでござります。



申し遅れましたが、婆は近江屋があんなになり申してから、幸いにも同じこの御城下に、娘が婿と一緒に住んでおりましたので、その家に厄介になつていたのでござります。そんな或る日でござりました。お嬢様のお城での御朋輩で萩江様と申されるお方が、お宿下りの節に、この婆めを密かにお訪ね下さいましたのでござります。そして、誰にも口外して呉れなと前置されて、婆めにお聞かせ下さいました。



あの御領主様は、お嬢様がお城へ上られた、ほんの当座こそ、神妙にしておられたのでござりますが、早や、十日も経つか経たぬかというのに、もう、さしたる御用もないのに奥方様のお部屋に行かれ、そこで大人しくお勤めの中のお嬢様に、隙をみて云い寄られたそうにござります。お嬢様は、よもやと思われていたことだけに、その驚かれ方は大へんなものでござりましたが、それでも言葉丁寧にお断わりなされたのは、さすがお嬢様と婆は感じ入ったのでござりますが、でも、これはいけませぬ。このような、女子の大事の際は、わざと下衆にかまえて、薄ら笑いの一つも浮かべ「おたわむれを」とか「お冗談を」とか、はすっぱに云って軽くそらせば、御領主様にも意外に思われて、これは買被ったと、或はそのとき限りのことで済んだやらも知りませぬものを、それをお嬢様のように真向からお正直に、しかもお淑やかにおことわりなされたとあっては、あんな御領主様ならずとも、殿方の心は、火に油を注がれたように反って想いはいや増し、何としてでもという気になるものなのでござります。とは云え、まだ十七の箱入娘のお嬢様が、そのような手管を心得ておられれば、それは不思議というものにござります。

その後、御領主様がお嬢様へ云い寄られることは、日を追う毎に益々執拗となるばかりで、果は奥方様の見ておられまする前でも、平気でお嬢様を口説かれるという有様で、それをお忪えになるお嬢様のお姿は、萩江様には必死のものと見えた由。かかるとき、お嬢様のお心を励ましていたものは、きつと、かの松吉が恋しい面影にござりましたでしようが、奥方様にもお嬢様を御領主様からお庇いあつてこそ然るべきなのに、もともと病弱で、奥方様とは名ばかりのお方様ゆえ、ただ哀しそうなお眼で眺めておられたただけとは、なんとも不幸なお嬢様にはござりました。それにしても、このような難儀に会いながらも、そのことをお家へおしらせされなかつたのは、御両親様を心配させてはとの、お嬢様のいじらしい心根と、婆



は推しはかるのでござります。

さて、どうしてもおなびきにならぬお嬢様に、御領主様が下世話に申す、可愛さ余って憎さが百倍のお腹立をなされたのか、いえ、いいえ、そんなお気持ちにも少しはなられたかも知りませぬが、やはり、あの御領主様は、お嬢様が意に従われないうまま、美しいお嬢様のお身をおたのしみになることが出来ませぬ、そこで、よしそれならば、美しいお嬢様のお身体を、思いきり痛めて、存分にたのしんでやろうと決心なされたのに違いござりませぬ。そうでなければ、後で申し上げますような鬼畜の振舞を、お嬢様にされる筈がござりませぬ。それに萩江様の申されるのには、御領主様は以前からそういうことをされては、およろこびになる質のお方で、例えば、御城内では、腰元衆の些細な落度も決してお見逃しにならず、きつと折檻なされ、御自身で弓の折れを振るわれることもしばしばで、また折檻なされる腰元のお方が、お美しければお美しいほど、折檻の度はきびしく、そんなときの御領主様のお顔は、あの赧ら顔を一層赤くさせられ、大きい眼はぎらぎらと光り、にんまりと笑ええ浮かべられて傍目には気味悪いほどでござりました由。されば、そのような御領主様が、あんなにも美しくお可愛らしかったお嬢様く

どのような嗜虐の思いをめぐらされたかは、お嬢様があのような無残なお最期をお遂げになられた後にこそ、婆などの少しは思い当るところとなつたのでござります。

ともあれ、それはお嬢様が城へ上られてから一月も経た或る晩にござりました。御領主様の御寝所近くから火が出たのでござります。火は幸いと申すより、不思議なほど呆気なく消されたのでござります。火が場所が場所とて一大事となり申し、御領主様も「かかるところから、火が出るのは奇怪じや」と仰せられ、お自ら御詮議あそばされるのでござりました。すると、どうでござりましたよう。火の出た場所から、お嬢様が日頃ご愛用になっていた簪が見つかったそうではござりませぬか。そこへまた、火の揚る少し前に、御寝所の前のお庭を、逃げるようにして横切つて行かれた、お嬢様のお姿を見かけたと申し出る宿直の小姓まで現われて来る始末に、お可哀想にもお嬢様に火つけの嫌疑がかつたのでござりました。

早速、曳かれて来られたお嬢様を庭に引据えられると、御領主様は、なんと理不尽にも、頭から

「そちは、余が近頃、そちに言寄つたことを根に持ち、また、うるさいことにも思い、余さえ亡き者にすれば、そんなわずらわしさは除けるとの浅薄な女心から、余を焼き殺さんとして余が寝所に火をつけたのであらうが」

と、決めつけられるのでござりました。

あまりのこの仰せに、胆をつぶさんばかりとなられたお嬢様が、それでも懸命となられて、

「簪は鏡台の曳き出しに入れておいたものが、昨日の朝方、見ますと、なくなつておりました」

「今宵は気分もすぐれませぬため、早ようからお寝みをいただき、火事騒ぎも知らぬほどでございました」

と、申開きになるのでござりましたが、御領主様は、それにはい

つかな耳もかされず、ただ、もう

「素直に火つけを白状いたせ」

の一点張りで、遂には、

「どうしても云わぬのなら仕方がない、そちの身体に尋ねるまでじや」

と無体な仰せをされ、夜はもう丑の刻も近いというのに、お嬢様を御城内の拷問部屋とか申す恐ろしい部屋に曳くよう、御家来衆に下知なされ、御自身の指図で、身の毛もよだつような拷問にかけられることになされたのでござります。あのお美しいお可愛らしい、そして優しいお嬢様をでござります。

御城内の拷問部屋と申しますのは、これも萩江様のお話でござりますが、昼もなお薄暗い部屋だそうで、ここは他国の隠密とか忍びの者が、御城中にひそみ込んで見つかつて捕つた際などに、したたか者の彼等の口を割らせるところで、それだけに部屋の中には、見ただけでも気の弱い者なら、気を失いそうになる笞打ち、石抱き、逆さ吊り、海老責め、箱責め、その他、火責め、水責めと云つた恐ろしい拷問用の道具が揃えてあるのだそうでござりますが、先にも申しました通り、隠密とか忍びの者とか云つた輩にだけ使われるので、それゆえ平常は滅多にこの部屋は用いられませず、ましてや、お嬢様のような女性のお方が、このお部屋で拷問にかけられあそばすなどということは、全くもって初めてのことでござりました由。

ここで、もう皆様にもお気づきのことと存じますが、御寝所の火事騒ぎのことも、お嬢様をその犯人に仕向けられたことも、お嬢様を拷問にかけられることも、それから、後にお嬢様を火焙りの刑に処せられたことも、みな御領主様が仕組まれた筋書き通りのことなのでござります。一夜、御領主様が、側近く仕える小姓や、意地悪の老女達と、おかたらいあって、そのような悪企みをなされていたという御城中での、ひそかなる囁きを萩江様は、その後、或る折

に、どのような折であつたかは、婆には申されませなんだが、耳にされたのでござります。

それを聞きました時の婆めの憤り、おのれ悪魔の御領主め、お嬢様を焙り殺すというようなことを本当にしてみよ、この婆は年とつたりとは申せ、老の身に鞭うってでもお江戸にはせ下り、柳生様とやら申す剣術の強い立派な殿様について、女ながらも修業いたした上、必ずやお嬢様の仇を討って進せんと、まあこうまで本気で思つたものにござります。

お話をとお嬢様の身に戻しますと、その晩、拷問部屋からは、夜のお城の中は静かでござります故、お嬢様の魂消るような悲鳴や、泣き喧がれるお声が、萩江様のお寝みになつておられました枕辺まで、微かながらはつきりと聞えて参り、ために萩江様には一晚中まんじりともせられなかつた由にござります。

翌朝、御城中の人々の口から口へと伝わり、忽ちの間に拡がり申した、お嬢様が拷問の模様の際は、萩江様の耳にも入り、それを萩江様がまた、この婆にお話し下さるのでござりましたが、聞く中に婆のこの身が責められているような思いをいたしましたほどの、それはおぞましい限りのことにござりました。

お嬢様は拷問部屋へ入れられなされ、恐ろしい恰好をした拷問道具が眼に入つた途端、もうへなへなと其の場に崩れられるのでござりました。無理はござりませぬ。蝶よ花よのお育ちのお方ゆえ、そんなお嬢様を先ず答打ちにかけられるとて、御家来衆が寄つてたかつて、お嬢様のお召物を、長じゆばんまでも、無理矢理お脱がせし雪のように白い、お嬢様の背の肌も露わに、裸におむきた上、柔いお身体に荒縄を二重にも三重にも廻し強くひっぱり申すのでござりましたが、もうこれだけで、お家におられましたときは、お針の稽古事の最中に、ちよつと針が指を突いても、「あれお嬢様が」とか「お早くお手当を」などと、召使達が騒ぎするほど、大事にさ

れて来なすつたお嬢様の身には、死ぬほどの苦痛とおほえられ、声をあげて、お泣きになるのでござりました。すると御領主様が近寄られ、

「まだ何もいたしておらぬではないか。今頃からそのように泣いておつてどうする。いまにももっともつと痛い目に会うぞ」

と、口をゆがめ笑を浮かべて、お嬢様に申されたとか。お嬢様が後手に縛られ、すっかり答打ちの準備が終りますと、御領主様は、やおら、お自ら、壁に、すうりとかがつた幾本もの答の中から手頃なものを一本はずされ、それを手にしてお嬢様の背に廻られ、しばし、お嬢様の雪のような背の肌を眺めておられるのでござりましたが、矢庭に答を高くふり上げられたかと思うと忽ち、

「これ白状いたせ！」

「まだ白状いたさぬか！」

「この強情者め！」

と叱咤されながら、何回も何回も、力任せに、お打ちはじめになるのでござりました。

お嬢様は身に覚えのないこととて、

「知りませぬ」「存じませぬ」「おゆるしを」

と泣き叫ばれるのでござりましたが、なんで、あの御領主様がお許しになりましたやうや。びしっ、びしっ、と柔肌に鋭く高鳴る答の響きと、そのたびにあげられるお嬢様の魂消るような悲鳴に、酔つたやうになられ、例のあの大きい眼で、のたうたれるお嬢様を、この上ない好ましい眺めと御覧になりながら、なおも烈しく答を振り続けていかれる中に、柔いお嬢様のお膚が何条たまりましよう。お膚はやがて破れはじめ、白い肌に赤い血が流れ出すのでござりました。すると御家来衆は、用意されてあつた砂を血止めのために、お嬢様の背へなすりつつけるのでござりました。

また、お嬢様が、答打ち五十ほどで、とうとう苦痛の余り気を失

われますと、あらかじめその場に呼び寄せられておられたお城の御典医様が、すぐにお嬢様を介抱されるのでござりましたが、間もなく息を吹き返えされると、待ちかねたように再び、お嬢様のお身体に答を加えられるという、げに鬼畜の御領主様にはござりました。

それにいたしましても、お嬢様が弱い女の身で、このように責めさいなまれ、死にそんな悲鳴をあげられながらも、なお白状せずにおられたのは、かりそめにも火つけなどという恐ろしい罪を白状しては、御両親様が如何ばかりおなげきあそばされることかと思われたからか、それとも火つけをすれば、その身は火焙りの極刑に処せられるということを、御存じだったからでござりましょうか。

けれど、答打ちが最初から数えて、百近くにも及んだとき、お嬢様は遂に耐えきれず、

「恐れ入りました。この雪江めが、御寝所に火をつけたのでござります」

と嗚咽まじりに、無実の罪を白状されるのでござりました。

ところが、もともとお嬢様をあくまで痛めて楽しんでやろうとの魂胆の御領主様は、それだけではお許しにならず、

「はて、どのようにして火をつけた。それをこと細かに申せ。そちのような小娘が一人で出来る筈がない。誰かに手伝って貰ったのであろうが、その者の名を申せ」

と、今度は途方もないことを白状せよと迫られるのでござりましたが、毎度申上げます通り、全く身に覚えのないお嬢様が、そのようなお尋ねに、どうしてお答え出来ましょう。口ごもっておられますと、御領主様は

「顔に似合わず、そちはしぶとい喃。だが、何としてでも云わさずにおくものか。それ、こんどは雪江めに石を抱かしてやれ」

と、お嬢様を次は、答打ちより数倍こたえる石抱きの拷問にかけ、御家来衆にお命じになるのでござりました。

この石抱きの拷問と申しますのは、これもまた萩江様のお話によるのでござりますが、なんでも、三角の棒の鋭い角の方を上に向け、てでござりますが、何本も揃えて敷き並べた上へ、拷問にかけられるお方を、下着一枚の薄着、ときによっては裸にしてきちんと坐らせ、身動きならぬよう柱などに縛りつけた上、その膝の上へ、一枚で十二貫目もあるという伊豆石を一枚、二枚と、白状するまで積み重ねていくという、すさまじいものだそうで、拷問にかけられるお方は、己れの身体の重みだけでも、三角棒の角が両足肉に食い込んで、耐えようもない痛さなのに、そこへ重い石をのせられたとあっては、まこと言語に絶する苦痛でござりまして、如何な氣丈の豪の男でも、音をあげてしまうそうで、中には大人のくせに、頑是ない子供かなんぞのように、おいおい声をあげて泣く者もおるとか。

さてお嬢様は、湯もじ一枚きりという浅ましい恰好で、石を抱かれるのでござりました。はじめ御領主様は、お嬢様を裸とするよう仰せ出されたのでござりますが、さすがにそのようなことは、おたしなめするお家来のお方もあって、しぶしぶ従われたのでござりますが、お嬢様の膝に石を重ねられる段になりますと、己れの意のまま、みじんの容赦もされず

「それ雪江めが、可愛い石っ子を、早ようもう一枚抱かして呉れと、泣いてせがんでおるのではないか」

などと大層、楽しいことでもされているようにふざけられ、お嬢様が両足から、ぼとりぼとりと血をしたたらせられ

「ひえーっ」

と、腸から絞り出すような哀しいお声をあげられても、可哀想だとか不びんだとか、痛ましいとかのけぶり、さらさら示されることもなかった由とは。一体あの御領主様は、何のお生まれ変りのお方なのでござりましょう。お嬢様は、とうとう五枚もの石を、顎にも届くほどに、膝の上にのせられなすったのでござりました。

お嬢様のお身体と申せば、婆の知り申す限りでは、せいぜい十二、三貫もあるかなしさで、そこへ突に六十貫ものものがのせられた訳でござりますが、お嬢様には、よくもまあ死なれなかつたものにござります。むろん、そんなにされるまでに、石を抱かれたまま顔を石の面にふせるようにして二度、三度、氣を失われたそうでござりますが、その都度、御領主様が、横から御典医様の何かと申されるのもお聞きにならず、お嬢様のお身体に、抜かれた脇差の刃を突き立てるようになして傷をつけられ、お嬢様に劇しい痛みを与えられるという残酷なやり方で、お嬢様を正氣に戻されたのでござりました。

それだけではござりませぬ。もうすっかり弱り果てられて、今は悲鳴もおあげにならず、僅かに呻きを洩らされるだけの、そんなお嬢様に、なお一層の苦痛を与えるため、ひざの上の石を左右から掛声をあげてゆすぶれと下知されるのでござりました。主命とあればいたし方なく、二人の御家来衆が石をゆすられると、とっくにお嬢様の足の皮を破り肉を裂いて、骨にまで達しておりました三角棒の鋭い角が骨にきしって、その音の氣味悪さ。おじけをふるわれた御家来衆が、手を休められると、御領主様は地獄で羅卒達を叱咤される閻魔さながらの恐い形相で、お怒りになるのでござりました。

やがて、お嬢様の口の端から血の混じったよだれがたれはじめ、真白なお身体の色が膝の方から、少しづつ上の方へ、まるで水が浸み入るように、土氣色に変わって行くのでござりました。それを眼にとめられた御典医様が、たまりかねたように

「これ以上、拷問を続けますと、雪江殿は死なれます」

と御領主様に申し上げられましたので、やっと、その夜のお嬢様の拷問は終了しましたものの、お嬢様は御典医様の手厚いお手当を受けられました後、そのまま御城内の牢につながれる身とはなられたのでござります。

その後、御領主様は五日ほどが間というものは、それが日々の習慣であるかの如く、お嬢様を牢から拷問部屋へ曳き出されては、毎日必ず一刻がほど、今日は逆さ吊り、明日は海老責め、その翌日は水責めと、手を変え品を変えて、お嬢様をお責めになっておよろこびになるのでござりました。でも、いつも御典医様を立会わしめられ、お嬢様が少しでも死にそうになられると、拷問を途中でやめられ、いそいそとお嬢様に手当をくわえられるのでござりました。こうして御領主様は、お嬢様のお身体を、さんざん罵りものにされ、惨虐の限りを尽された末、お嬢様を火つけと、主を殺そうとした二重の重い罪の廉で、火焙りの刑にかけるよう強く仰せ出されたのでござります。

萩江様は、ざっと以上のようなお話をお聞かせ下さいまして、お城へお帰りなされたのでござります。あ、それから何故、萩江様がこの婆をお訪ね下さりましたかと申しますと、萩江様が牢のお嬢様へお食事をお運びなされたことがありまして、その際、お嬢様が、自分が無実であることを、是非とも御面親様か乳母のこの婆に伝えて呉れと、涙ながらに、ひそかに萩江様へ頼まれたからでござりますが、近江屋の御主人様御夫婦は、既にあのように他国へ追払われなされて生死のほどもおぼつかなく、そこで萩江様は、この婆が御城下に住んでいることを聞かれ、捜し求めてお訪ね下さりましたのでござります。

萩江様が婆をお訪ね下さりました日から、ちようど半月目ぐらいが、いよいよ、お嬢様のお仕置の当日でござりました。その日は、まことに春らしいのどかな日で、どこで若い美しい女子が焙り殺されるのだと、うそぶいているような朝からの麗かな日和でござりました。

婆は御城下の、ひっくり返えるような大騒ぎをよそに、朝から奥で、まだなおりませぬ氣疲れのあまりの病の身を、横たえていたの



でござりますが、昼下りでござりましたか、表を「来た、来た」と云い触れるようにして、駈けて行かれた町内の子供衆の声に、ふとつられるようにして床を立ち申し、ふらふらと家の外へ出まして、そして婆が見ましたものは、この婆が胆もつぶれるばかりに、変り果てられたお嬢様のお姿でござりました。荒縄で後手高く縛られなされたお嬢様が、非人達、乞食のごとでござりますが、その行列の中の馬の背に乗せられなされ、一際高くおられるのでござりました。

お家におられましたときは、いつも、髪は島田に結われ、美しい振袖に、あでやかな帯を結んでおられましたお嬢様が、この日は、髪はと申せば、油のきれた長い毛をそのまま、ばさっと背へたられ、その一処を藁で束ねられておられるだけ。お召物はと見れば、白い晒木綿のごつごつした寝巻のようなものを着せられなされ、帯代りの荒縄を一本お腰に廻して、しかも足は素足という浅ましき。その上、よく見ますと下着のようなものは一切身につけておられないのでござります。首には、これから死に行く人らしく、数珠がかけてござりましたが、それも木で作った大きい粗末な不細工の代物にござりました。またがっておられますお馬は、俗に裸馬と申すもので、鞍などはありません。藁むしろが一枚ごつごつした馬の背にかけてあるだけで、その上に様々の拷問と牢のお暮しで、すっかり弱り果てられたお嬢様が、もう死んだ人のように、首をうなだれて、おゆられてござりました。

婆はこんなお姿のお嬢様に、思わず駈けよるようにして近づき「お嬢様」と呼ぶと、お嬢様には、はっと

してこちらを御覧になるのでござりましたが、お声は、その元氣も失せられたと見え、一言も給わらないのでござります。

でも婆の顔を、じっと見つめられる哀しそうな眼は、たしかに乳母や、わたしは無実なのよ。そのことは、お前が一番よく知っててくれるね。

と、おっしゃっておられるのでござりました。婆は、もうそれからは、お痛わしいお嬢様のお傍を離れることは出来ませなんだ。行列の後になり先になりして、よろよろと随いて行くのでござりました。

行列の先頭に一人の非人が、お嬢様の罪状をまことしやかに記した立札を、高くかかげて歩き、お嬢様のお馬の前後には、刑場でお嬢様を焼く殺す役目を承る四五人の非人達がつきそい、最後は、これまた立派なお馬に召したお侍のお役人でござりました。ひき廻しの行列は、御城下のそれこそ露地の奥までもくまなく、人々のさわめきの中を分けるようにして練り歩き、やがて長い春の日もあと一刻ばかりで暮れようとする頃、御城下はずれの刑場に着くのでござりました。

刑場の周りには竹矢来が組まれ、既に夥しい見物人、恐らく足腰の立たぬ重病人の外は、御城下の人々、全部が集られたのではないかと思われる程の人出にござりました。婆は、かような人々に、お願いし乍ら、必死となって群を押し分け掻き分け、一ばん前に出、して貰い、お嬢様の御最期を見ばやと、竹矢来の竹にしがみついたのでござりました。

お嬢様のお馬は刑場に入ると、竹矢来の内側に沿うて大きくゆっくり一周りし、お嬢様を改めて多勢の人々の眼に晒し申した後、静かに刑場の真中辺へと向うのでござりましたが、まあ、そこには、お嬢様のお身体を縛りつける磔柱と、お嬢様のお身体を焼くため燃やす柴、藁束などが山のように置かれてあるではござりませぬか。

そして、それらを眼に入れられた途端、それまで死んだようにおとなしくしておられたお嬢様が、突然わめきながら暴れられるのでござりました。

「わたしは死ぬのは嫌、焼き殺されるのは嫌。わたしは悪い事をしただおぼえがありません。誰か助けてエー。松吉、たすけておくれエ」

と駄々を、こねられるように泣き叫ばれるそのお声に、竹矢来の回りを埋めた人々が一瞬、鳴りをひそめられるのでござりました。

非人達は、暴れられるお嬢様を馬から引きずり下ろし申すと、先ずお身体のいましめを解き、今はもう死物狂いで逆らわれるお嬢様を、せせら笑うようにして、手どり足どりして倒されてある磔柱へ両手両足を荒縄で縛りにかかるのでござりましたが、その時、あのお優しいお嬢様が一人の非人の腕に、歯で噛みつこうとなされて、その非人から頬に平手を喰われたのを婆は、しかと見たのでござります。問もなく、大の字に括られなされた、お嬢様の磔柱が刑場の真中に、すくっと立ち申し、刑場全体が、潮鳴りにも似たどよめきに包まれるのでござりました。

若い女の身として、この上ない浅ましい恰好を、衆人の眼に晒され、磔柱の上のお嬢様は恥ずかしさに、再び死んだように頭を垂れられ、それは、もう死を顧念あそばしたお人のお姿と、婆の眼には映り申したのでござりますが、非人達がお嬢様の足下に柴や藁を積み始めると、またもや、

「死ぬのは嫌、焼き殺されるのは嫌」

と哀しいお声を力の限りお上げになるのでござりました。丁度、そんなときでござります、婆が悪魔の声を聞き申したのは……。それは、刑場の役人衆に交って、ずっと始めから、非人達がお嬢様を取扱うのを、立ったまま身動きもされず眺めておられた、お忍び姿の立派な扮装のお侍のお口から出たものにござりますが、

「これこれ、そのように柴を山のように積んでは、雪江めがすぐ死ぬではないか。この女は、焼き殺すのではない、焙り殺すのじや。なるべくひまをかけて、出来るだけ苦しませるのじや」

そのお声に婆は、はっと思い当るところがあり、そのお方が少しく頭をこちらへ向けられた時に頭巾の隙から、ちらりと見え申したそのお眼、大きいお眼。なんでこの婆が忘れ申しましようや。あの日、舐めるようにして御接待のお嬢様を御覧になつておられた大きい眼。正しくそのお方は御領主様でござりました。

「おのれ人非人の御領主め。お嬢様を惨々戮りものにした上、なお飽き足らず、この上、お嬢様を生きたまんま焙り、それを見て楽しむというのか」

婆は大声で怒鳴ろうとするのでございましたが、あまりの怒りに身体が震えるばかりで何故か声が出ませぬ。口惜し涙を、ぼろぼろこぼしながら、竹矢来を竹もつふれるばかり握りしめ、これから焙られなさるお嬢様を、見守っていくより他ござりませなんだ。

その中にも、お嬢様の火焙りの準備は、すっかりとこのい申し、太鼓の音が刑場に響いて、多勢の見物人が水を打ったように、しんとするのでござりました。一人の役人衆が進み出て、お嬢様の罪状を声高々と読んでいくのでござりましたが、それを磔柱の上で聞かれるお嬢様の心の中の無念なさは、如何ばかりでござりましたでしょう。

罪状の読上げが終り、二度目の太鼓の音が鳴りますと、もう竹矢来の周りは、しわぶき一つ聞えませぬ。いよいよ地獄さながらの火焙りの刑がはじまるのでござりました。まさかと思つておりましたのに、非人のお嬢様の足下にかがみこんで、火打ち石を叩くのでござりました。めらめらと薬に火がつき、ばちばちと柴をはしかせた音に、あな無残と、思わず眼を閉じた婆の耳に、たちまち聞えて参りました百舌鳥の鳴く音にも似たお嬢様のかん高い悲鳴。はっとし

てまた思わず眼を開きますと、おお、お嬢様は、夢でも幻でもなく正しく現に、生きたまま燃える火に焙られていなさるのでござります。髪をふり乱され、両手両足を縛った縄も引きちぎらんばかり、磔柱も揺れよと、身悶えて苦しまれる、その物凄さ。それに悲鳴の合間に

「あつーいー、あつーいー」

と泣かれるその声が、人々の胸を掻きむしるのでござりました。磔柱の高さは、左様にござります、お嬢様の足の先から地面まで凡そ一丈もござりましたか。或は、もっと高うござりましたかも知れませぬ。何れにせよ、燃える火の焰は、お嬢様のお足さえも舐めるようなことがなく、お嬢様のお身体のずっと下の方で、ゆらゆら燃え立つだけで、それは御領主様のお望みに全く叶い申した、文字通りの火焙りでござりました。

火の子が散って、お嬢様の両手両足を縛った縄にふりかかると、非人達は縄が焼ききれては大変と慌てて、長い箒のようなもので、それを払い落すのでござりました。お嬢様の白いお身体が火に焙られて、段々と赤味を帯びていき、それと共に苦しみも益々増していくらしく、縛つてある縄が余りもがかれて、ゆるみ申したのか、それとも、はじめからわざと、ゆるく縛つてあったものか、お身体をばたんばたん磔柱にぶつけるようにして苦しまれ、ここをせんだの如く

「火を消してエ、だれか火を消してエ」

と金切声をあげられるのでござりました。

でも、誰が火を消し申すことが出来ましようや。けれど、さすがにお役人衆や非人達は、そわそわと落着かない風にござりましたのに、あの御領主様だけは依然として立ったまま身じろぎもされず、苦しみ悶えられるお嬢様を、じっと御覧になるのでござりました。見物の衆はとみれば、むごたらしさ恐ろしさに、早くも大半のお

方が浮足立ったように、たじたとされ、見るに忍びずと刑場を去って行くお方や、女子衆の中には気分を悪うして倒れられるお方も出てくるのでござりました。婆の傍におりました遊び人風の若い男も、はじめの中こそ好色らしい眼付で、お嬢様を見ていたのでござりますが、いざ火が燃やされて、お嬢様が苦しみはじめられると、たちまち顔をしかめ、ほんの暫く見ていただけで、

「なんてひでえ事をしやがる。可哀想で見ちやあーいられねえ」と捨台詞を残して、逃げるようにして立去って行くのでござりました。



と両手を合わせ、数珠をまさぐる姿にござりました。婆も、そのお方にならって手を合わせるのでござりましたが、お嬢様には、やはり悲鳴をあげ、身をもがかれて、たとえようもない苦しまれ方。そして、見物の衆は、いつのまにやははじめが中の半分ほどに減り申しておるのでござりました。

お嬢様はそうして小半刻ほど火に焙らておられましたか。時が経ち申して、声も出されず、悲鳴もあげられず、うめきも洩らされず、まるで達磨さまのように全身朱色となり申したお身体を、ぐつたりとお静かにされ、ただ眼ばかりを恨めしそうに、お忍び姿の御

やがて、お嬢様のお身体がすっかり赤色に変わり、わけてお腰の辺りから、両足の先へかけては、朱のように染まり申すと、お嬢様はもう熱いとも、火を消して呉れとも云わず、ただ

「ひと思いに殺してエ、ひと思いに殺してエ」と叫ばれるのみで、そのお声が婆の腸を、ずたずたに断ち切る様でござりましたが、ふと、そんな婆の耳へ聞えて参りました念仏の声。見れば齢も婆と、そうかわらぬ一人のお年寄りが、柱のお嬢様へ向って、

「今はもう迷わず成仏なされませ」

領主様へと向けておられたが、ほどなく頭を、がっくりと前へ垂れられ、哀れお嬢様は遂に、あの世の人となられたのでござりました。

お嬢様が、はかなくなれますと、火は直ぐさま消され、磔柱は倒されるのでござりました。検死の御役人でござりましょう。つかつかとお嬢様に寄られ、暫し、縛られたままのお嬢様の手の脈を診ておられたのでござりますが、非人に下知して、磔柱はお嬢様を縛ったまま再びもとのように刑場の真中に立つのでござりました。重き罪を犯されたお方のこととて、これから後、一月がほどの間も、人々への見せしめのため、このままの哀れなお姿で、鳥のついでにも勝手、風雨にもさらさればなっしの情ない目に、なおこの上も会わされなさる由なのでござりましたが、それと同時に、めぐらされてあつた竹矢来も払われ出し、刑場に居残っておられた見物の衆がこわいもの見たさに、ぞろぞろと磔柱の傍近くに群らがっていくのでござりました。

婆もその中の一人にござりました。お嬢様は、あのお可愛らしかったお顔が、こうも変わるものかと、背筋が冷とうなるほどの無念の形相で、顔に振りかかった髪の毛を二筋三筋、口の端に唾えられ、眼を見開いたままお果てにござりました。

その夕、婆は刑場から何処をどうして歩いたのやら、とんと覚えがござりませぬが、娘夫婦が家に着きますと、そのまま頭も持ち上げぬほどの、このたびは重病人となり申し、三日三晩というものは食も摂らず、夜も昼も、うなされ通しの身とはなったのでござります。

お嬢様が婆の枕辺へ、ひっきりなしに立たれるのでござりました。或る時は美しい振袖姿で、或る時は縄つきの哀れなお姿でござりました。そんなであつた婆も、十日ほどの後には、娘夫婦の至れり尽くせりの看病のおかげで、なんとか人心地もつくようになり申

したのでござりますが、それにつけても先ず思い出されるのは、あのまま刑場にさらされなされたままのお嬢様のことでござりました。一度、お嬢様のお前へ御線香の一本もあげばやと思ひ立つのでござりましたが、昼の中は、お城のお役人の眼もあり、重き咎をこらうむられたお方へ、そのようなことをするのもしられ申したので、それでは夜に入ってもと決心したしたのでござります。

幸いと申しますか、その頃、夜に刑場の辺りを歩くと、お嬢様の「あつーい、あつーい」と泣かれるお声が聞かれるという噂が立ち申しておりました、気味悪がられた御城下の人々は、滅多に夜には刑場に近寄られないので、人目につくようなことは決してなかったのでござります。

婆が刑場へ行きましたあの晩は、おぼろ月夜にござりました。噂の通り若し、お嬢様の泣声が聞かれますものならば、それでもよい。今一度、懐しいお嬢様のお声も聞きたいものだ、婆は病み疲れの身もいとわず、人影はおろか猫の子一匹にも出会い申さぬ夜道を、刑場へと心だけはせわしく歩を運ぶのでござりました。やがて婆の行手にあたって、薄闇の中にも、それだけは、くっきりと黒い影を、春の夜空に浮び出して、お嬢様の磔柱が見え申したのでござりますが、近づくほどに、何やら黒いうごめくものが、お嬢様のお亡骸にまつわりついておるではござりませぬか。はつといたした婆は、この夜更けに、これは何の化生のものが、お嬢様のお亡骸の肉をしやぶるものぞとも、いやいや、さては、お美しかったお嬢様のお身体に慮外のいたずらをなす不届者めがとも思つたのでござりますが、更に近づきたしかめ申すと、それは哀れ、かの松吉がお嬢様にしがみついて掻きくどく姿にござりました。

松吉は、もう半分以上も腐り申したお嬢様のお身体に、しっかと両腕を廻し、己が頬をお嬢様のお顔にびったりとあて申し、まるで生きた人に物申すが如く、何やらぶつぶつと泣きながら云っておる

のでござります。

「お嬢様。なんという哀れなお姿におなりあそばした。あんなにもこの松吉へお優しくして下さったお嬢様が……」

とだけは、婆に聞きとれ申したのでござりますが、その中に、松吉は近づいた婆の気配に気づき、あわてて磔柱からとび降り申し、しばらくはこちらをうかがうのでござりましたが、こちらから名を云うまでもなく、すぐに婆めだと分ると、間もなく二人は抱き合うようにして、お嬢様のことを語り合うのでござりました。

松吉が「今宵、長崎から立ち戻ったばかりなのだ。近江屋へ帰ってみると空屋となっていたので、驚いて近所の人に尋ねると、これしかしかである」と聞かされ、驚いて旅の身装もそのまま、この刑場へ駆けつけてみると、果して近所の人の申された通り、お嬢様にはこのように成り果てておられる。でも、これにはきつと何かの深い仔細が隠されているに違いない。婆や、お前は知らないか」と顔に似合わぬ凄じい見目で問い申すので、婆は、萩江様の他言するなと云われたことをつい忘れ、本当のことを話してしまったのでござります。そしてこのことが、また新たな哀しい出来事を一つ作り出す因とはなったのでござります。

それから三日後の夜、松吉は、あの優しい松吉が、何処で手に入れましたものやら一本の刀を手にとって、またお城の何処をどうして越えしましたものやら、大胆にも御城内に忍び入り、お嬢様の仇を討たんと御領主様の御寝所に近づき申したのでござりますが、もとより警固きびしき御城中のことゆえ、直ちに宿直のお侍衆に見つかり、松吉が武芸も知らぬ身で叶わぬまでも、刃を抜いて手むかいしたので、興がられたお侍衆の手で鬭り殺し同然に、哀れ松吉は全身を膺のように斬りさいなまれたのでござります。

それでも松吉は、血と砂にまみれながら、苦しい虫の息からなお「お嬢様のかたき」と呼ばわりつつ、一寸でも二寸でも御領主様の

御寝所に近づこうと、お城のお庭を留い申して息絶えたのでござりました。

以上で、婆めのお語り申すことは凡てなのでござりますが、今日此頃の婆は、老い先短いこの身を、亡きお嬢様と松吉の冥福をひたすら祈ることに、心を専らにいたしおるのでござります。そして、このような明け暮れの婆のたった一つの気がかりは、お嬢様と松吉が、あの世では何の障りもなく、添い遂げられたかどうかということなのでござります。

(終り)

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢

(大中判印画紙焼付)

第一集 六枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 六枚一組 八百円

略号(によ2)

絹川文代嬢が双肩ぬぎとなり雪よりも白く、豊かに息づく下腹の左脇へ、氷の刃をぐさりと突き立て、鮮血が、みるみる傷口から、にじみ出てくるという光景から初まり、きりきりと臍下を切り開き、忽ち血汐が溢れ出る壮烈きわまりない女性切腹の姿態を血紅を使用して連続撮影した中の、クライマックス・シーンばかりを選んだ六枚のシリーズであります。

潔く、あらゆる衣服下着をかなぐり捨てて、今は生れたときと同じ姿になった文代嬢が、右手に握った短刀を、我と我が下腹へ突き立てて、激痛に悶え苦しむ姿態を、血紅によって、その傷口から迸り出る血汐をあらわし、女体切腹の得難い雰囲気であらゆる角度から狙った中から最も真に迫った傑作ばかり六枚を選んで、ここにマニア諸氏の高見に資する次第であります。

沼正三だより

(一) (再執筆の契機)

御無沙汰しましたが、ヤプーは今月から、手帖(改稿)は来月から再連載を始めます。ハイド的なマゾ人格を再び目覚ませる機縁となったのは皇太子妃正田美智子様でした。清宮様とは又、別な意味で、この才色兼備の富豪令嬢はドミナの象徴として、私達貴婦人(必ずしも嗜虐女性である必要はない)と言うまでもありません。崇拜症者の胸を疼かせる資質を持っておられます。ダンテのベアトリッチエにおけるが如くといつては、おこがましいですが、再執筆の決意は「雲上からのインスピレーション」でした。スポーツのお好きな妃殿下が、いずれは背の君の特技とされる乗馬をもマスターされて、颯爽たる雄姿を示されることを諸君と共に期待しましょう。

(二) (市田氏に)

「女水兵哀史」は、サドものですが、身分関係を言葉遣いによって把握しようとする点、甚だわが意を得、面白く読みました(少くとも前半は)。主体として、高慢な貴婦人を設定される点、(魔教園などと同じく)サドものとマゾものとの共通点を感じさせられます。なお、麻生氏に一言。言葉遣いに関する市田氏の議論を、あなたと私との論争における私に有利な例として引用したいと思います(十月号一一八頁ないし一二四頁)。

(三) (とやま氏に)

マゾヒズムとサディズムが同一の深層心理から生ずるということ自体は、性科学者の通説といっても良いのです。マゾヒストは自分自身に対してサド的に振舞っているのです。表面的な心的症状においても両面的であるひとが報告されています。然し、そういう事実から、あなた自身もこの種の両面的存

在であるというわけには行きません。あなたの書かれたものが裏切っています。私の指摘したのは、そこだったのです。

(四) (鞍氏に)

「馬化白書」は着想、面白く期待していますが、本誌旧号、休刊前の分が資料として欠けているのが残念です。ね。二九年三月号の久信男氏「捕虜の洗礼」の挿絵、同年一月号手帖第七二項「女性の乗馬」の挿絵など、私には印象深いものでした。なお手帖第一一二項で「デパートの売り」と書いたのを気にしておられますが(九六頁)、私としては、白人貴婦人なら黒人部族の女王になるのは当然だが、庶民であっても白人美女であるというだけで黒人に君臨できる、ということと言いたかったので、デパートの売りは若い美しいのが多いから、庶民美女の代表としてあげたのです。スチュワートでも良い。軽蔑的意味はありません。

(五) (土路氏に)

「魔教園」、愈々出て愈々奇。殊に構想上の布石が周到なのは敬服します。犬のピーマが自動車に乗ったから、黒塔会に送られてる筈だが、いづどんな風にして路子と再会するのか?なんて予想して楽しんでます。美女の浴後の水を飲ませるなどコプロ的になられたのも嬉しい。

手帖雑報欄

二二五 大宅壮一「女傑とその周辺」

文春連載のもの。常識的だが、母権的家庭の著名なものについての知識が得られる。

二二六 浅香光代「女剣戟」

浅香の方が大江よりマゾヒスト向きだということは、「らぶ・すれいぶ」(四回)で鬼山氏が尻に指摘されていた。もっとも、この本は大して刺戟的なものではない。

二二七 司馬遼太郎「才壁の匈奴」

(「白い歓喜天」所収) マゾ的なものではないが、ジンギスカンが西夏の女に執心する叙述に

東洋人のコーカサス人種の美女に対する憧憬が表現されているのでここに録する。

二一八 香山滋「ナナ夫人」(『とかげの様な女』所収) 家畜的侏儒を飼育する驕慢の美女が出る。旧作で本誌にも夙に紹介されたが、新刊本に再録されたので。

二一九 ウィーン性科学研究所編・高山洋吉訳『愛撫の風俗史』八冊の叢書中の二冊から抄して一本に訳編したもの。訳者の力量は雑報一四七及び手帖一二三、一二四項参照。内容は多少参考になる程度。ノーマルな人には面白からう。

二二〇 五島勉『白いSEX』 同じ著者による『東京の貞操』と同じものである。『アメリカへの離縁状』とも一部重複している。コールガールの実態がよく分る。外国商社の日本人営業部員が重役秘書のブロード嬢が本国へ結婚に帰る前のつまぐいの対象にされ、そうと知ってなおその一夜を有り難がっている心境など、手帖第一〇四項の引例ともなる。

二二一 武田泰淳「妖美人」(『土塊商才』所収) 鉄白国太郎という財閥人の成長を描くが、G夫人という英国美人への心理に注目させられる。この作者は健全だけれども、異常な情熱にも理解ある人だ。尚速報三三参照。

二二二 朝日新聞社外報部編『黒人―迫害と忍従を越えて―』

二二三 芳賀武『アメリカの黒い地帯』 前者はアメリカとアフリカと両方にわたっている。後者はアメリカ南部十三州の実地踏査である。今迄、雑報で触れたものに親しんでいた人には、特に得るところはあるまい。

二二四 早大赤道アフリカ探検隊『アフリカ横断一万キロ』

二二五 鈴木耿子『キリマンジャロの雪』 雑報一九五で報じ、既に記録映画も公開されたアフリカ探検隊の記録が前者。その「こびとの国―パンプティ―を訪ねて―」の章など、スラックス姿の

白人女性ブトナム夫人の命令一下、踊ったり、木登りしたりするピグミー達の記事を読むと、サーカスの猿の芸を連想させられる。後者は、その女子隊員の一人の著書だが内容は劣る。日本女性がアフリカ探検したという点の意義に止まらう。

二二六 藤島泰輔『アフリカ紀行』 これは前二者より面白い。白人に対するアフリカ黒人の「恐怖と尊敬の結合した」人間関係については、前二者にも随処に感想があるが、この著者は、さすが作者の目と心で見、かつ感じている。自分には、にこやかに応待していたホテル受付の予約係「二十才台の美しい英国婦人が騒いでいる黒人達に向って、静かに」と叫んだ時のおそろしい顔付」(序)におどろきながらも、ピタリ静まった黒人達の顔に不当な制圧を受けたという表情がなかったことも見落していない。女らしさの階級性の一例証である。

二二七 犬養直子『お嬢さん放浪記』 浦田氏が一月号の通信で取り上げておられるが、そういうサド的な感想でなくとも、「スーパーウーマン」(夢声評)の行動としてマゾヒストにも充分楽しい読後感がある。

二二八 アンリ・ダンフルヴィル著・田辺貞之助訳『性の難破』 麻生氏も一月号の通信で触れておられる。「女らしさの衰微」「西欧における男の性欲の低下」「西欧の男性喪失」「女性の貫祿」等々の小見出しだけでも内容は想像できよう。要するに西欧文明においてMに対するWの比重が増大して来たことを説いた文明評論。家庭、教育、道徳といったものは女性的起源のものであり、文明は女性の勝利に始まるのみならず、教会は聖母崇拜の思想で母権を固めた。世界は新しい母権制へと進もうとする、といった趣旨。冒頭の長い歴史的回顧も実に面白い。モリス・ステカの『女性に関する十五章』(これについては手帖新稿参照)ほどの奇矯な逆説ではないが、それだけ説得力は強いと言えよう。なお、「現在白人種に

支配されている人類」といった表現、白人がその支配を有色人に譲る時はあるまい、といった口吻があるのは、西洋人の文明論として当然ながら、私達には刺戟的。同じ訳者によるエドモン・アロークール『人間と性の歴史』も出たが、大したことはない。

二二九 高木東六「パイプとソーセージ」(文春漫画読本八月号)
 女が使用したサラミソーセージを輪切りにして配る。「洗いもしないソーセージをみんなおいしそうに食べてるじゃないですか」コプロ趣味をくすぐる漫文だが、舞台とされた銀座のキヤバレー「サイセリヤ」では激怒したらしい。お刺身の一切一切を宴に侍っている芸者に、味をつけさせてから喰べたという大尽の話を想起する。そういうえば、週刊新潮三三年八月末号の小断の欄にもよく似たものがあった。小断は全部を搜索したら、相当な収獲があるかも知れない。この種の描写としては、大江健三郎「見るまえに跳べ」(同名単行本所収)が見事だが、本誌でも既に誰か指摘していたと思う。この本は日本人の屈辱という点からも面白い。「喝采」(同書所収)はゲイの生態を描くが、これも主人公はフランス人の玩具である。

二三〇 南条範夫「妻を怖れる剣士」(同名単行本所収) これは題名に釣られたが、読むほどのことはない。

二二二 真鍋呉夫「異物」 雑報一〇「ダイナマント・ドン」

の完結したもの。
 二二三 漫画・ブロンディもの「十代は愉し」(同誌九月号)
 息子のアレキサンダーが女友達の家から帰って、嬉々として「……パパ、リンダはこれから毎晩ぼくに血洗いを手伝わせてくれるって！」二二八で論ぜられた現象の一例。(庄野潤三氏は婦人公論一二月号で、妻のひるね中、血洗っている夫が「アメリカン・ハズバンド!」と自嘲するのを聞いた話を書いている)もう少し漫画をあげると

二二三 漫画・清水崑「今は昔」(同誌連載中) これは原始時

代、女が外で働き、男が家事をするという社会体制を描いている。
 二三四 漫画・西川辰美「最高殊勲亭主」(同誌連載中) 御存じ恐妻もの。

二三五 漫画・井崎一夫「奥さま勤務評定」(週刊漫画連載) 同じ様な内容だが続きもの。

二三六 漫画・「あべこべ夫婦」(同誌連載中) 毎号リレー式に読切。内容は題名どおり。つまらぬものもある。

二三七 漫画・亀井三恵子「ヤジ夫とキタ子」(同誌連載中)
 続きもの。男が女の下宿している部屋の半分を貸して貰い、彼女に儲わっている。求愛者としての奴隷的奉仕のみでなく、女の方が積極的に男をケライにし、万事に上手な点「性の難破」した現代を描くこと、前数項に劣らない。作者は本当に女性であるが、女性の手

にこの内容が成ることは嬉しい。
 二三八 漫画・松下井知夫「飼育手帖X」(小説倶楽部連載中)
 正月号では、ブルジョア娘の求愛者が、彼女のペットの猫と競争して敗れる。飼育の二字をどこまで生かすか今後楽しみである。

二三九 映画はあまり見ていないが、美空ひばりの「女ざむらい」(「マゾ百景」第十三景参照)に喜ぶ人は「姫君花吹雪」「謎の紫頭巾」「大暴れ女俠客陣」の宇治みさ子や、「灰神楽木曾の火祭」の中田康子らの女剣客ぶりに堪能できよう。スチールを見て私がマゾ的情熱を昂ぶらせているのは「隠し砦の三悪人」の上原美佐姫で、乗馬鞭を握って両脚を踏み開いたこの美女の脚の間に四つ這いになって這い込みたい気持になる。日本映画としては空前のヒロイン(マゾヒストの為に)となるだろう。「人魚昇天」の泉京子と田代百合子のメトミは凄いが、マゾ的には未だし。然し、演出次第では、前田通子以上のグラマー・ドミナが期待できる。夫婦間の倒錯としては、雑報一九八の続編「続夫婦百景」、速報八九の映画化「赤い陣羽織」がある。「女俠一代」もそうだが、清川虹子

では感興が湧かなかった。案外、熱中したのは「御免遊ばせ花婿先生」で、憐天下の町の高校に赴任した青年教師の話だが、前半、女教師、女生徒の大威張りが快い。徹底的な性の難破だ。尤も広告文には「女生徒が円盤投、男生徒がミシン」とあったので、「花嫁学校の男生徒」（週刊サンケイ三三・五・一一・号）的光景を期待したが、これはなかった。円盤投をする女生徒の腿の汗を男生徒がタオルで拭う場面もスチールだけだった。然し、男生徒達を吊し上げあわや土下座させんとする（結局させない！）場面がある。後半は逆転劇で興冷め。

二四〇 島本春雄「幽霊奉行」（裏窓三三年八月号） 隠密覚書
 の一篇。この人のものはサド的グロ味濃く、私は好かぬが、この篇では美男がダルマにされて首だけ出して身体を玉に籠められ、玉乗の美女に舞台で乗り廻される。この趣向に心を惹かれたから、録しておく。

二四一 「消えた裸の伯爵夫人」（週刊明星三三・八・一七・号）
 「鞭を揮う全裸の美女」という見出し。「彼女は長い皮の鞭を肌身はなさず携えていて、激情の赴くままに二人の男を失心するまで打ちのめした。」南海の孤島での異常な生活。トロローペンコレル（手帖第一〇七項）を考へても良からうか。その頃の週刊サンケイ（八・二〇・号）では「悪妻うり出す」が特集。麻生氏がこの週刊誌の編集の特異性（マゾ向きな）を指摘されたのには賛成する。

二四二 東郷青児「新男女百景」 仲々、面白い。叙事が薄味だが、全部「性の難破」的夫婦の事例である。「昼でも夜でも養子は養子」は令嬢と結婚した雇人。「土下座する夫」は前身が汲取人夫だった男。「夫は妻の奴隷であるか」は母親共々、飼育される無能者……未章「女性の飼育趣味について——首輪をつけた夫」でPTAのプールを寄附した女がプール開きの余興に、夫をプールに入れ犬かきでまわりを追かけさせ、自分はその首に繫いだ綱の端を持ってプー

ルの縁を歩き、夫がまわりを取って渡すと、又逆方向に投げ入れて追わせて往復し、犬を連れた奥様の散歩と、しやれた話が出ている。

二四三 佐賀芳男「屋根裏のダブルベット」（別冊宝石82号エロチック・ミステリー18集） 独西混血の若妻ワルブルガアが夫フレッドの能力不足から小男の青年オットーと通じ、屋根裏に飼育すること実に十一年、遂に情人をして夫を殺さしめるに至るが、裁判の結果、共に無罪となったという、一九三〇年ロサンジェルス裁判実話。手帖第九〇項の「丹夫人の化粧台」を想起する。（昭和五年頃の米国紙からヒントを得て「丹夫人」が書かれたのかも知れない。）オットーは日光不足で白くふやけ、太陽を眩しがったそう。その無罪の理由は「十一年間も苦勞したことで既に罰せられている」というにあったというから、畜生化が陪審の目に同情を惹く程度だったのあろうか。十一年とは、正に小説よりも奇である。

二四四 広池秋子「変な男」（同誌） これには驚かされた。美貌の女カメラマンの所へ、マゾヒストが来て告白する。その内容が便器、ベッド番、と私のマゾにピッタリ。彼女は彼を友人のバーのマダムに紹介する。マダムは彼を飼育中、急死する。あとで彼から手紙が来て、マゾ幻想を語るのだが、男が馬や犬に変形されて働く家畜、家具になり、ピグミーが靴拭きのマットになっていて、鞭たれて流す涙で靴を洗う仕掛……と、明らかにヤプーの空想（白人崇拜が抜けているが）が用いられている。この作者が直接、本誌を読んだのだと思うが、相手が知名の女流作家だけに悪い気はしない。肉体的苦痛のみからマゾヒストを見ていた従来の人達に比べると、精神的凌辱からのマゾヒズムを理解している点は立派である。一時、流行したゲイものから、今度はマゾもの流行の兆しが見えるというが、その矢先流作家にこういう正しい理解を見出し得たのはマゾヒストの一人として嬉しいことである。

読者通信



読者通信の小生の悪文を拝見いたし今更乍ら御配慮を感謝すると共に我乍ら恥入る心地がいたしました。同好の二、三の方と文通いたして居りますが直接文通、又は場所を指定して同好の方と接するのは初めてでもあり、いざ逢ってみると思うことを実行に移すことが計画の半分にも及ばず、いささか心残りを感じて居ります。心ある方と、せめてブロック単位でも結構です。種々の資料の提供、経験談の発表等を行い、許されればプレイの実施等が出来たらと、厚顔乍ら理想を描いて居ります。幸い現在まで交際いたしました全部の方が、誠意と信頼を似て接することが出来ましたことを誌上を拝借して厚くお礼申し上げます。香川神奈川の小生と同様の趣味をお待ちの方の住所、氏名が不明なるままお便り出来ません。是非その後の消息を知りたいと念じて居ります。

す。尚、御誌に寄稿されます杉俊夫氏にお便り致したく御差支えなき様でしたらお知らせ頂けません。皆様の中心より御存知の方は是非お教え頂けたらと存じます。小生への宛先は十二月号に載って居ります故、今回は省略いたします。

(立川市 大森)

山茶花の美しい色を見られるこの頃になって参りました。毎月号とても嬉しく拝見させて頂いております。本月号の藤山さんの告白は、よくよくお気持ちがわかる様な気がしました。思う目的等は違っても、私にピッタリ似ている様です。この頃の読者の皆様は近代的なセンスを持って居られ私達、和服趣味の者は何んだか影が薄くなつて行く様な淋しい気がします。私の一ばんの望みは女装したいことです。女装の際のカツラを欲しいのですが、心よく合わせて売ってくれる店はないでしょうか。そ

の他、求めるのに適当な方法がありませんでしたら、お知らせ下さい。衣類は家にありますので、髪さえ整えば女装する事が出来ます。

(福本時依)

私の拙文を御掲載下さい、ありがとうございます。今後の貴誌の御繁栄を祈りつつ、続いて私の愚感を述べさせて頂きます。十二月号の「継母」は、ピンときた題だった。余り文学的表現に氣を使つたせい、話が前後してしまつた感が強く、何がなんだが読みとれず、題に負けてしまったというところ。挿絵のブラウスにズボン姿の緊縛は頂けても雨中の立樹縛りは、投げやりな描き方であるといわれても仕方あるまい。むしろ平凡に、後妻が先妻の娘を虐待するストーリーで、虐待の方法を色々な責め方で表現し、クライマックスで「お母さんで「お母さん」を叫び、ごめんなさい」と叫びさせる。そして今後、継母のいうことは何でも「ハイ、ハイ」と

◎写真特写引受◎

特別に変つた着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他に付いてお返事いたします。

(返信料同封下さい)

服従させ、又「お前のような娘は人一倍働くべきだ」として、寒風吹き荒ぶ中でブルマー姿で酷使して、便所にも行かせないで、ブルマーとオシメカバーを兼用させる。そしてその上、自分の連れ子に責めさせる。この様なストーリーは如何？ただし、少々、この作品は異色であつたことは私も認めるが……。体験記「バー、ナナの人々」は、未完とある文字が、ホッとさせた。新年号におけるストーリーの発展が興味津々というところだ。作中、セーラー服姿の女生の後手緊縛挿絵はよかった。私自身が現実に、あの様な後手に括られた女学生だったならあとさえ思った。グラビア、絹川文代嬢、いったい全体、苦しくないのか、無表情とはこのことだ。そんなに表情が下手なら、芸者の装いか女学生の装いか、何かカラーを出し給え。馬子にも衣裳というから、特色のある衣をつけ給え。ニューガールと新人のようだから

(編集子)

(四日市 S 生)

残念です。これからもサド特集号第二集として、読むより見ることを主としたものを小冊子でも構いませんから出来れば年内に発刊して頂きたいと希望しております。特集号を見た後のためか十月号は全く物足りなかったと思います。口絵、写真共に猿ぐつわがないという事、本文に挿画が少いこと等です。十一月号は写真の方は、まあまあという処でしょう。映画の緊縛場面は、どれもよかったと思います。やはり緊縛に猿ぐつわのないのは淋しいものです。だから小生は、拷問よりも私刑や折檻の場面の方を好みます。そんな意味で今度は、出来るだけ猿ぐつわを齧ませたものを多数、収載して頂きたいのです。更に口絵もさる事ながら、映画の緊縛場面の中でも縛りの強いものを、又、海外の緊縛写真集も、それぞれ判は大きくなくてもよいから、出来るだけ多数挿入して頂きたい。そして本文はあんなにスペースをとらなくて

モデル 大塚啓子嬢 略号 (せふ)

(略号こし)

村井知可子嬢

大判印画紙焼付
六枚一組 八百円

甲斐仁参案
四馬孝画

「涙のダイヤモンド」

略号 (なみ)

○胃の洗滌

○ヒマシ油責

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

も、ほんの画面の説明程度に重要な部分だけに、他はあらずじ程度にするという具合にして、出来れば絵物語や写真物語、又は連続写真や既載小説の名場面再現の写真など大いに期待したいと存じます。以上、勝手な事を記しましたが、要は読者の一人として抱いている希望を述べたまでですが、この希望を出来るだけかなえられますよう念願して居ります。

○ (北海道 嵯峨紀世)

とやま・かずひと氏に。「マニヤのノート」は、毎月楽しみにしています。是非、お会いしたいのですが連絡が取れないものでしょうか。御返事をお待ちします。

○ (芳野眉美)

新年号読者通信に物申された香川の山田晴美さん。今時、珍らしい和服の女装好みは大変私の興味をひき起させました。ただ、最愛の奥さんに対して、奥さんの物は

借りても「絶対に秘密にしています」は、どうも分り兼ねます。折角御家庭内で、派手な模様の腰巻までされる以上、子供さんの就寝された夜を利用して、今一人の女性の出現は日々の娯しみの一つではないでしようか。御主人の小遣いの端くれで、質流れか古衣屋で訪問着や長襦袢はお求めになろうとも、矢張り奥さんの御諒解を得た上で、男が着る女物の長襦袢なりを改めて裁つことが結局はよろしいようです(これは知人である某女装マニアのお話)。本誌に曾って紹介された先輩の和服女装マニヤの言葉を引用すれば、汗のべたつく夏よりも冬場のキモノ、下着の数々は感触また一段とさわやかでよろしい由。精々お煩焼を閉んで団欒される奥様へ、パートタイマーならぬ女装のあなたがサービスマされるその情景が、取りも直さず御二人の生涯の御幸福かも知れません。読者通信欄に女装マニアが現われないからといって、広

甲斐仁参案
四馬孝画

「涙のダイヤモンド」

略号 (かん)

○申し責

○苦悶のホルセット

○浣腸責

大中判印画紙焼付 三枚一組 四百円

い天下に和装好みの人が決して絶えた訳ではありませんから、勇気をお出し下さるよう祈っておきます。

○ (東京 牧高志)

私は注射と平手打ちのマニアです。小学生の時、親友が女教師に頬つべたをビシビシと平手打ちされて、いるのを見た時、異常なスリルと興奮を感じました。また予防注射を看護婦や女医から受けた時の刺戟が何ともいえない快感となつて、以来、今日まで文学の中にこういうシーンがあると快くなります。「細雪。青い山脈。青春前期」等です。映画では「女軍医と偽狂人。北海の叛乱。愛と死の谷間。最後の橋」等々。そこで本誌の口絵(写真を含めて)等に、私

の希望するものを発表して頂きたいのです。①女性が男性に平手打ちをしている場面——女教師と男生徒、多勢の場合は整列させてピントしている処。女学生対男生徒(右に同じ)。女事務員対男事務員。母親対男児。妻対夫。②女性が男性に注射している場面——女看護婦対男性。女学生対男生徒。妻対夫。母親対男児。注射するのは腕(上膊部、下膊部)股(つけ根や膝の近く)互いに椅子に腰かけている時や、男を押えつけて注射している処等。服装は、肉感を見せるように薄い衣服か半裸、または上品な服装。以上、一日も早く私の願いが叶えられます様、希望し

女体禪美の緊縛

(9×13センチ) 印画紙焼付

五枚一組 四百円

略号 (こん1)

女体の禪美フォト

(9×13センチ) 印画紙焼付

二枚一組 二百円

略号 (こん2)

ます。それから注射や平手打ちのシーンの出ている映画や小説にはどんなものがあるか、お知らせ下さい。
(岡山 白旗生)

○ 最近のニューガールの縛られ写真を大変面白く拝見しております十二月号の絹川文代嬢は、表情に少々欠点がありましたが、豊富な文代嬢の体に、ぐるっと廻きしめた中繩は緊縛感があり、スポーツ的な足元も美しい写真でした。次回には、もっと苦しみの表情を出して頂きたい。猿ぐつわをかけて

ズロース一枚、横坐り姿を望みます。映画写真中の「裸身の聖女」南風、筑波、両女優の縛られ姿は頂けません。全く緊縛感がない。もう少し東映調に日活もなつてほしいものです。花園ひろみは今後東映のよき女優となりましょう。今後の縛られ役を大いに希望します。小生には、女が縛られて苦しむ表情の、女の縛られ面が一ぱん興味のある処です。しかし、責めも苦しませる手段として或る程度、いいと思いますが、逆さ吊り等、余り拷問的なものは頂けませ

んね。益田房子嬢は、よく撮れていました。確にこの人はスタイルがいい方です。今度は中繩で縛つて横に転がしてほしい。注文としては、白のズロース、黒の猿ぐつわ、中繩縛りの事。絹川嬢には、やはり黒のズロース、太繩又は中繩で四重巻き、白の猿ぐつわで、いずれも横すわり又は転がしでお願いしたいと思ひます。足を縛つたらいいといわれる方も多いでしょうが、私は女の足は縛らない方がいいと思います。美しさが全身的に眺められますから。
(岩谷栄三郎)

◎ 絹川文代嬢 緊縛姿態 新作写真 (新作)

全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

輝くばかり純白の美女の柔肌にきびしくも、痛ましく、喰い込んだ縄目の鮮やかさ。

股間縛り三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

健やかに伸びた手と足、全裸の肢体に掛った麻縄、苦痛に耐えた愁顔の美しさ。

全裸高手小手 略号(きた)

三枚一組 二五〇円

ひしひしと二の腕から豊かな胸に、黒ずんだロープがからみついてゆくむごたらしさ。

緊縛全裸立姿 略号(きり)

三枚一組 二五〇円

後手にきりきりと縛しめられた全裸の立姿は麗しくも神々しく我々の目に輝く。

○ 近藤一様。小生の駄作「蜚蜚楼」がお目にとまり、貴兄の読後感で過分のおほめの御言葉を頂いて、ありがとうございます。小生の気持は、友あり、遠方より来る又、楽しからずやです。今後も宜しく御交際いたしたいと思ひます。そこで一つ提案したいのです。もし、貴兄が御迷惑でございませんでしたら、毎月、又は交代にでも読者通信欄で語り合いませんか。先ず自己紹介させて頂きます。小生は東京に住む二十八才の独身青年で「蜚蜚楼」の青年が小生と考えて下さって結構です。さて、貴

兄の「継母」は素晴らしいと存じました。子供が大人を責めるテーマからしてユニークなものを思われますが、特に七十頁、下段、後三行目から七十六頁の十一行あたりまでには、激しい感じを覚えましたが。いずれ貴兄の外の作品についても愚見を述べさせて頂きます。
(東京 奥田滝夫)

○ 読者通信欄に私たち生活合理化クラブの記事を載せて頂き、本当にありがとうございます。私たちもクラブの活動に自信を持ちました。私たちは六人いますが、M過剰な者が多く、したがって男の下着(ブリーフ)や褲にフェチなのです。しかし近頃は、そんな記事が殆んどなく私たちは淋しかったのですが、私の書いた記事が載った時、クラブ全員で大喜びしました。今後私たちも一生懸命、クラブ員を多くする様に努めたいと思ひています。十月号の口絵写真に益田房子様の美しい姿体を見せて頂きましたが、私たちは、あの益田さんの着用された薄い黒のパンティが、男物の薄い小さなブリーフであつたら嬉しかったのですが……。益田房子様以外のモデルさんでも結構ですから、なるべ

くポリユームのある女の方に男の薄い（トリコットか、ウーリーナイロン、又はメリヤスの極く薄い布地で出来た）ブリーフを着用した写真を、小さくてもよろしいですから載せて下さいませ。一同、心からお願ひします。

（東京 富永洋子）

○ 小生はサディズム的読物に興味を持っております。サド特集号も結構でしたが、やはり以前のアリスの人生学校のほうがよいと思いました。内容的に見て、女が何故に責められるのか、もっと合理的に納得のいく様に書かれると面白いと思います。例えば、ある男が高利貸から多額の金を借り、これが払えないため二、三日後には司直の手に捕えらるる運命で、その時、その娘が父親を救おうとして、單身、高利貸の家へ行くが、高利貸のために責めを受ける。この様な筋書では如何でしょう。

（京都 R・R生）

○ 長い夜の灯の元で、幻想の世界が限りなく広大に感じられる季節になります。臨時増刊号、弓沢氏の「青い廃院」は正に力作といふべきでしょう。ヒロインが少しの

暇もなく執拗に責め抜かれ、心身共に困憊の極に達しながら、なお神経の正常を保ち得たことを驚嘆します。他の女達以上に精神的な拷問に虐められた以上、また精神病院という背景からして、かつての「気狂いにされた令嬢」のような結末かと思つたのですが……。永山氏の「与那国奇談」は面白く拝見しました。大体、女奴隷や女囚に、そこはかとない愛情を感じてる私は処刑シーンが大好きです。処刑というのは死刑ばかりではありませんし、法や掟による裁きに観念しきつて裁徒する若い美女が好ましいのです。杉原氏の描く女体は、ふつくらとした柔かみとビッチした弾力が滑かな線で現わされ、連続する緊縛と処刑の本文にマッチしていると思います。惜しむらくはグラビアに「与那国奇談」の画集がないことです。受縄の八ポーズは流石に見事だと思ひました。十二月号のグラビア・フオートは絹川嬢の表情が硬く益田嬢の柔かみに及ばぬと思ひます。「裸身の聖女」のヌチールは宣伝用のもの、画では四馬氏と浜氏の①が気に入りました。十二月号の記事の中、私の好きな文は、辻村氏「蠟涙」、真木氏「白い玩

代理部案内

最新作女体緊縛写真

凌辱 略号（れん）

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号（よく）

3枚1組 二五〇円

悦虐雨さらし

愛川悦子 略号（あめ）

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号（まき）

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号（きよう）

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号（ふさこ）

5枚1組 四〇〇円

寢室の苦悶

益田房子 略号（くもん）

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号（もん）

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号（せつ）

3枚1組 二五〇円

行燈（アンドン）

愛川悦子 略号（あん）

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号（いた）

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号（ねや）

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号（ふと）

3枚1組 二五〇円

具「法谷氏」機上切腹海野氏「テレビ観賞日記」水野十郎左衛門「三条氏」竹夫人「土路氏」魔教園等々の諸篇と、牧氏の「危し伊達六十二万石」でした。この処、暫く女性マゾの声が低調だと思えます。記事の作品にも通信にも、もつともつと積極的なマゾヒストの呼びかけがあつてよい筈です。新人モデル諸嬢の被縛の感想も知りたいと思ひますし、読者中の隠れたマゾヒストを識りたいと念じています。新年号は極めて楽しく拝見致しました。グラビアのすべてがサディスト向きであつたことは、私にとってはありがたかつたのですが、同時に又申し訳けない思いがしたほどです。目次カットの繋がれた裸女、南村氏の戯画二題、滝、杉原、南村四馬各氏、それぞれ独得の味を持つた麗筆の競う処も、奇巧の大きな魅力です。「かるた会、夜の口許と手の指、ボクシングの練習」の対照的な眼差しと、豊かな丸味「観世音菩薩」の意味ありげな小道具の数々、そして「女体の家畜化」の独得な拘束具、等々は奇巧ならではものでしょう。これ等に劣らず素晴らしいのは絹川文代嬢のフォトです。松葉散らしの猿ぐ

つわが、大きなイヤリングと共に彼女の表情を華やかに彩り、十二月号とは格段の差があります。喉肩から胸への滑らかさ、足の爪先まで手入れの行届いた肢体、パランスのとれたポリユームの柔かみが彼女の表情とマッチして、実に清潔な艶をかもし出していると思ひます。十七ページのカットもなかなか珍しいものだと思います。記事の中、蒼野礼氏の「花腎」は入選作だけあつて楽しい読物でした。「宿直室」の男性責は、心理的な加虐に面白味を覚えました。「人妻すみれ」は、かつての竹谷十三氏の作品を想起させられました。「一夜を賭ける男」は都会の裏面を扱うシチュエーションも、氏の独特のもので四馬氏の挿画とピッタリしています。余り庶民的な感じはせず、リファインされていて泥臭さが全くないのが特色でしょう。この味もまた奇巧に欠かせないものと思ひます。映画「鬼火灯籠」は全般的に暗く、つまらない作品だつたと思つています。「遊侠伝」は単なるシナリオにしておくのは残念です。「魔教園」の調教描写は、ようやく愉しみになつて来ました。ただ現実に、あの調教で女体美が保たれ得るのでし

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賄 儀 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13種)です。

お申込は

天星社代理部へ

ようか。「涙は宇宙空間に輝く」「従卒」「月光の中で」等の諸作も楽しく拝見致しました。私の「美女処刑之賦」と「呼びかけ」に今号も相当の紙数を頂いて感謝しております。六十六頁の挿画の打たれる女は、短い囚衣のつもりだったのですが、しかし、いずれも綺麗な画でありがたく思つております。読者通信で石川浜毅氏から私の「継母」へのお褒めの御言葉を頂き、恐縮に存じます。今後と

も、よろしくお願い致します。一月号も又、女性の登場が少いのは残念でした。三隅千恵子さんのような強い女性?と共にマゾ女性の執筆が待たれる処です。オダリスクをお持ちのサディスト諸兄、ムチャ責具をフルに使つて、彼女等に体験記などの発表を強いるのは如何でしょうか。その点、旧号の早川新二郎氏の記事は愉しいものでした。臨時増刊号には、懐かしい「長期刑」「続・囚衣」「憐光」

「悦虐の旅役者」それに「女奴隷の手記」等が載せられるとか、今から心待ちにされる処です。追信池袋のアヴアンは、とうとうつづられてしまいましたし、浅草奥山の見世物はつまらないし、フランス座、ロックス座の責場も飽き足りないうし、といて違法なもののは公開されないし、暮から正月にかけて何か面白いことはないかと考えています。

(近藤一)

○ 一月号掲載の創作「宿直室」横村奏、「従卒」菅良太の二篇は久しぶりで堪能した力作でした。K誌は何と言つてもアブの唯一の自由な雑誌ですから、あまり一方に偏した編集は感心しません。殊に女性に関するものがいつも大半を占めて男性に関するものが皆無なのはいつも感じる不満です。全体の比率から言つて男性に関するアブは少いことは確かだと思ひますが、読者欄でも分るように男性側の要求もあなどり難い数を示していると思ひますので編集の方針として毎月三篇ぐらいの男性側向の創作をのせて載せたいと思ひます。その偏り方は特集号にはつきり現われていました私達には一向に興味の無いものばかりでいつ

も失望しています。どうか一度ソドミア風のを三、四篇混ぜた特集を拜見したいものです。「宿直室」の小説構成はまことにうまく、被虐教師の恐怖がひしひしと胸に迫つて来るようでした。挿画もすぐれていて殊に階段を這い上る図など迫真的なものでした。「従卒」の方はマゾでない正常の人間の責なのでブレイ物にない酷らしさと、凄さがありません。私はあのような男性的で端正な性格の人間が責められる事に大きな共感をもっています。被虐さの無念さが胸に迫ってくるからです。中尉の逆吊の図は憲兵隊らしい雰囲気とともによく描けていました。殊に海老責の後で凌辱を受けるらしい描写は、種々に想像できるような描き方で、面白いと思ひました。今後ともあのような男責の小説を是非おねがいします。それから最近男性責のフォートや画を発売しないのでしょうか、広告欄には見えませんのでおたずねします。もしなかったら作つて発売してはいかがでしょうか。

(葛西生)

△代理部からV男性の責写真は一前分譲して居りましたが申込者が極めて少数でしたので作成を中止

◎浣腸連続フォト◎

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

女体『浣腸風景十二態』

(9×31cm) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

して居ります。折角作成しても希望者が少いので今後も企画はしておりません。

○ 私は貴誌の愛読者ですが経済的に余裕がないため毎月、購入することが出来ないで非常に残念に思っています。復刊第一号より三年目を迎えた今日、多くの愛読者と豊富な資料とによって、著しく発展していることと思ひます。今後とも益々成長して立派な雑誌を作つてくれることを、愛読者の一人としてお願い致します。

(長崎 森山生)

○ 冬が迫ると、美と力の裸像が影薄くなるのは淋しき限りである。以下は、気温や季節に左右されぬ図書と映画の中から抜萃であるから、消極的は免れないとして、やや新しい紹介見聞録である。映

画「裸の大将」の壮丁検査では、腰巻みたいな風呂敷にイヤ気がさしたけれども、「果しなき慾望」では、加藤武のヤクザが、堂々たる六尺で暴れ回ったのでスツキリしたものである。「悪徳」(藤大路春彦著)第二部は前巻に引続き所詮禁色の似而非で落胆。「ジャ・ソ・ジニネ」の「バラの奇蹟」は徹頭徹尾、獄舎内の愛の戯れに終始しているのかかわらず迫力が出ないのは国柄の差であらうか。テネシー・ウイリアムスの「焼けたトタン屋根の猫」は、アメリカ最近文学の例に洩れず異常心理を描き、カッパルの片割れが登場しないだけに、むしろ生々しさを感ぜさせると同時に、やりきれない文明人の痛々しい悲劇を讀ませられてしまった。結局、日活映画の加藤武の裸像が一ばん日本的で身近であるし、青葉慎一氏の挿画

懸賞原稿募集

☆規定☆ ☆賞金☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

に類似した御馳走であつた。

(原俊行)

昨年四月号に載せて頂きました私のアイデアと、十月号にそれを描写して頂きました浜毅兄の口絵につきまして、御親切な比較お調べの御意見を頂き感謝しております。私より浜兄に御礼の一筆並びに私の意見をお伝えしなくてはならなかったのですが、筆不精のため、つい遅れました。御容赦を乞い、改めて私の拙い空想へ真剣な画筆をふるって下さいました浜兄に、御礼申し上げる次第でございます。

ます。さて私としましては、あの十月号口絵を拝見させて頂きました折に、ただ自分のアイデアが絵となりました喜びに、真実の処、今日まで御注文申上げる個処はございませんでした。一月号誌上に、南方先輩より、あのような指摘がございまして、やつと気づいた次第でございます。そうなりまして、凡夫の浅はかさと申しましたようか、にわかに欲が募りましてかような失礼な要求を記す気になつてしまいました。浜兄には何とぞ悪しからず御見逃し下さいませあの口絵「藤の女」は、私のアイ

写真 実写 磔

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚啓子嬢

デア「藤縛り七態」の中の「姫君の十字磔」から取材されたものだと存じます。背景、アングルの違いについては、むしろ私の間違いで何も申しあげるところはございせん。ただ南方先輩の申されております表情点につきまして私は、やはり、しいたげられながらも姫という誇りを失わないような恐怖に斗う姿が欲しかったと思ひます。それが武家の娘と町家の姿との処刑される姿の違いではないでしょうか。私がアイデア・モデルに東映の大川恵子の名を挙げましたのも、彼女のマスクに、そういうイメージが感じられたからです。しかし私は、今ここで反省してみました。この口絵を、ことさら姫君処刑の図におかなくてもよいのだと。もしこれを、閑所破りでもした町娘の姿におき換えてみたらそのモデルに今売出しの東映の花園ひろみを仕立ててみたら、これは実際は、この口絵を見た初印象なのです。そうして私は、絵の出来ばえの素晴らしさに満足していた

のです。随分、失礼なことを申し上げました。でも私が、このように浜兄に御注文申し上げましたのも、どこことなく親しみが湧いて来たからです。私も学生の頃、おそろくもう十二、三年も前になりました。一度は絵の道を志した人間なのです。同じ道にありました兄に、その道の苦しさや困難性、私のセンスの乏しさをとかれて以来、絵筆を折りましたが、そのころ私の憶れていた絵を今、見出した思いで、これが浜兄への親しみと変つたのでございましょう。私も、いつか機会を見出して絵筆を持ち、貴方の御批判を仰ぎたいと思っております。

(奈加多須磨尾)

「青い魔院」は案外、期待外れで物足りなかった。文の盛り上がりなく、何か中途半端な感じをまねがれませんでした。むしろ附録的な永山久美雄氏の「与那国奇談」の方が反って面白く、杉原虹児氏の挿絵も又、素晴らしいものでした。

次号(二月号)の本誌は十二月中旬発売です

私は、この種のサド小説が好きです。どうも四馬氏に悪いけれど、あの独得な画き方が私には好きにはなれないのです。それに反して杉原氏の目次裏の「受縄」の、ささやかな小品の珠玉的な美しさはどうでしょう。私には、あの画き方が、とても好きなのです。全くあの苦痛の跡も痛々しい顔の表情何ともたまりません。百四十五頁の挿画も不愉快を与える処か、正に芸術品です。処で、十二月号には私の大好きな女学生物が二篇も掲載されているので、ガゼン嬉しくなりました。南時夫氏の「バーナナの人々」の挿画、三十八頁の美智子の苦痛に満ちた顔の美しさ！白い玩具の挿画は四十二頁、四十五頁、共に文句なしです。牧高志氏のスナップシリーズ……「寒牡丹の巻」は特によかったです。百五十九頁の中段の写真の、後れ髪を口にくわえた表情が実になまめしかったです。一月号の表紙はスケートする女性が如何にも明るく健康的でした。目次裏の南村俊平氏の小品、悪くはないのですが、上図の矢が乳の下にささっている少女の

顔の表情が余り苦痛の跡がないのが物足りなかつた。絹川文代さんの猿ぐつわ四態は素晴らしかった。彼女には猿ぐつわを嵌めた方が、むしろ好いぐらいで、正にピカ一の存在でした。九雅節夫氏の「特異な角度から」も久々の登場。病後の体故、余り無理をされぬ様に東町三郎氏の「人妻すみれ」は一月号の庄巻でした。但し、最後に関東大地震にこじつけたのは、何とも感心できませんでした。それにしても、この嫁いびり物語りは如何にも実感がともっていて素晴らしかった。近藤一氏の「美女処刑之賦」は、実にこの種の時代物としては興味深きものがあつたが、肝心の挿画が如何にも物足りない。せめて磔柱上の由起姫の場面があつてもよかつた様に思う。菅良太氏の「従卒」は創作といつても実に生々しい。やはり旅館の風呂番が作者に話した実話である故か？弓沢俊二氏の「夜を賭ける男」が余りにも作り過ぎた傾向があつた故、菅氏の作品の方に、私は軍配を上げます。土路草一氏の「魔教団」は今回は挿画の方がよかつた。

とにかく余りあくどいので何度か嫌気がさすが、それにもかかわらずグイグイと引きつけられるのはやはり土路氏の文章の巧みである故でしょう。(東京 東一郎)

○ 御誌に浣腸の記事が十分にはないのは大変残念です。世の中には小生の経験では浣腸の愛好者は頗る多いのです。しかし、その多くは激しい肉体的サジズムに結合した形、つまり「浣腸責」といった様なものには余り関心を示しません。御誌に時に取り上げられている様なお腹の割れそうになるまでの浣腸とか、その様な激しい肉体的な行動にはついてゆけない人の方が何倍も多いように見受けられます。私達の周囲の数限りなくいる愛好家達は男も女も、もっと心理的な繊細な情熱を浣腸によせています。その心理的な背景はやはりサド・マゾヒズムなものと思われます。が、例えば浣腸に対する強い羞恥と、それを敢えて冒される時の気持ちです。これを裏からいえば、羞しがり拒否する人達を無理に浣腸したり又やむなく浣腸されるのを監視するとかいうことに命がけの興味をもっている様に見えます。それには矢張り臀部や肛門に対する

花坂道子嬢

緊縛フォト分譲

大判判印画紙焼付(13×18㎝)

○全裸緊縛集

略号(はな1)

10枚1組 八〇〇円

○股間縛り集

略号(はな2)

10枚1組 八〇〇円

○ヌード縛り

略号(はな3)

2枚1組 三〇〇円

○股間縛り

略号(はな4)

2枚1組 三〇〇円

フェチシズムも加われば盗視も重要な要素でしょう。しかし浣腸自身に異常な環境で、つまり縛りあげられたり、全裸にされたり、不思議な体位で行われたりするよりも、美しく着飾った婦人が——むしろ裸でなく——浣腸をうけるためにスカートを開けられ、美しい下着がのぞかれたりする普通の病院や家庭等での浣腸場面の方が、どの位素晴らしく思えるでしょう。そこで美しい下着へのフェチシズ

ムまで加わってくるのです。要するに一番数多い浣腸愛好者は余り強く異常に執着しない人たちです。ですから、その人たちにとっては異性に対する好色の形態が一つのもの、例えば、責め、鞭打等に純粹には結合せず、正面が漠然としてゐるのです。もとより、その中で浣腸ということに焦点があるということがあります。貴誌がそのような読者を相手にされないというところであれば別ですが、その様な人をも相手にされるつもりであれば沢山の新しい読者を集められるでしょう。それ等の人は必ずしも世の非難を浴びる様な露骨な浣腸場面を誌上に呈示しないでも、充分それを評価することでしょう。例えば、本誌のグラフにでも「浣腸」という口画を入れるとする。病院の診察室の椅子の上で美しい婦人が医者から横のベッドにあがる様に言われて羞恥の表情に堅くなっている。その横に看護婦が浣腸器の準備をしている。その様な画は必ずしも現在のグラフに比較して怪しからぬものではないでしょうが、多数の人々がその画の故に本誌を求めるでしょう。次の様な画はどうですか。一人の女性が一人住いのアパートに戻ってきて自分

で浣腸をし様と浣腸器の準備をしている。そこへ人が訪ねてきて不意にドアが開かれ、その光景を見られてしまう。女の人は手に浣腸器を持って狼狽している。又、古今東西の色々の浣腸器のコレクションについての写真や記事ののせる。十八世紀の歐洲の色々の浣腸についての画をのせたり解説したりする。文学上で浣腸器が出てきたものを集録する。或は色々の人にアンケートして浣腸に対する人々の意見、感想、経験を集めてのせる等々。どうか、しぼり、鞭打ちばかりでなく、浣腸の領域を大いに開拓して下さい。お願いいたします。(浣腸ファン)

愛読者の皆様、私、初めてお便り致します。私は二十四才の平凡な青年ですが、KK誌を最近号より愛読しております。他人より苛められることを趣味として現在に至っておりますが、未だかつて機会がなくただKK誌を読みつづけるながら毎日を過しています。どんな責めでも受けますから長野県近辺の男女でなるべく四十才位の年配者なら一番結構なのですが、無論、これにこだわることにはありません。私を奴隷として使ってください。

女体緊縛フォト E組

9×13Cm印画紙焼付

ES1 ヌード緊縛集

モデル 佐賀美智子嬢
三枚一組 二五〇円

ES2 全裸悦虐集

モデル 須川 令子嬢
四枚一組 三〇〇円

ES3 腎 羞

モデル 佐賀美智子嬢
三枚一組 二五〇円

ES4 酒宴の弄者

モデル 佐賀美智子嬢
二枚一組 二〇〇円

ES5 脱がされる娘

モデル 須川 令子嬢
五枚一組 三五〇円

ES6 あわや寸前

モデル 佐賀美智子嬢
二枚一組 二〇〇円

ES7 剥れたスロース

モデル 佐賀美智子嬢
五枚一組 三五〇円

ES8 乙女のすべて

モデル 花坂 道子嬢
七枚一組 四五〇円

ES9 女学生の縛り

モデル 須川 令子嬢
二枚一組 二〇〇円

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル 佐賀美智子嬢
六枚一組 四〇〇円

の方がございましたら、至急御連絡下さい。私も近日中に県外に出ますので、この機会に宜しく御願ひ致します。個人的な意志や秘密は絶対に守ります。

(長野 市稲塚生)

夢野様、一月号の便り有難うございました。早速毎日三回位、新名古屋駅伝言板(公衆便所脇)へ参りました。連絡がなくながっかりして居りました。毎日いろいろの空想をしながら貴君からの伝言

を待ちつづけました。本当に残念でなりません。何かよい方法がないかと考えましたが、仲々よい方法がありません。今一度伝言板に連絡方法を書いて下さい。二十日から二十七日迄お願い致します。

(名古屋 山本)

一月号の東京K・M氏の読者通信を拝見したので初めて書いてみる気になりました。僕は二十一才の青年ですがたくましい男性を見ると彼を征服して隷属させたいと

代理部分護品総目録

新人モデル多数
新しく参加

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

いう欲望を常にもちます。彼の社会的な仮面を彼を裸体にする事によってひんむいてやりたいと思うのです。そして一歩外へ出た世界では一般人としておっっている彼が僕の足の下で裸で遊びえなうごめいていてという事実にたまらない魅力を感じます。そしてその彼を僕以外の誰れもが知らないといふことも。僕は身長一七三センチ体重十七貫五百で肉体的にも他の人々より別に劣っていると思いません。だから僕の興味を引くのは僕と同じくらいかあるいはそれ以上の男性に対してのみです。弱い人にはS的興味は感じません。若い人(特に学生)でM的傾向の人がいたらお互に秘密厳守の上文通交際しようではありませんか。

(東京都 岩瀬不二夫)

八編集部よりV以上三篇と同じような読者通信の原稿が多数参つておられますが、巻末の読者原稿募集要項にも記してありますように読者交歓室は都合によって中止いたしておられます故、個人的な文通交際を求めるものは今後御遠慮願

います。尚、投稿者の住所氏名の照会にも応じておりません。

○

法谷四郎様へ。御丁寧なお批評ありがとうございます。あの「機上切腹」は、私が考えていた同種のものより、もっとリアルで、しかも筆力が冴えているので、何度何度も繰返して読ませて頂きました。カバカバと血を吹く傷にぞわぞわとした厚手の飛行服など身も心も灼けつくようでございました。御申越しの女スパイ物、何とかして御期待に沿うよう仕上げたいと思います。私は今、一寸スランブ気味で、今まで考えていたテーマを一応全部、整理して再出版するために「乗馬ズボン・シリーズ落穂集」を、まとめはじめています。その中の一つに、女スパイ飛行服姿の自決を加えさせて頂きますように。でも、これは挿画の先生が、きつとお困りになると思いますので、それまで何か女性の飛行服姿の映画か写真でも発表されればよいと願っています。お恥しいですが、私にはもう、まとま

ったものを書く力はなくなっている。苦悶の描写だけ書くのが精一杯なのです。どうぞ私に代って切腹シリーズをお続け下さいませ。私も又、想を新たにしてお目にかかりたいと願います。大島広志様へ。私の一ばん痛い処を一決りされたような気が致します。私の作品は皆、同じようで、しかも表現が、どぎついといふことも、誰より気になつてゐるのは私なのです。それ故、私は懸命に新しい分野(責め、架、悦虐)へ、切腹までの筋を遠廻りするようにし、何とかしてこのマンネリを救おうと努めて参りました。表現の、どぎつさを救うために猿ぐつわをしたヒロインに腹を切らせても見ました。でも、この作品は少しの反響もなかったし、第一私らしくないので、つくづく私は、あの呻きのたうち血みどろになつて苦しむ切腹描写しか私の生命はないのだと思うようになりました。また私の作品を愛読して下さる方々も、今までは藤山秀緒と聞いただけであの「ウィツ！」という自虐的なポーズを思い浮べて居られましよう。私は編集部がお許し下さる限り、私の自虐の告白として、あの種の描写を続けたいのです。大島

様、私の作品は小説ではないのです。不幸な女の自虐の記録として私の我儘を、お許し下さいませ。藤山秀緒様へ。「藤山党」などと、おっしゃられると困つてしまいます。私も京都へは、よく参りますし、実は円山の馬場では写真を写されたこともありませう。若し、それが貴方様なら、貴方様のアルバムには私の乗馬姿がある筈なのです。でも、あの馬場は狭くて乗馬には不向きです。私の様に乗馬ズボンを穿いて腹を切りたいたか。私の乗馬ズボンシリーズの中に、あなたの御希望のスタイルを加えます。御幸福をお祈りして居ります。(藤山秀緒)

○

はじめにお便り致します。いつも、貴誌を通じて皆様の御体験や御活躍の様子を大変うらやましく読ませていただいております。私も女装と緊縛に限りない憧れをもっております。現在まで数少ない経験ですが、何度か女装を試みた事もあり、又、不慣れながら女装をして夜間ひそかに街の中を歩きまわった事もあります。その体験記を、拙い文ですが綴って御送りしようと思つて、唯今整理中です

(東京 桜井良美)